

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第246集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成7年度分)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成7年度分)

序

岩手県は、埋蔵文化財の宝庫だと言われています。この先人たちが遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。また一方では、幹線道路網の整備など、社会資本を充実させていくことも行政上の重要な施策であります。このため、埋蔵文化財の保護と地域開発の調和と言うことも、今日的な課題であります。

こうした見地から、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターでは、岩手県教育委員会文化課による発掘調査事業の調整と指導のもとに、道路建設などに関連して止むを得ず消滅していく遺跡については発掘調査を実施し、発掘調査報告書として記録保存する措置をとってまいりました。今年度は県内5市11町4村にわたる33遺跡、95,129㎡の調査を実施しました。

調査しました遺跡の時代は、縄文時代を中心として近世まで、殆ど全ての時代にわたっております。今年度の調査で注目されたのは、紫波町の山屋館跡で検出されました奥州藤原氏時代の経塚4基があります。ここからは愛知県常滑産の三筋壺などが出土し、平安時代後期における仏教文化とその広がりを解明する貴重な発見となりました。

この発掘調査略報は、調査報告書の発刊に先立って、今年度に調査された33遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、多くの方々に活用され、埋蔵文化財へのご理解を一層深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を進めるにあたり、ご援助とご協力を賜りました委託者をはじめ、地元教育委員会やご教示を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝を申し上げます。

平成8年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 千葉浩一

目次

I. 建設省・農水省関係

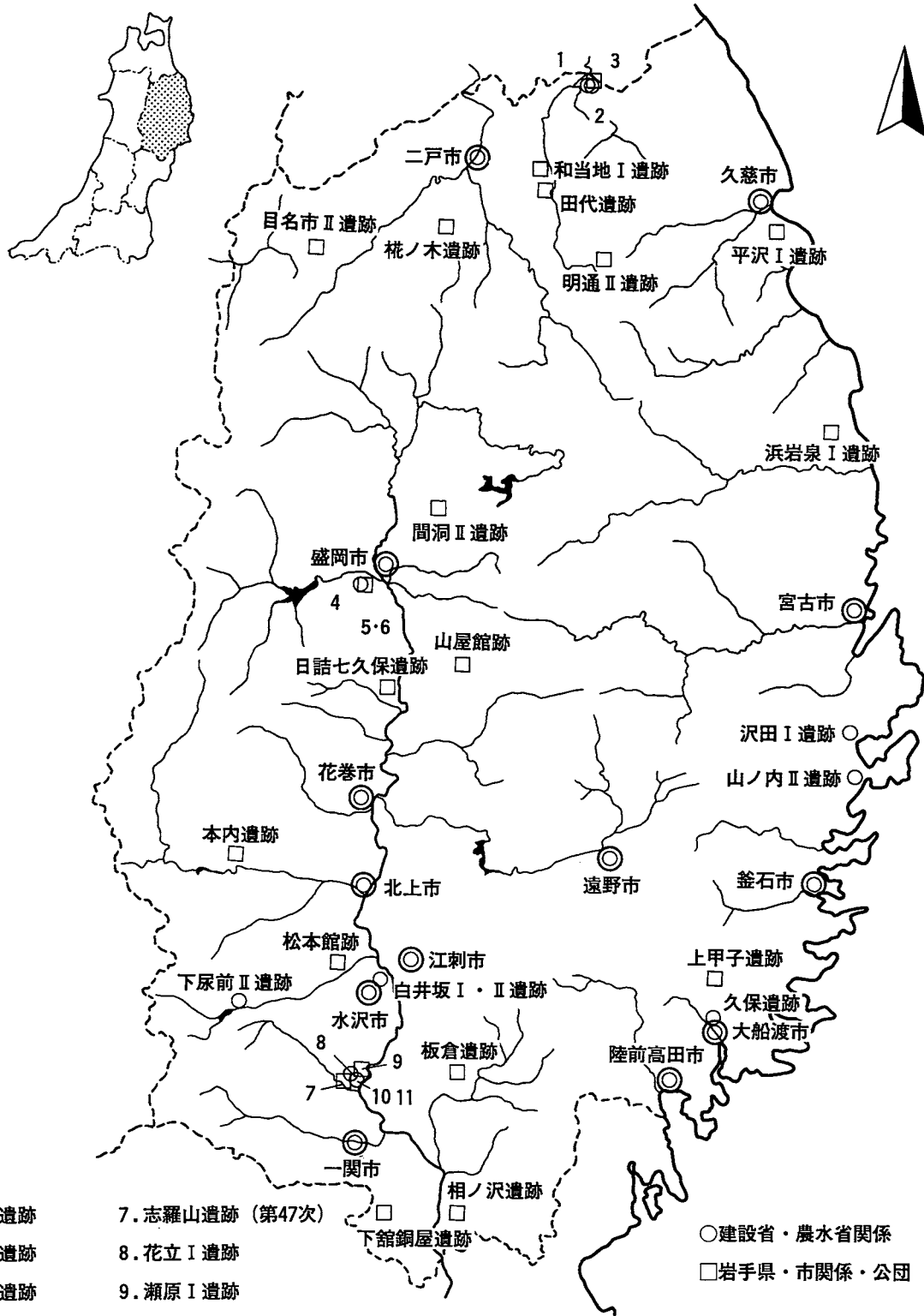
(1)泉屋遺跡(平泉町) ……………	3	(7)沢田Ⅰ遺跡(山田町) ……………	37
(2)志羅山遺跡46次(平泉町) ……………	9	(8)山ノ内Ⅱ遺跡(山田) ……………	43
(3)白井坂Ⅰ遺跡(水沢市) ……………	15	(9)久保遺跡(大船渡市) ……………	49
(4)白井坂Ⅱ遺跡(水沢市) ……………	21	(10)下尿前Ⅱ遺跡(胆沢町) ……………	53
(5)花立Ⅰ遺跡(平泉町) ……………	27	(11)大鳥Ⅰ遺跡(軽米町) ……………	59
(6)小幅遺跡5次(盛岡市) ……………	31	(12)長倉Ⅶ遺跡(軽米町) ……………	65

II. 岩手県・市関係

(1)上甲子遺跡(大船渡市) ……………	75	(11)間洞Ⅱ遺跡(玉山村) ……………	135
(2)本内遺跡(北上市) ……………	81	(12)目名市Ⅱ遺跡(安代町) ……………	139
(3)山屋館経塚・山屋館跡(紫波町) ……	85	(13)日詰七久保遺跡(紫波町) ……………	143
(4)松本館跡(金ヶ崎町) ……………	91	(14)相ノ沢遺跡(藤沢町) ……………	147
(5)瀬原Ⅰ遺跡(平泉町) ……………	97	(15)長倉Ⅰ遺跡(軽米町) ……………	153
(6)下館銅屋遺跡(花泉町) ……………	103	(16)田代遺跡(九戸村) ……………	159
(7)志羅山遺跡47次(平泉町) ……………	109	(17)椈ノ木遺跡(一戸町) ……………	165
(8)板倉遺跡(大東町) ……………	115	(18)浜岩泉Ⅰ遺跡(田野畑村) ……………	171
(9)明通Ⅱ遺跡(山形村) ……………	121	(19)小幅遺跡4次(盛岡市) ……………	177
(10)和当地Ⅰ遺跡(軽米町) ……………	131	(20)平沢Ⅰ遺跡(久慈市) ……………	183

III. 公団関係

(1)小幅遺跡第6次(盛岡市) ……………	191
-----------------------	-----



平成 7 年度調査遺跡位置図

I. 建設省・農水省関係

(1) 泉屋遺跡

所在地 平泉町平泉字泉屋25-28ほか
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間 平成7年4月12日～8月4日
発掘対象面積 2,982m²
発掘調査面積 2,982m²
遺跡番号・略号 NE76-1079・IY95-15
調査担当者 羽柴直人・吉田 理
協力機関 平泉町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 一関・水沢

1. 遺跡の立地

泉屋遺跡は平泉市街の南側に位置している。今回の調査区は北上川の支流太田川北岸の、東日本旅客鉄道東北本線と国道4号線に挟まれた部分である。これまでの調査の進展の都合から、調査区は東側と西側の2箇所に分かれている。両調査区とも以前は宅地、水田として使用されており、盛り土や削平により、原地形がかなり改変されていた。原地形は概ね太田川に向かってなだらかに傾斜して下がっている地形である。

2. 調査の概要

泉屋遺跡はこれまでも平泉町教育委員会と、埋蔵文化財センターによって緊急発掘調査がおこなわれており、今回の調査は第15次調査になる。今回の調査で検出された遺構、遺物のほとんどは12世紀のものと江戸時代のもので占められている。検出された遺構は掘立柱建物23棟、礎石建物4棟、柱穴状ピット813個、井戸状遺構25基、溝43条、土坑62基、かまど状・焼土遺構22基、陥し穴状土坑1基である。

〈掘立柱建物〉

12世紀に属する掘立柱建物は東側調査区で1棟、西側調査区で3棟検出されている。しかし西側の2棟は大部分が調査区外に懸かっており、全体の形状は明らかではない。東側調査区の建物は2間×2間の小規模なものである。また西側調査区の全体の形状が把握できる建物は2間×3間である。これらの建物の柱間寸法は2.4m程度の長さが多い。

また近世以降に属する掘立柱建物は、西側調査区では礎石建物の民家に先行する掘立柱建物の民家が2棟検出されている。どちらも梁間は概ね3間分程度の長さを持っている。建物の年代は礎石民家が18世紀末頃の建築と考えられるので、それ以前の概ね18世紀内に納まる時期と考えられる。東側調査区でも掘立柱の民家跡が1棟検出されている。この建物は掘立柱民家としては例をみない大きなもので、礎石建物の民家と概ね同じ大きさを有している。構造も大型の礎石民家にみられるように上家柱と下家柱からなるもので、掘立柱建物でありながら礎石建物と共通する構造技術が用いられており、礎石民家と掘立柱民家の関係を考える上で重要な資料になり得る事例である。

母屋以外の近世の掘立柱建物で特徴的なものに、かまど状遺構を内部に持つ建物がある。東側調査区と西側調査区でそれぞれ1棟検出されている。いずれも建物の軸線と合う形にかまど状遺構が位置しており、建物とかまど状遺構が同時存在であったと考えることができる。

〈礎石建物〉

西側調査区で4棟検出されている。民家の母屋とこれにともなう厩、便所の建物、そしてこれらとは伴わない可能性のある付属小屋と思われる建物である。用途不明の付属小屋1棟を除くと、昭和41年まで存在していた建物である。この母屋は礎石の上に柱が直接立つ「石場建」で、1間の長さが6尺3寸で、5間×8間の大きさである。この家の四隅を結ぶ対角線の交点の付近から、小型の陶器の甕が倒立した状態で出土した。甕の中には仙台通寶が入っており、この銭が納められた甕はその出土位置から、この家を建てる際に地鎮のために埋納されたと推定される。仙台通寶は天明4年(1784)に初鑄された銭であるので、この家は天明4年よりも後の建築ということになる。

〈井戸状遺構〉

井戸状遺構は12世紀に属するものが11基、近世以降に属するものが14基検出された。12世紀のものも近世以降のものも、すべて井戸枠を持たない素掘りの井戸である。深さは3mから4m程度のものが多い。12世紀の井戸からは陶器破片、かわらけ、下駄、曲げ物などが出土している。SE3からは常滑や渥美の陶器片

が250片以上も出土した。近世以降の井戸からは陶磁器片や桶、自然木などが出土している。

〈土坑〉

12世紀に属する土坑の中には、埋土に有機質が多く、瓜の種子が混入するものがみられる。この埋め土の特徴は、柳之御所跡などで検出されている、トイレの可能性が高いとされる土坑の埋め土に類似している。ただ本遺跡ではいずれの土坑からもチュウ木は出土していない。これらの土坑の埋め土に人糞が含まれているか土壌の分析をおこない、土坑の性格を考えていきたいと思う。

近世以降に属する土坑には、桶が埋設されたものがあり便所にかかわる遺構と考えられる。他には用途不明なものが多い。

〈溝〉

東側調査区で南北に走る大規模な溝が検出されている。これは12世紀の都市を区画する溝の可能性も考えられる。また西側調査区では10次調査区から連続する溝が2条検出された。

〈かまど状・焼土遺構〉

かまど状遺構は、鍋などを置くかけ口が2つある形状と、かけ口が一つの形状のものがある。いずれも近世以降の時期のものである。焼土遺構は所属時期が不明なものが多い。

〈陥し穴状土坑〉

東側調査区で1基検出された。縄文時代のもと思われる。

〈出土遺物〉

12世紀に属する遺物から述べる。国産陶器では常滑産、渥美産が多い。二筋壺、突帯付四耳壺、甕、壺、片口鉢の器種が出土している。他に須恵器系、在地産と思われる壺、甕が少量出土している。中国産磁器は白磁四耳壺又は水注、白磁碗、青磁皿、青白磁の合子が出土した。かわらけは手づくねかわらけとろくろかわらけが出土した。柱状高台など特殊な器種も少量出土している。木製品は下駄、曲物、建築部材、漆器椀が出土した。石製品は硯、温石、砥石、金属製品は釘、銭(政和通寶、元豊通寶、天聖元寶)が出土した。その他の遺物としては壁土、瓜の種がある。

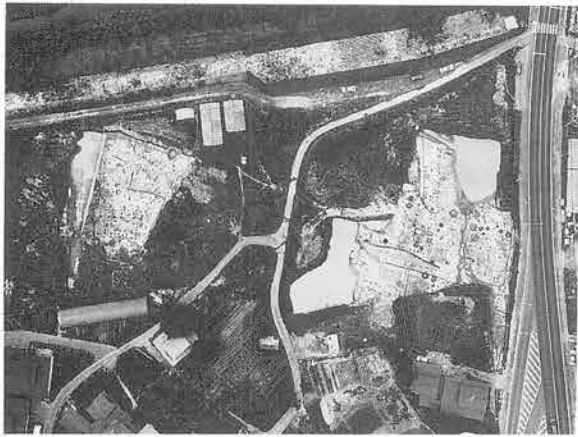
近世に属する遺物には、磁器(碗、皿、瓶、火入れ、仏飯器、猪口)、陶器(碗、皿、鉢、播鉢、土瓶)がある。磁器の産地は肥前とそれ以外の国内の産地、陶器は肥前、瀬戸・美濃、大堀相馬、在地産の陶器がある。木製品は下駄、桶、こね鉢、へら、柱材が、石製品は硯、砥石、石臼が出土している。金属製品は銭(寛永通寶一文、四文、仙台通寶、天保通寶)、柄鏡、かんざし、煙管が出土している。

12世紀、近世以降の遺物以外に、縄文時代の土器、石器、弥生時代の土器、平安時代前半の土師器、須恵器が少量出土している。

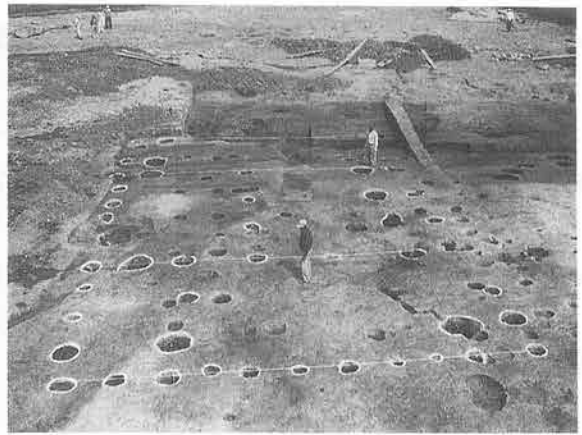
3. まとめ

今回の調査では12世紀の遺構、遺物と近世の民家の屋敷跡とそれに伴う遺物が多量に検出された。今回の調査を含めて、これまで5次にわたる太田川河川改修工事にかかわる泉屋遺跡の発掘調査によって明らかにされた12世紀の遺構分布から、12世紀の奥州藤原氏の「都市平泉」の南辺の一部の様相が明らかになったといえよう。また出土した遺物の中に、常滑産の突帯付四耳壺という全国的にも例のないものもあり、本遺跡の性格を考える上で重要な資料になりうる。

また近世屋敷とそれに伴う遺物は近世の農民の具体的な生活を知る上で、非常に良好な資料といえよう。



調査区航空写真



近世掘立柱建物(SB1)



SE3(井戸)陶器出土状況



突帯付四耳壺(常滑産12C)



二筋文壺(常滑産12C)



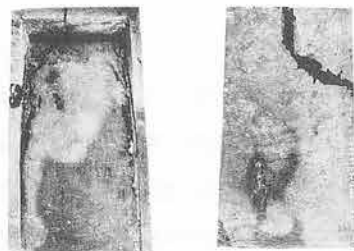
手つくねかわらけ(12C)



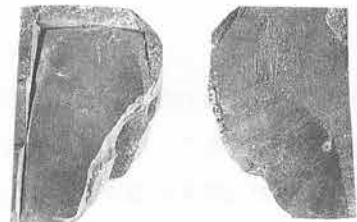
青磁皿(中国産12C)



白磁壺(中国産12C)

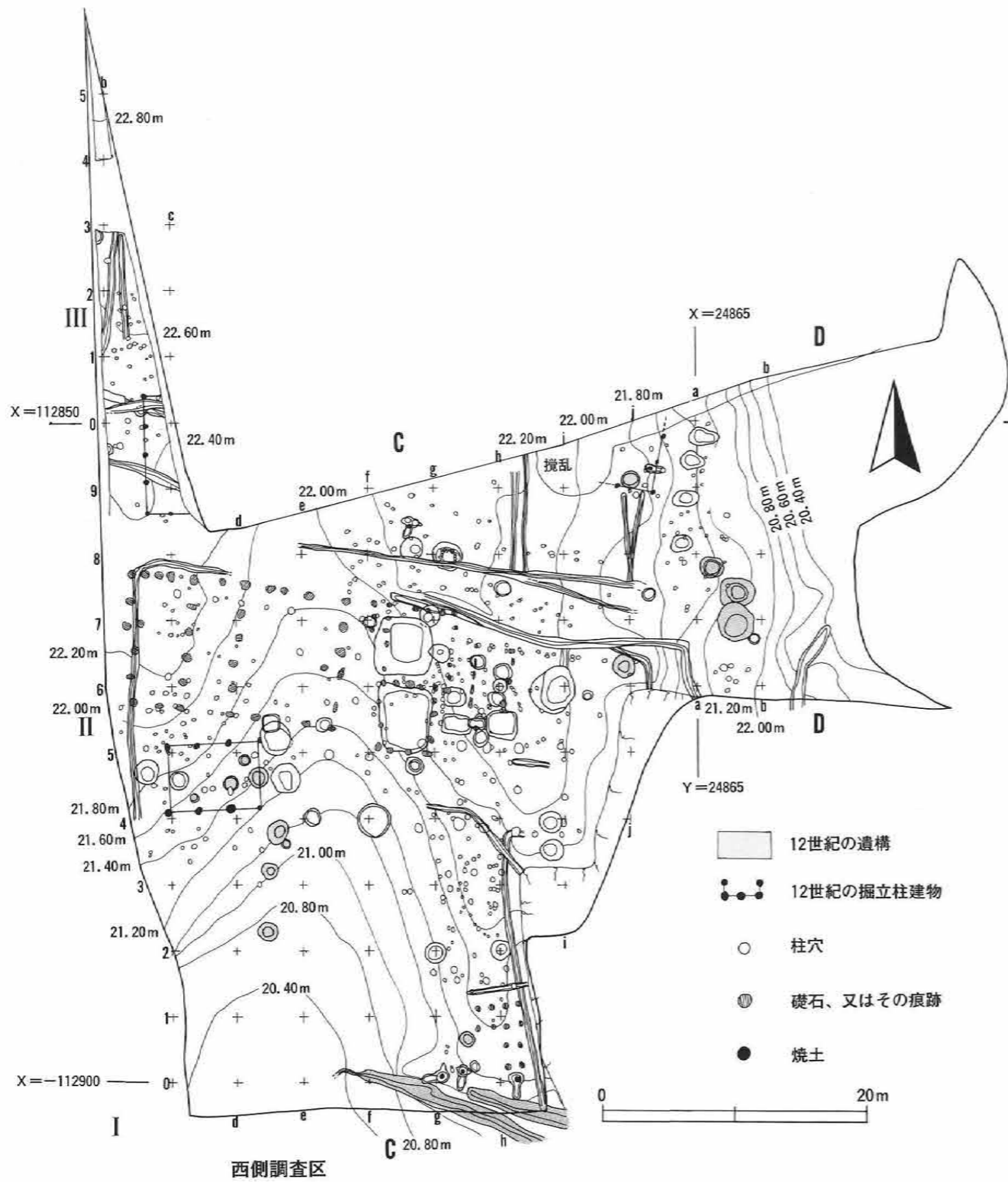


補修復のある硯(12C)

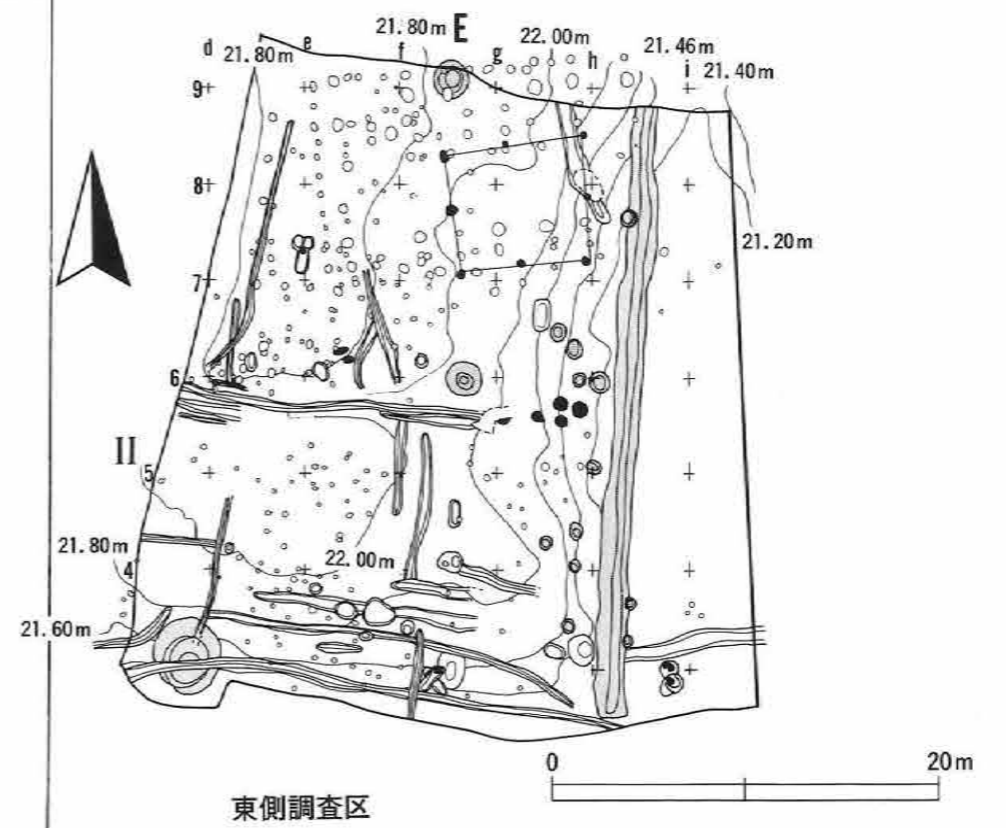
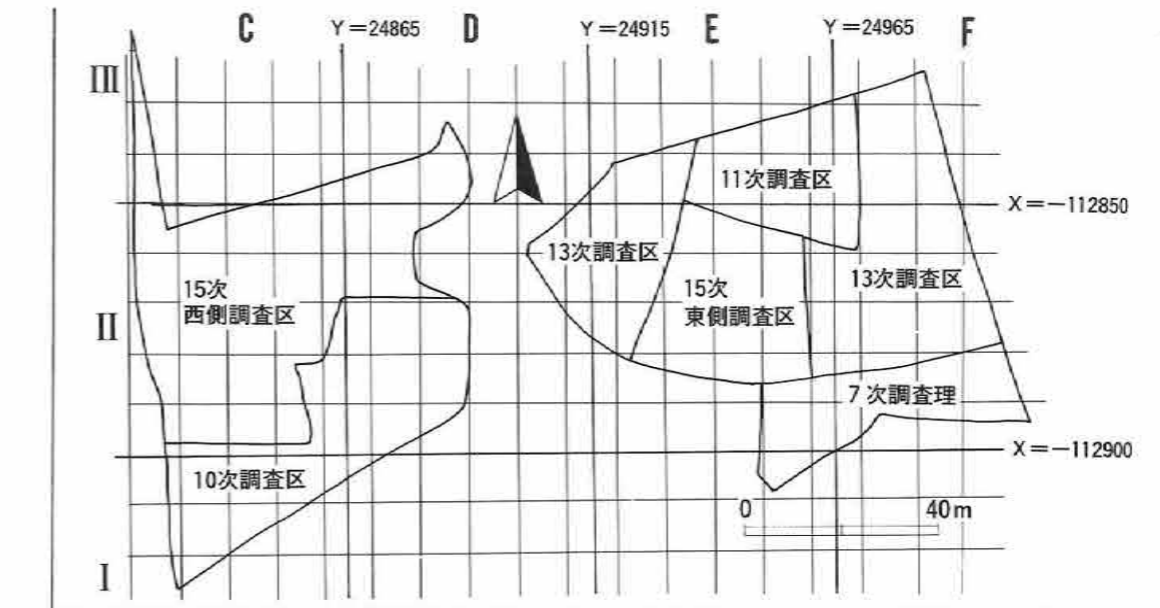


硯(12C)

泉屋遺跡(15次)検出遺構・出土遺物

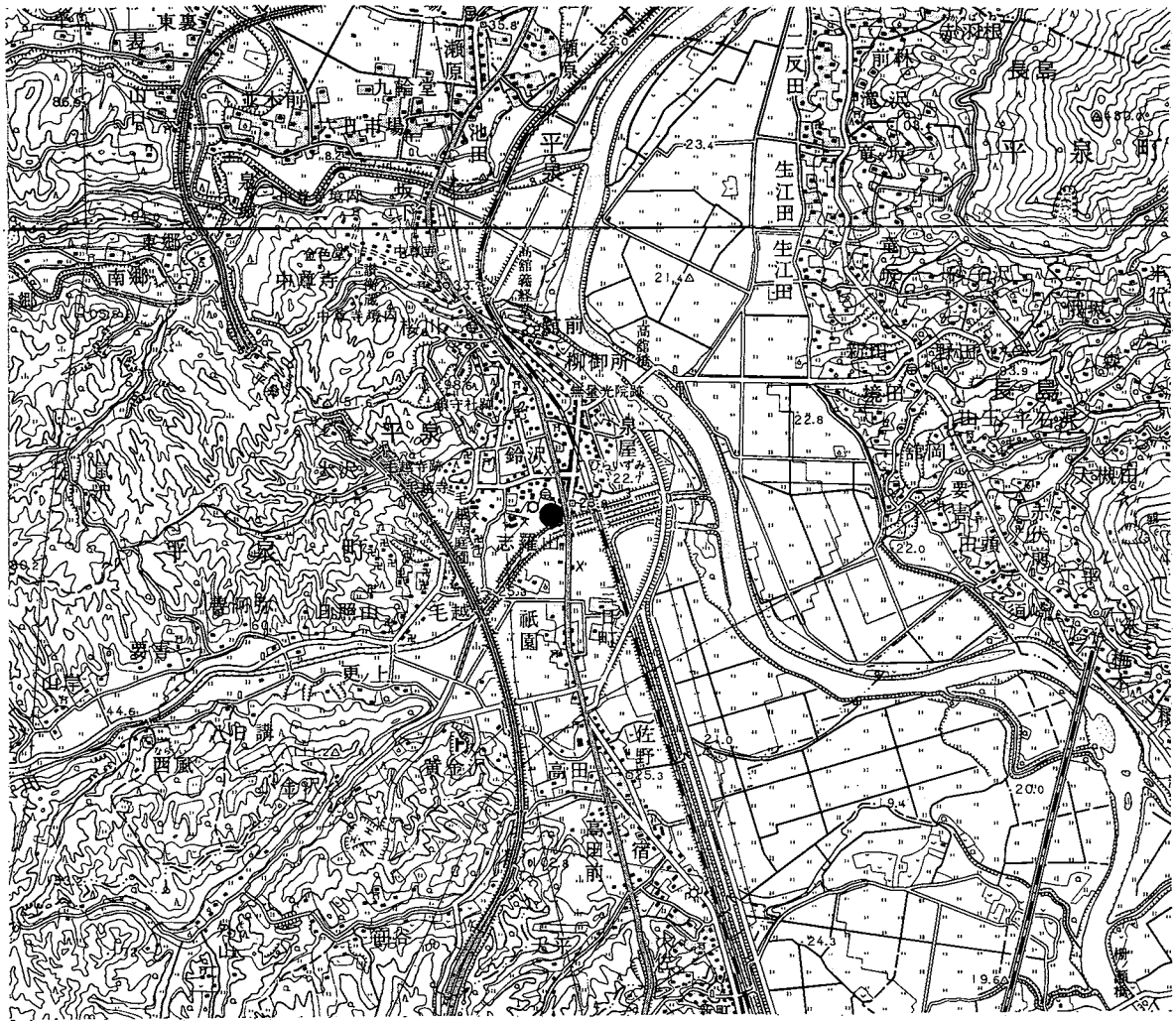


泉屋遺跡15次調査遺構配置図



しらやま
(2) 志羅山遺跡第46次

所在地	平泉町平泉字志羅山32-1ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間	平成7年8月7日～11月22日（8月9日から8月31日まで中断）
発掘対象面積	2,102㎡
発掘調査面積	2,102㎡
遺跡番号・略号	NE76-1088・SY-95-46
調査担当者	羽柴直人・吉田 理
協力機関	平泉町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 一関・水沢

1. 遺跡の立地

志羅山遺跡は平泉市街の南側に位置している。今回の調査区は国道4号線の西側に沿った部分である。調査区は南側と北側の2箇所に分かれている。調査前は南北両調査区ともに大部分が宅地として使用されていた。北側調査区は宅地として利用される前(昭和25年頃より前)は水田として使用されており、原地形がかなり改変されている。原地形は南側調査区では概ね太田川に向かってなだらかに傾斜して下がっている地形、北側調査区ではそれとは逆方向の北側になだらかに傾斜して下がっている地形である。

2. 調査の概要

志羅山遺跡はこれまでも平泉町教育委員会と埋蔵文化財センターによって、様々な地点で緊急発掘調査がおこなわれており、今回の調査は第46次調査になる。一関遊水地事業に係わる志羅山遺跡の発掘調査は、当埋文センターが平成4年(第14次)、平成5年(第25次)におこなっており、今回の46次調査はその3回目にあたる。第14次、25次調査では主に12世紀の奥州藤原氏の時代の遺構、遺物が発見され、これらの時期の人々の生活を知る重要な資料を提供している。今回の46次調査で検出された遺構、遺物は12世紀に加え、近世以降のものも検出されている。検出された遺構は掘立柱建物10棟、井戸状遺構9基、土坑31基、溝17条、柱穴状ピット360基、塀跡1条、道路状遺構1条、竪穴住居跡1棟である。

〈掘立柱建物〉

12世紀に属するものと近世に属する建物がある。12世紀に属するのは北側調査区で検出された1棟のみである。大部分は調査区外にかかっているが小規模な建物と思われる。近世の建物は南側調査区で9棟検出されている。この内民家の母屋と考えられる規模の建物が4棟、付属する小屋と思われる建物が5棟である。これらはもちろん全部が同時に存在していたのではなく、建替えが繰り返されていたものである。これらの母屋はプランが重複しない建物どうしもあり、前後関係を完全に把握できないが、建物の形から西側にあるSB1、SB2が東側のSB3、SB4より古いと思われる。東側のSB3とSB4は柱穴の重複から、SB4が新しいことがわかる。この調査区では17世紀前半の中国産の染付磁器の碗が出土しており、これらの建物の上限年代を示している。

〈井戸状遺構〉

井戸状遺構は12世紀に属するものが4基、近世以降に属するものが5基検出された。12世紀のものも近世以降のものも、いずれも井戸枠を持たない素掘りの井戸である。深さは3mから4m程度である。12世紀の井戸からは陶磁器片、かわらけ、滑石製鍋などが出土し、近世以降の井戸からは陶磁器片、砥石などが出土した。

〈土坑〉

南側調査区のSK8の埋め土は、瓜の種子が混入する有機質分が多い土で、柳之御所跡などで検出されているトイレの可能性が高いとされる土坑に類似する特徴を持っている。ただしチュウ木は出土していない。また北側調査区の西側で11基の土坑が集中して検出されている。これらは12世紀に属すると考えられるが、いずれも径約80cm、深さ約1mほどで形状が類似しており、同一の目的で構築された遺構と考えられる。

〈溝〉

12世紀の溝は東西方向のものと、南北方向のものが検出されている。南北方向のものは、道路の測溝ではないかと考えられる。SD7は東西方向に走る溝であるが、開口部の幅が約2m、深さも約2m程もある大きなものである。埋土中に十和田a火山灰が粒状に混入しているが、埋土からは12世紀の遺物も出土している。よってこの溝は12世紀に属し、火山灰は12世紀末頃に溝が埋もれた時に混入したものと考えられる。こ

の溝は14次調査のSD3と同一の溝である。近世の溝には屋敷に伴う排水の目的の溝がある。

〈塀 跡〉

12世紀に属すると思われる塀跡が北側調査区で1条検出されている。溝を掘った後に、厚い板状の木を立てて塀を構築している。土坑が構築された区域と掘立柱建物の区域を区分する目的で構築された可能性が考えられる。

〈道路状遺構〉

南側調査区と北側調査区で12世紀に属する2本の溝が南北に平行して走っており、道路の跡ではないかと考えられる。すなわち2本の溝は道路の側溝で、溝に挟まれた部分が路面と考えられる。道路幅は側溝の内側で6mから7mほどある。だが路面の整地層や轍の痕跡は検出されていない。南側調査区と北側調査区の間は未発掘であるが、北側と南側の側溝が同一線上にあるので同じ道が続いているとすることができる。また北側調査区の南側では側溝が無い部分があるが、これは削平のため失われたのであり、本来は存在していたものと考えられる。南側調査区の溝は重複しており、側溝を何度か作り替えている。今回の南側調査区に連続する14次調査区では東側の側溝の続きが検出されているが、東西に走る溝より南には伸びていない。道路はここでとぎれていたとも考えられる。また北側調査区の北側に、西から東に流れる埋没沢が検出されている。この沢は12世紀段階でもまだ窪んでいたことが確認されたが、この窪みを人為的に埋めて、そこに道路側溝を掘込んでいることがわかった。さらに排水のためであろうが西側の道路側溝から路面を横切る形に溝が掘られている。この部分では東側の道路側溝は調査区域外にかかっており確認できないが、おそらく東側の側溝も横切って道路外に排水のための溝が伸びると推定される。

この道路状遺構の軸は、概ね南北の軸線に重なっている。このままの角度で道が進むならば、無量光院の南辺におつかることになる。

〈竪穴住居跡〉

北側調査区で1棟検出されている。出土した土師器、須恵器から、9世紀後半から10世紀前半の住居と考えられる。かまどは東側に造られている。

〈出土遺物〉

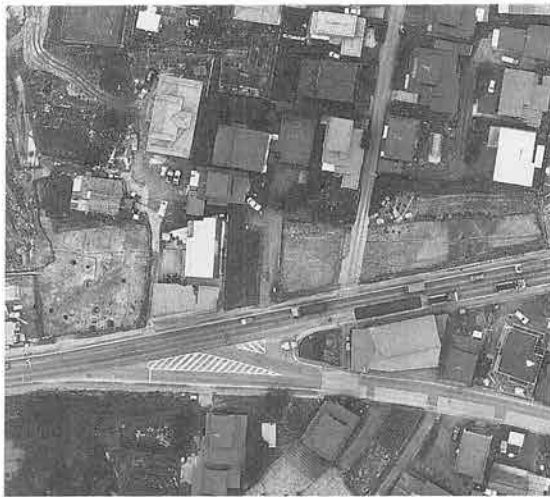
12世紀に属する遺物はかわらけが多い。てづくね、ろくろの両者があるが、手づくねかわらけが圧倒的に多い。国産陶器は常滑、渥美産の甕、片口鉢が出土している。他に在地産と思われる陶器も少量出土している。中国産磁器は白磁四耳壺又は水注の破片と青磁碗の破片が出土している。ほかには滑石製鍋、瓦（軒丸、丸、平）が出土した。

近世以降に属する遺物は陶磁器が多い。磁器は碗、皿が出土している。産地は中国産、肥前産、肥前以外の国内産がある。陶器は碗、皿、播鉢、土瓶などが出土している。産地は肥前産、大堀相馬産、東北地方在地産がある。他の遺物は砥石、石臼、銭（寛永通寶一文、四文）、煙管がある。

その他の時期の遺物として、平安時代前半の土師器、須恵器、縄文時代の石器が少量出土している。

3. まとめ

今回の調査では12世紀の遺構、遺構と近世の屋敷跡とそれに伴う遺物が多量に検出された。今回の調査で最も特筆すべき成果は12世紀の道路状遺構の検出である。奥州藤原氏の時代の「都市平泉」の構造を考える上で、欠くことのできない重要な資料を示すことができた。またこの道路状遺構は沢を埋め立てて構築されており、平泉の都市造りで行われた、自然地形の改変の事例も示すことができる。



調査区航空写真



道路状遺構



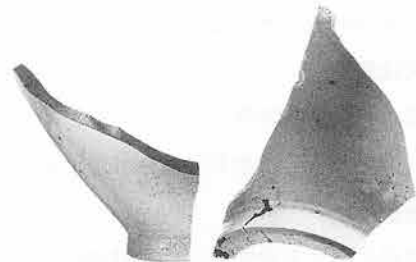
陶器壺(渥美産12C)



手づくねかわらけ(12C)



青磁碗(中国産12C)



白磁壺(中国産12C)



滑石製鍋(12C)



磁器碗(中国産17C)



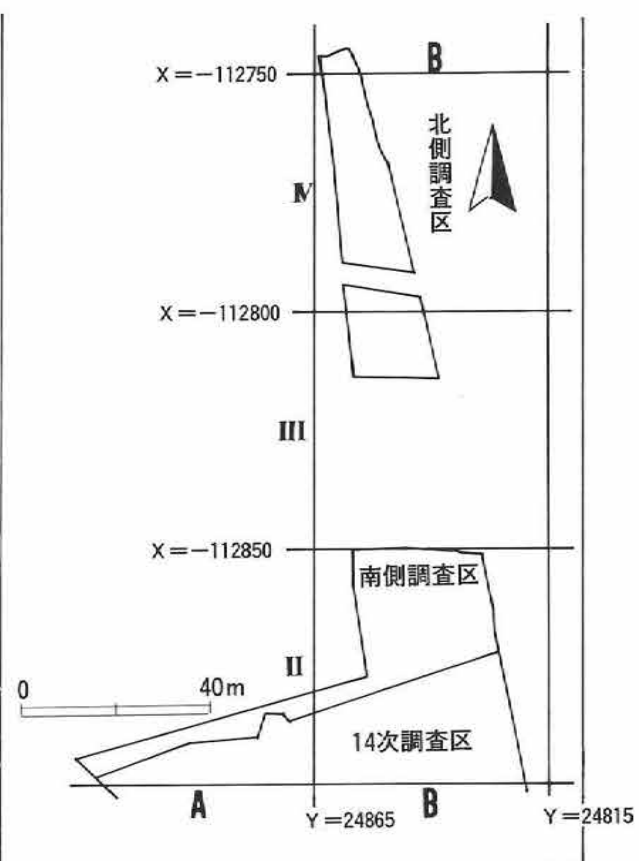
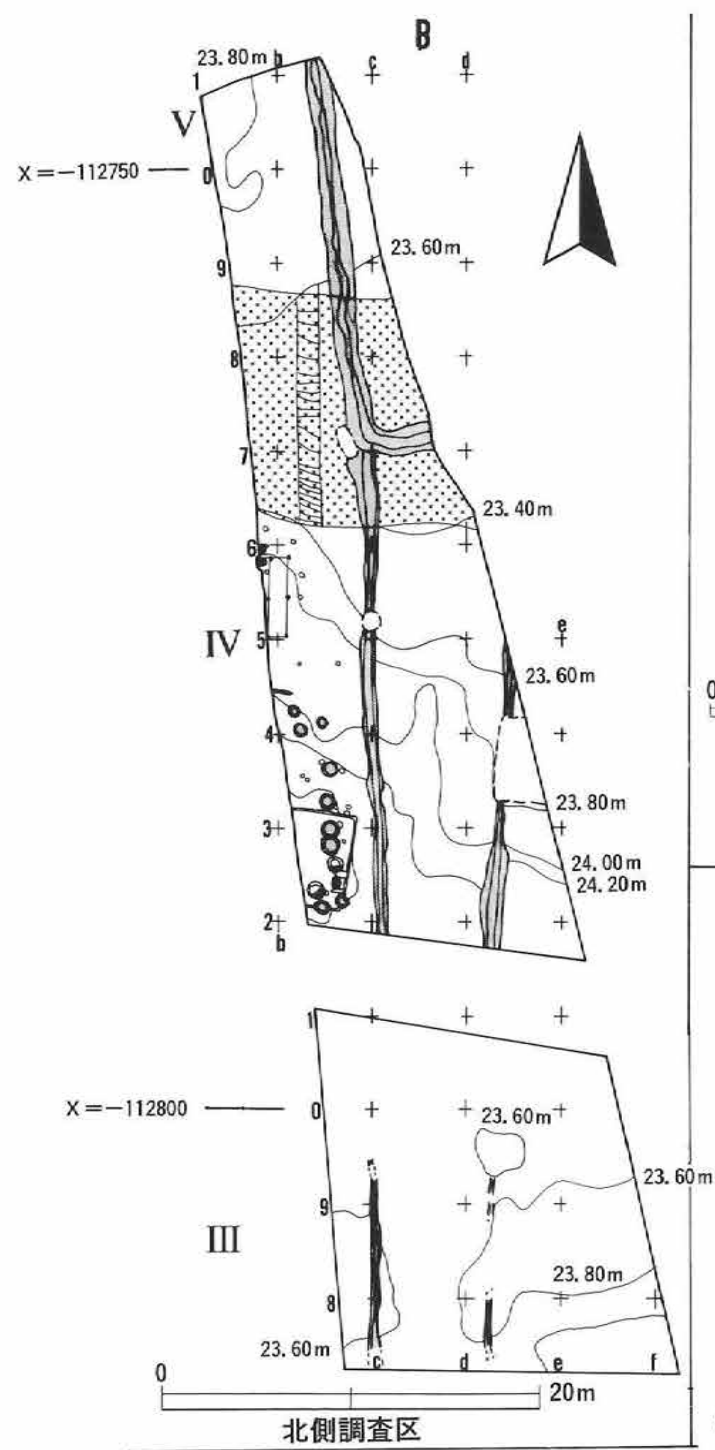
磁器皿(肥前産18C)






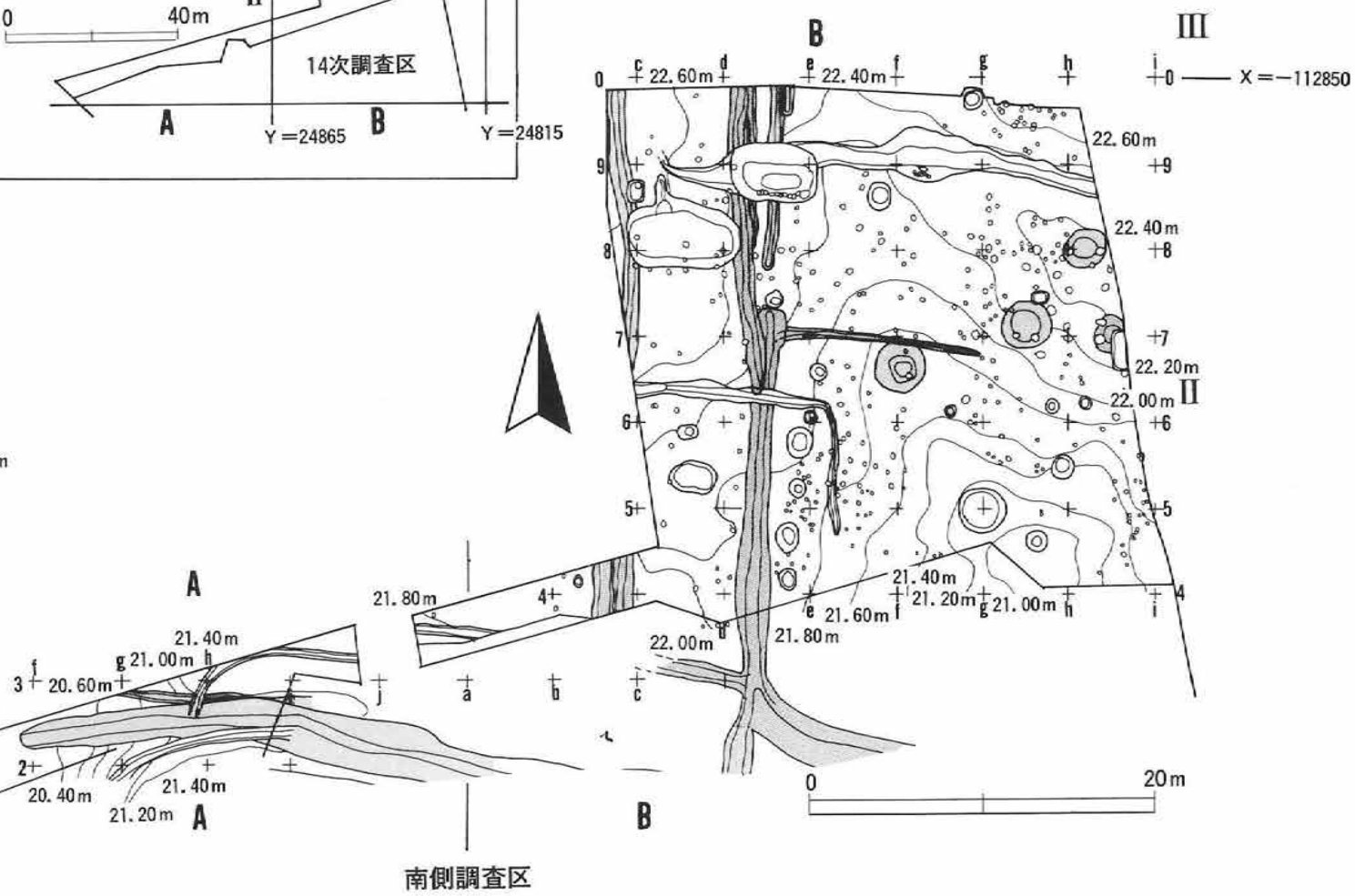
磁器皿(肥前?産19C)



志羅山遺跡(46次)検出遺構・出土遺物



-  12世紀の遺構
-  埋没沢跡
-  柱穴



志羅山遺跡46次調査遺構配置図

(3) 白井坂 I 遺跡

所在地 水沢市佐倉河57-4ほか
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間 平成7年4月7日～8月31日
調査対象面積 2,454㎡
発掘調査面積 2,454㎡
遺跡番号・略号 NE06-2314・S I I-95
調査担当者 杉沢昭太郎・佐々木裕司
協力機関 水沢市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 北上・水沢

1. 遺跡の立地

白井坂 I 遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線水沢駅から北に3.5km、胆沢城跡から南東1kmに位置し、水沢段丘の北東端に立地している。段丘下は北上川の沖積地となっており、遺跡の標高は約49mで沖積地との比高は9m～10mである。調査区の現況は畑地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は堀跡1条、土塁1基、竪穴状遺構5基、土坑18基、溝跡9条、井戸状遺構2基、焼土1基、掘立柱建物跡10棟等でいずれも中世の館跡（お伊勢館）に伴う遺構である。

出土遺物は陶磁器、かわらけ、銭貨、石臼といった中世の遺物のほか、ロクロ成形の土師器・須恵器、縄文土器の細片等が出土している。

〈竪穴状遺構〉

検出された5棟のうち、平面形が方形のものが2棟、長方形を基調とするものが3棟である。規模は最小で1.8m×1.4m、最大が2.8m×2.5m程で、壁溝を有するものも1棟検出されている。炉・焼土はみられず遺物も殆ど出土していないが城館に伴う遺構と思われる。

〈土坑〉

土坑は18基検出された。平面形が円形（直径1.3～1.8m）を呈するものが7基。平面形が小判形・隅丸方形（1.3m×0.8m程）を呈するものが11基である。平面形が円形を呈する土坑2基からは永楽通寶が出土しており、他の土坑も含めて中世の遺構と考えられる。

〈堀跡〉

調査区の東端で検出されたものは、上幅が約4m、下幅が約2m、深さ約2mで断面形は逆台形状を呈する。南東～北西方向に7m程行き、東側にくの字状に湾曲し調査区外に延びている。この堀跡は平成4年調査区を区切る堀跡までは延びず、その手前2mのところでは止まっているのが特徴である。

〈土塁〉

今年度調査区と昨年度調査区との境界に位置する堀跡の南東部に構築している。本来は堀の東側全域に土塁を巡らしていたと推測される。遺存するのは全長2m程で、崩落や流出のために詳細な規模は不詳である。上幅は60～80cm、下幅が約2mを測り、高さは現地表面から1m程である。

〈溝跡〉

平成4年度に調査した堀跡、平成6年度に調査した堀跡に並行するものと直行するものとに分けられる。前者は幅が0.5m～1m、深さ0.2～0.6m程度なのに対して後者は上幅約3m、深さ0.6m～1mと規模が大きく、郭内を区画していたかのようである。掘立柱建物跡との関係をみながら今後検討していきたい。

〈井戸状遺構〉

調査区の南西端で2基検出された。いずれも平面形は円形で直径は3m程度、深さは1～2m程しかない。井戸枠等の施設は見られず、湧水もなかった。遺構の性格については判然としない。

〈掘立柱建物跡〉

調査区全域から10棟が検出されている。最大規模の建物は桁行11間×梁行4間（16m×6.2m）、最小規模は桁行4間×梁行2間（6.6m×4.2m）である。建物跡はその規模の類似するものがほぼ同じ位置から重なり合って検出され、時期差をもっていることを示している。柱穴からは中世陶磁器が出土しており城館に伴う遺構と考える。柱穴は合計3500基余り検出されていることから建物の棟数も増加が予想される。

〈出土遺物〉

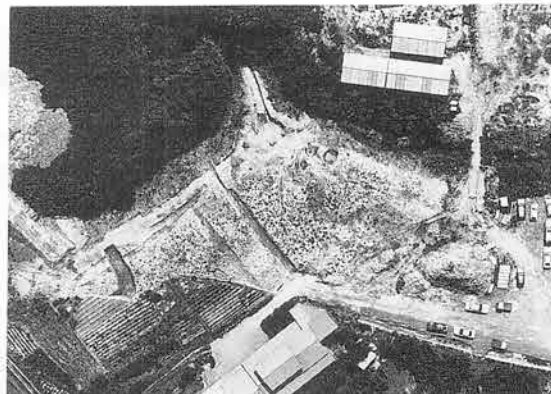
出土遺物の総量は中コンテナ5箱余である。中世陶磁器では瀬戸・美濃灰釉、鉄釉陶器。中国産染付、青磁・白磁、唐津長石釉皿などが小コンテナ1箱程出土した。他に永楽通寶・洪武通寶をはじめとする銭貨14点、瓦質陶器、ロクロ成形かわらけ、石臼、石鉢、平安時代の土師器・須恵器片、縄文土器細片などが出土している。

3. まとめ

前回までの調査により、白井坂I遺跡は河岸段丘の縁辺部を利用した複数の郭をもつ15世紀前半～16世紀に営まれた城館跡であることが明らかになっていた。今年度の調査区は郭一（92年度調査区）に北隣する郭二の南側部分が調査対象で、出土した陶磁器類も概ねこの時期に属するものであった。また検出された柱穴の数、密な分布状況は掘立柱建物跡の幾度とない建て替えを意味するもので、この城館の存続期間の長さを裏付けているといえる。さらに郭内は溝によって区画して利用されていたと見られる。



調査区遠景(東から)



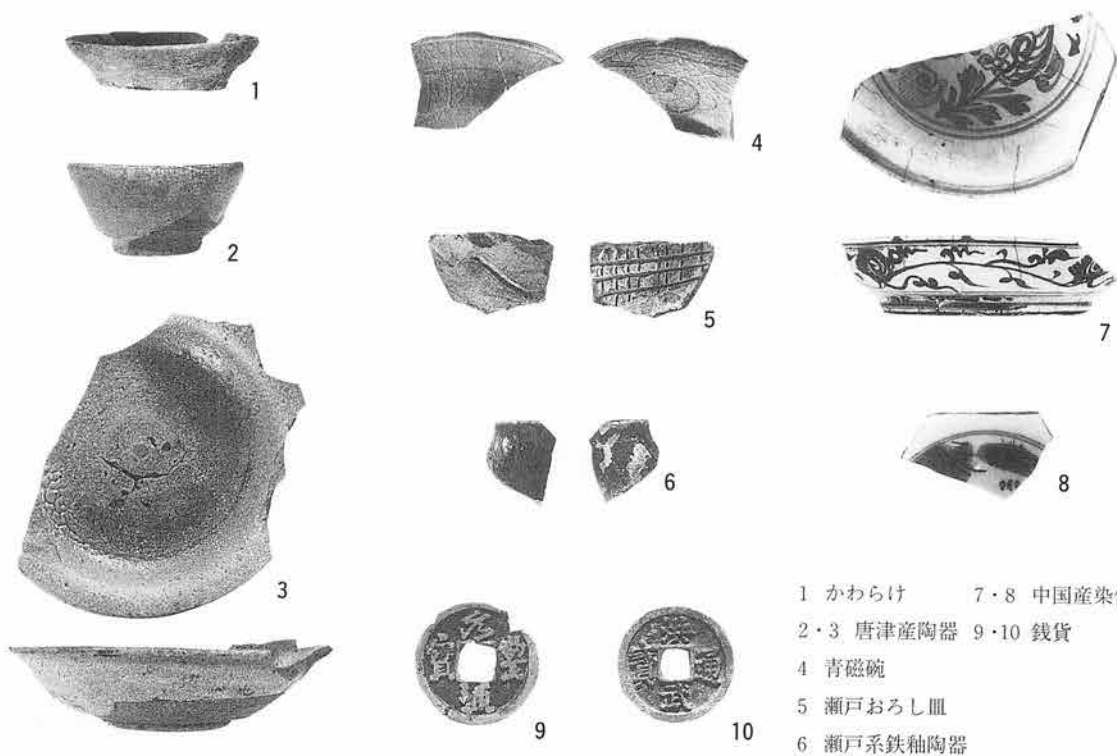
遺跡空中写真



竪穴状遺構



掘立柱建物跡・柱穴群



- 1 かわらけ
- 2・3 唐津産陶器
- 4 青磁碗
- 5 瀬戸おろし皿
- 6 瀬戸系鉄釉陶器
- 7・8 中国産染付
- 9・10 銭貨

白井坂 I 遺跡検出遺構・出土遺物



白井坂 I 遺跡遺構配置図

(4) 白井坂Ⅱ遺跡

所在地	水沢市佐倉河字白井坂56-2ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間	平成7年4月7日～8月31日
調査対象面積	833㎡
発掘調査面積	833㎡
遺跡番号・略号	NE06-2351・SⅠⅡ-95
調査担当者	杉沢昭太郎・佐々木裕司
協力機関	水沢市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 北上・水沢

1. 遺跡の立地

白井坂Ⅱ遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線水沢駅から北に約3.3km、胆沢城跡から南東に1.5kmに位置し、水沢段丘の北東端に立地している。段丘下は北上川の沖積地となっており、遺跡の標高は約49mで沖積地との比高は9m～10mである。調査区の現況は宅地・原野であった。なお白井坂Ⅰ遺跡とは沢を挟み隣接している。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代、中世城館、近世に関する遺構に大別できる。縄文時代の遺構としては土坑3基、城館に伴うものとして堀跡1条、土坑1基、柱穴状土坑群、近世では掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構2基、溝跡7条、土坑11基等が検出されている。遺物は近世陶磁器、銭貨、土師質土器、縄文土器、ロクロ使用土師器・須恵器などが大コンテナ3箱分出土している。

〈土坑〉

15基検出されている。縄文時代中期の土器を伴ったものが3基検出された。平面形は円形を基調とし、開口部径1.2～1.5m、深さ30～50cmほどで断面形は袋状や浅皿状のものがある。土器はいずれも廃棄されたような状態で出土し、埋土も人為的な様相を呈する。昨年度の調査で検出された土坑と同様、その分布が調査区の南端に偏って見られる。

中世の遺構と思われる土坑が堀跡の東隣で1基検出されている。開口部径1.1m×1.6mの隅丸長方形を呈し深さは40cmを測る。埋土は人為的堆積で永楽通寶が4点出土している。

そのほかの土坑からは遺物は出土していないが検出状況や他の遺構との重複関係などから近世遺構のものと思われる。平面形は隅丸長方形を基調とし規模は最大で2.1m×1.5m、最小のもので1.4m×1mである。遺構の性格については不明である。

〈竪穴状遺構〉

調査区の西側で南北に並んで2基検出されている。北側の1基は平面形が隅丸長方形を呈し、規模は4.4m×3m深さ50cm、床は若干凹凸がある。炉・焼土は見られない。大堀相馬産と思われる陶器片が出土しており近世の遺構と思われる。他の1基は規模が5.4m×1.9mで、平面形は隅丸長方形を基調とし深さは80cm、床面は概ね平坦である。遺構の性格については不明であるが、近世陶磁器が出土しておりこの時期の遺構であろう。

〈溝跡〉

7条検出されているが、その殆どが調査区の西側に位置し重複も見られる。南西―北東方向に延びるものが6条と東―西方向に延びるものが1条である。近世陶磁器が出土しておりこの時期の遺構と考えられる。

〈堀跡〉

調査区の中央に位置する。南―北方向に延び、北側は緩やかに北東方向に曲りながら調査区北側の沢に達している。さらにこの堀を北に延長させると白井坂Ⅰ遺跡で昨年度検出された堀跡に対応するようである。南側は調査区外に延びており詳細は不明である。上部幅は3～4m、深さ2m、断面はV字状を呈する。白井坂Ⅰ遺跡の堀跡と同様、城館に伴う遺構であると思われるが遺物は出土していない。

〈掘立柱建物跡〉

調査区西側で1棟検出された。建物の殆どは調査区域外に位置していることから、規模の詳細は不明であるが、桁行は7間まで確認することができた。柱間寸法は1.8m前後である。遺物は出土していないが近世

の民家跡と思われる。

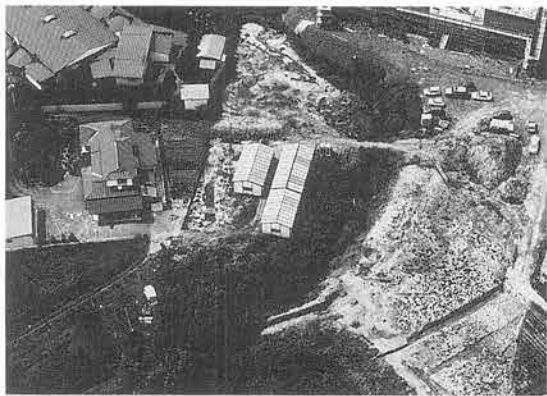
柱穴は調査区南東側を中心に全部で177基程検出されていることから建物棟数は今後増加すると思われる。さらに堀跡が確認されていることから白井坂Ⅰ遺跡と同様に城館に伴う建物跡が存在していた可能性が高いと思われる。

〈出土遺物〉

18世紀代から明治時代までの陶磁器が溝・柱穴・竪穴状遺構などから小コンテナ2箱分出土している。陶磁器の産地は肥前・瀬戸・美濃、大堀相馬が多く、産地不明の東北在地のものもある。他に銭では寛永通寶が3点、永楽通寶が8点。土器類では縄文時代中期の土器、ロクロ成形の土師器・須恵器細片が少量出土している。勾玉も1点出土している。

〈まとめ〉

今回の調査により断続的ではあるが、縄文時代から近世に至るまでの遺跡であることが確認された。とくに堀跡が検出されたことにより、白井坂Ⅰ遺跡と同様この地が城館として利用されていたことが判明し、城域がこれまで知られていたものより広範囲に及ぶことが明らかとなった。また柱穴の検出状況、出土した陶磁器類から判断して、近世に営まれた屋敷跡の存在も予想される。縄文時代の遺構は調査区の南側に偏って分布しており、集落が南側に広がっているものと思われる。



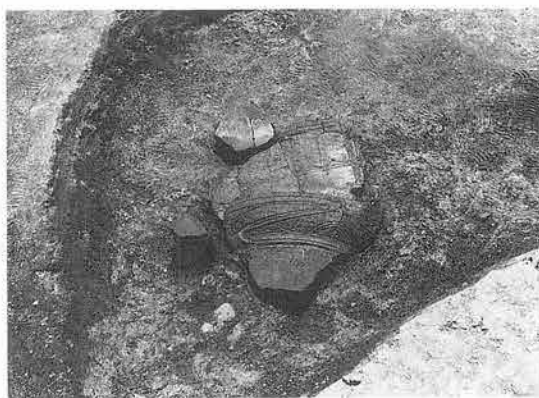
遺跡空中写真



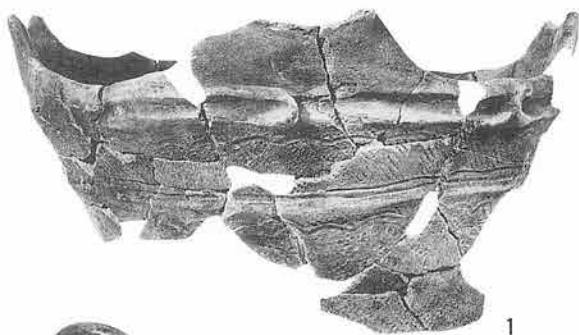
遺物出土状況



掘跡



遺物出土状況



1



6



7



2



3



5



8



9

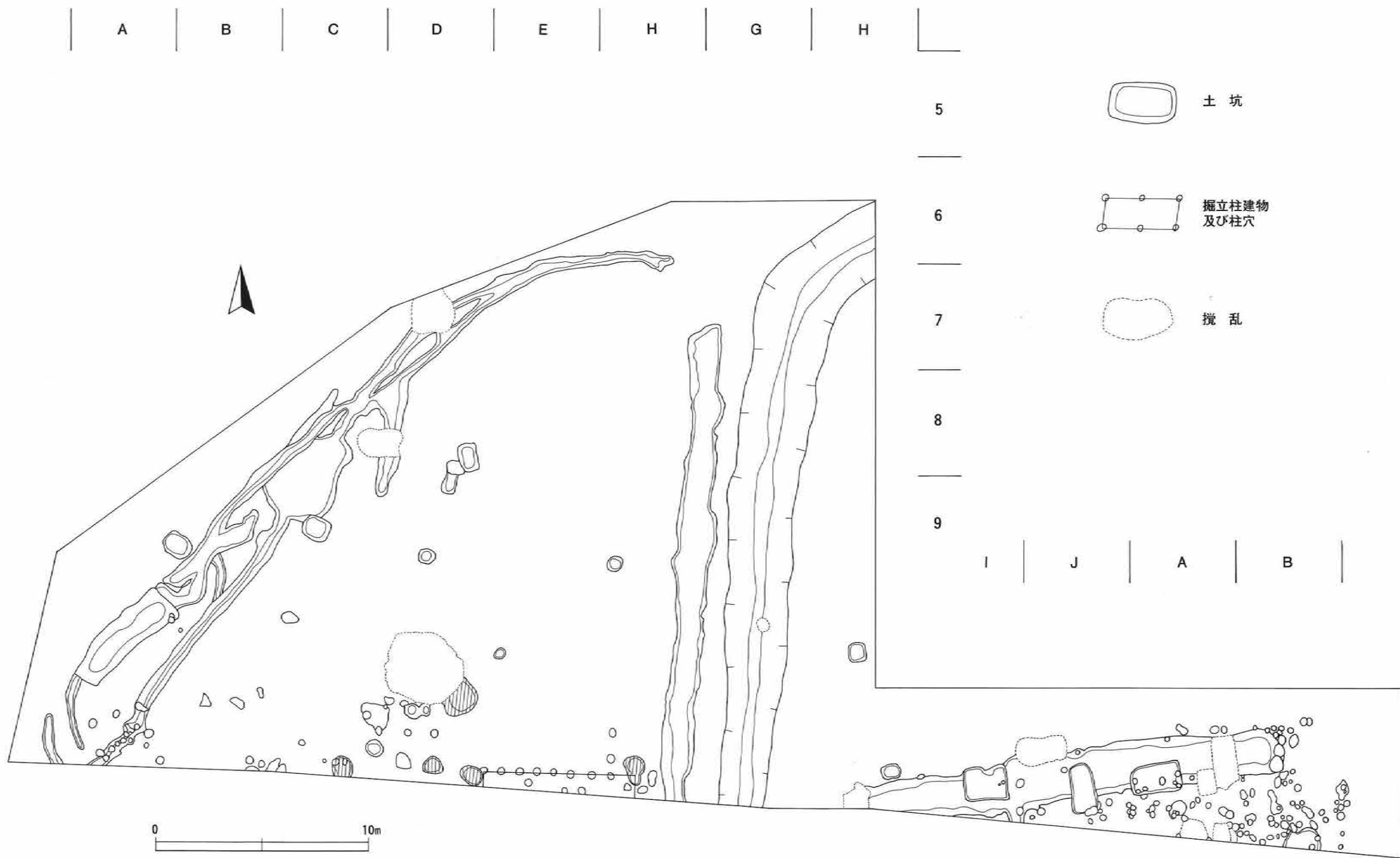


4



- 1 縄文土器
- 2 勾玉
- 3・4 陶器碗(大堀相馬産)
- 5 陶胎染付皿(瀬戸・美濃産)
- 6～8 肥前磁器皿
- 9 肥前系碗

白井坂Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物



白井坂Ⅱ遺跡遺構配置図

(5) 花立 I 遺跡

所在地 西磐井郡平泉町字花立102-2ほか
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間 平成7年6月16日～7月31日
調査対象面積 654m²
発掘調査面積 654m²
遺跡番号・略号 NE76-0092・HD I-95-12
調査担当者 木戸口俊子・溜浩二郎
協力機関 平泉町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 一関・水沢

1. 遺跡の立地

花立Ⅰ遺跡は、平泉町のほぼ中央に位置しており、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅から北西約900mのところにある。今回は第12次調査で、国道4号線西側沿いの住宅と道路を挟んで2ヶ所に分かれている。南側調査区は国道の道路面よりも1.5mほど低くなっており、道路側溝はあるものの調査区面よりも高いためにほとんど機能しておらず、西側に連なる田地からの水や降雨がそのまま調査区にたまって常に浸水状態である。北側調査区は、以前に宅地として利用されていたが、現在は取り壊されて空き地となっている。

2. 調査の概要

南側調査区では、土坑3基、溝状遺構2条、柱穴状ピット20基、旧沢跡3条が検出された。北側調査区については遺構検出に努めたが、既に地山が出ている状態であり、家屋建築時に削平されたためか遺構は検出することができなかった。

〈土坑〉

調査区中央部より3基検出されている。地山で検出された1基は、口径1m深さ約50cmの円形で、断面はビーカー状を呈している。底部より板状の遺物が認められた。しかし、風化が著しく原形はわからない。

〈溝状遺構〉

調査区最北部より2条検出された。このうち1条は、幅60cm～70cm長さ3m、底部25cm～30cmでしっかりと掘り込みが認められた。東～西に走行しており、国道にぶつかっているためその先は不明であるが、平泉町教委で実施した第7次調査では国道を挟んでこの溝の延長上に溝が検出されている。

〈柱穴状ピット〉

調査区中央部の2号沢と3号沢の間に集中して20基検出されたが、いずれも建物跡にはならなかった。

〈旧沢跡〉

旧沢跡と思われるものが3条検出された。このうち3号沢と名付けた沢跡では、北西部に15cm～30cmのある程度大きさのそろった石が密集して検出された。また、そこから1mほど南東の沢の埋土からは完形品を含むかわらけが集中して出土した。この沢の最大幅は4m、深さは1.2mある。

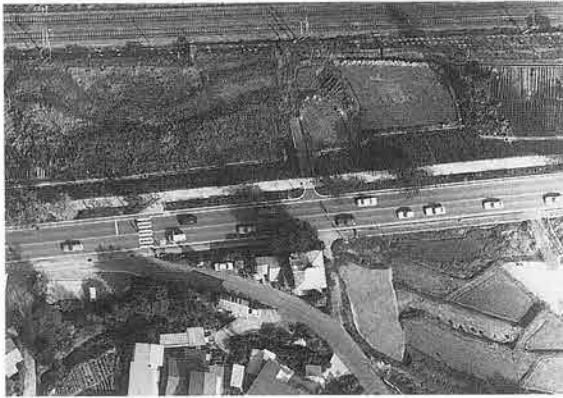
〈出土遺物〉

4箱出土したかわらけのうち、3号沢からの出土が半分を占める。国産陶器は50片余りであり、常滑産と渥美産が同数程度でほとんどを占めている。中国産磁器、時代不明の墨書された小木片が1点出土している。

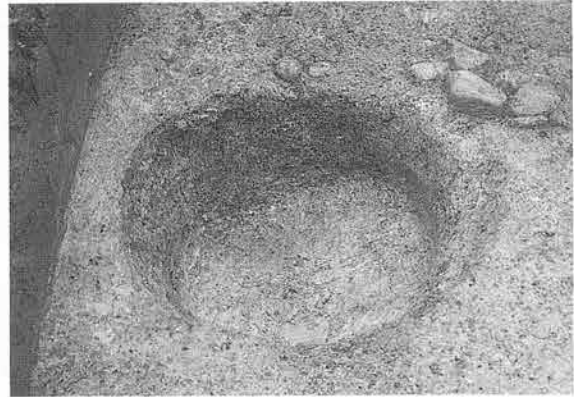
3. まとめ

今回の調査では、東側の国道に向かって調査区全体が緩やかな傾斜になっており、低い東側では沢跡、高い位置にある西側では、柱穴状ピットを検出する事ができた。今回の検出された柱穴状ピットでは建物は建たなかったが、現在耕作田として利用されている調査区西側に建物跡が広がっている可能性が高いと思われる。

いずれの旧沢跡も走行方向、幅、深さ等から、先に平泉町教委により実施された周辺の遺跡調査で検出されていた沢跡に続いていくものであると考えられる。また、3号沢においては、ある程度大きさのそろった石が並んでいること、かわらけが一定の場所、一定の深さより集中して出土していること、大小のかわらけが重なった状態で、しかもその場で割れたごとくに割れ目がついていることなどから、一時期に意図的に捨てられた可能性が高い。そうした場合、3号沢においては当時そこに沢があったということだけでなく、自然の沢を利用して当時の生活習慣の何らかに関連した場所ということができると考えられる。



遺跡全景



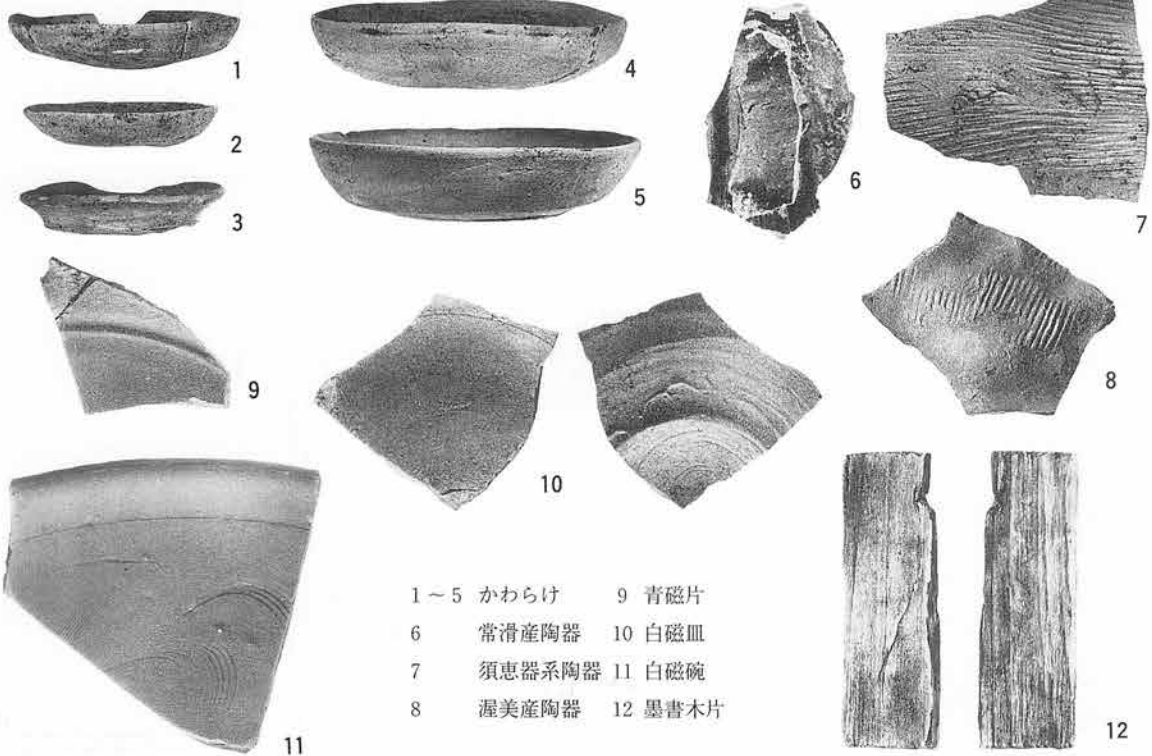
土坑



かわらけ出土状況

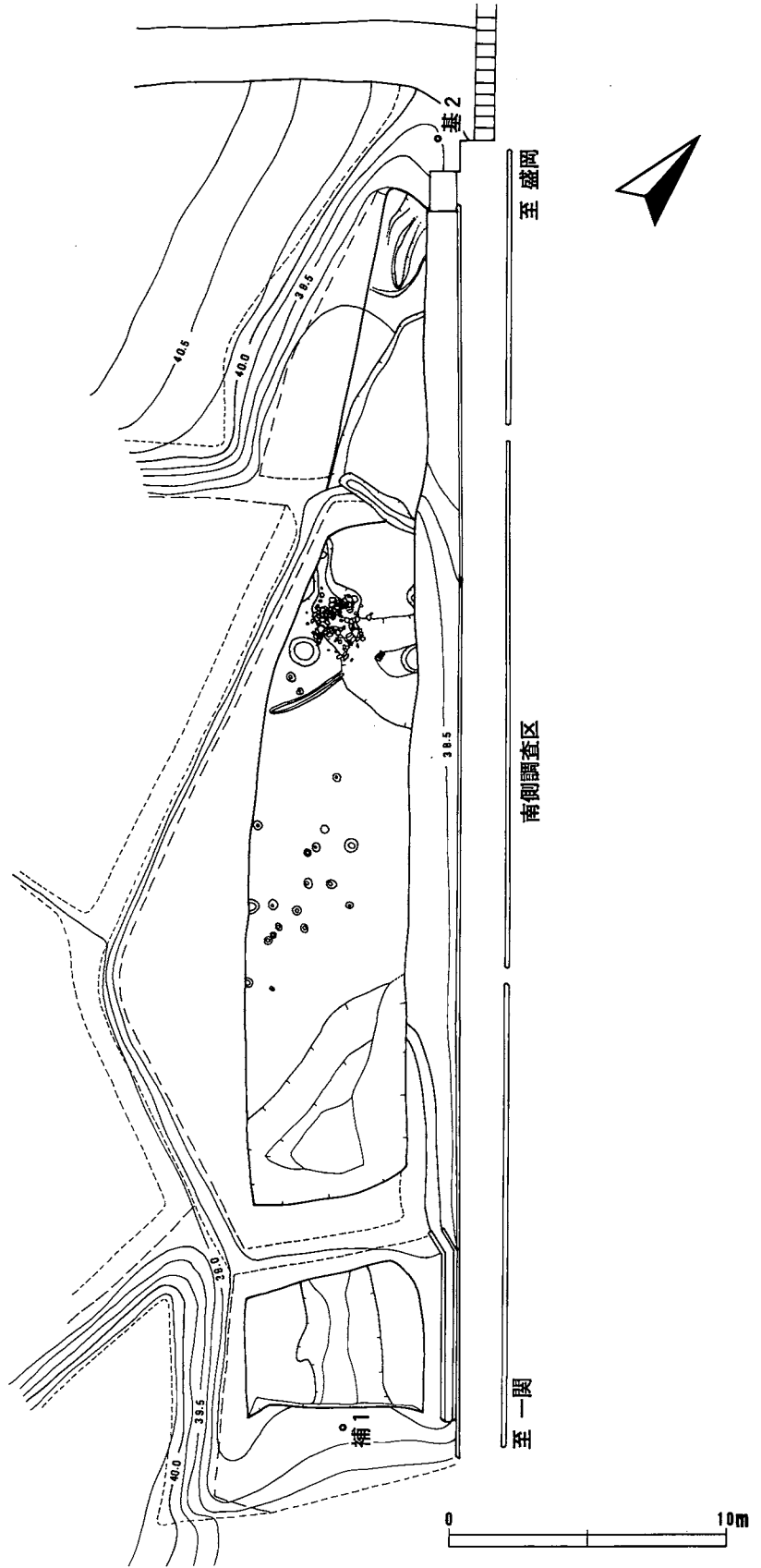
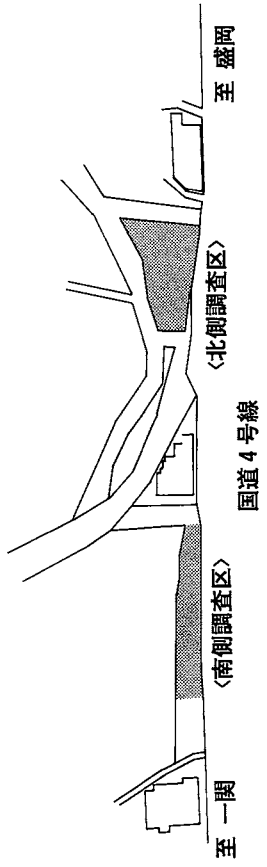


旧沢跡



- | | | | |
|-----|--------|----|------|
| 1～5 | かわらけ | 9 | 青磁片 |
| 6 | 常滑産陶器 | 10 | 白磁皿 |
| 7 | 須恵器系陶器 | 11 | 白磁碗 |
| 8 | 渥美産陶器 | 12 | 墨書木片 |

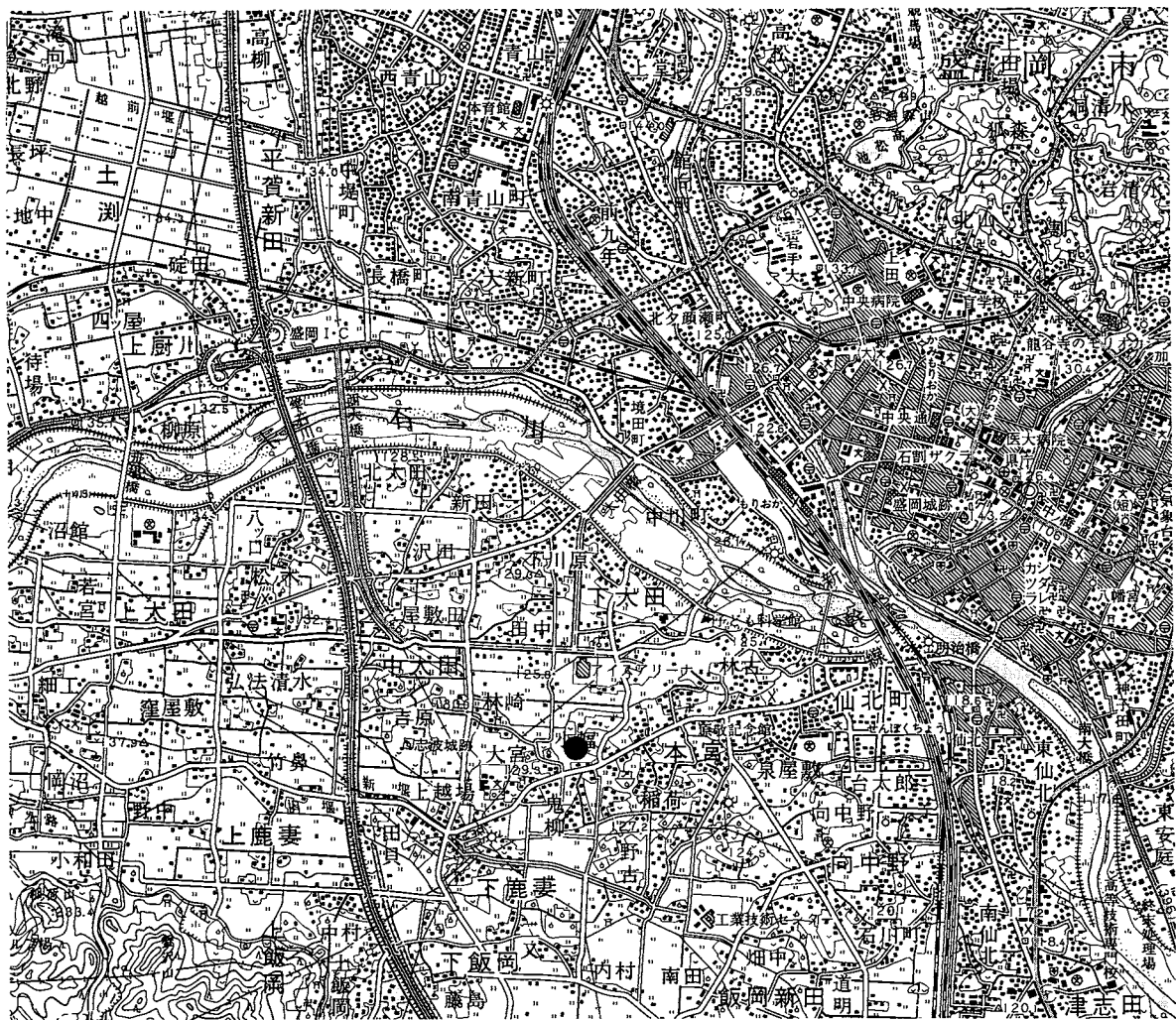
花立 I 遺跡検出遺構・出土遺物



花立 I 遺跡遺構配置図

こはば
(6) 小幅遺跡第5次

所在地	盛岡市本宮字小幅53ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間	平成7年9月11日～11月16日
調査対象面積	2,000m ²
発掘調査面積	2,000m ²
遺跡番号・略号	LE16-2009・OKH05
調査担当者	伊藤 拓・鎌田 勉
協力機関	盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡

1. 遺跡の立地

小幡遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅より西約2.5kmに位置し、雫石川によって形成された標高127m前後の河岸段丘縁辺部の微高地に立地し、現在の雫石川との高低差は約10mある。周辺地域は雫石川の氾濫源に当たり、旧河道の跡も残っている。調査区の現況は水田で、周辺地域も水田・畑地など農村的土地利用が中心だが、一部に宅地、公共施設などの都市的土地利用も見られる、都市郊外に典型的な両者の漸移帯となっている。本遺跡の周辺には、西側約1,000mの所にある志波城跡をはじめ、本遺跡と時代的にも近いと考えられる林崎遺跡・本宮熊堂遺跡・矢盛遺跡などがある。

2. 調査の概要

調査は北側に隣接する第6次調査区と平行して行ったが、掘立柱建物跡や溝跡など、第6次調査区にまたがる遺構も見られる。検出された遺構は竪穴状遺構2棟、掘立柱建物跡2棟、土坑19基、溝跡14条、柱穴124基であり、特に西側に集中して見られ、東側は少ない。また西側ほど時代の新しい遺構が見られる。

〈竪穴状遺構〉

調査区の南西端に2棟が切り合って検出された。平面形は円形であり、規模は直径約6.0m、深さ50cmある。切り合い関係から東側の遺構が西側よりあたらしい。また西側遺構の南縁に沿って、幅約10cmの溝が見られる。西側の遺構には再調整なしの静止糸切りの坏が含まれる(内黒土器を含む)ことから9C後半と思われる。東側の遺構からは底部の小さい椀型のあかやき土器が見られることから10C半ば～後半と思われる。

〈掘立柱建物跡〉

調査区の南西部から検出された掘立柱建物跡は、遺構の西側部分が調査区域外に及んでいるため全容は不明である。検出された部分では桁行5間、梁行2間(14.8m×6.6m)の南北棟で、柱間は2.8～3.0mである。各柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺が約1.0m、深さ約1.5mである。出土遺物から10C半ば～後半のものと推測される。

調査区の中央部では近世のものと思われる掘立柱建物跡が検出されている。桁行2間、梁行2間の南北棟で、庇は東側のみにある。柱間は約2.3m、各柱穴の直径は50～60cm、深さ20～40cmある。

〈土 坑〉

19基検出されたがTo-a火山灰や遺物を埋土に含むなどして時代を特定できる遺構も見られる。時代を特定できる遺構はすべて平安時代のものである。

〈柱 穴〉

124基検出されたが、一部の柱穴にTo-a火山灰を含むものがある。また近世の住居跡の西側にある柱穴の1つからは寛永通宝が出土した。柱穴とした中には掘立柱建物跡として組むことができるものもあると思われるので今後検討していきたい。

〈溝 跡〉

調査区の南側と西側を中心に計14条検出されたが、最も規模の大きな溝跡は南端部に近い場所で検出され、東から西にやや蛇行しながらほぼ直線的に延びている。両端とも調査区外に延びているが、西端は隣接する第2次調査区で検出された溝に、東端はやや離れているが、第4次調査で検出された溝にそれぞれつながると思われる。検出された規模は約54m、上幅は約1.5m～2.0m、底部幅は約50cm、深さ1.0～1.5mである。埋土中位からTo-a火山灰は検出されたことからこの溝跡は平安時代前期のものと思われる。

この溝跡と合流する溝跡が3条検出されている。東側にあり、南から前記の溝跡に合流している溝跡は長

さ約5.3m、上幅60～80cm、底部幅30～60cm、深さ約20cmある。遺構の切り合い関係から前者より新しいと思われる。西側にある2条の溝跡も最初に挙げた溝跡に切られることからより古いと思われる。この2条の内東側の溝跡は長さ約12.5m、上幅0.8～2.5m、底部幅0.3～1.7m、深さ約20cmである。埋土から10C後半のあかやき土器の坏の完形品が出土している。西側の溝跡は、長さ約7.0m、上幅約1.2m、底部幅約1.7m、深さ約25cmである。

調査区中央には南北に延びる溝跡が2条検出されている。1条は北に隣接する第6次調査区から続くものだが、調査区内で検出された規模は長さ約13m、上幅0.7～1.0m、底部幅約50cm、深さ約30cmである。もう1条はほぼ直線的に延び、長さ約14m、上幅約20cm、底部幅約20cm、深さ約10cmある。

その他の溝跡は調査区南西部に集中しているが、規模が小さく浅いものがほとんどである。

〈道路状遺構〉

調査区の南端部で検出され、ほぼ東西方向に直線的に約38m延び、東側は未調査区のため不明だが、西側は第2次調査区で検出された遺構に続いている。側溝の埋土にはTo-a火山灰を含み、道路面となる側溝の間には同時代の遺構が見られない。道路状遺構の幅は約3.5mあり、側溝はそれぞれ上幅が約1.0m、底部幅が約40cm、深さ約50cmある。また側溝には路面に敷いたと思われる玉石が埋土の下層に混入している。また、北寄りの側溝の東側に溝跡が切られていることから、道路状遺構の方が溝跡より古いと思われる。

〈出土遺物〉

出土遺物は大コンテナ7箱程度あり、西側に集中し、東側は比較的少ない。平安時代前期（9C後半～10C後半）の遺物を中心とし、それ以前のものは見られない。主体は土師器、あかやき土器で器種は坏が多く、甕は少ないのがこの遺跡の特徴である。須恵器も見られる数は少なく、また表土からは近世陶磁器が出土している。出土した坏はロクロ成形で回転糸切りがほとんどであるが、静止糸切りも少し見られる。また底部外面に砂の付着した土師器の砂底土器も出土している。

3. まとめ

今回の調査で平安時代の竪穴状遺構、掘立柱建物跡、溝跡、道路状遺構が確認され、集落として利用されていたことが明らかになった。しかし竪穴住居跡は検出されず、焼土などの生活痕跡を示す遺構も少なかった反面、大規模な掘立柱建物跡や道路状遺構が検出された。また南側に隣接する、第2次調査区につながる溝跡が検出されたが、この溝跡はやや離れた第4次調査区で検出された溝跡にもつながる大規模なものになるとと思われる。



遺跡全景



竪穴状遺構



掘立柱建物跡



掘立柱建物跡



溝跡



道路状遺構



1



2



3



4



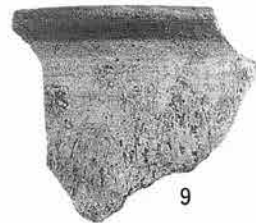
5



6



7



9



8



10

1~7 土師器坏

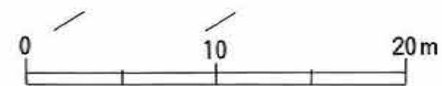
8・9 土師器甕

10 須恵器甕

小幅遺跡第5次検出遺構・出土遺物



小幅遺跡第5次遺構配置図



(7) 沢田 I 遺跡

所在地	下閉伊郡山田町山田3-8ほか
委託者	建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
発掘調査期間	平成7年6月15日～8月4日
調査対象面積	2,500m ²
発掘調査面積	2,500m ²
遺跡番号・略号	L G 94-0032・S D I-95
調査担当者	佐々木清文・大場慎也
協力機関	山田町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 大槪

1. 遺跡の立地

沢田Ⅰ遺跡は、山田町山田字沢田地内に所在し、東日本旅客鉄道山田線陸中山田駅の北1.7km付近、山田北小学校の北側100mの山際の緩斜面から沢沿いにかけて広がっている。

陸中海岸のほぼ中央に位置する山田町は北上山地の東部にあたり、湾と岬が入り組んだりアス式海岸特有の海岸線を呈している。町内には段丘はほとんど発達せず、関口川や綾織川・船越湾周辺にやや平らな面がわずかに発達しているが、平坦地は少なく、山地が海に張り出す地形が大部分を占める。

遺跡周辺も大畑山地を主とする小起伏山地から関口川沿いの谷底平野に張り出す山麓の緩斜面や小規模な砂礫段丘が見られる。遺跡はそういう山麓の緩斜面から沢沿いの平坦地にかけて立地している。標高は10m前後で、古くから縄文時代・古代の遺物が散布していることで知られている。沢を挟んで東側には、中世の館跡と見られる沢田Ⅱ遺跡がある。

2. 調査の概要

沢田Ⅰ遺跡の調査は昨年度からの継続事業で、今年度は二次調査にあたる。当初の調査対象面積は5,000㎡であったが、途中で山ノ内Ⅱ遺跡の二次調査を行うことになり、2,500㎡の調査面積に変更となった。

今年度の調査は、調査区の東側から始め、そこで終了した後、残りの調査地の北側から遺構の精査に入ったが、途中で上記のように調査日程に変更ができたため、2,500㎡の未調査地の調査は次年度に繰り越すことになった。それに伴い長さ16mを越す大型住居跡など、次年度以降の調査予定地に続く調査中の遺構は埋め戻しを行った。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡20棟、奈良・平安時代の竪穴住居跡10棟・竪穴状遺構3基・土坑18基・陥し穴1基である。遺構は調査地の中央から山際の方に集中する。調査地東側の沢沿いには旧河道の痕があり、流れ込みによる遺物は見られるものの、遺構はほとんどで検出されていない。

(1) 縄文時代竪穴住居跡

縄文時代前期前葉から中期後葉までの住居跡があり、時期の異なる遺構が重複しているところも多い。前期前葉の住居跡は、大型のものと小型のものがあり、大型のものは長さ16.5m・幅5.2mの俵形を呈し、少なくとも三期の建て替えが行われている。さらに次年度以降の調査地に延びており、長さの更新が予測される。長い壁に沿って対になる柱穴が作られ、中軸線上に地床炉が複数作られている。壁際には土砂の崩落を防ぐ施設の痕跡の溝が巡る。小型の住居跡は、長径2m未満の楕円形状で、柱穴や炉は見られない。

中期中葉の住居跡は、径が5m前後の円形ないしは楕円形である。石囲炉が中央付近にあり、柱穴が4本配置されているものが多い。埋土に大量の土器が投げ込まれたように混入している遺構もある。中期後葉の遺構は、西側壁際に一段高いベット状の施設が作られ、反対側の壁寄りに複式炉が設けられている。

(2) 奈良・平安時代の竪穴住居跡

方形で、一辺3mの小型のものから6m近いものまでであるが、遺構の重複や耕作・土取りなどの削平・攪乱を受け、壁の一部や貼り床部分しか残存しない遺構もある。

奈良時代としたものは、一辺6mほどの方形で北側壁にカマドを持つ焼失家屋1棟である。埋土の中央付近から多量の礫が、カマドの脇からロクロ未使用の土師器のセットや鉄製品が出土している。柱穴はやや細いが4本検出されている。

ロクロ使用の土師器を伴出する住居を平安時代としたが、カマドの位置は北壁だけでなく、南や西のものもある。一辺4～6mの方形のものであるが、壁の一部や貼り床部分しか残存しないものもある。小型の住

居跡では柱穴がはっきりしない。焼失家屋もあり、遺物の残存状態のいい住居もある。土師器や鉄製品・砥石などが出土している。また、殆どの住居跡から鍛冶滓やフィゴの羽口破片が出土している。

(3) 竪穴状遺構

方形ないしは長方形の平面形で竪穴住居跡より小型である。カマドを持たず、柱穴も不明瞭である。埋土からロクロ使用の土師器や不使用の土師器片・鉄滓などが出土している。

(4) 土坑

直径・深さともに1 m未満のものが多く、浅い楕円形状のものもある。住居跡と重複しているものもある。時期は縄文時代のものと奈良・平安時代以降のものがあり、縄文時代のものは黄褐色土のブロックの混入するやや締まった暗褐色で埋まっている。縄文時代の土坑で、底部付近の広がる袋状のものは少ない。

(5) 陥し穴

中央東寄りから1基検出されている。長さ3 mほどの溝状を呈するが、大きな礫に阻まれて、蛇行している。縄文土器片が数点出土している。今年度の調査地内では、周囲に同様な施設は見られない。

3. 出土遺物

表土から縄文土器片・土師器片・鍛冶滓・フィゴ羽口片などが多く出土しており、下位の遺物包含層・遺構検出面でも多量の遺物が出土している。調査地の中央から西側は厚い黒色土中に奈良・平安時代の検出面があり、下位の縄文の検出面との間に差があるようだが、それ以外の地区では、縄文と奈良・平安時代の検出面がほぼ同じで、遺物包含層中の遺物も混在している。

また、旧河道には泥砂や花崗岩風化礫が厚く堆積し、流れ込みと見られる遺物が地表下2 m付近からも出土するところがある。また、数片ではあるが縄文時代晩期と弥生時代の土器片も出土している。

鉄製品は刀子と思われるものが多く、鉄鍋の可能性のある鋳物の破片もある。

縄文時代の石器は磨石が多いが、石皿・台石は少ない。石製品の中には軽石を加工したものもある。その他には石鏃や石匙・石錐・削搔器などがある。平安時代の住居跡からは砥石が出土している。

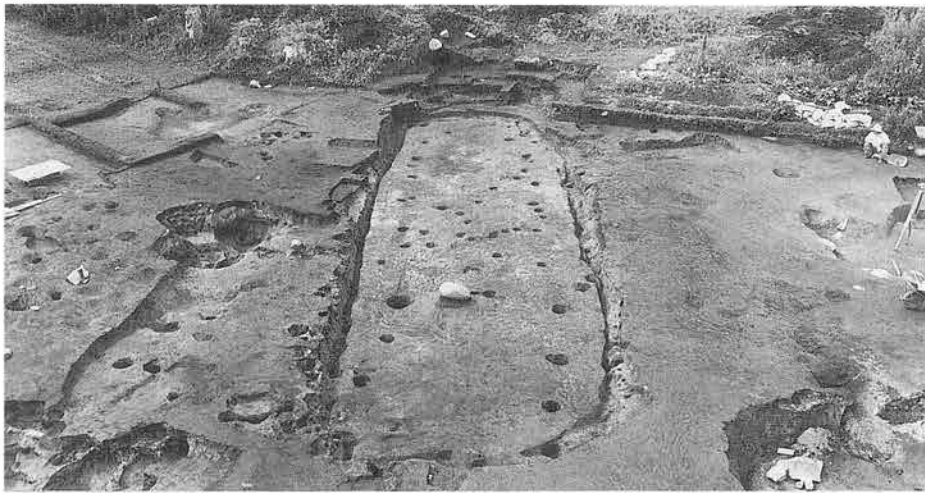
4. まとめ

今回の調査で、山田町史などにも紹介され、遺物の散布地とし著名な沢田遺跡の一部を明らかにすることができた。縄文時代前期前葉から中期の後葉まで集落が継続して営まれ、場合によっては弥生時代まで継続していた可能性が明らかになった。特に前期前葉の大型住居跡は、太平洋側で初めての検出例であるとともに、これまで検出されている豪雪地帯以外での初めての発見となりそうである。

奈良・平安時代の遺構は、鍛冶滓やフィゴ羽口片などが多量に出土し、鍛冶加工がかなり行われていたことをうかがわせる。町内では上村遺跡や山ノ内Ⅱ・Ⅲ遺跡のように奈良・平安時代の製鉄炉も検出されており、それらの遺跡で生産された鉄素材も使用して鍛冶加工が行われていたと考えられる。また、鋳型はまだ検出されていないが、鋳物の破片も出ているので、鋳物加工も行われていた可能性も考えられ、鉄素材の加工も行っていた集落と見られる。



調査区遠景（北から）



縄文時代の大型住居跡



複式炉のある縄文時代住居跡



平安時代の住居跡

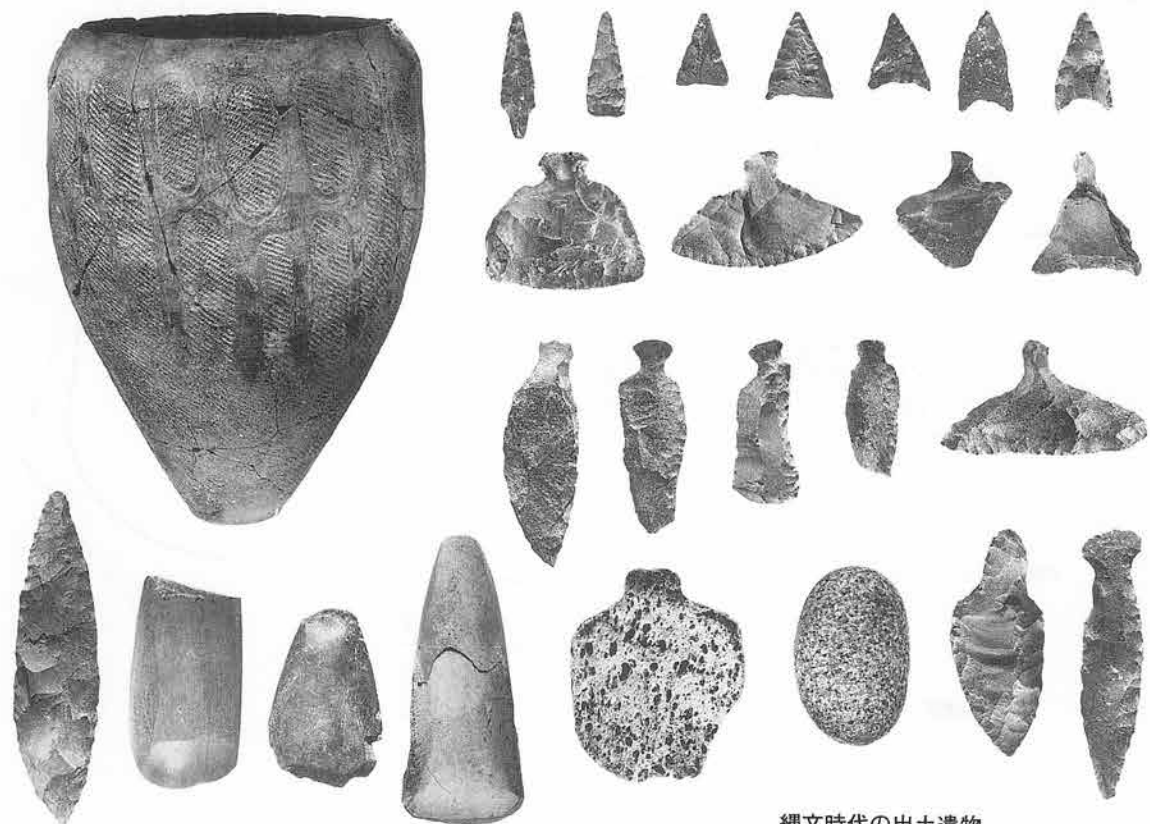
沢田 I 遺跡遠景・遺構写真



平安時代の住居跡出土遺物

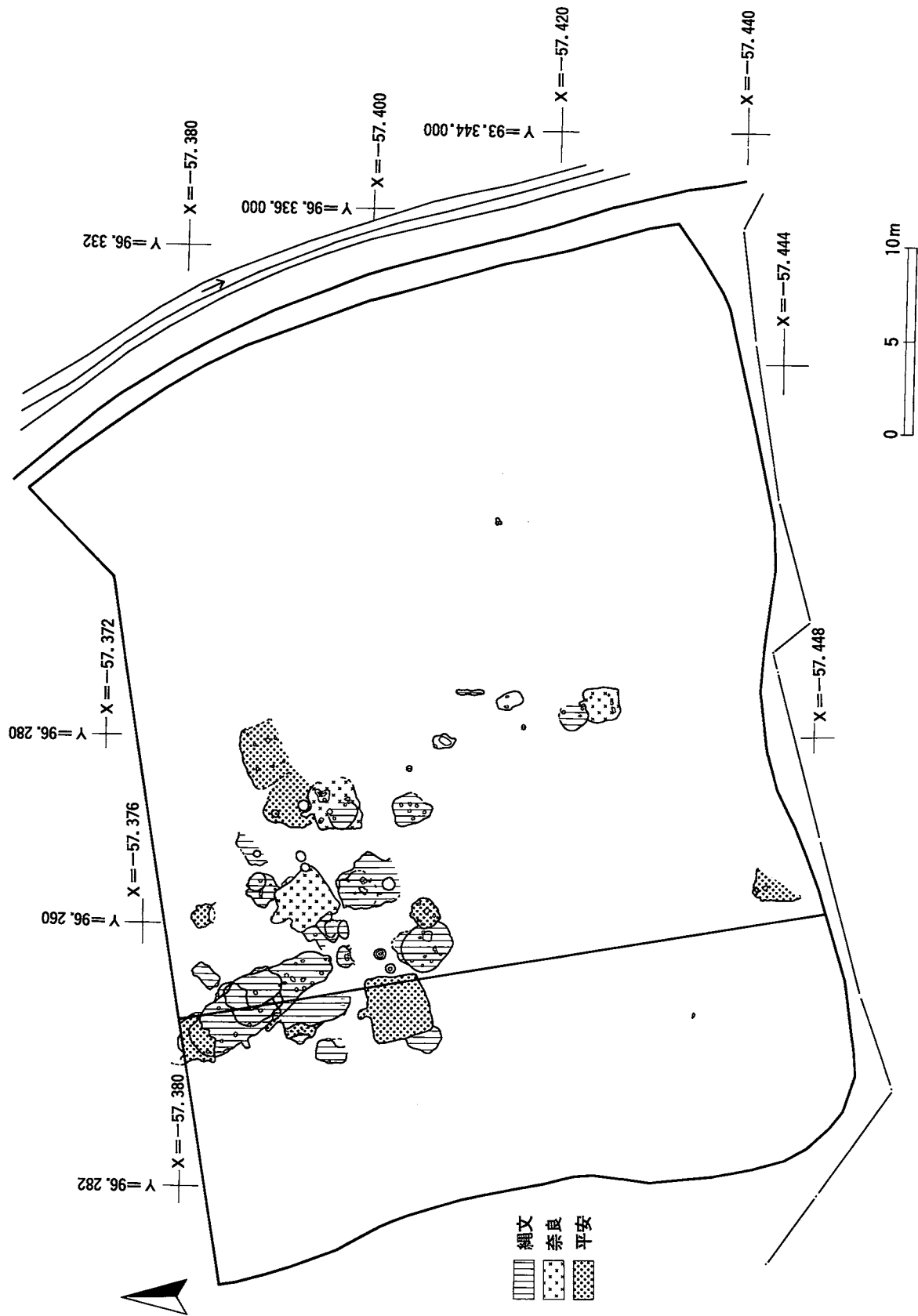


奈良時代の住居跡出土遺物



縄文時代の出土遺物

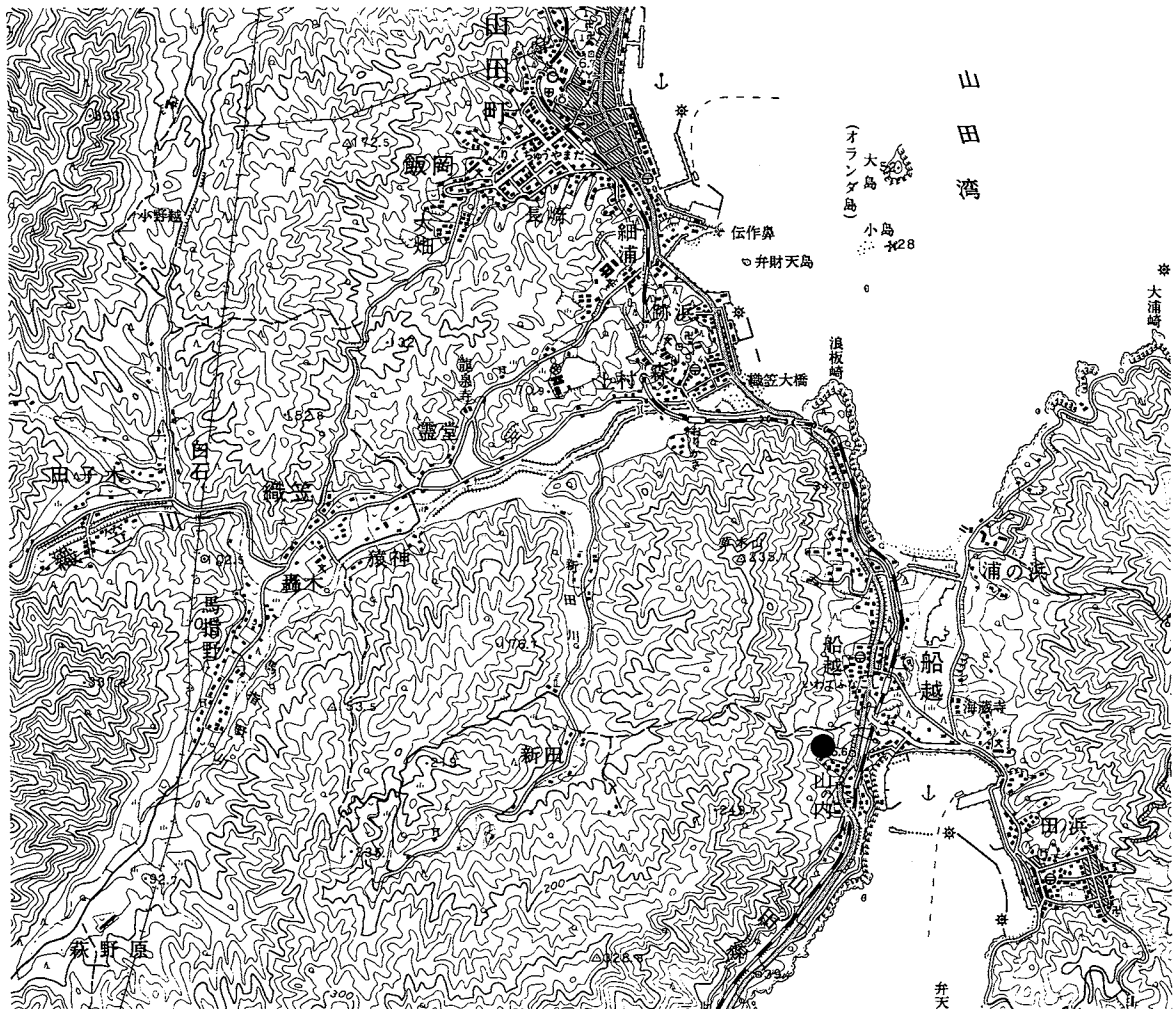
沢田 I 遺跡出土遺物



沢田 I 遺跡遺構配置図

(8) やまのうちの山ノ内Ⅱ遺跡

所在地 下閉伊郡山田町船越第4地割ほか
委託者 建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
発掘調査期間 平成7年4月10日～10月19日
調査対象面積 7,290m²
発掘調査面積 7,290m²
遺跡番号・略号 MG14-0230・YUⅡ-95
調査担当者 佐々木清文・高橋佐知子・高橋英樹・大場慎也
協力機関 山田町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 大槌

1. 遺跡の立地

山ノ内Ⅱ遺跡は、山田町船越地内に所在し、東日本旅客鉄道山田線岩手船越駅の南600m付近の船越湾を見おろす尾根上から斜面・沢沿いにかけて広がっている。

陸中海岸のほぼ中央に位置する山田町は北上山地の東部に当たり、湾と岬が入り組んだリアス式海岸特有の海岸線を呈している。段丘はほとんど発達せず、関口川や綾織川・船越湾周辺にやや平らな面がわずかに発達しているが、平坦地は少なく、山地が海に張り出す地形が大部分を占める。

遺跡周辺の山稜も草木山(235m)など150~200m程度のものが南北に延びており、山容もなだらかである。遺跡はそういう山稜から東に延びる一つの尾根上から沢沿いにかけて立地し、尾根の鞍部付近を中心に縄文時代の集落が、下の沢沿いのところに平安時代の製鉄関連遺構が検出されている。

2. 調査の概要

当初の調査対象面積は4,590㎡であったが、その後の分布調査で2,700㎡が追加され、最終的には7,290㎡になった。検出された遺構は一次・二次の調査を合わせて、竪穴住居跡26棟・竪穴状遺構3基・土坑45基・焼土遺構7・集石遺構1・製鉄炉2基・鍛冶炉7基・木炭窯7基である。このうちの縄文時代の遺構と近世と思われる木炭窯1基は尾根上から、製鉄に関連する遺構は沢沿いから検出されている。製鉄関連遺構は、製鉄炉2基・鍛冶炉7基・木炭窯6基等である。

(1) 竪穴住居跡

縄文時代中期の住居跡が、26棟検出され、中期中葉のものと同葉のものに大別される。中葉のものは直径4mほどで、床の中央付近に炉を持つ。末葉のものは直径4mほどのものと8mほどのやや大型のものがあるが、炉は壁際に寄った位置に作られている。柱穴は4本が基本のようだが、小さな住居跡では2本しか検出されないものや、大きな住居跡では8本検出されたものもある。また尾根上でも鞍部付近のやや広い平坦地に遺構が集中し、遺構同士の重複や建て替えによる拡幅が少なくない。

遺物は、埋設土器や石器が炉や埋土から得られているが、土器はきわめて脆く、特に埋設土器は取り上げ・水洗の段階でも崩壊し、復元困難なものが多い。

(2) 竪穴状遺構

竪穴住居跡に類似するが、炉を伴わないものである。尾根上の住居跡の間に3基検出されている。床面と壁の一部が残り、柱穴の検出されないものが多い。

(3) 土坑

尾根上の鞍部付近から端の方に分布している。直径1m未満の小さいものと1.5m以上の大きなものがあり、大きなものは底部付近が広がる袋状を呈している。花崗岩の風化礫層まで掘り込んでいるものもあり、中でも大きなものは直径・深さともに3m近い。底面は平坦で締まっているが、中には副穴と思われる小土坑を伴うものもある。底部付近あるいは埋土の下位から貝殻片が出土した土坑もあり、中には中コンテナで12箱も出土した遺構がある。貝の種類は岩礁性のアワビやイガイ・クボガイ、砂泥性のアサリ・オオノガイなど十数種類あるが、魚骨や骨角貝器は見られない。

(4) 焼土遺構

住居跡や土坑の周辺に7カ所検出された。石や土器で区画した痕跡はなく、周囲に床面や柱の跡など住居跡の痕跡は見られないので、屋外炉と思われる。形状も不定形で、焼土の厚さも一様でない。周囲から縄文土器片が得られている。

(5) 集石遺構

尾根の上方に平たい円礫が、径80cmほどの範囲に十数個集められていた。礫の下に土坑や埋設土器などは見られなかった。周囲から縄文土器片が出土している。

(6) 製鉄炉

2基とも沢沿いの東側の斜面に検出されている。直径50cmほどの還元色の炉底部分とその下位に排滓場、炉の後ろ側の一段高い面には平場が作られ、ファイゴを置いたような小土坑が2基ある。ファイゴはシーソー式の土ファイゴではないようである。年代を表す遺物は少なく、排滓の中からロクロ使用の土師器片がわずかに得られている。

(7) 鍛冶炉

鍛冶を行ったと思われる遺構が、沢沿いの旧川原のようなところから7ヵ所検出されている。粘土で作られた炉底が残るものと焼土の広がりだけのものがある。その周囲には鍛冶滓のほかに鍛造剥片やファイゴの羽口が散乱している。鉄銚石（かなとこいし）に使用されたと思われる焼け痕のある盤状礫もあるが、現位置を保っていないようである。炉跡の一つは直径50cm・深さ30cmほどのボール状の炉底が作られ、底部に木炭が詰まっており、大鍛冶炉と思われる。

(8) 木炭窯

沢沿いの旧河道よりやや高い位置に、5基検出された。いずれも長さ4mほどの俵形を呈し、長軸は等高線に並行するもの4基・直行するもの1基である。

また、尾根上から長さ5mほどの溝状の木炭窯が1基検出された。出土遺物はないが、近世の鍛冶炭を焼いた窯に類似する。

3. 出土遺物

住居跡以外の遺構では、伴出遺物が少ない。多量の貝殻の出た土坑からは土器片も多く出土し、その保存状態もいい。縄文土器の時期は中期中葉と末葉のものが多い。中期後葉や弥生土器の破片も見られる。また、沢沿いは製鉄関連遺構が多いせいか、広い範囲から鉄滓や羽口片が出土している。土師器片・縄文土器片も少量見られる。

縄文時代の石器は磨石やくぼみ石が多いが、石皿は破片で数点検出されただけである。石器は175点出土している。その他に石鏃や石匙・削搔器などがある。

4. まとめ

今回の調査で、リアス式海岸の海岸段丘があまり形成されない地域の縄文時代の集落と平安時代の製鉄から鍛冶加工まで行われた工房跡が調査された。縄文時代の集落の構成とその食生活の一端が明らかになった。しかし、貝塚遺跡の少ない地域での貝層の発見や、貝層に魚骨やほかの動物遺骸などが含まれず、一般の貝塚とは様相をことにしている。

製鉄関連遺跡では、製鉄炉の送風装置の一部らしい遺構の発見と大鍛冶炉を含めた鍛冶場跡、そして木炭窯が検出され、鉄の生産から加工まで一貫して行われていたことが明らかになった。これまでも隣接する遺跡から製鉄や鍛冶に関連する遺構・遺物が出ているので、この地域の古代製鉄の実態解明に近づく資料を加えることができたと思われる。



遺跡遠景



縄文時代住居跡



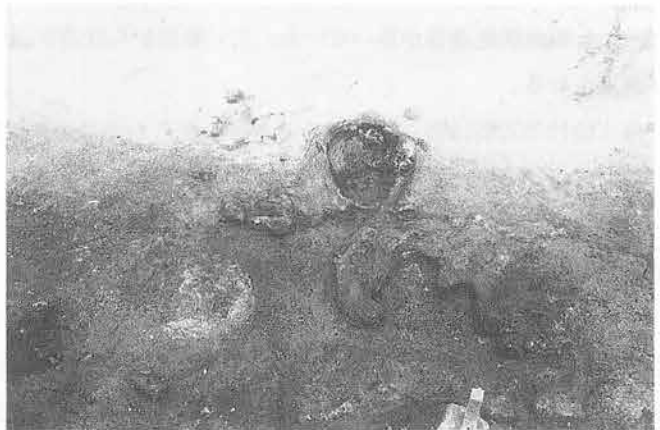
平安時代製鉄炉



貝層出土状況



大鍛冶炉

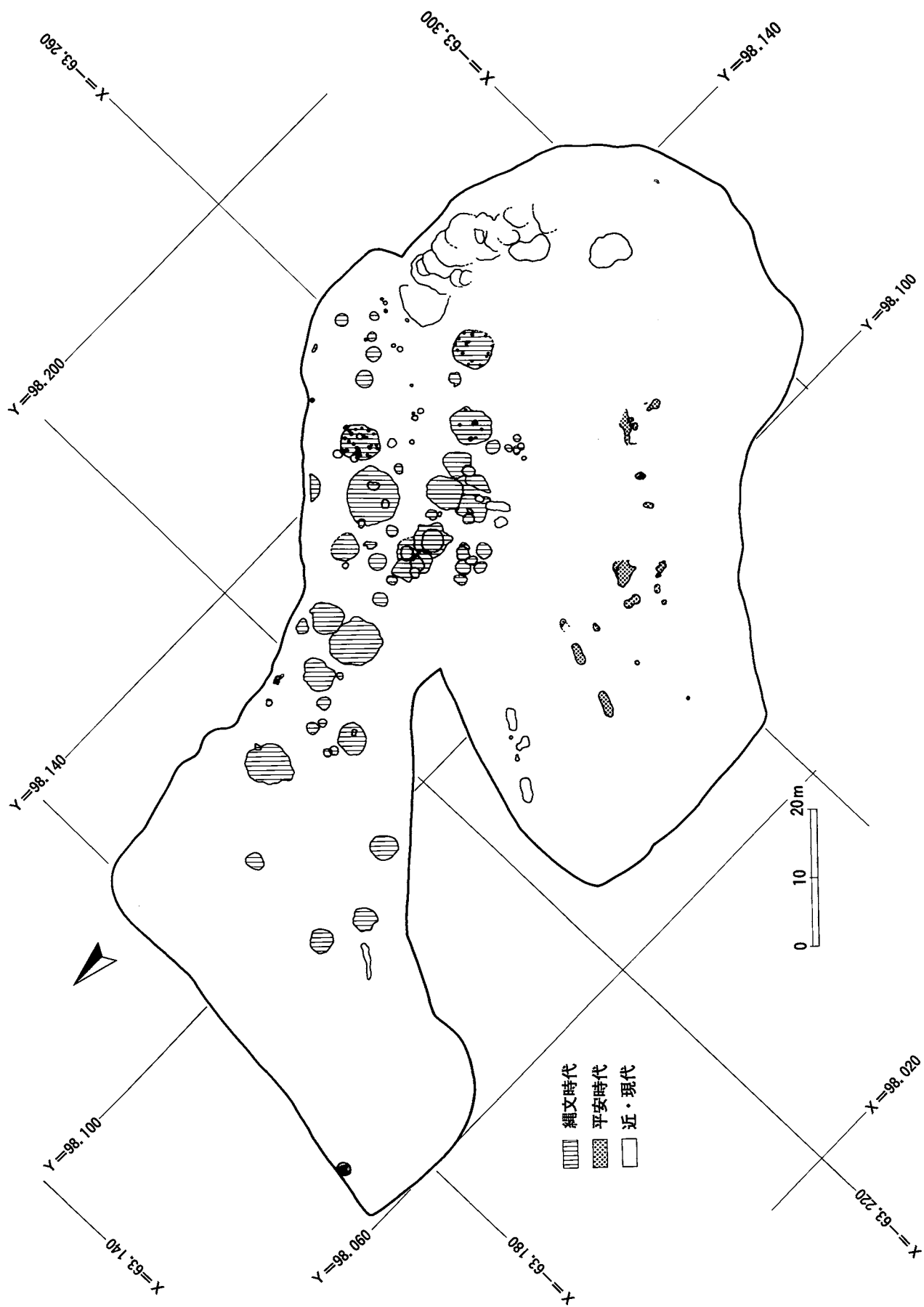


鍛冶炉

山ノ内Ⅱ遺跡遠景・遺構写真



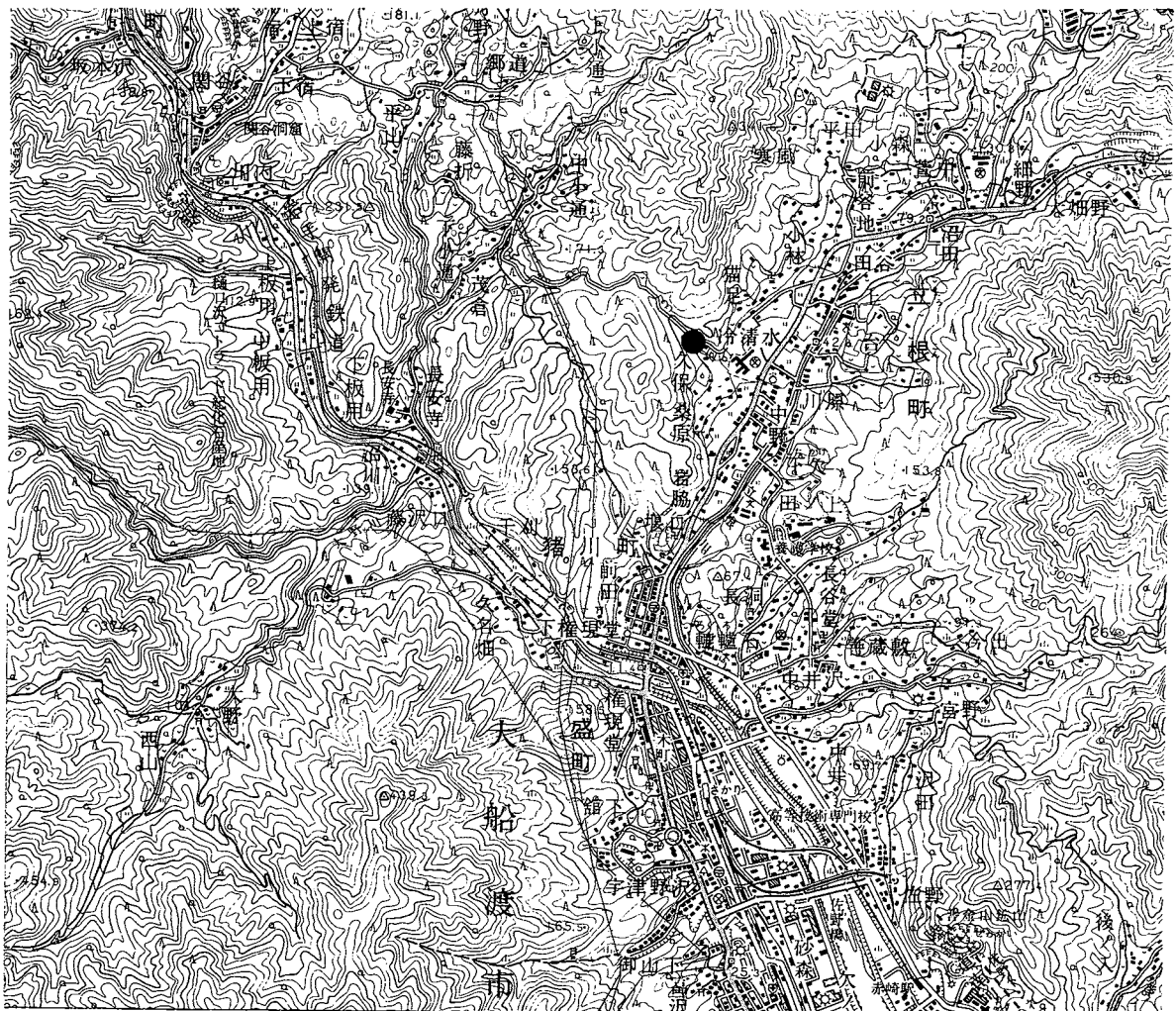
山ノ内Ⅱ遺跡出土遺物(縄文時代)



山ノ内Ⅱ遺跡遺構配置図

(9) 久保遺跡

所在地	大船渡市立根町字久保36-5ほか
委託者	建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
発掘調査期間	平成7年4月10日～6月15日
調査対象面積	2,000m ²
発掘調査面積	2,000m ²
遺跡番号・略号	N F 29-2052・K B-95
調査担当者	佐々木清文・大場慎也
協力機関	大船渡市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛

1. 遺跡の立地

久保遺跡は、大船渡市立根町久保地内に所在し、東日本旅客鉄道大船渡線盛駅の北約3 km付近、岩手県立大船渡工業高等学校の北西300 mに位置している。

大船渡市は北上山地南東部に当たり、山地が広く分布する地域である。主として中・古生層からなる山地に五葉山を中心とする花崗岩帯が山地の南端部に入っている。盛川や立根川沿いには低地が広がり、低地と山地の間には、南北に帯状に連なる主として海岸段丘起源の丘陵地帯があり、広く耕作地として利用されている。

遺跡は、山麓緩斜面が、小規模な段丘化した地形上に立地している。小さな沢に面した南向きの緩斜面上に縄文時代早期から弥生時代にかけての集落が営まれたようである。

2. 調査の概要

当初の調査対象面積は1,100㎡であったが、その後橋脚工事の工法に合わせて調査面積が変更になり、最終的に2,000㎡になった。検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、土坑1基、焼土遺構16カ所である。

(1) 竪穴住居跡

縄文時代前期の住居跡で、直径2.5 mほどの不整な楕円形を呈する。炉は作られていないが、床面に直径5～7 cmの柱穴状の小土坑が4つ検出されている。埋土はあまり締まりのない暗褐色土で構成され、土器片や石器・巨礫が多く混入していた。

(2) 土坑

わりと傾斜のきついところに1基のみ検出された。直径1 mほどの不整な円形を呈し、深さは約60 cmである。底部には副穴のような小土坑がある。伴出遺物は少ないが、縄文時代である。

(3) 焼土遺構

表土直下の弥生時代の遺物を含む層から、下層の縄文時代前期の層までの間に16カ所検出された。いずれも不整形な焼土の広がり、石や土器で囲ったり区画した痕跡はない。また、周囲に床面や柱の跡など住居跡の痕跡は見られない。縄文時代前期の土器を伴出する遺構が多い。

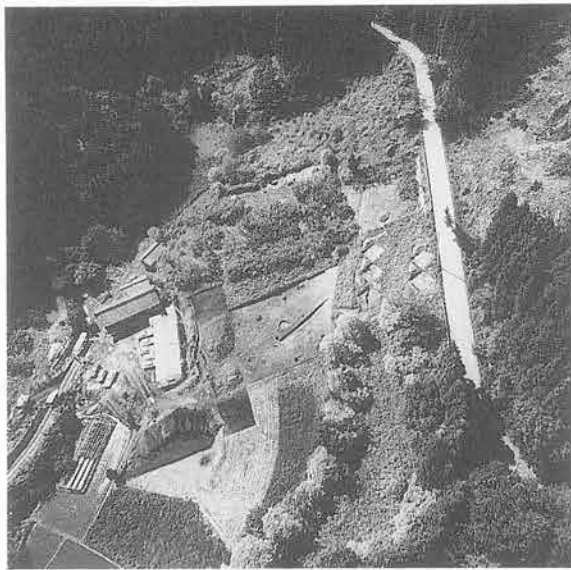
3. 出土遺物

住居跡以外の遺構では、伴出遺物が少ない。遺構外のいわゆる遺構包含層からの出土遺物が多い。段丘上の緩斜面から縄文時代早期～後期・弥生時代の土器片や石器が出土しており、主体は縄文時代前期である。段丘下の沢沿いの緩斜面からは平安時代の土師器片が少量出土している。

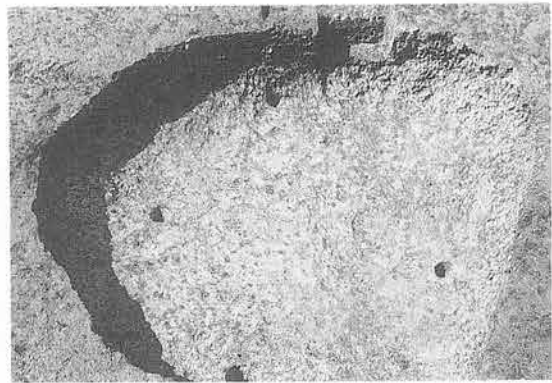
石器は174点出土している。主なものとして石鏃20点・石匙65点・削搔器36点・磨石27点・台石5点などがある。磨石は平らな面を使用したものより、縁辺を使用したものが多い。

4. まとめ

小さな沢沿いの南向きの緩斜面上に立地する縄文時代前期を中心とする集落遺跡と思われる。隣接地に集落の中心があることも考えられるが、住居跡が少なく焼土遺構が多いことや、海岸からそれほど離れていないのに周囲の耕作地からも貝塚の痕跡が検出されていないことなど、一般の集落とは違うような感じを受ける。石匙や磨石が多いことなどから、毛皮とか食料品の加工所的な性格の遺跡だったのかもしれない。



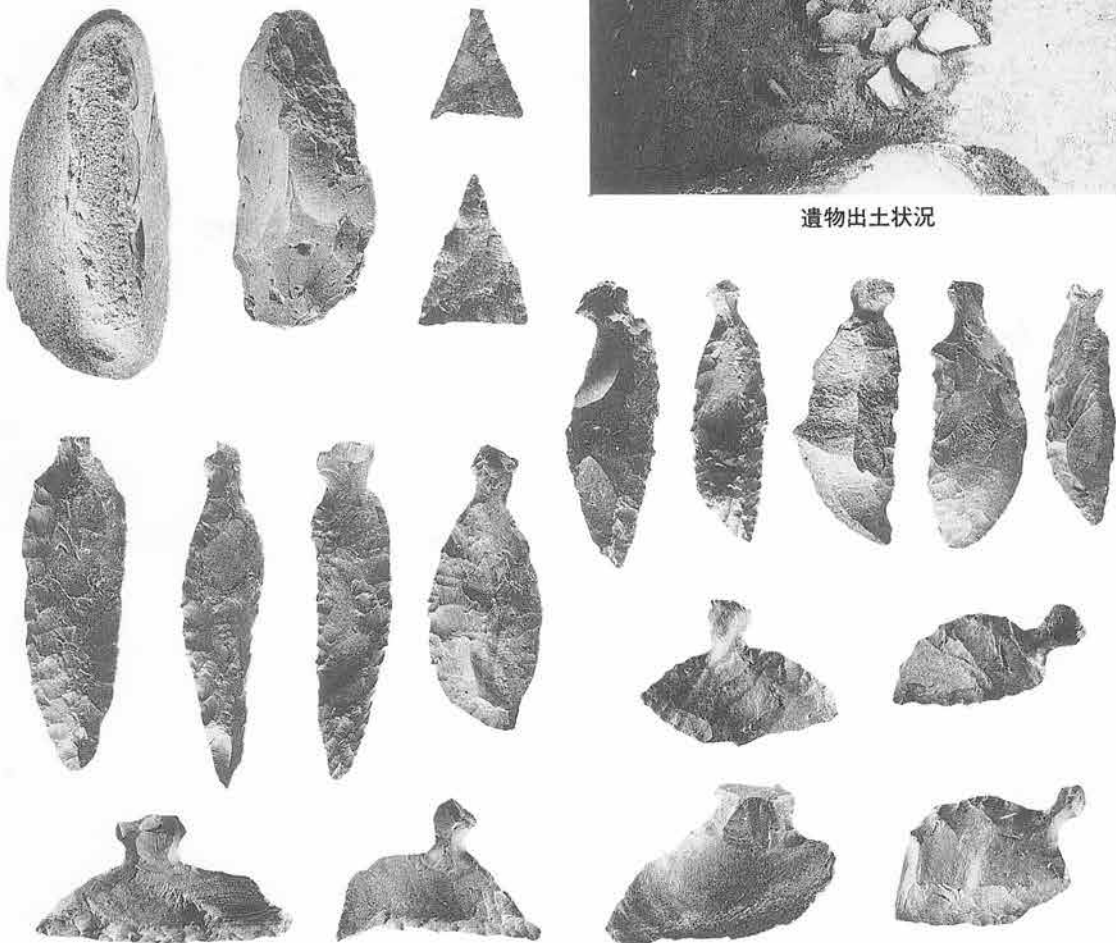
調査地遠景（東から）



縄文時代の住居跡

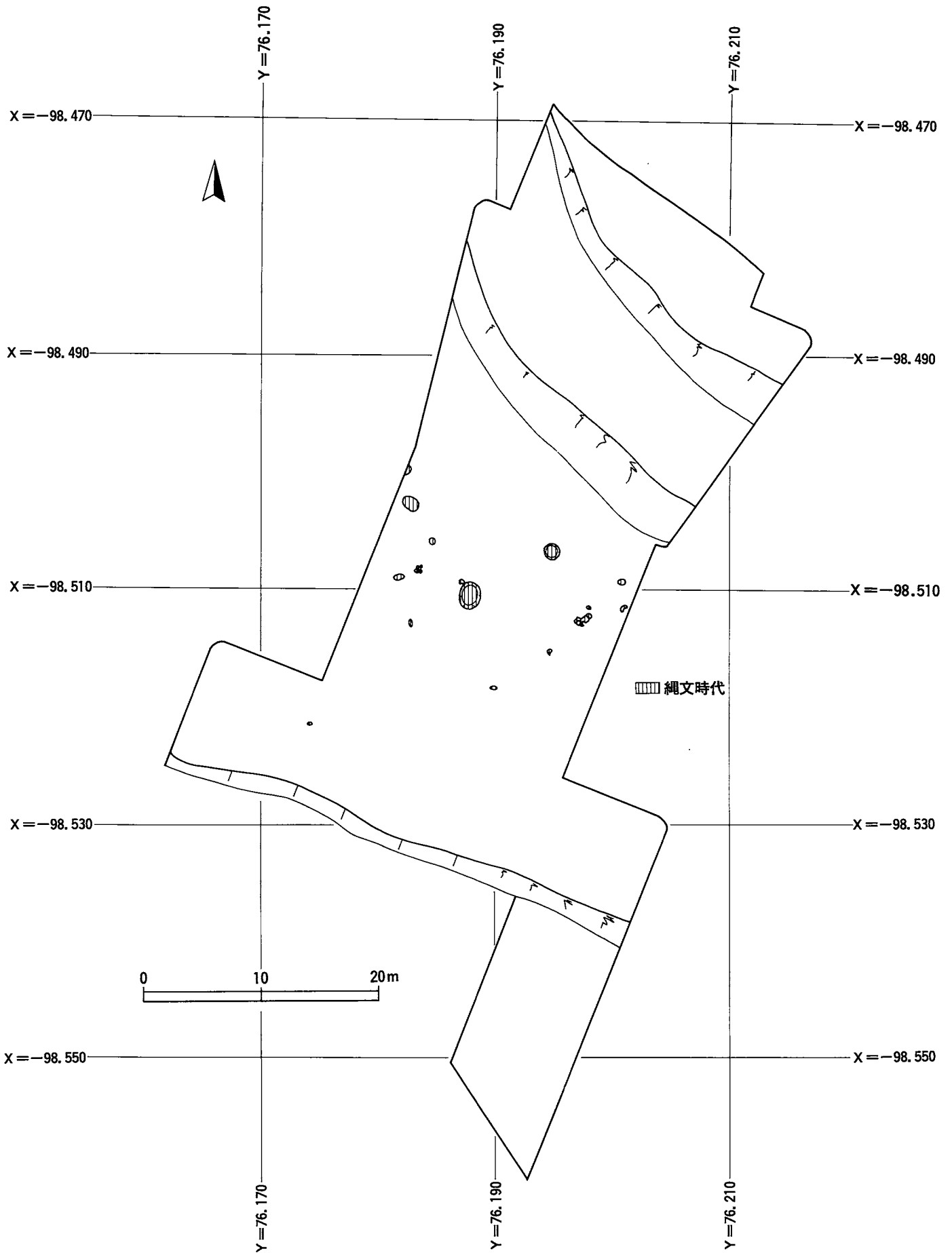


遺物出土状況



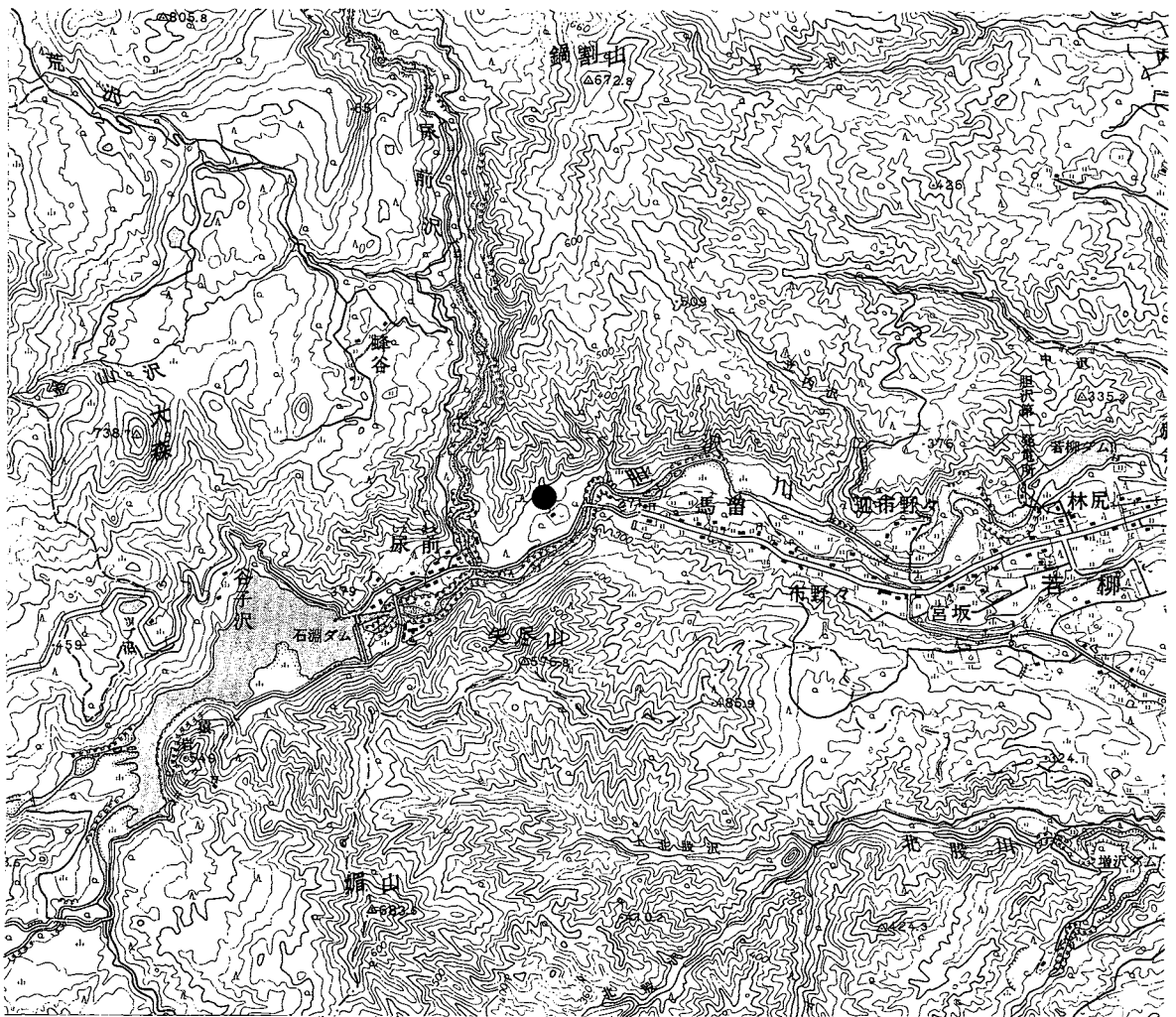
出土石器

久保遺跡遠景・遺構・遺物



(10) ^{しも} ^{しと} ^{まえ} 下尿前Ⅱ遺跡

所在地 胆沢郡胆沢町若柳字下尿前9-1ほか
委託者 建設省東北地方建設局胆沢ダム工事事務所
発掘調査期間 平成7年9月1日～11月22日
調査対象面積 8,500㎡
発掘調査面積 8,500㎡
遺跡番号・略号 NE21-2312・SSⅡ-95
調査担当者 杉沢昭太郎・佐々木裕司
協力機関 胆沢町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 焼石岳

1. 遺跡の立地

下尿前Ⅱ遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線水沢駅より西に約19.6km、石淵ダムの北東約1.8kmに位置し、西一東に流れる胆沢川によって形成された河岸段丘上の胆沢川左岸部に立地する。遺跡の立地する段丘面は南向きの緩斜面を呈し、調査区全体は北一南の埋没谷によって3つのブロックに区切られている。遺跡の標高は281～287m、胆沢川との比高差は31～38mで現況は山林と原野である。

調査は平成5年度からの継続であり、今年度の調査は、3ブロックのうち、西ブロック（A区）の西部と中央ブロック（B区）の東部、そして北側ブロック（C区）を行った。

2. 調査の概要

遺構はⅡ層上面からⅣ層面にかけて検出された。Ⅱ層上面で検出された遺構は、炭窯跡1基。Ⅱ層上位から中位で検出された遺構は焼土遺構3基、Ⅳ層面で検出された遺構は竪穴住居跡1基、土坑27基、焼土遺構5基であるが、土坑の一部は掘り込みがⅡ層中から確認されている。このうち出土遺物等から時代・時期を特定あるいは推定できた遺構は、竪穴住居跡1棟と土坑26基、捨て場遺構1基が縄文時代、炭窯跡1基が近現代、他は時期不明である。

また、遺跡全体には風倒木痕が数多く認められ、なかから遺物が出土することもあることから、プランの確認はできなかったが、検出した以上に土坑等が存在していたと思われる。

〈竪穴住居跡〉

調査区の東側（B区）で1棟検出されている。住居の南西側は風倒木によって破壊されているが平面は不整形円形を呈し、規模は径約3m程と推定される。炉の形態は石囲土器埋設炉で、使用されている礫は熱をうけ赤変していた。時期は出土した土器から縄文時代中期末頃と思われる。

〈土坑〉

A区で1基、B区で26基を検出した。とくにB区では調査区の西側に密に分布し重複も見られる。平面形はほとんどが円形を呈し、わずかに楕円形のものが存在する。規模は径0.8～1.2m前後のものが多く、断面形は袋状、皿形のものなどがある。遺物は断面形が皿形のものに多くみられ縄文時代後期中葉・弥生時代の土器等が出土している。

〈焼土遺構〉

B区のⅡ層暗褐色土面から3基、Ⅳ層地山面で5基検出された。焼土の形状や厚さは不定であるが、いずれも周辺から住居の床や柱穴等は検出されていない。遺物も出土していない。

〈捨て場〉

B区北側の沢の斜面上に約4m四方の広がりをもった小規模な捨て場が検出され、土器（後期前葉）、石器等が出土した。

〈炭窯跡〉

A区西側より1基検出された。平面形は長円形で南側に作業場と思われる方形で中央に浅い円形の彫り込みをもつ施設と、北側に土取り穴と思われる土坑状のものがみられる。窯跡の壁面は火熱のため強く赤変しており、タールが付着して固くなっていた。埋土には焼土や炭が多量に混じり、底面の下には湿気抜きのための炭化材が敷かれている。時期を決定するような遺物は出土していない。

3. 出土遺物

遺物はコンテナ7箱分の土器と2箱分の石器類が出土した。土器は縄文土器（中期末葉・後・晩期）・弥生土器が出土している。量的には縄文時代中期末・後期のものが多いようである。石器は、石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・磨製石斧等の製品が計12点、凹石、磨石等の礫石器と石核・剥片が多数出土した。石製垂飾りも1点出土している。

4. まとめ

昨年度までの調査で、下尿前Ⅱ遺跡は縄文時代後・晩期を主体とする遺跡であることが確認されていた。今年度の調査は当遺跡の東西両端部分にあたり、これで遺跡全体を発掘したことになる。調査範囲の全てを発掘してみてA区の東側部分に配石遺構・竪穴住居跡・土坑群（墓域）が比較的まとまって分布していることからこの範囲が遺跡の中心的部分であるという印象をもった。A区に東隣するB区には土坑が多く分布し、集落づくりに計画性があったようにも思われる。

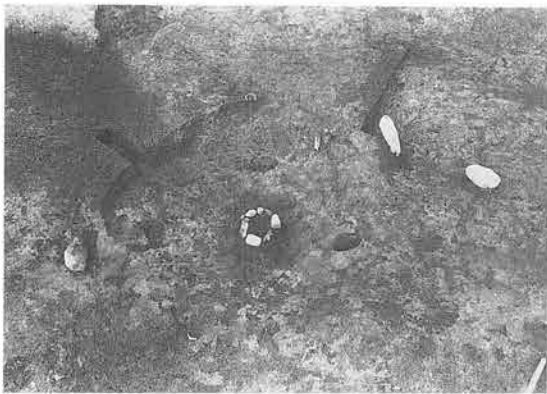
出土した土器には縄文時代後・晩期のほかに前期、中期末、弥生時代のものがみられる。量的には多くないが断続的にはあるが当時の人々がこの地を利用していたと言える。



調査区遠景（南から）



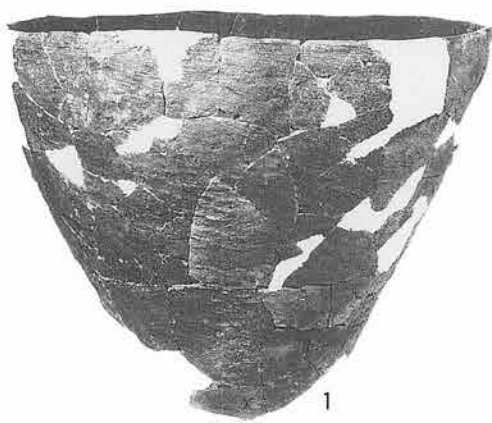
遺跡空中写真



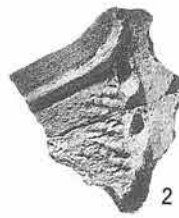
縄文時代の住居跡



遺物出土状況



1



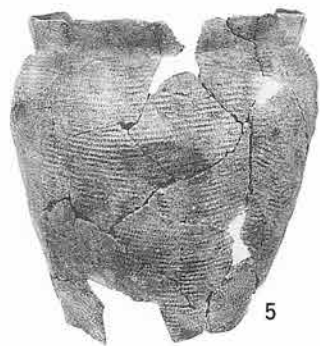
2



3



4



5



6



7



8



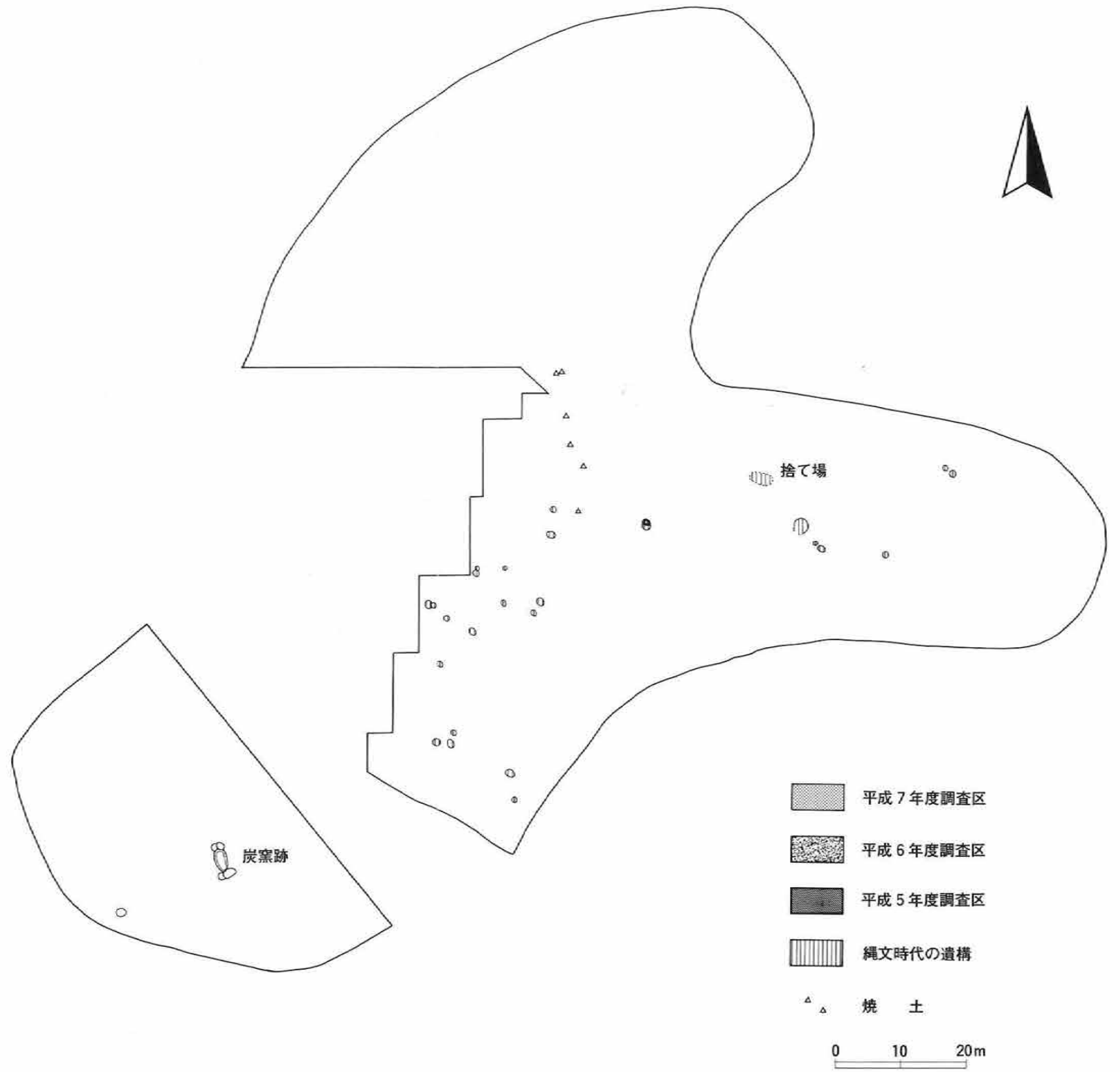
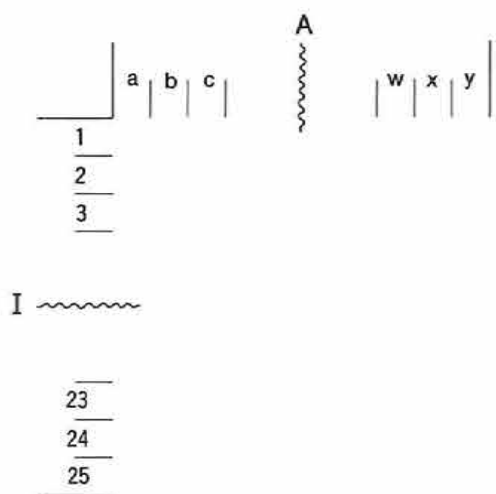
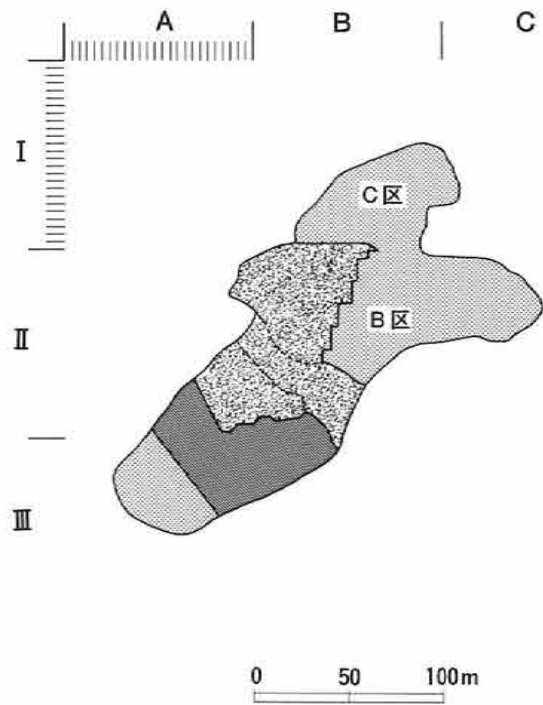
9



10

- | | |
|----------|---------|
| 1～3 縄文土器 | 9 石鏃 |
| 4・5 弥生土器 | 10 磨製石斧 |
| 6 垂飾り | |
| 7・8 石鏃 | |

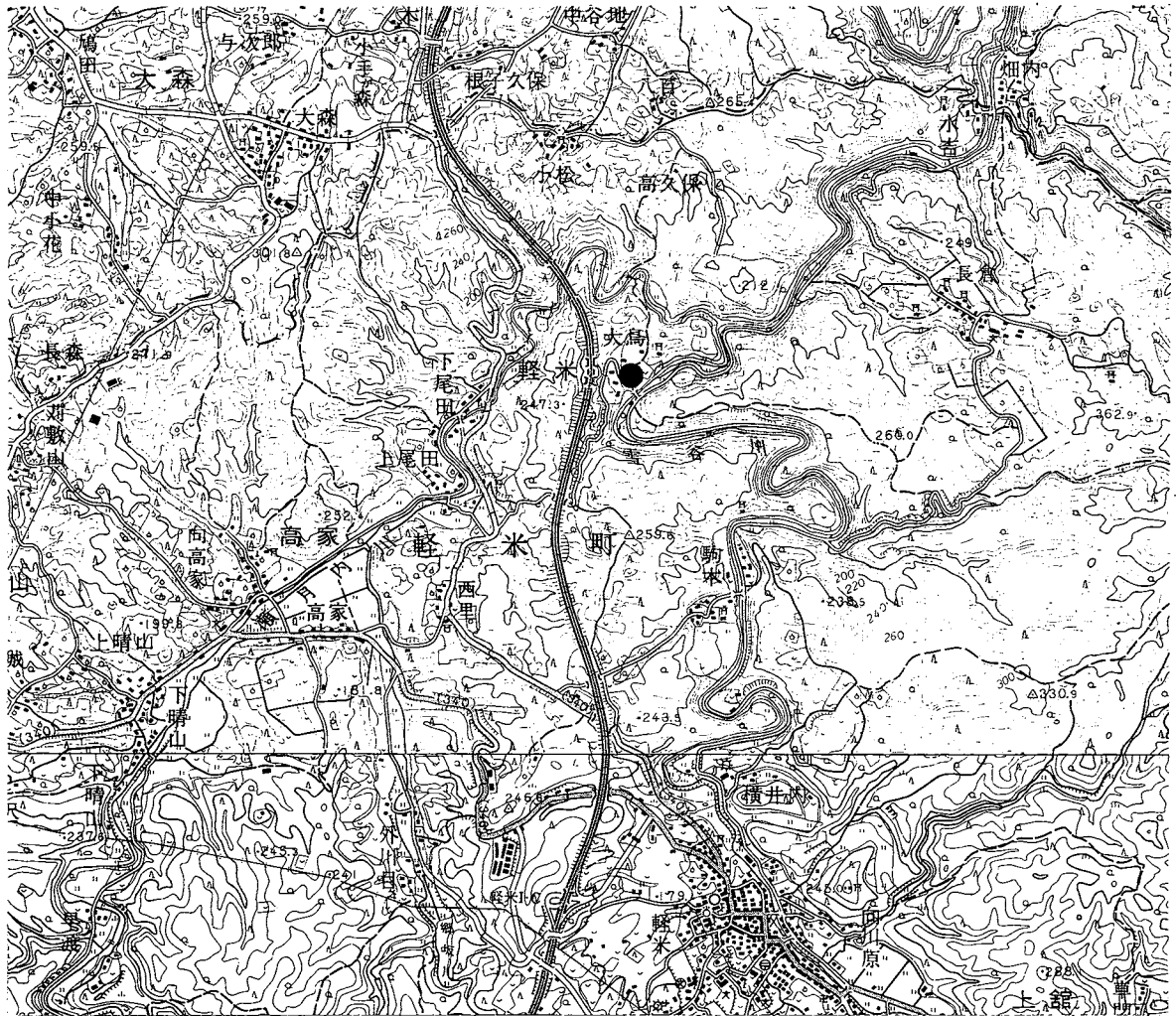
下尿前Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物



下尿前Ⅱ遺跡遺構配置図

(11) ^おと^り大鳥 I 遺跡

所在地 九戸郡軽米町大字軽米第17地割字大鳥163-1ほか
委託者 農林水産省東北農政局八戸平原開拓建設事業所
発掘調査期間 平成7年6月16日～11月16日
調査対象面積 5,812m²
発掘調査面積 5,812m²
遺跡番号・略号 IF63-2029・OTI-95
調査担当者 阿部勝則・沼田和宏
協力機関 軽米町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 三戸・一戸

1. 遺跡の立地

大鳥 I 遺跡は、八戸自動車道軽米インターチェンジのほぼ北側約3.5km付近に位置している。遺跡は、雪谷川左岸の河岸段丘上に立地している。標高は105～120mで、川との比高は約10mである。対岸には長倉Ⅶ遺跡がある。遺跡の現況は畑地・山林である。

2. 調査の概要

調査区は、付替道路路線部分（A区）と水没域3ヶ所（B～D区）の併せて4箇所である。遺構が検出されたのはA区とC区である。遺構の分布は、縄文時代の遺構がA区南端とC区に集中しており、いずれも雪谷川をのぞむ台地の縁にあたる。平安時代や近世の遺構はそれよりやや中寄りのところで検出された。B・D区は沢跡で遺構・遺物は検出されなかった。またA区の南側は畑地造成の際に削平を受けている。

検出された遺構は、縄文時代の住居跡1棟、土坑類45基、陥し穴状遺構1基、焼土遺構2基、埋設土器遺構1基、遺物包含層、平安時代の住居跡1棟、土坑類1基、近世以降の掘立柱建物跡3棟、土坑類4基、墓壇9基などである。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡はA区南端で検出された。規模・形状は径4.5m×3.8mほどの不整な楕円形を呈する。炉は径30cmほどの広がりをもつ地床炉が中央付近にある。この住居跡は、フラスコ状土坑と重複し、その埋没後につくられているが、貼り床を施した痕跡はなかった。時期は、出土遺物から縄文時代中期初頭と思われる。

平安時代の住居跡はA区の中央付近で検出された。東側が調査区域外にかかる。規模・形状は、1辺4mほどの隅丸方形を呈し、かまどは、調査区域外にあるものと推定される。また埋土中には火山灰の堆積がみられた。時期は、出土遺物から10世紀末頃と思われる。

〈土坑類〉

A区で35基、C区で10基が検出された。A区南端とC区からは、いわゆるフラスコ状土坑がまとまってみつかっている。規模は、開口部の径1.5m～2m、底部径1.5m～2m、深さ1m～1.5mほどのものが多く、底部に副穴や溝状の掘り込みをもつものもある。時期は、出土遺物から縄文時代前期と思われる。

〈陥し穴状遺構〉

A区南端から1基検出された。規模・形状は、径1.5mほどの隅丸方形で、深さは約1.2mである。底部には、杭をたてた跡と思われる5本の副穴をもっている。

〈遺物包含層〉

C区の約150㎡の範囲から大コンテナ約150箱の土器と多くの石器類が出土している。西側にある南北を沢に挟まれた平坦面の東斜面に形成された包含層で、層厚は最大1.5m以上を測る。下位の旧地表面には雨裂溝が走り、その埋土中からも多くの遺物が出土している。

〈掘立柱建物跡〉

A区の南側で3棟検出された。時期は、検出面や出土遺物から近世以降と思われるが、いずれも一部分の調査であり、全体の規模・構造については不明である。

〈墓壇〉

A区から8基、C区から1基が検出された。A区南端の雪谷川をのぞむ台地の縁に6基がまとまっており、他の2基は離れたところにそれぞれ単独で位置している。規模・形状は、径1m～1.6m、深さ0.3m～1.1m

ほどで、方形基調のものと円形基調のものがある。このうち5基から人骨がみつまっている。鉄釘や板材の出土から座棺を想定できるものもある。副葬品は六道銭と思われる寛永通寶のみで、時期は近世以降と思われる。

C区の1基からは、鉄鍋が伏せられた状態で出土している。鉄鍋は内側に耳をもつ内耳鉄鍋と呼ばれるもので3耳式である。墓壇の規模・形状は、径1.2m×0.8m、深さ1.2mほどで小判形を呈し、南北方向に長軸をもつ。埋葬方法は、埋土の状態その他から土葬であったと推定され、鉄鍋は、埋葬時に頭に被せたものと思われる。他に副葬品として鎌・緡銭・漆製品（皮膜のみ）が人骨とともに出土している。緡銭は約100枚あり、洪武通寶と無文銭から構成されてる鏝銭である。時期は出土遺物から中世末～近世初頭の可能性があると思われる。

〈出土遺物〉

出土した遺物の総量は、縄文土器が大コンテナで約150箱である。A区から1箱、他はC区の遺物包含層からの出土である。完形品で廃棄されていたものも多く、個体復元可能なものが多い。時期は縄文時代前期で、縄文尖底系土器・円筒下層式土器である。他に極少量の中期・後期の遺物も出土している。石器は約600点出土しており、大半がC区遺物包含層からの出土である。礫石器の占める比率が高く、器種では、石匙や半円状扁平打製石器・打製石斧が多いのが特徴である。石製品も出土している。他に極少量の土師器・須恵器、内耳鉄鍋・鎌などの鉄製品、寛永通寶・洪武通寶・無文銭などの古銭が出土している。

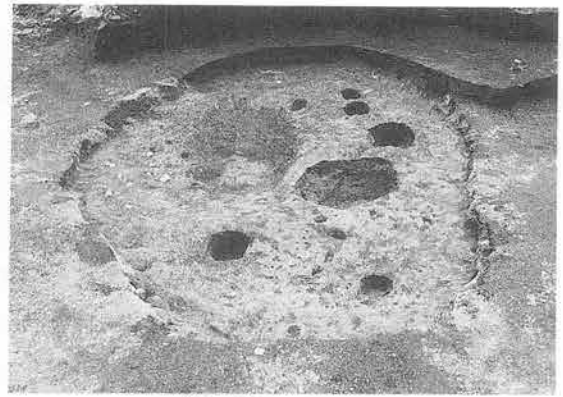
3. まとめ

今回の調査で、大鳥I遺跡は、縄文時代前期～後期・平安時代・中世末・近世の複合遺跡であることが確認された。また縄文時代前期の遺物包含層やフラスコ状土坑群の存在から、C区西側の南北を沢に挟まれた平坦面に該期の集落跡が存在するものと推定される。

近世の建物跡・墓壇の存在も旧大鳥の集落の起源を探る手掛かりになるものと思われる。また内耳鉄鍋が出土した墓壇など葬制を考えるうえでの貴重な資料も得られている。



遺跡全景



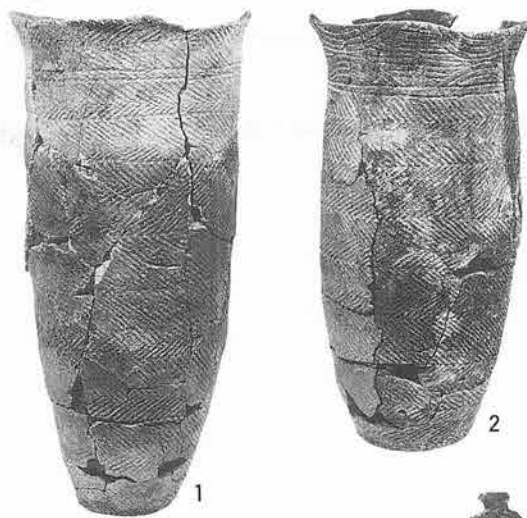
縄文時代の住居跡



遺物出土状況

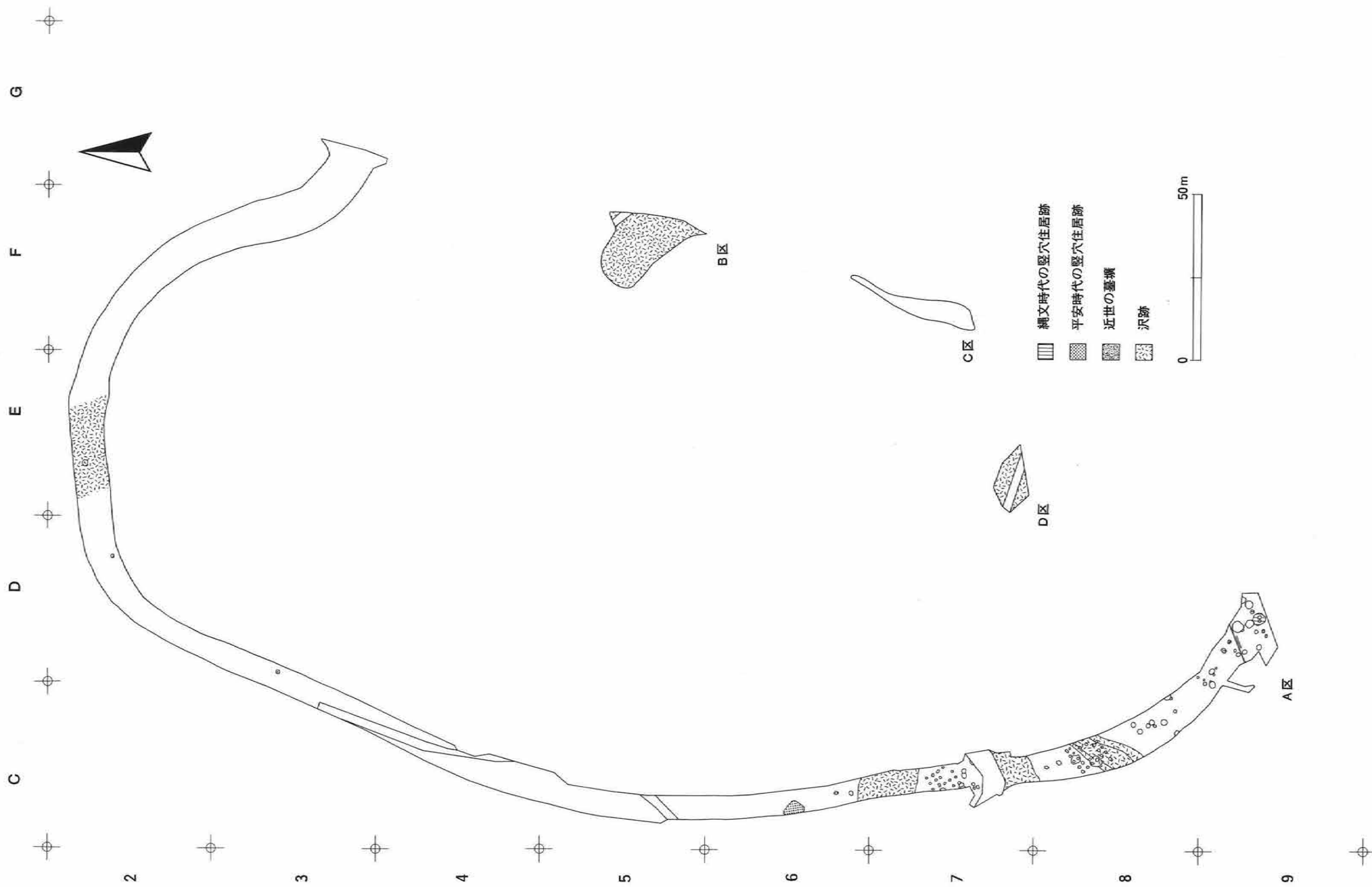


鉄鍋・人骨出土状況

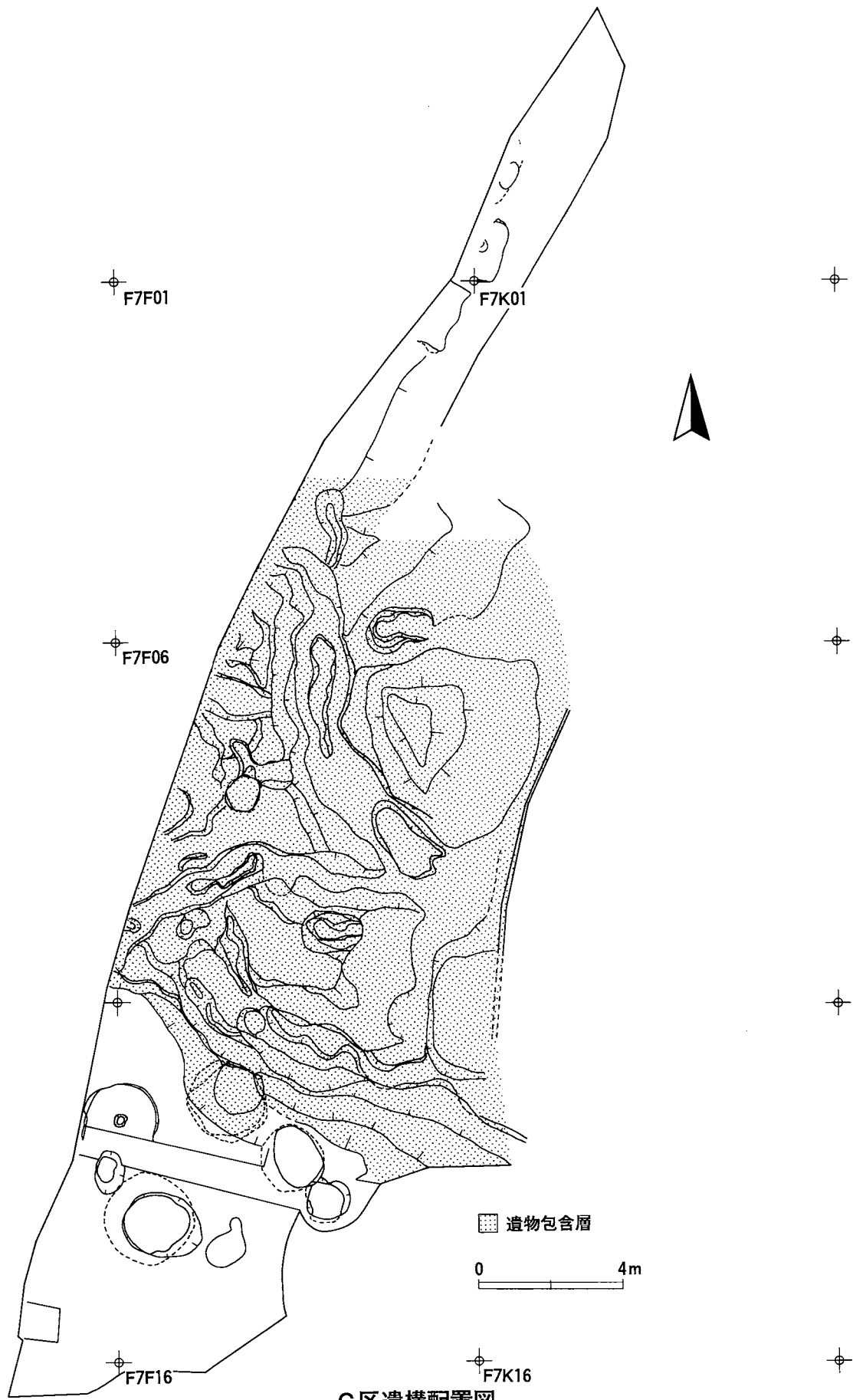


- 1～3 縄文土器
- 4・5 石鏃
- 6～8 石匙
- 9・10 半円状扁平打製石器
- 11 凹石
- 12 石製品
- 13 内耳鉄鍋

大鳥 I 遺跡検出遺構・出土遺物



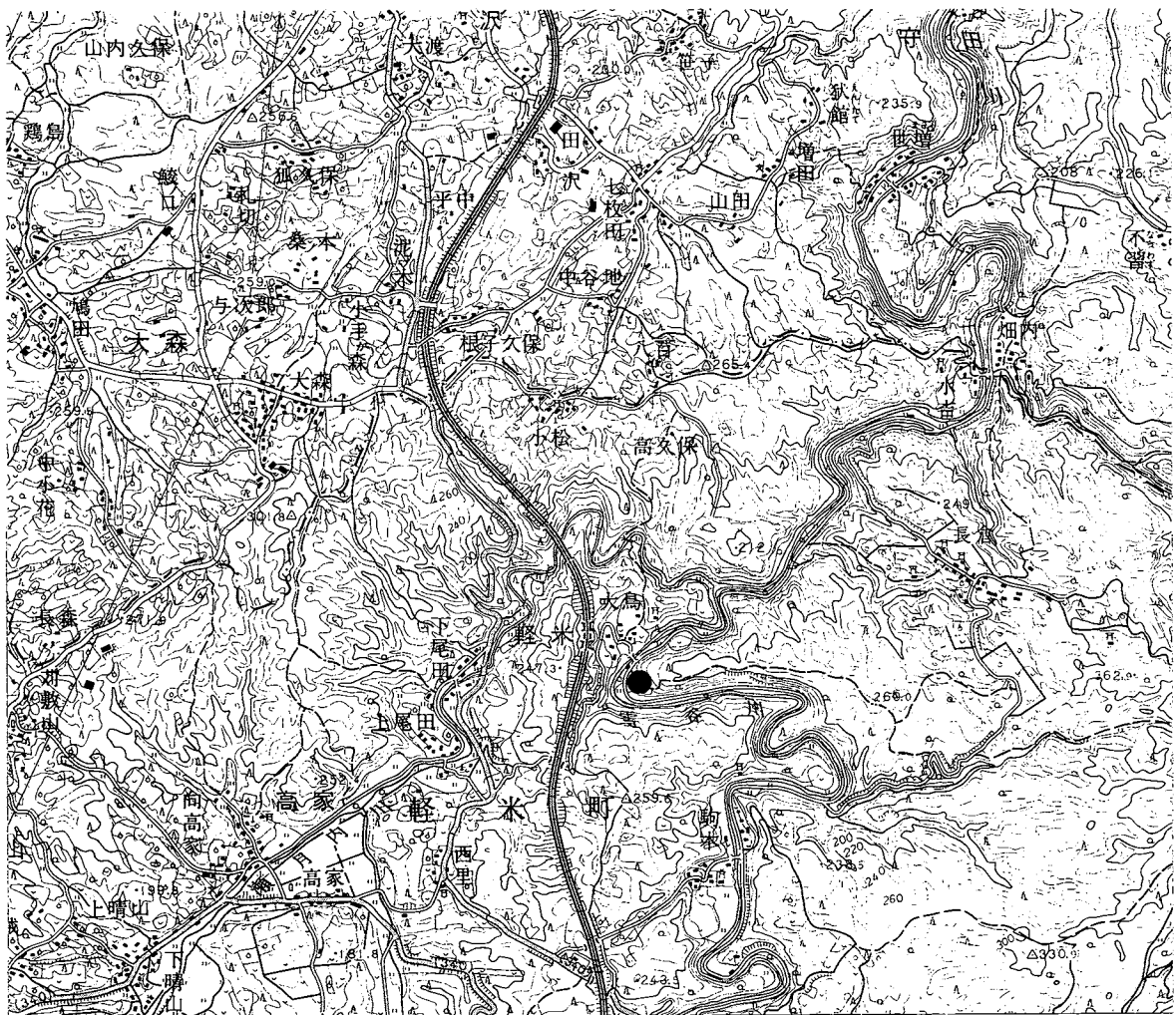
大鳥 I 遺跡遺構配置図



C区遺構配置図

(12) ながくら VII 遺跡

所在地 九戸郡軽米町大字長倉字間通仁太久保97-1ほか
委託者 農林水産省東北農政局八戸平原開拓建設事業所
発掘調査期間 平成7年6月1日～8月11日
調査対象面積 2,298m²
発掘調査面積 2,298m²
遺跡番号・略号 I F 63-2150・NK VII-95
調査担当者 沼田和宏・阿部勝則・菊池人見・大道篤史
協力機関 軽米町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 三戸

I. 調査に至る経過

長倉Ⅶ遺跡は「八戸平原開拓建設事業」に関連して、農林水産省東北農政局八戸平原開拓建設事業所及び岩手県の委託を受けて緊急発掘調査された。発掘調査事業の集約についての問い合わせに対し、平成7年度の事業とするように要請した。要請を受けた県教育委員会文化課は、平成7年度の(財)岩手県文化振興事業団の受託事業として発掘調査を実施する旨回答し(財)岩手県文化振興事業団にもそのように通知した。実際の調査は平成7年5月31日に東北農政局長、同年6月1日に岩手県と(財)岩手県文化振興事業団の間で契約を締結し、発掘調査を実施した。

II. 遺跡の立地

長倉Ⅵ遺跡は、軽米町役場の北北西約3.3kmに位置し、軽米町内を北流する雪谷川右岸の段丘上に立地している。周辺はほぼ西側に開ける地形である。遺跡の現況は、北側から約10mが山林、次の約120mが水田、南側の約70mが山林で、水田部は造成により地形の改変がみられた。対岸指呼の位置に同年度調査の大鳥Ⅰ遺跡がある。

III. 調査の概要

遺跡の基本土層（自然形成の土）は4層で、以下のとおりである。調査はⅣ層上面まで行なった。

I：黒色土、シルト、厚土約20～30cm（水田部分では、この上に水田造成土が約50cmある。）

II：黒色土、シルト、中礫テフラがふくまれる。厚さ約20cm

III：黒色土、シルト、厚さ約40cm

IV：南部浮石

〈竪穴住居跡〉

E12区のⅥ層上部で検出した(1)。上部は水田造成時に失われている。埋土は3層に分かれるが成因は不明である。1・2層から礫約50点が出土した。

〈陥し穴状遺構〉

F14・15のⅥ層上面で2基検出した(2、3)。2基は相互によく似たものである。埋土は大きく2層に分かれる。1層は黒色で3では中央部の粘性が強い。2・3層は南部浮石を主として黒色土が数層入っている。遺構の上部が落ちたものだろう。

〈土坑〉

E14～F15のⅥ層上面で7基検出した(4～10)。径0.9m～1.3mほどのものであるが、このうち8・9・10は丸底で埋土が黒く均一であり、相互に似たものである。いずれも用途は不明である。

〈遺構外出土遺物〉

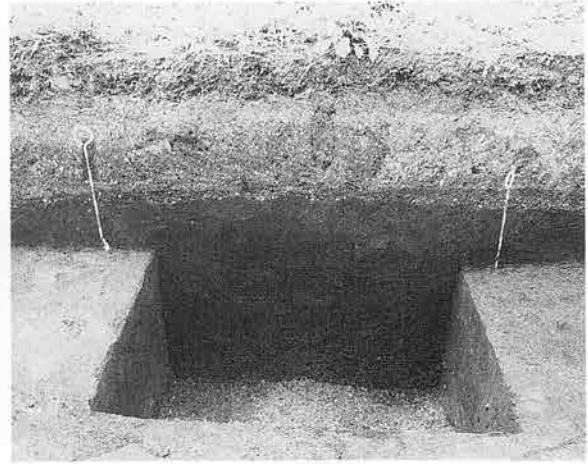
E12区のⅡ層から縄文後期の土器がくずれた状態で出土した。このほかにE11・12区の水田造成土から土器片及び礫約20点が出土した。土器片は縄文の施文されたものとする鉢の破片とが中心である。礫は丸く、表面のなめらかなものである。

IV. まとめ

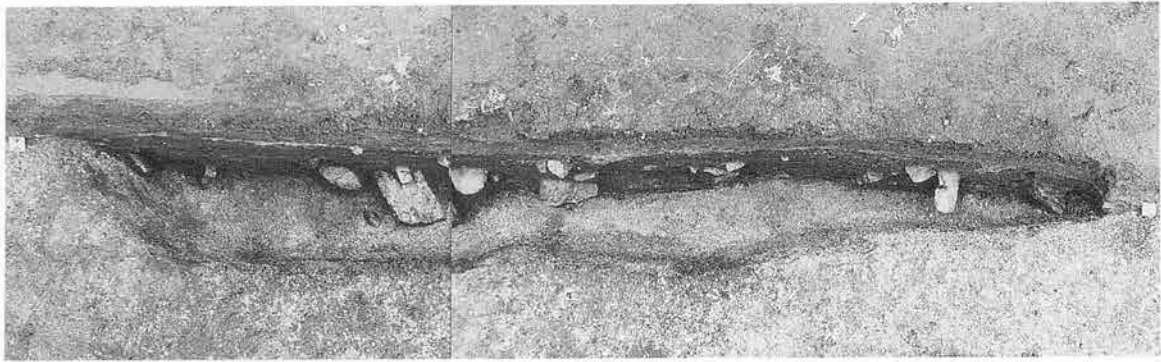
今回の調査により各種の遺構および縄文時代を中心とする遺物を検出した。今後周辺の調査が進むことにより、遺跡の性格がさらに明らかになるであろう。



遺跡全景（南西から）



基本土層



竪穴住居跡——(1)



陥し穴状遺構——(2)



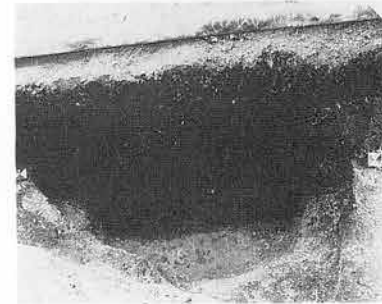
陥し穴状遺構——(3)



土坑——(9)

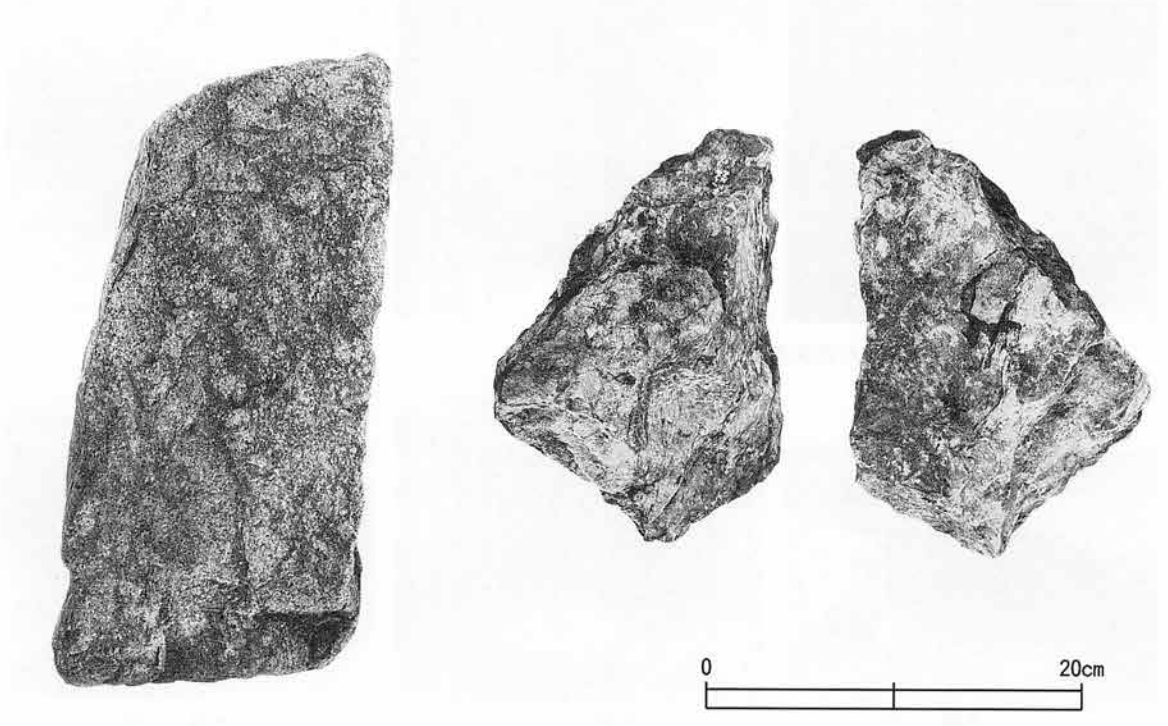
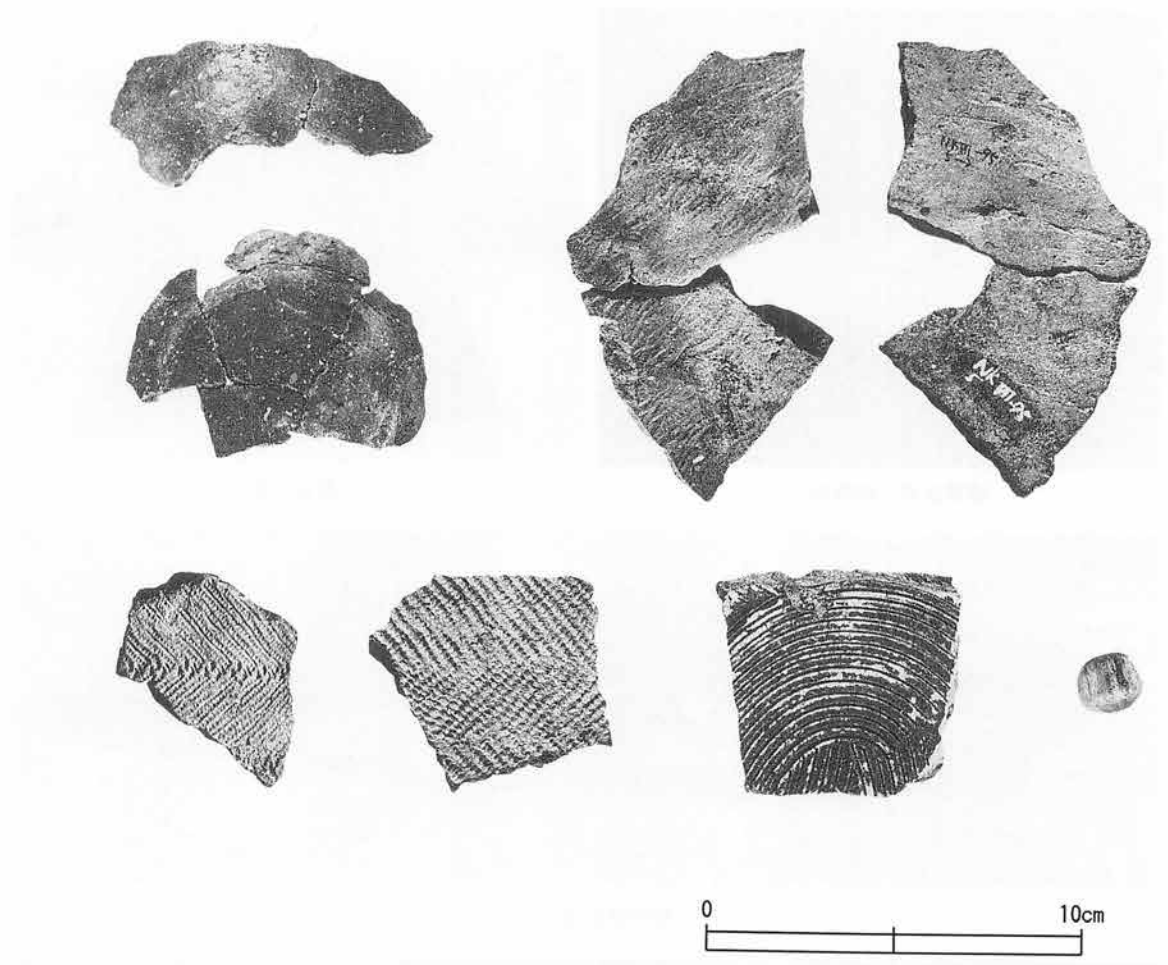


土坑——(7)

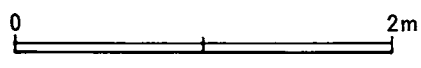
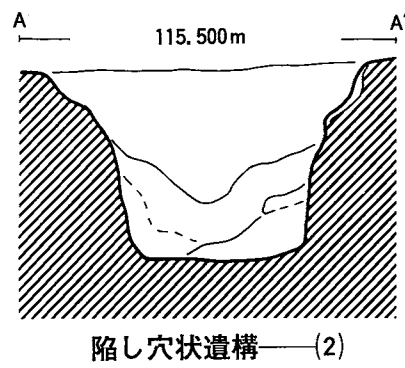
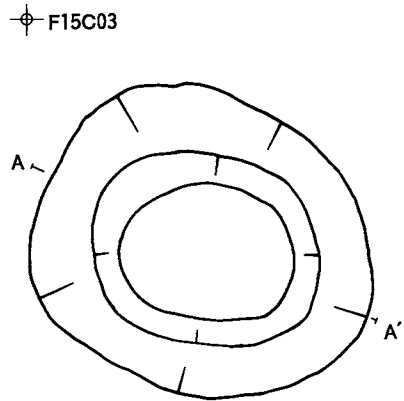
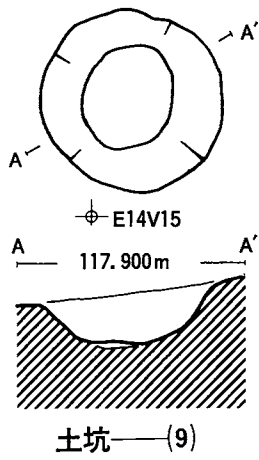
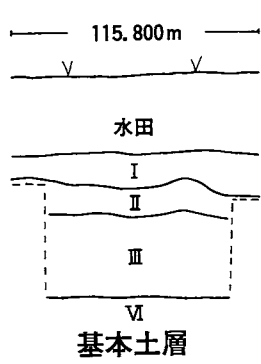
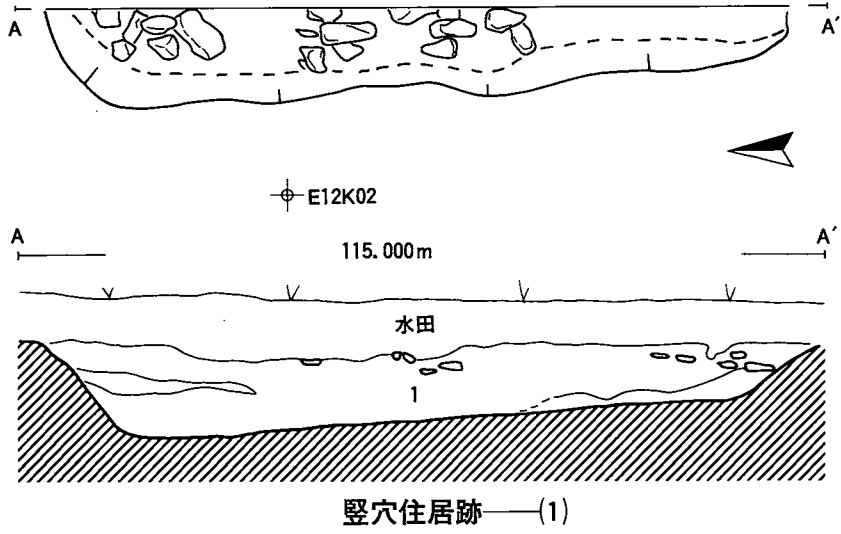


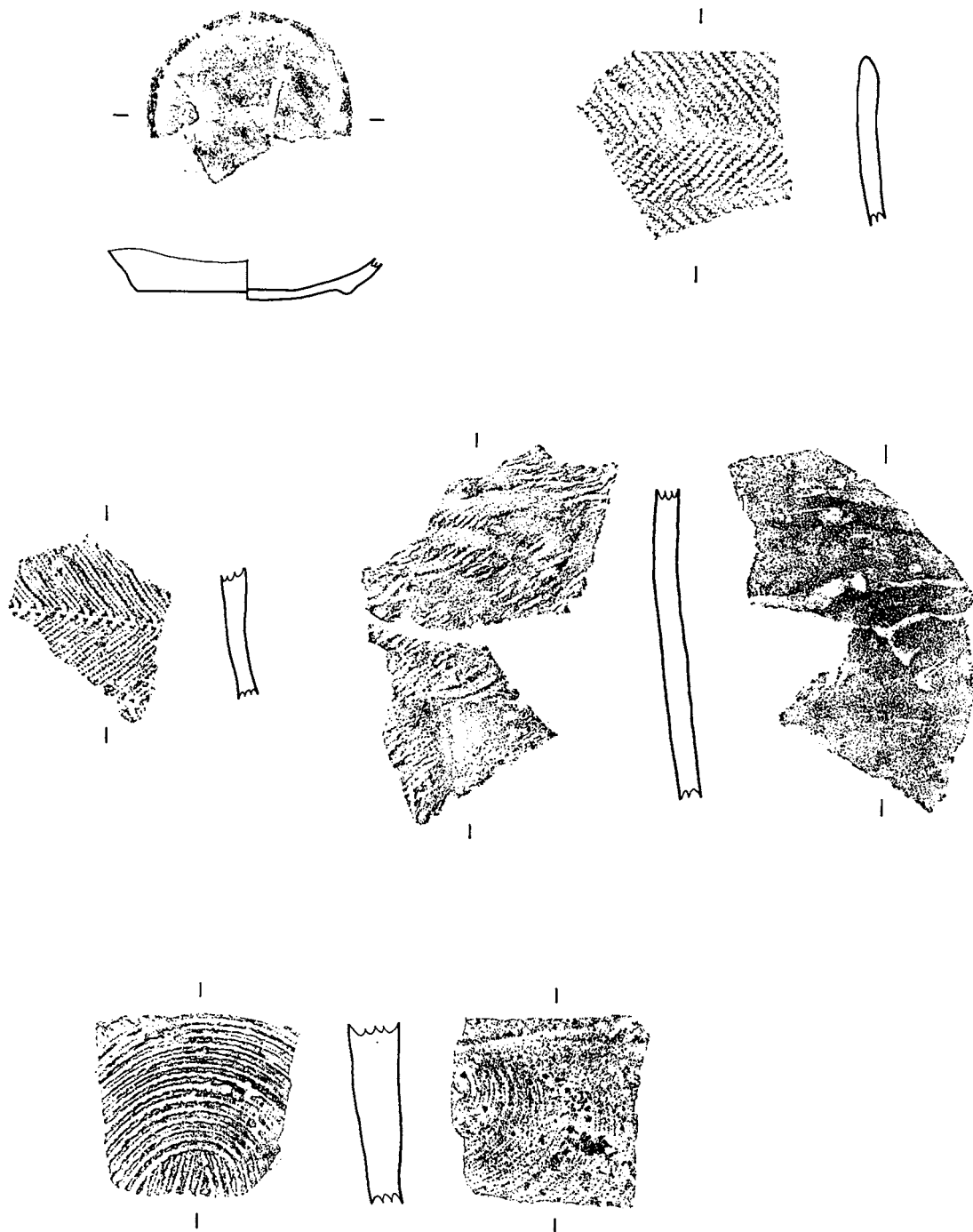
土坑——(5)

検出遺構



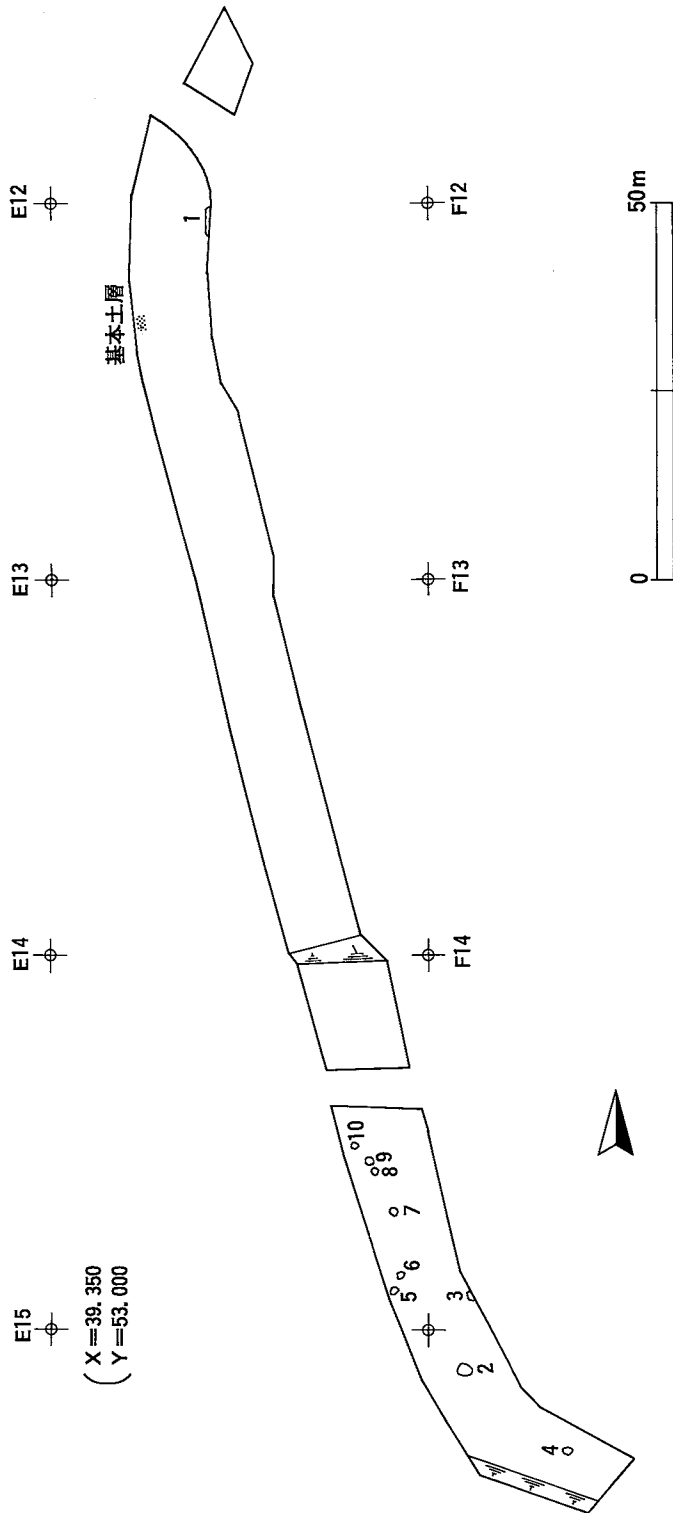
出土遺物





0 10cm

出土遺物



長倉Ⅵ遺跡遺構配置図

報告書抄録

ふりがな	ながらなないせきはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	長倉Ⅶ遺跡発掘調査報告書							
副書名	世増ダム建設関連遺跡発掘調査							
巻次	第246集							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	沼田和宏							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 盛岡市下飯岡11-185 TEL0196-38-9001							
発行年月日	西暦 1996 年 3 月 29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	・〃	・〃			
ながらなないせき 長倉Ⅶ遺跡	いわてけんくのへん 岩手県九戸郡 かるまいまち 軽米町	03501		40度 21分 11秒	141度 27分 29秒	19950601～ 19950812	2,298㎡	世増ダム建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
長倉Ⅶ遺跡	狩場跡、土坑群	縄文時代	竪穴住居跡	1棟	縄文土器			
			陥し穴状遺構	2基				
			土坑	7基				

Ⅱ. 岩手県・市関係

(1) 上^{かみ}甲^{かつ}子^し遺跡

所在地	大船渡市日頃市字上甲子1の1～6ほか
委託者	岩手県土木部鷹生ダム建設事務所
発掘調査期間	平成7年4月13日～6月15日
調査対象面積	1,710㎡
発掘調査面積	1,710㎡
遺跡番号・略号	N F 18-0327・KK-95
調査担当者	大道篤史・鎌田 勉
協力機関	大船渡市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛

1. 遺跡の立地

上甲子遺跡は岩手開発鉄道日頃市駅の北東約5kmに位置し、県道唐丹日頃市線とその西側の山の間に発達した小規模な緩斜面に立地している。緩斜面は崖錘性の地形であり、斜面の中央部から下部にわたって大型の礫が堆積している。調査区の標高は257m～265mであり、南方250mにある鷹生川との比高は約20mである。遺跡の東西は沢によって区画され、かつては西側に宅地が二軒、東側に一軒あったが、現在は取り壊されており、荒地となっていた。

2. 調査の概要

調査は昨年度と今年度の2ヵ年にわたり、今年度は調査区東側半分の1,710㎡を対象に行なわれた。今年度の調査の結果、弥生時代初頭の竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構5基、土坑19基、柱穴状ピット160基、焼土遺構2ヵ所、配石遺構2基などが検出された。

以上の遺構を含む遺跡の層序は上位から下位の順で大きく第Ⅰ層～第Ⅷ層に細分される。この内、第Ⅱ層中に縄文時代晩期末～弥生時代前半、第Ⅲ・Ⅳ層中に縄文時代後期中葉、第Ⅴ層中に縄文時代前期前半、第Ⅶ層中に縄文時代早期後半の遺物を含む。

〈弥生時代初頭の竪穴住居跡〉

昨年度の調査の段階で弥生時代初頭4棟、縄文時代後期中葉4棟の住居跡が検出されており、今年度新たに弥生初頭の時期と思われる住居跡2棟が検出された。昨年度同様、今年度検出された住居跡も斜面のへり際に連続して構築されている。R A 09住居跡の埋土の南半分は流出しており、周辺より住居跡に伴うと思われる多くの土器片が出土している。住居跡は直径約4.3mの円形を呈しており、黒褐色を主体とした埋土である。壁は堅くしまっており、斜面上部側の壁の高さは1mを測る。住居中心部には炉が位置しており、炉内には焼土が厚く堆積している。本来は石囲炉であったと思われるが、炉の縁石は抜き取られたと考えられ、床面東側に炉の縁石と思われる被熱を受けた礫が出土している。また炉を取り囲むように3本の柱穴が検出された。斜面下部側の床面は削平されていたが、炉周辺の4本の柱で住居を構成したと思われる。床面より口縁部分を指頭で押圧した粗製の土器が出土しており、遺構周辺からも変形工字文を文様を持つ土器が出土している。

R A 10住居跡も他の住居跡と同様、斜面のへり際に築かれている。斜面下部の南側は削平を受けたり、他の遺構との切りあい関係になり、全容を把握することは出来なかったが、直径4.5mの円形のプランを呈すると推測される。R A 10住居跡は大型の角礫を多く含むⅤ層相当の褐色土を掘り込んで作っており、斜面上部側の壁はなだらかに立ち上がっている。住居跡中央付近よりレベルの異なる石囲炉が2基検出されている。2時期による作り替えが行なわれていると考えられ、古い炉の縁石を抜き取って新しい炉に転用している。何れの炉も焼土の堆積はさほど厚いものではなかった。出土遺物として床面より粗製の長銅形の甕や、変形工字文の文様を持つ高坏の脚部・浅鉢が出土している。いずれも弥生初頭の時期に相当し、住居跡も同時期のものと思われる。柱穴跡は確認することができなかった。

また調査区最東端において石囲炉が検出されている。扁平な角礫を外側に開くようにして埋め込む構築方法から言って他の弥生初頭期の石囲炉と同一時期のものと思われる。また石囲炉を囲むように柱穴跡が60～70cm間隔ごとに検出されており、石囲炉を伴う住居跡遺構である可能性も高い。ただし住居跡の壁は検出されなかった。周辺から弥生初頭の土器が多く出土している。

〈竪穴状遺構〉

R A10住居跡の東側縁辺を切るようにして、R E02堅穴状遺構が構築されている。V層褐色粘土層（角礫を非常に多く含む）を彫り込んでおり、壁際には角礫が多く入る。同様にR E03・04もR A10住居跡の南辺を切って構築されている。いずれも構築された時期を特定できるような遺物はなかったが、弥生初頭以降の時期であると思われる。R E06堅穴状遺構は調査区外に広がるため、全容をつかむことは出来なかったが、方形の形状を呈するものと思われる。

〈土 坑〉

土坑の成立時期は大きく縄文時代前期前半と弥生初頭の時期に大別される。縄文時代前期の土坑は主に中央部の平坦面に集中し、弥生初頭の土坑は調査区東側平坦面の石囲炉の周辺に多く見られる。各土坑の性格に関しては今後の整理によって明らかにしていきたい。

〈配石・集石遺構〉

R A09住居跡の北東側に扁平な角礫を立石状に立てた遺構が検出されている。立石は縦38cm、横30cm、幅7cmの扁平な角礫を使用しており、5cm程度地中に埋め込まれていた。立石周辺には埋め込み痕が認められ、拳大の角礫を配列して根固めを行なっていると思われる。その30cmほど北側には焼土が検出されており、立石と一連の遺構と思われる。

中央部平坦面においては浅めの土坑に拳大の円礫を中心とした集石遺構が検出されている。埋土中に遺物を含まないで具体的な年代を特定できないが、埋土上面に中掬火山灰が広がることから縄文時代前期の遺構であると考えられる。

東側平坦面に連なるR H02の配石遺構は北東から南西にかけて角礫が配列されており、配石間には溝状の役割を果たしたものと思われ砂質分の堆積が見られる。溝の埋土には遺物は伴わなかったが、近代の住居に伴う暗渠の施設である可能性が高い。

〈出土遺物〉

遺物は土器がほとんどであり、石器は数点のみの出土で、きわめて少ない。時期の内訳としては、九割方が縄文晩期末～弥生初頭のものである。今年度調査区の南端部分から縄文後期中葉と思われる土器が若干量出土している。また中央部平坦面より縄文前期・早期の土器片がわずかに出土している。縄文晩期末～弥生初頭の精製土器には変形工字文の文様を持つ土器が多く出土している。変形工字文を形づくっている沈線、瘤は力強いものが目立ち、「砂沢式」的な要素が強い。前期の土器としては刺突文を持つ土器が出土している。また早期の土器として貝殻沈線を文様を持つ土器が1点出土している。

石器としては石鏃が数点、石槍が1点、大型蛤歯石斧と思われる破片等が出土している。

3. まとめ

今年度の調査によって、弥生時代初頭期における集落の形成がさらに確実なものとなり、昨年度の調査から合計して6棟の住居跡が弥生時代初頭期に存在したことが判明した。しかも斜面のへり際に住居跡が連なること、炉の形態が石囲炉であること、炉の作り替えの形態に共通性が見られること（古い炉の縁石を抜き取って新しい炉に使用すること）など同時期の遺構で共通項を多く持つことが確認できた。出土遺物も時期がまとまっており、沿岸南部地域における弥生初頭の集落跡として興味深い資料を提示できることと思う。

さらに縄文前期・早期の時期にも生活を営んでいた痕跡が認められ、近隣に同時期の遺構が検出される可能性も高まった。



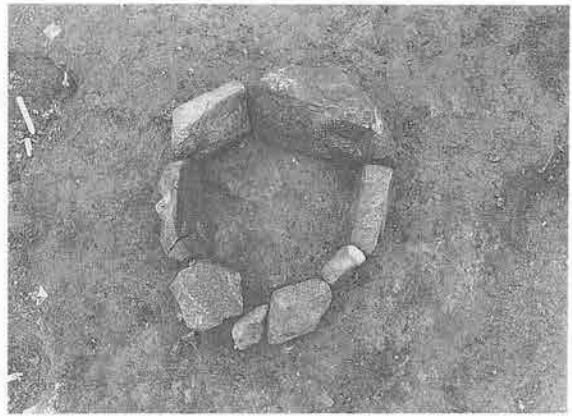
今年度調査区全景



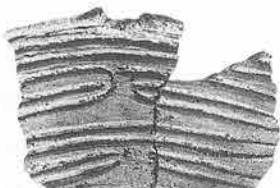
竪穴住居跡



竪穴住居跡と竪穴状遺構



石囲炉遺構



甕の口縁部破片



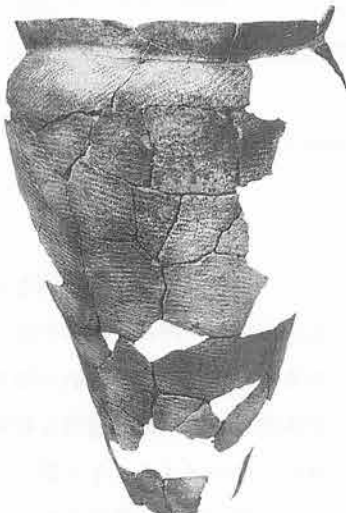
浅鉢



縄文前期の土器片



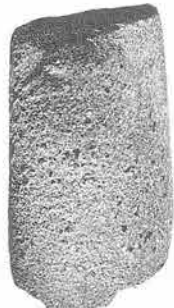
縄文早期の土器片



甕



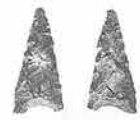
高坏 (脚部)



磨製石斧 (破片)



石槍

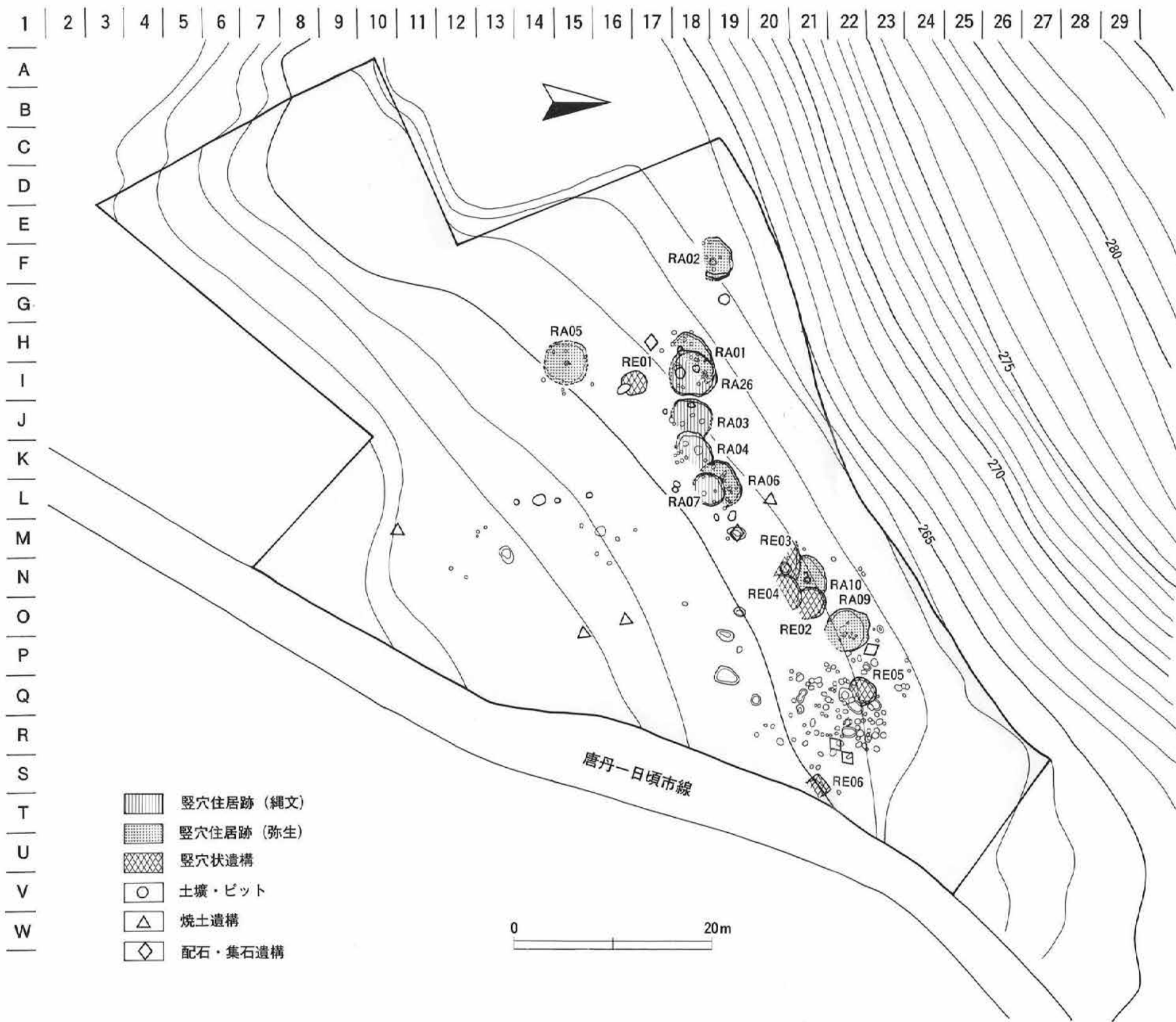


石鏃



石鏃

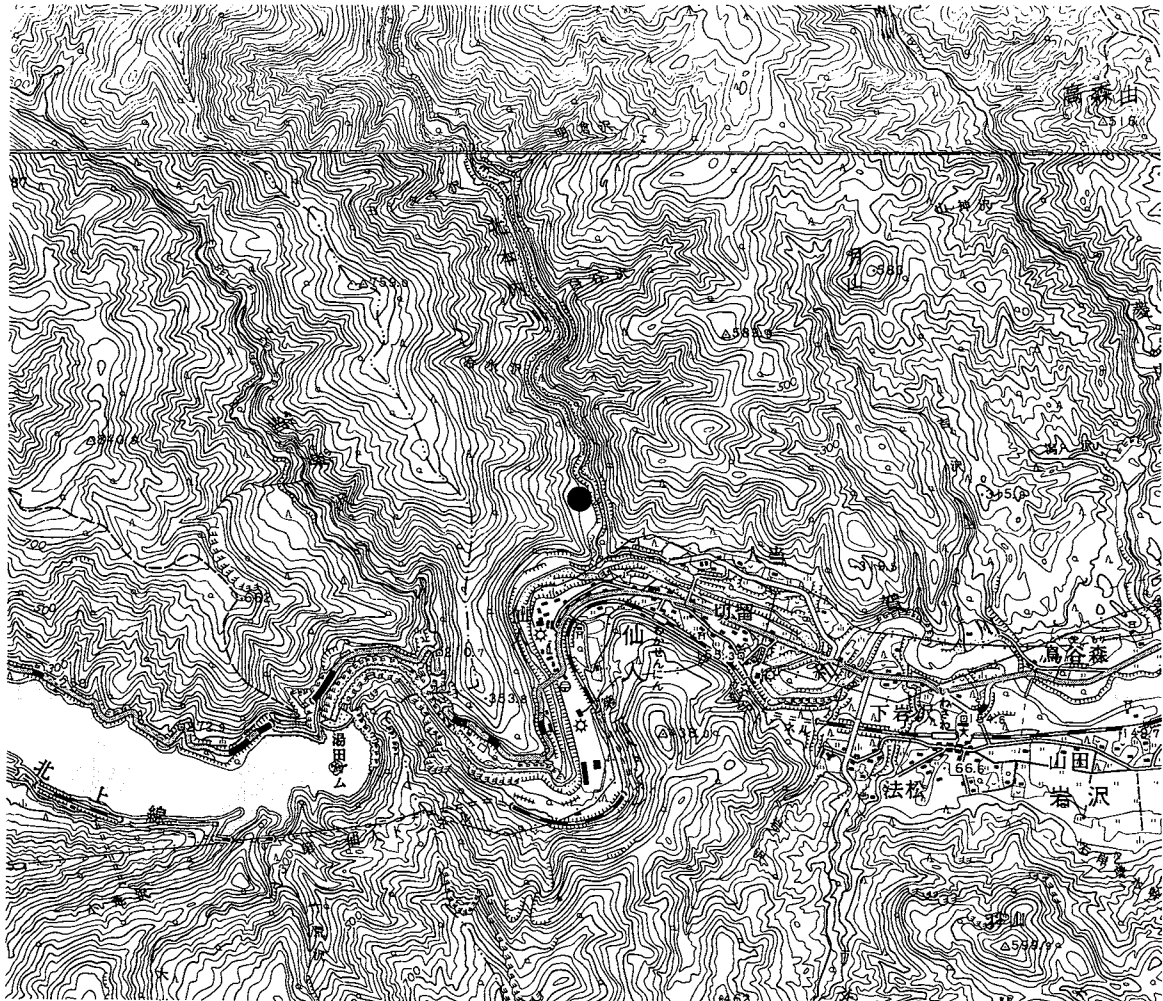
上甲子遺跡検出遺構・出土遺物



上甲子遺跡遺構配置図

(2) 本^{ほん}内^{ない}遺跡

所在地 北上市和賀町仙人
委託者 岩手県土木部北本内ダム建設事務所
発掘調査期間 平成7年8月1日～11月15日
調査対象面積 1,830m²
発掘調査面積 1,128m²
遺跡番号・略号 ME51-1243・HN-95
調査担当者 菊池人見・大道篤史
協力機関 北上市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 川尻・新町

1. 遺跡の立地

遺跡は、東日本旅客鉄道北上線と和賀仙人駅の北北西約1 kmに位置し、和賀川の河岸段丘上の自然堤防に立地している。段丘の形成年代は、後期更新世最終末(約15,000～13,000年前)と推定され、川尻低位段丘(中川、1963)および小繫沢面(豊島、1984)に所属している。遺跡の標高は、170 m前後で、北本内川の川床とは21 m～22 mの標高差がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、縄文時代の遺跡として当初平成7年8月1日から10月31日までの調査予定であったが、進入路の橋の流失によって約3週間の間断を余儀なくされた。また、予測していなかった旧石器の遺物包含層の発見により、本年度は縄文時代の調査を終了させ、旧石器遺物包含層は、次年度への継続調査とした。

遺跡の立地している段丘面は、昭和のなかばまで集落の一部になっており、北西部に当時の礎石が残っていた。複数の沢と湿地があり、湿地からは遺構・遺物とも検出されなかった。

〈竪穴住居跡〉

6棟検出されており、いずれも調査区中央部段丘寄りに位置している。長年の侵食と耕作等により、残存状態は悪く、原型を留めているものは1棟だけである。その1棟は直径3 m余りの円形で、中央に炉を伴い、壁際に石を配している。

〈土 坑〉

全部で約120基検出された。貯蔵穴と思われるフラスコ状のもの2基のほか、性格のわからないものが複数あり、柱穴状のものも多数検出された。

〈焼 土〉

4基検出された。いずれも規模は小さく、一時的なものと思われる。

〈埋設土器〉

中央部やや東寄りに1基、ほぼ完全な形で検出された。土器の高さは約30 cmである。

〈その他〉

中央部西寄りに、沢の水を貯めたと思われる長径約5 m、短径約3 mの凹地が検出された。これは礫層まで掘り込んでおり、底に水性堆積物の粘土が溜まっていて、多数の縄文時代の遺物が伴っている。

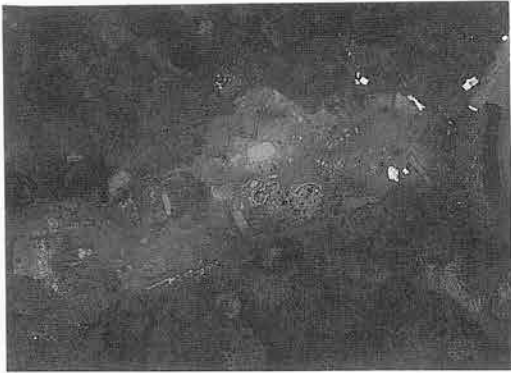
〈出土遺物〉

縄文時代全般にわたる土器片が多数出土した。復元可能なものは約20個である。石器は石篋が多く、ついで、石匙・石鏃・スクレイパー・石錘・凹石など多数出土した。

試験掘りをかけた仮称T1区からは、数ミリの多数の木炭片とともにポイントフレイクや石刃タイプの剥片が出土した。これらは、晩期旧石器時代に属するものである。

3. まとめ

今回の調査では、昭和の住居跡を除くと、大きく二つの時代(旧石器時代と縄文時代)の遺物あるいは遺構が確認された。とくに、II a～II b(u)、II b(1)からは、晩期旧石器時代のポイントフレイクや木葉型のポイントが発見されていることから、今後の調査では、薄手の無文～隆線文土器の出土も予想される。



遺跡全景



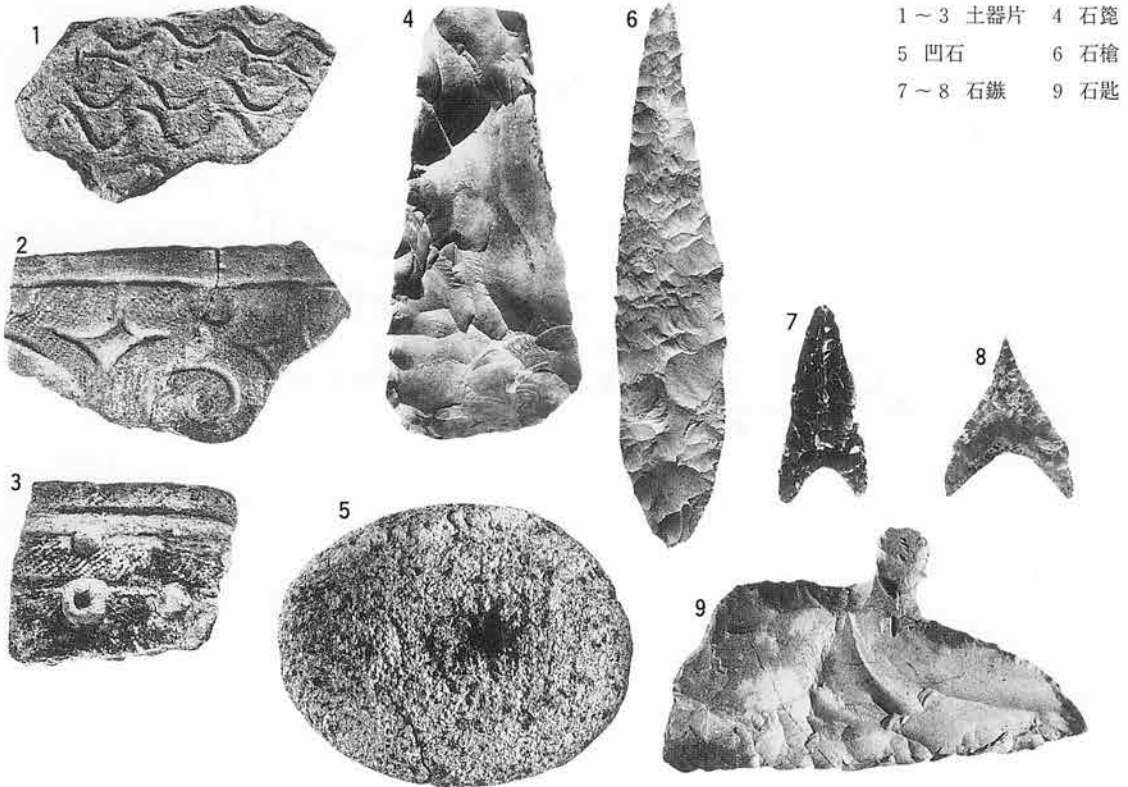
実測風景



発掘開始時の遺跡

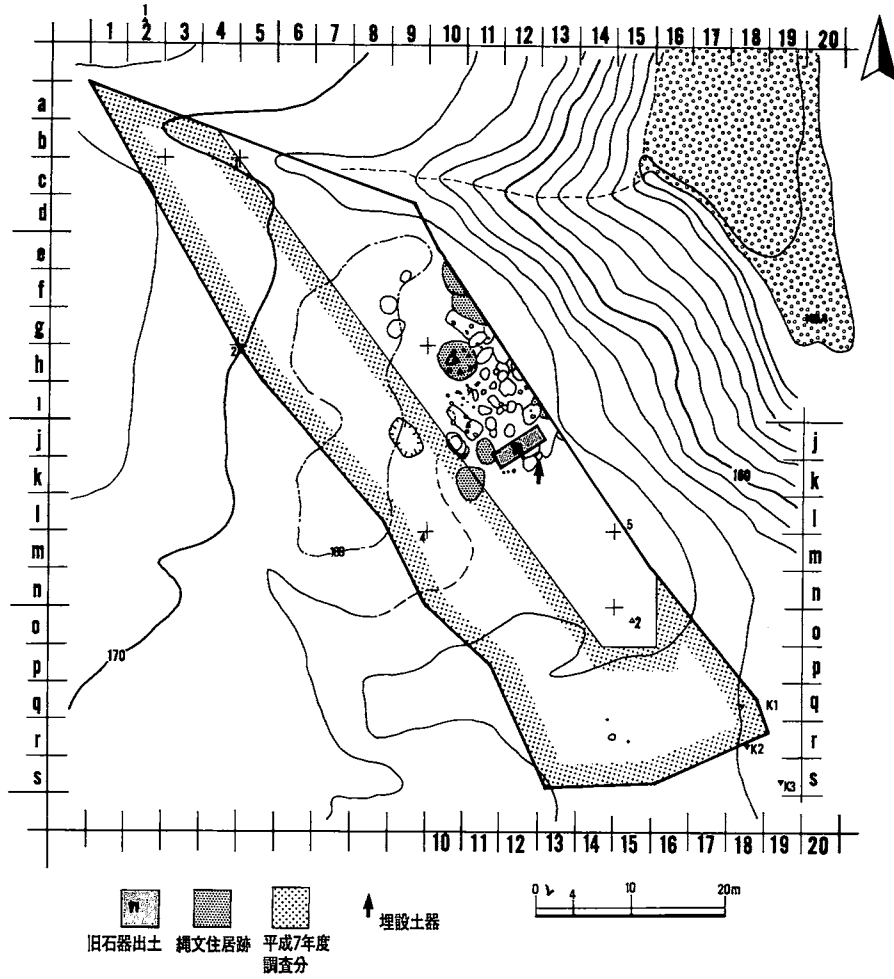


住居跡と土坑



本内遺跡検出遺構・出土遺物

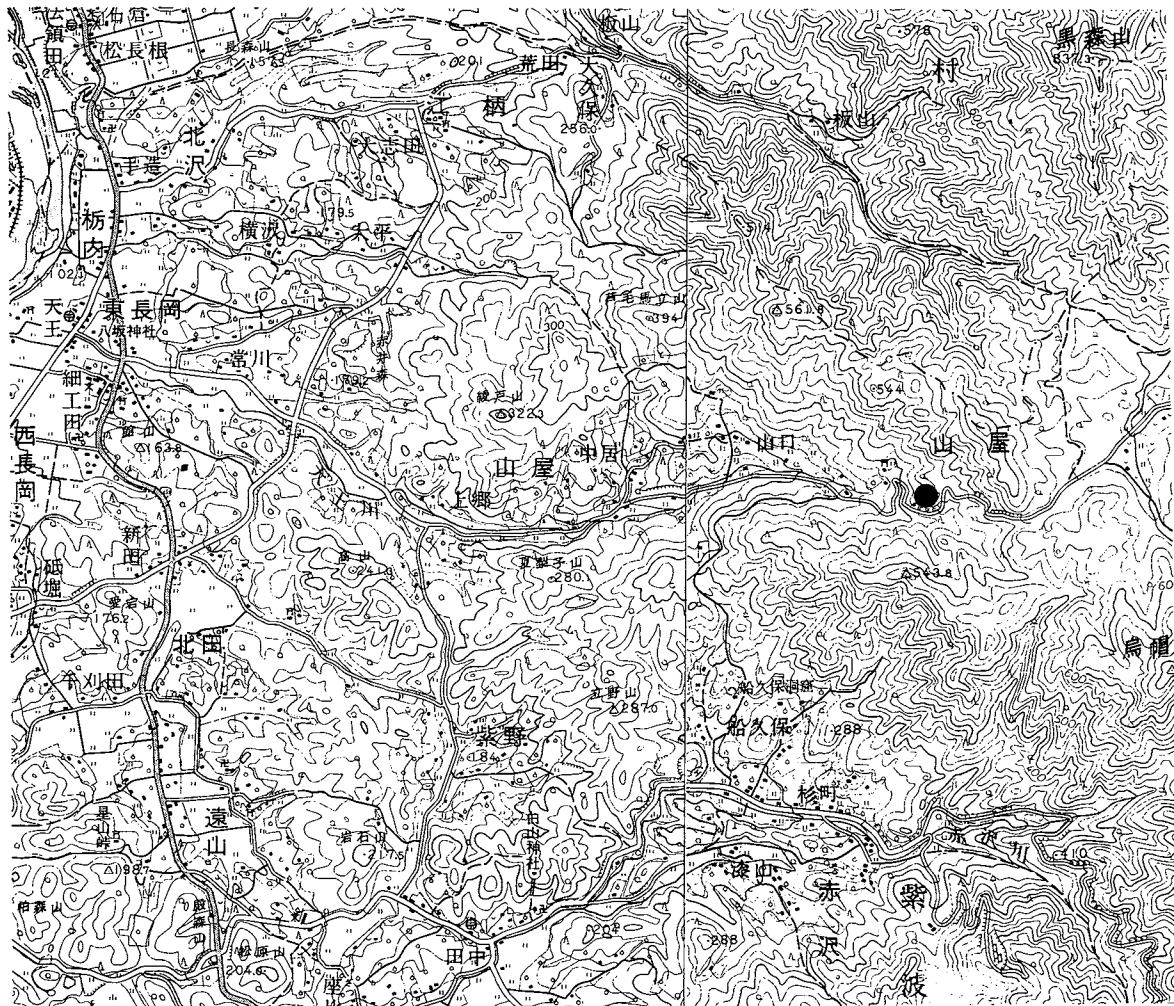
HN-95



本内遺跡遺構配置図

やま や た て き ょ う づ か やま や た て
 (3) 山屋館経塚・山屋館跡

所在地	紫波郡紫波町山屋字山口地内
委託者	岩手県土木部盛岡土木事務所
発掘調査期間	平成7年6月16日～9月18日
調査対象面積	2,900m ²
発掘調査面積	2,900m ²
遺跡番号・略号	LE59-2113・YY-95
調査担当者	鎌田 勉・伊藤 拓
協力機関	紫波町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 日誌・早池峰山

1. 遺跡の立地

山屋館経塚・山屋館跡遺跡は東日本旅客鉄道東北本線古館駅の東約9.5kmに位置し、北上山地西部・黒森山系の舌状の尾根上に立地している。遺跡の南側は北上川水系天王川（山屋川）に開析された深い谷になっており、遺跡の標高は約410～490m、現況は主として赤松・杉等の森林（国有林）である。また地元の人々は、山屋館経塚の周辺を「寺山」（てらやま）、山屋館跡周辺を「蛇洞」（じゃぼら）と呼んでいる。

2. 調査の概要

〈竪穴住居跡〉

館跡の北西の尾根上の緩斜面である調査区C地点で、縄文時代後期末葉と推定される竪穴住居跡2棟を検出した。2棟とも4～5基の柱穴があった。炉は検出されず、床面も平坦ではないことから、臨時的野営的な住居跡であると思われる。

〈竪穴状遺構〉

竪穴状遺構は、昨年紫波町教委の試掘で一部分検出していたものである。平面プランは形、規模は2×2.5m程で、深さは検出面から30～40cm程である。遺構埋土から出土した土器片は赤穴式といわれるもので、弥生時代後葉の時期が考えられる。

〈土坑等〉

土坑群については、出土する土器の形式と埋土の状況から、縄文時代後期末葉と弥生時代後葉の2時期に分けることができる。埋土に縄文時代後期末葉と弥生時代後葉の土器片（赤穴式）が共伴する土坑もあり、弥生後葉以降の遺構であることは確実であるが、遺構同士が切り合い、埋土上部は攪乱で動いていることが考えられるので、土器片の存在だけで明確な時期の特定は出来ない。なお、中世以降とした土坑群は、採掘口の埋土を切って構築されており、縄文～弥生時代の土器は一切含まれないので比較的新しい遺構であると考えられる。用途・性格等は不明である。また陥穴状遺構が、尾根を切る形で一基だけ構築されていた。

〈経塚状遺構〉

館跡の西側の尾根の先端部から、平安時代末期の経塚状遺構を4基検出した。これらの経塚状遺構はほぼ北東－南西の軸線上に直線的に並んであり、出土した壺の年代から12世紀前半から後半にかけて順次作られていったものと思われる。3つのマウンド状の積石があり盗掘のため中央部が凹んでいた。4基の経塚状遺構は有櫛式で、石櫛部は四方の測石と底石、蓋石とその周囲の組石で構成されている。構築の時期の新旧関係は、積石・組石の切り合いから3号・4号経塚状遺構が古く、1号・4号経塚状遺構が新しい時期のものと考えられる。4基の経塚状遺構のうち3基は盗掘を受けていたが、盗掘を免れた4号経塚状遺構からは常滑産の三筋文壺が出土した。また1号経塚状遺構は盗掘を受けたものの外容器と思われる壺のみが残存していた。その壺は須恵器系陶器で産地不明の波状文四耳壺である。また3号経塚状遺構の石櫛部下の人為堆積の埋土中から木箱の一部が出土した。それらは漆等を施さない白木の箱に銅板で縁取りしたものである。3号経塚は作り替えが行われた可能性がある。

〈館跡〉

調査区B地点から検出された山城様式の館跡は、標高465～492mの尾根上の山頂及びその斜面に主体部が構築されている。

①主郭・曲輪

主郭は東西約5m・南北約6m程の小規模なもので、マウンド状に盛り上がっており、建物跡等の遺構は

検出できなかった。おそらく物見台的な場所であったと思われるが、削平前の縄張り図には塚状の盛土が描かれていることから、主郭部は主として塚的な機能を持っていた可能性も考えられる。主郭を囲むような形で、丘の斜面には半円状の比較的平坦な曲輪が構築されていたが、伐採時の削平により失われた曲輪もかなり存在するようである。曲輪はいずれも小規模なもので、斜面を削って造成したものと思われる。検出した約13余りの郭輪は、帯曲輪状に連続して主郭を囲むような形態だが、南側斜面には曲輪は少ないようである。また柱穴等の遺構は検出されていないので曲輪における建物等の遺構は想定できない。これら遺構からの出土遺物はなかった。

②堀跡・土橋

東側の斜面中段から下段にかけて、5条の堀が構築されていた。1号堀跡は伐採時に削平を受け、車道に押しつぶされた形になっていた。幅約2m・深さ約0.5mの比較的小規模な堀であり、形態は薬研堀である。また、東斜面に約2mの削りだし式の土橋がかかっていた。土橋部分を頂点として下方へ傾斜する形で北側と南側へそれぞれ伸びていくが、南側に伸びていくものは途中で崖に突き抜けていた。2号堀跡は、尾根を切る堀切状の遺構で、竪穴住居跡や土坑群を切って構築されていた。東側へは急激に下がっていくが、形態ははっきりしなくなる。3号堀跡は、塚を切る溝状の遺構である。あるいは水を流すための施設だったかもしれない。なお4号・5号堀跡はマウンド状遺構の上部と下部に構築されていた。4号堀跡は比較的深く、塚を切って東側斜面へと伸びていっている。4・5号堀跡は犬走りとも考えられる。これら堀跡等からも遺物は出土していない。

③塚状遺構・マウンド状遺構

堀の下段部に3基の塚状遺構を検出した。堀跡に切られていることから、館跡以前に構築された塚状遺構と考えられる。封土は、地山起源の黄褐色ローム質土を主体とし、多くの角礫を含んでいるもので、礫のみで固めた層もあった。盛土の下からは石塚のような構築物は全くみられず、遺物もなかった。宗教的な儀式に関係する遺構の可能性はある。マウンド状遺構も、同様の形態をしているが、西半分が削平で失われており地山起源の土を主体とする盛土である。性格については、目隠し的な目的で作られた可能性が考えられる。

3. まとめ

今回の調査で、この遺跡には縄文時代後期末葉・弥生時代後葉・平安時代後期・中世前期という少なくとも4つの時期の遺構が存在していたことがわかった。縄文後期末葉の住居跡が検出されたことで、この住居跡に伴う集落が調査区近辺に存在した可能性が考えられる。しかし、連続する尾根上に住居跡が展開しないことから、大集落の一部と考えることはできないようである。一時的な野営等の施設であり、臨時的住居跡と考えるのが妥当だろう。弥生時代後葉の遺構（土坑群）については、用途は不明だが土坑の形態から墓塚等の祭祀・呪術的な施設であった可能性が考えられる。

4基の経塚状遺構は平安時代末・12世紀頃の遺構であり、奥州藤原氏かその関係者による所産と考えるのが妥当であると思われる。この地に「経塚」を造営した理由については、当時この地が重要な寺院の境内であり、聖域・靈域とみなされる場所であったことが想定できる。寺社等の聖域を利用して館を構築することは中世前期（特に南北朝期前後）には全国的に広く認められている。そして、寺社の権威と聖性を背景にして中世の武士層がこの地の支配権を正当化する時代において、この「館跡」を作ったのかもしれない。また、館跡における5条もの堀跡も防衛というよりは精神的な境界（結界）だった可能性もある。調査区C区には中世以降の遺構も若干確認できるが、経塚状遺構と館跡周辺にはその後の人々の生活の痕跡を認めることはできない。



館跡全景



経塚全景 (左から1号、4号、2号、3号経塚)



1号経塚石槨部



2号経塚石槨部検出状況



3号経塚石槨部検出状況



4号経塚石槨部



1



2



3



4



5



6



7



8



9



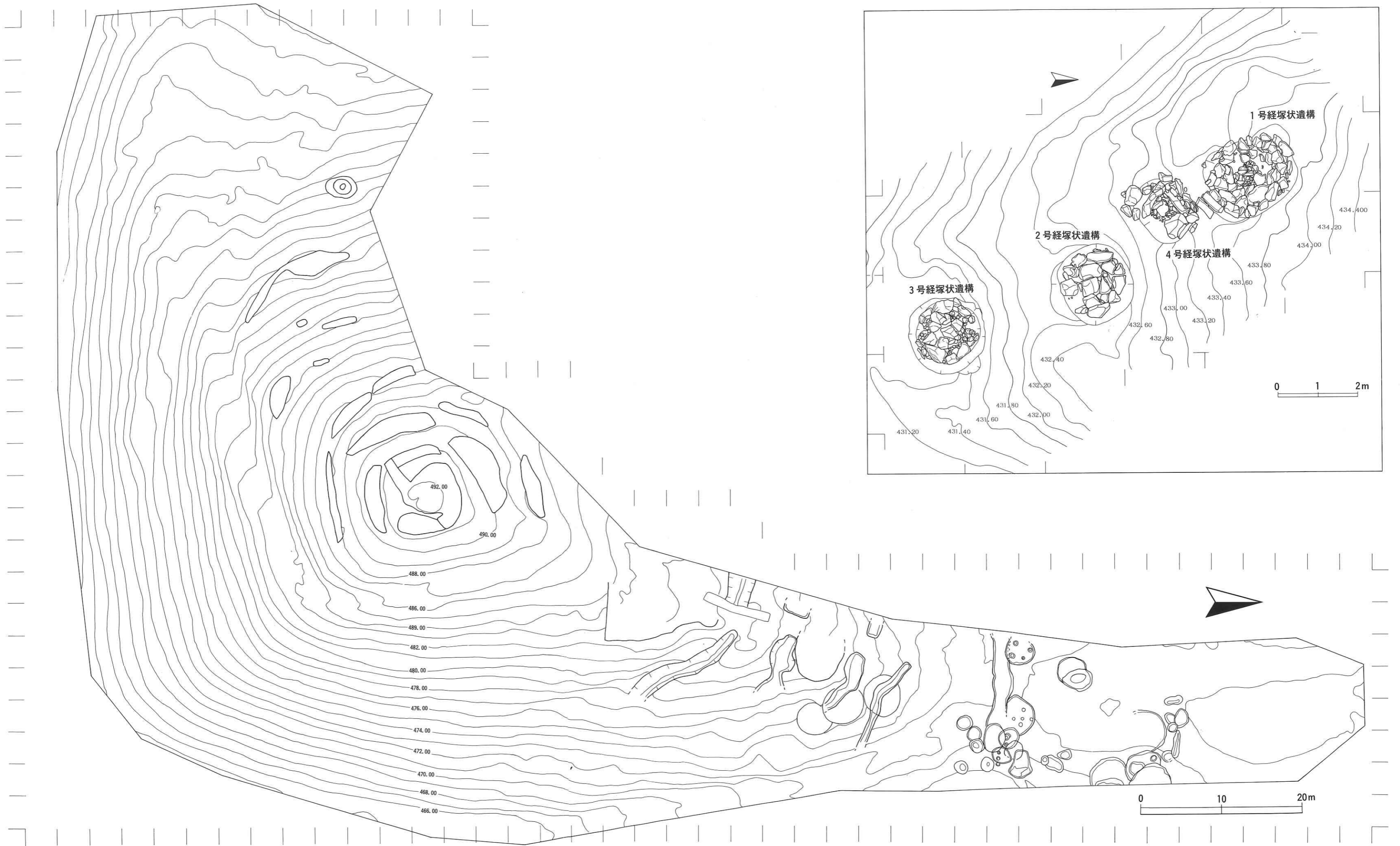
10



11

1 常滑産三筋文壺 2 須恵器系波状文四耳壺 3 経箱銅片
4～7 縄文時代後期末の土器片 8～11 弥生時代後葉の土器片

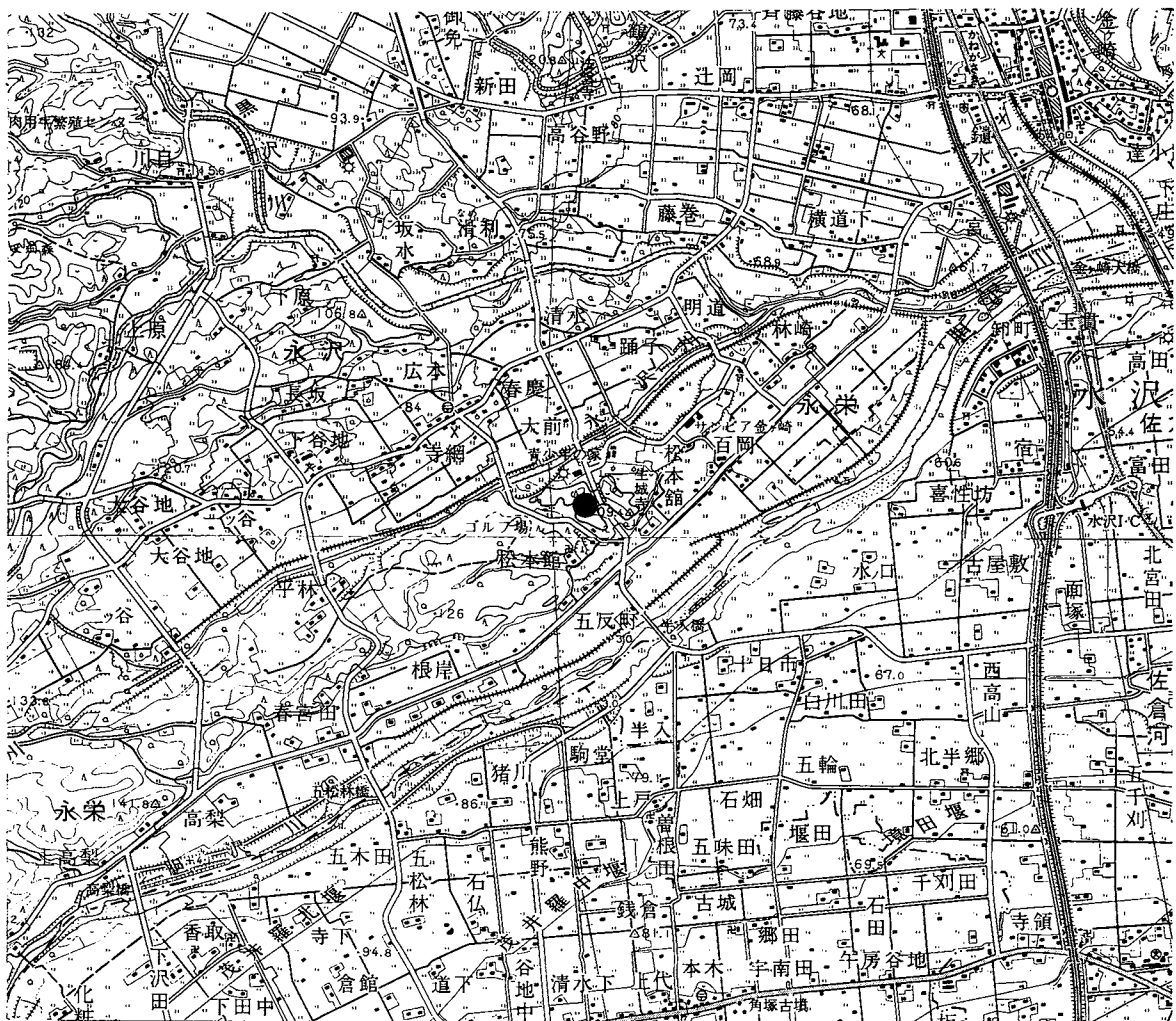
山屋館跡検出遺構・出土遺物



山屋館跡遺跡遺構配置図

(4) 松本館跡

所在地 胆沢郡金ヶ崎町永沢松本館
委託者 岩手県土木部北水沢土木事務所
発掘調査期間 平成7年4月13日～11月16日
調査対象面積 7,880㎡
発掘調査面積 7,880㎡
遺跡番号・略号 NE-05-2118・MM-95
調査担当者 小山内透・元吉弘明
協力機関 金ヶ崎町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 北上・水沢

1. 遺跡の立地

松本館跡は大林城の西郭を構成する館跡で、東日本旅客鉄道東北本線金ヶ崎駅から南西約4 kmに位置し、胆沢川と永沢川にはさまれた永栄丘陵上の東端部に立地する。標高は80～108mで、最高位部の郭と最低位部の堀底との比高差は30m以上を測る。遺跡の現況は山林と果樹園及び草地である。

本遺跡（大林城）は全体では最長部約1,500m、最大幅約650mの規模の総構えの城郭であり、現在の地名として下館・羽黒堂町・上宿と呼ばれる城下はこれまで数回の調査が行なわれており、その成果として家臣団の居住域と考えられている。

2. 調査の概要

調査は平成5年度からの3カ年にわたる継続で行われ、昨年度までに6,340㎡の調査を終了しており、今年度は残り7,880㎡を対象として調査を実施した。

今年度の調査区は地形的に平坦な所は少なく、急斜面の城の防御的空間が主体となったため段築等の城の構造的遺構が多く確認された。検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡1棟、古代～中世と思われる竪穴状遺構4棟、土坑6基、中世の館跡に属するものとしては、平場遺構（郭8カ所・帯郭2カ所・テラス状6カ所・犬走り状3カ所）、道路状遺構2カ所、階段状遺構1カ所、切岸4カ所、虎口1カ所、土塁4カ所、堀5条、溝16条、井戸2基、柱穴約300基などである。

〈竪穴住居跡・竪穴状遺構〉

竪穴住居跡は調査区中央部郭の中世盛土整地下から検出され、規模3.6m×3.2mの方形を呈し、西壁南側にカマドを持つ。カマド本体は30cm程の河原石を芯材とし、支脚には土師器坏を伏せて使用していた。柱穴は不規則な配置で数基検出された。住居外南西方向の斜面山側には排水用と思われる溝が西壁沿いに巡る。

竪穴状遺構はすべて中央の郭で検出されたが、畑地の開墾掘削により西側（山側）の壁と柱穴が一部確認されたに止まる。西壁長がそれぞれ2.6m、4m、9.7mを測る3棟は方形プラン、南西部のみ遺存する1棟は隅丸方形を呈するものと思われる。小型の2棟は壁際に等間隔で柱穴が3基ならぶが、他の2棟は不規則配置であった。最大の1棟は壁溝が存在するもので、建物跡に伴う排水溝の可能性も考えられる。いずれも遺物が出土せず遺存部分が少ないため時期を特定するには至らないが、形態からみて古代～中世と思われる。

〈平場遺構・切岸〉

郭・帯郭・テラス状・犬走り状遺構いずれもほとんどが削平と盛土によって造成されている。調査区北部で平成5年度の調査区を含む郭は自然地形のままで南側に緩く傾斜し、中央部では4カ所のうち北側の2カ所は谷頭に盛土することで平坦面を広く構築しているが、最も広い中央の郭は開墾時の掘削のため傾斜面となっており、造成方法は不明である。調査区南部で検出された3カ所は削平により平場としていた。北部および中央部の郭では、竪穴状遺構や井戸、多数の溝と柱穴が検出されているが、南部では道路状遺構1基が検出されたのみである。いずれの郭も大半が調査区外に広がるため全容は不明であるが、位置や状況等からみて北部と中央部の郭は生活的空間、南部の郭は防御的空間と思われる。

調査区中央部と南部で検出された幅約5m程の帯郭は現況で調査区外につづくのが確認される。いずれも切り盛りして構築されているが、柱穴等の遺構は検出されなかった。

テラス状平場と犬走り状遺構は中央部の郭から堀底に至る斜面に構築されており、単独のもの同士がつながるものがある。いずれも柱穴等の遺構は検出されなかった。

また、斜面に対して平行に存在する郭・帯郭・犬走り等各段の間は人工急斜面の切岸とされている。

〈道路状遺構・階段状遺構〉

道路状遺構は調査区南部で検出された土塁を伴う部分と東部の残地部分の試掘で確認されたものである。南部の北側は土取りにより破壊され、東部の大半が調査区外にかかるため全容は不明であるが、確認された状況等からみて一連の遺構であり、南部で幅約2.5mのものが中央を南北に走る堀の東側斜面では幅約1m程の犬走状となり、北部の階段状遺構に達するものと推定される。

階段状遺構は調査区北部で東西の堀2条に挟まれ、堀の合流する南側に向かって舌状に張り出す緩斜面に位置する。排水機能を持つ溝で区画され、浅い溝状に等間隔に段差を有する。

〈土 塁〉

敵の侵入を防ぎ、かつ目隠しや区画として土を盛って構築した土手状のものである。南部の道路状遺構に伴うもの、北部西側の堀に平行して構築されたもの、中央部の郭を区画するものは、幅約1.5m、高さ約0.5～1m程の規模であるが、中央部南側のは沢をせき止めて高さ約3.5m、上端幅約5m、下端幅約8mの規模で、約5cm単位の厚さに黒土と地山土をもって鍵形に構築し、枳形虎口状の空間を構成している。

〈堀〉

北から南に下る沢地形を利用し、一部人工的に手が加えられていた。調査区は縦断する堀は沢地形をそのまま利用しているものであるが、東側が調査区外にかかるため全容は不明である。確認された所では上端幅5～10m、下端で約1m、深さは3～5m前後で、土塁で沢をせき止めることによって一部水堀とし、その内外で高低差をもうけて鍵形に堀を曲げ、増水時には外側に流れるように工夫されていた。

〈井戸・溝跡〉

井戸は調査区北部の郭で検出され、北西の1基は平成5年度の調査で確認されていたものである。北東の1基は径約1.5m、深さ約4m程の規模で、いずれも排水用の溝が伴う。北部および中央部の郭で検出された他の溝跡も状況からみてすべて排水のためのものと思われる。

〈柱 穴〉

北部および中央部の郭で約300基程の柱穴が検出されたが、郭の大半が調査区外に存在するため建物等を想定するには至らなかった。形態には円形と角形があり、円形が大半を占める。規模は径20～30cm前後で、確認された柱痕は径15～18cmを測る。

〈出土遺物〉

今年度の調査区は防御的空間が大半であったため遺物はあまり多くは出土しなかった。年代や種類のには昨年調査で出土した遺物と差異はなく、中国産磁器類（青磁・白磁・染付）、国産陶器類（常滑・美濃）、かわらけ、漆器、曲げもの、鉄製品、石製品（石臼・石鉢）などである。その他には縄文土器・石器、土師器・須恵器がわずかに出土している。

3. まとめ

今年度は防御的空間の調査が主体のため、昨年のように遺物や居住空間など日常生活的資料は多くなかったが、入城するための道、柏山館と松本館を区画し、かつ最頂部の郭に達するまでの防御を考えた土塁、堀、数段の平場の構築など、地形をうまく利用した構造等、現在の道路工事による盛土のため現況では確認できず、これまで考えられていた城の縄張りを一部ではあるが把握できたことが最大の成果であったと思われる。



遺跡全景



調査区近景



1



2



3



4



5



6



7



8



9



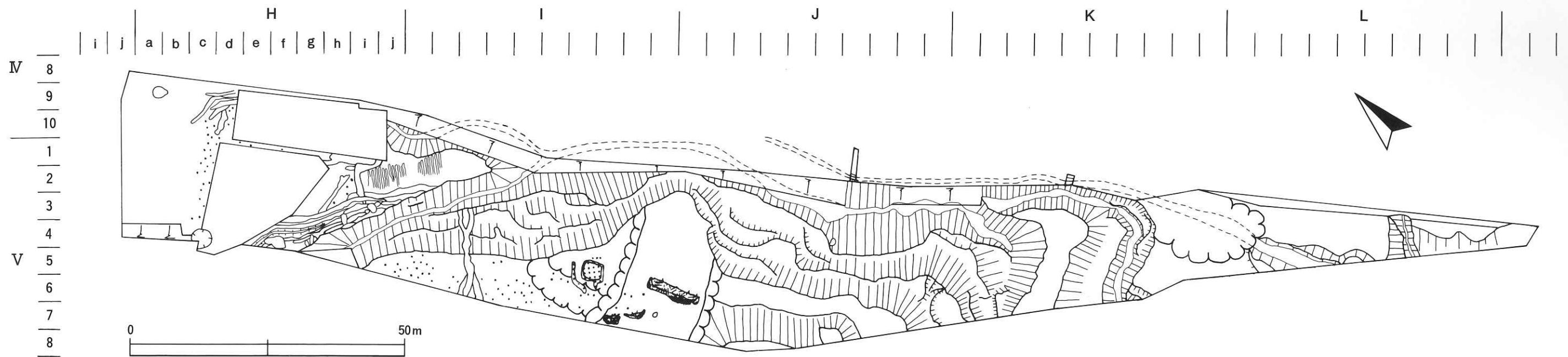
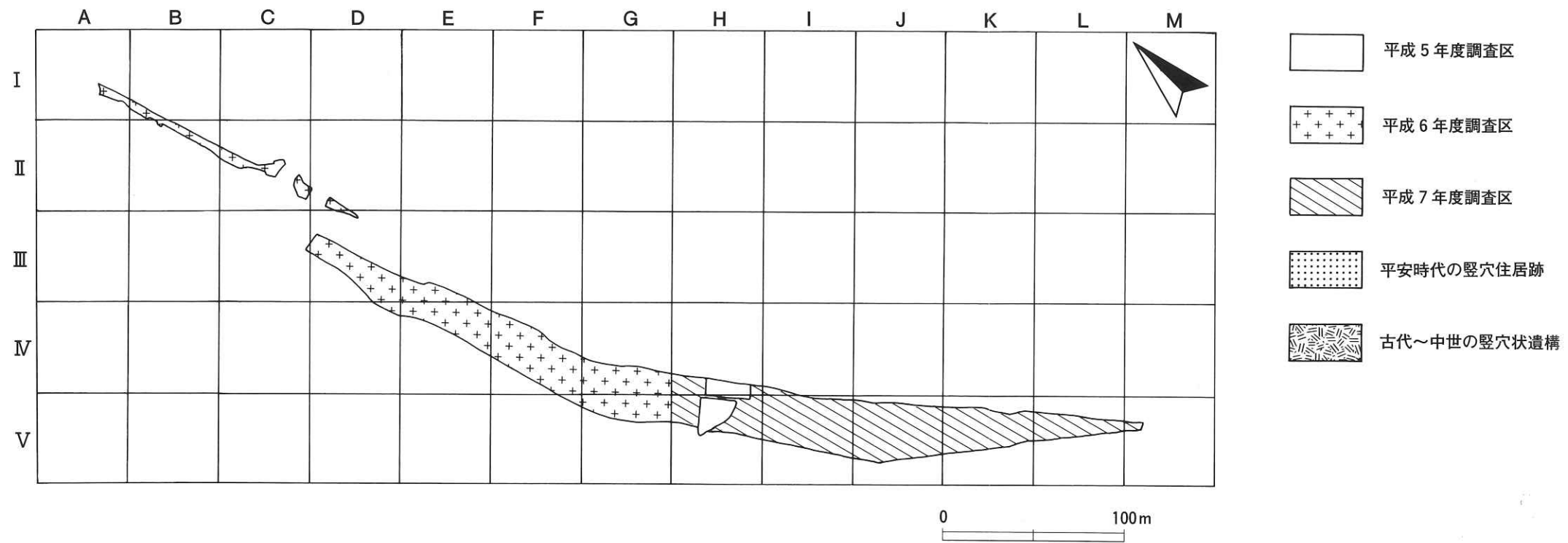
10

- | | |
|--------|--------|
| 1 土師器 | 7 染付 |
| 2 土師器 | 8 瀬戸美濃 |
| 3 鼻付き鉞 | 9 漆碗 |
| 4 青磁 | 10 石臼 |
| 5 天目 | 11 茶臼 |
| 6 白磁 | |



11

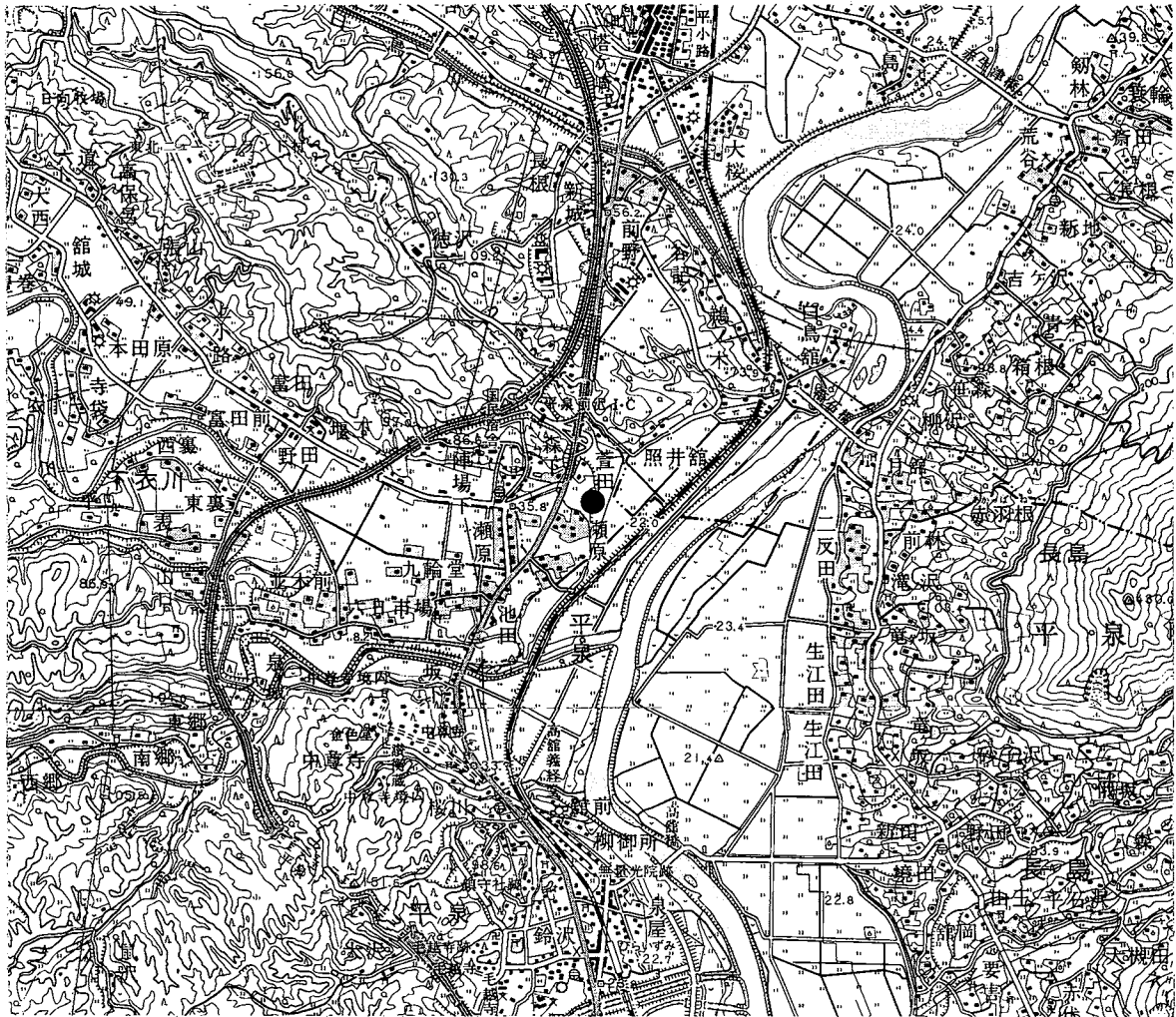
松本館跡検出遺構・出土遺物



松本館跡遺構配置図

(5) 瀬原 I 遺跡

所在地	西磐井郡平泉町平泉字森下66-2ほか
委託者	岩手県土木部一関土木事務所
発掘調査期間	平成7年4月12日～6月15日
調査対象面積	2,340㎡
発掘調査面積	2,340㎡
遺跡番号・略号	NE66-1066・SBI-95
調査担当者	溜 浩二郎・木戸口俊子
協力機関	平泉町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 水沢・一関

1. 遺跡の位置と立地

瀬原Ⅰ遺跡は東北自動車道平泉前沢インターチェンジから南南東約200m、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅から北北西約3.6km付近に位置し、遺跡の東側には徳沢川及び一級河川の北上川がある。調査区の現況は北側斜面部が荒蕪地、中央部谷間が水田跡、南側段丘面が墓地である。

2. 調査の概要

昨年度からの継続調査である、今年度の調査区域は北側斜面部、南側段丘面が主に調査対象となった。検出された遺構は近世の墓墳が50基、平安時代の竪穴式住居跡が1棟、竪穴状遺構が1基、平安時代、弥生時代の焼土遺構がそれぞれ1カ所ずつ、時期不明の土坑1基、溝状遺構が1条検出されている。

〈墓 墳〉

ⅠD区、ⅡD区で50基検出された。形状は円形が4基、正方形、長形状が46基である。円形は最大で直径58cm、深さ42cm、正方形は最大で56cm×56cm、長方形は最大で長軸80cm、短軸64cmで一部が重機によって削平されている。遺構の時期は形状や位置によって異なる。墓地の北東部に分布する墓墳群からは明治時代の古銭（半銭・一銭銅貨）が出土しており、この時代の遺構と考えられる。また長方形の墓墳からは底部から和鏡、古銭、磁器等が出土している。墓地は埋没していた墓石（安永時代）や副葬品から江戸時代後期以降から形成されてきたと思われる。

〈竪穴式住居跡〉

墓地の盛土の下から1棟検出された。竪穴式住居跡は規模312cm×300cm程でカマドは東壁の中央よりやや南側に寄った所に設けられ、約80cmの煙道をもつ。カマドの袖部には壁面から続く地山が利用され、地山が崩壊した南側の袖の先端は土器片を重ねて補修している。埋土には床面直上に灰白色火山灰が堆積している。また、南面、西面壁際に溝状の遺構が確認された。時期は出土遺物から10世紀前半と推定される。

〈竪穴状遺構〉

ⅣA区で1基検出された。竪穴状遺構は規模が300cm×280cm程で床面全体にわたって炭化物が広がっていた。壁面は一部を除き、ほとんど残存しない。カマドは東壁のやや北よりに設けられているが、全て壊れており、燃烧部とカマド構成礫とみられる不整形の礫がわずかに残っている。煙道・煙出しなどは確認できなかった。遺物は埋土中から土師器および須恵器の破片が出土している。

〈土 坑〉

ⅡD区で検出された。形状はほぼ円形で開口部径は187cm×175cm、深さは38cm、底部は平坦で断面は緩く立ち上がり浅鉢状を呈する。

〈焼土遺構〉

ⅣA区で1基検出された。検出面は弥生時代後期の土器を包含する層である。現地性の焼土で18cm×32cmの範囲にある。層厚は6cm程である。

ⅢA区で1基検出された。60cm×68cmの範囲で厚さ6～8cmで堆積している。検出面は平安時代の遺物が出土する層であることからこの時期の遺構と思われる。

〈溝状遺構〉

ⅠD区～ⅡE区にかけて1条検出された。幅が30cm程で長さは約8m、深さは最大で5cmである。時期は不明である。

3. 出土遺物

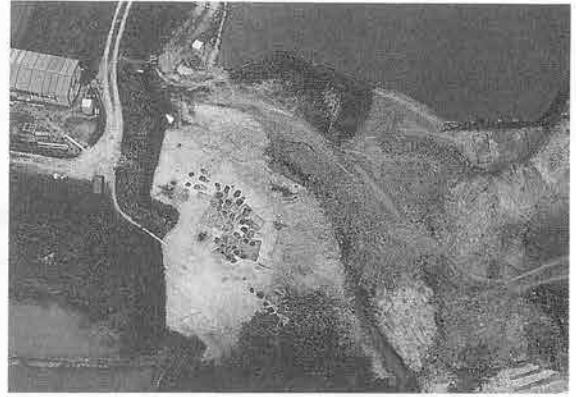
遺物は近世の墓墳から多数の古銭（主に寛永通宝、他に仙台通宝130枚、開元通宝1枚、文久永宝1枚、半銭銅貨7枚、一銭銅貨2枚）、磁器、漆器、数珠、煙草入れ、土人形、煙管、鏡、人骨（頭蓋骨の一部や歯など）が出土し、竪穴住居跡からは平安時代の土師器（甕など）、北側斜面部から土師器、須恵器、土錘、弥生土器の破片が出土している。出土量は大コンテナで2箱程度である。また同じく北側斜面部から石鏃、石錐、石匙などの石器が少量出土している。

4. まとめ

今回の調査で瀬原 I 遺跡は南側の段丘面は平安時代には生活の場所として、また18世紀後半以降には墓地として利用されていたことが明らかになった。北側斜面部から検出された竪穴状遺構周辺からは昨年度の調査で大量に出土した土錘が4点ほど出土しており、関連性があるものと思われる。また弥生土器は昨年度出土した弥生時代後半の口縁部に交互刺突文、連続刺突文、連続山形文などをもつ、いわゆる天王山式期前後の時代であり、昨年度同様焼土遺構も検出されていることから弥生時代の人々がこの付近を生活の場所として利用していた可能性が考えられる。



遺跡全景



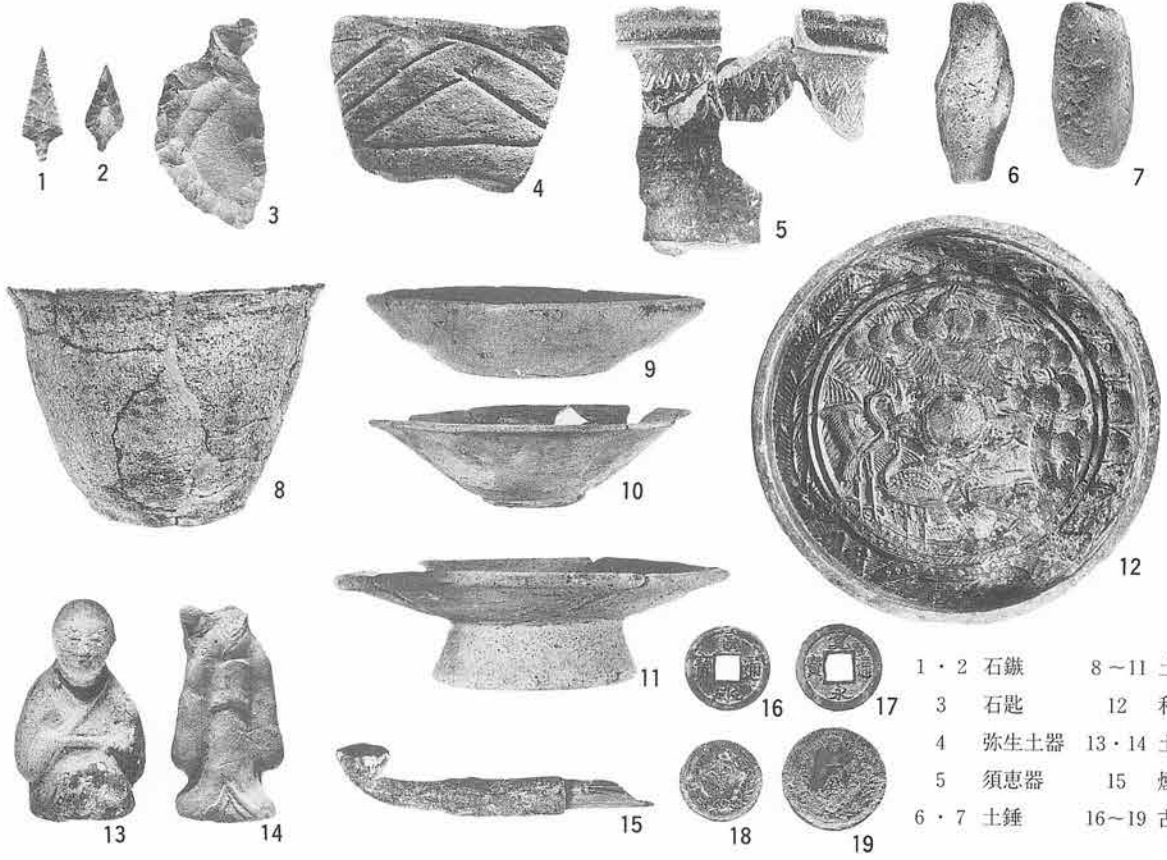
調査区南側



基壇

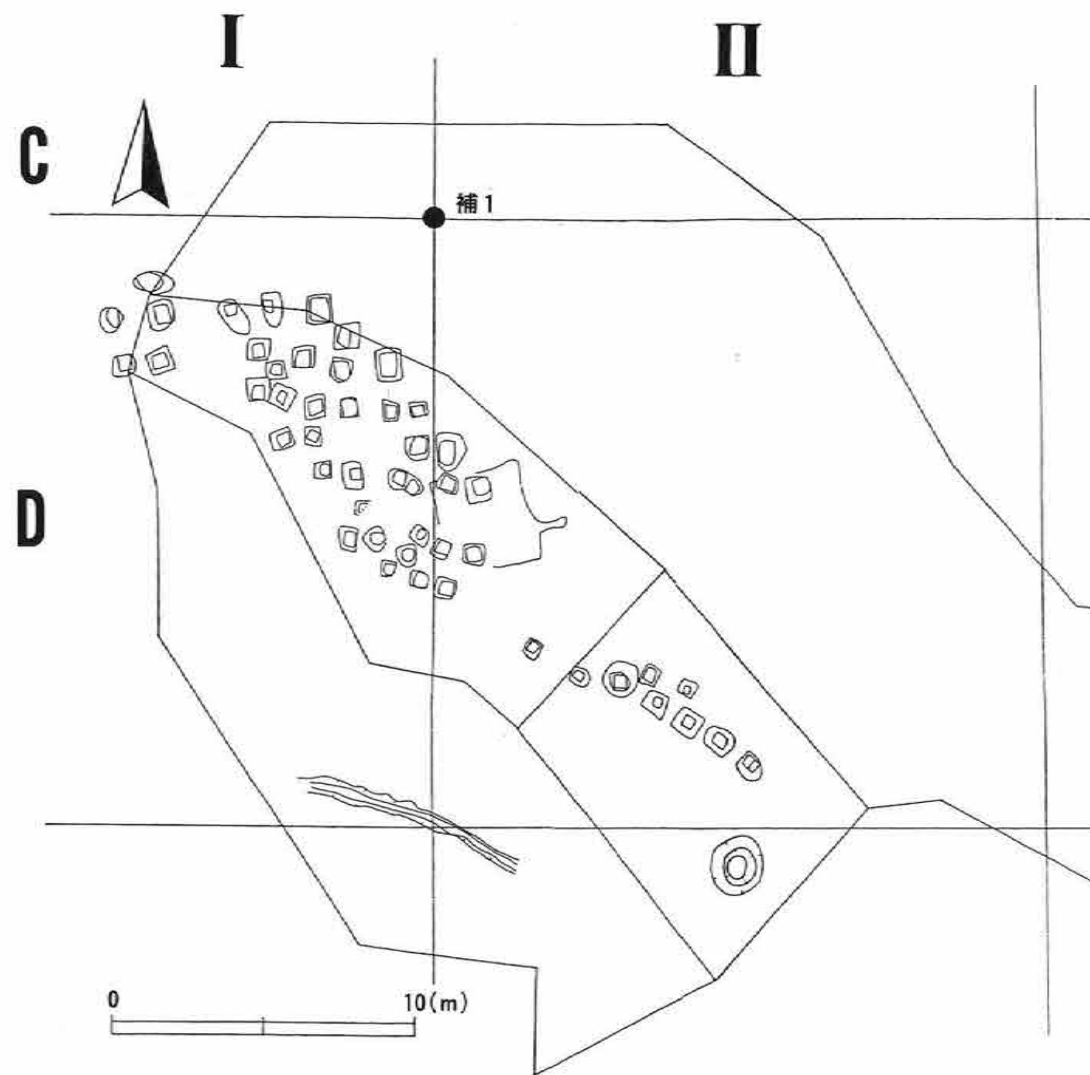
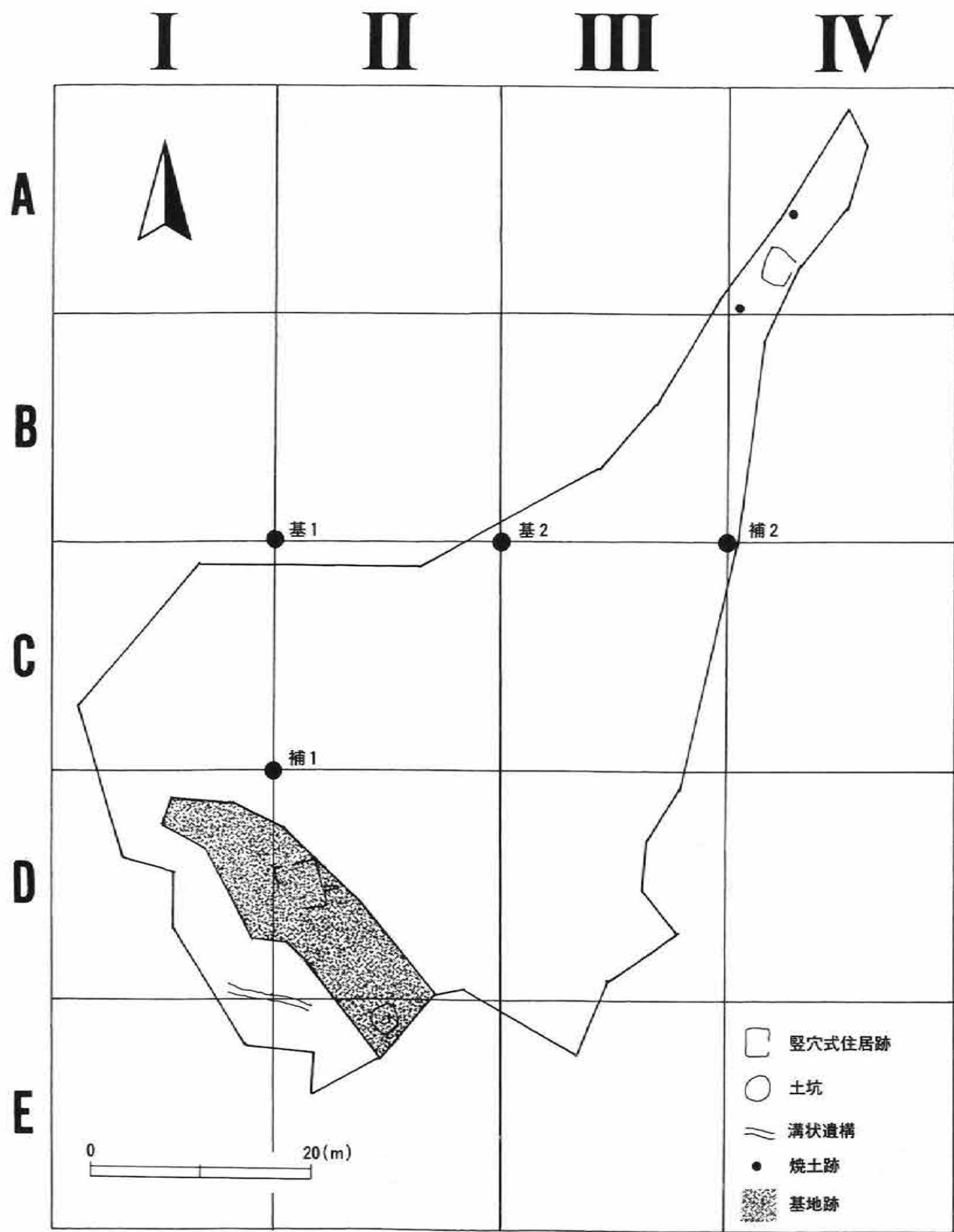


平安時代の竪穴住居跡



- | | |
|--------|-----------|
| 1・2 石鏃 | 8～11 土師器 |
| 3 石匙 | 12 和鏡 |
| 4 弥生土器 | 13・14 土人形 |
| 5 須恵器 | 15 煙管 |
| 6・7 土錘 | 16～19 古銭 |

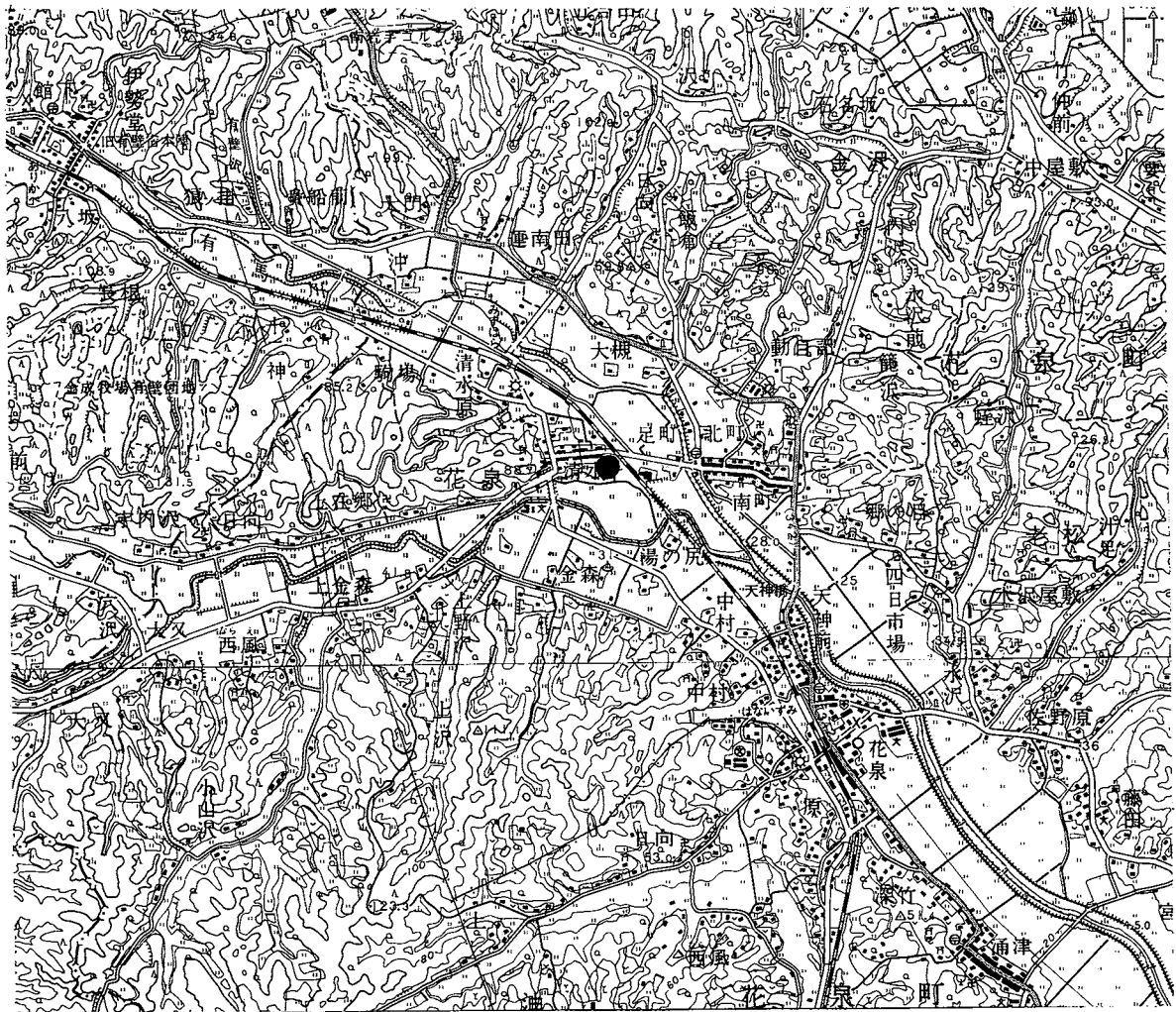
瀬原 I 遺跡検出遺構・出土遺物



瀬原 I 遺跡遺構配置図

(6) ^{しもだてどうや}下館銅屋遺跡

所在地 西磐井郡花泉町字下館銅屋77-2ほか
委託者 岩手県土木部一関土木事務所
発掘調査期間 平成7年8月1日~12月8日
調査対象面積 2,796m²
発掘調査面積 1,787m²
遺跡番号・略号 OE27-2111・SD-95
調査担当者 松本建速・宮本節子・佐々木清文・高橋義介・木戸口俊子
羽柴直人・高木 晃・阿部勝則・溜浩二郎・吉田 理
協力機関 花泉町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 一関・若柳

1. 遺跡の立地

遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線清水原駅から南南東約750mに位置し、有馬川と金流川に挟まれた河岸段丘に立地する。遺跡の標高は37～39mで、金流川との比高差は約15mである。遺跡の多くは現在畑地、および宅地である。調査開始前の調査区は畑地であったが、調査区南に隣接して近世から明治時代にかけての墓がのこされた部分がある。調査区の北東側と南側は沖積低地で、水田として利用されており、西側は小高い丘陵で清水城跡とされている。金流川を挟んで遺跡の約750m南の低地に、ハナイズミモリウシが出土したことで知られる、後期旧石器時代の花泉遺跡がある。

2. 調査の概要

今年度の調査予定面積は2,796㎡であったが、検出された遺構が多量であったため、完全に終了した面積は1,787㎡である。残りの1,009㎡は来年度に残されたが、いくつかの遺構については調査は終了している。完全に終了した調査区から検出された遺構は以下である。縄文時代中期住居跡8棟、縄文時代中期焼土8基、縄文時代中期埋設土器14基、縄文時代中期土坑90基（平安時代のものもいくらか含まれる）、縄文時代中期陥し穴2基、平安時代住居跡5棟、主に中世末期頃から近世以降のものと思われる柱穴260基、中世末期から近世以降と思われる掘立柱建物跡4棟以上（4棟以上の重なりが確認されるが、正確な棟数はいまのところ不明）、近世頃のものと思われる土坑4基が検出された。他に、後期旧石器時代の石器、フレイクが縄文時代の遺構や平安時代の遺構精査中に数点採集されている。したがって、それらの遺構が造られた基盤土（当遺跡の場合黄褐色の火山灰である。）は後期旧石器時代に形成されたことがわかる。

〈縄文時代中期の住居跡〉

8棟検出された。そのうち7棟は台地先端部に近い部分に重なって存在した。東側に4棟が重なり、その西側に3棟が重なっている。炉の存在状況から、東側の4棟の方が西側のものよりも古いことがわかる。住居内に埋設炉として用いられた土器や、住居廃絶後に廃棄されている土器はいずれも大木10式の範疇に入れられるものである。ただし、西側の住居を覆う埋土は大きくは2層に分けることができ、その下部から出土する土器と上部から出土する土器には時期差が読み取れそうである。上部層からは門前式土器の破片が数点出土している。西側の最も古い住居に生活した人々が使用した土器は不明である。

〈縄文時代中期の埋設土器〉

14基検出された。大木9～10式土器である。

〈縄文時代中期の土坑〉

現在整理中で正確な数は把握されていないが、約90基の土坑が検出された。それらの多くは出土遺物や出土状況からは用途について確実には把握されなかった。ただし、ほとんどのものが人為的に埋められたものであったので、何かを埋めるための土坑と予想できる。開口部は不整形、楕円形のもものがほとんどである。直径は50～100cmのものが多い。時期は埋土中に含まれる土器片から大木8b式から10式におさまると推定できる。1基だけ底面に欠損していない壺が置かれていた土坑があった。大木10式の壺である（写真参照）。これは土坑底面南壁に寄って横たわっていた。土器の口付近には周囲の埋土と同じ性質の土が入ってきていたが、中央より下の部分には周囲の埋土とは異なる土が入っていた。土器の中に何かを入れて、土坑の底に置き、その後それを埋めたと推測できる。土器が壁際に寄って置かれていたことから、土坑中央には何か別のものを置いていたのではないかと推測した。ただし、肉眼による観察では周囲の埋土と中央部の土に違いを見つけることはできなかった。埋土は周囲の地山起源の火山灰を主体として、当時の表土と考えられる

褐色土が混在し、人為的に埋めたことが把握できる。

〈縄文時代中期陥し穴〉

2基検出された。いずれも調査区北東部の台地先端に近い、緩やかな下り斜面が始まるあたりから検出された。両者とも、中央に逆茂木が刺されていたと推測される穴があった。埋土は自然の周囲の土が堆積したものである。遺物はまったく含まれなかった。周囲に土器が散乱していなかった頃のものと考えられる。ただし、遺跡全体から出土した縄文時代土器は中期のものだけであるので、縄文時代中期のものとして推測できる。

〈平安時代住居跡〉

5棟検出された。いくらか壁が残っていたのが2棟、貼り床面と床面よりも下にあった土坑だけが残っていたものが3棟である。いくらか壁が残っていた2棟のうち1棟にはカマド状の遺構があったが、調査の結果それはカマドではないことがわかった。カマドの袖ふうに見えたものは焼けた粘土ブロックや焼けた礫を置き土の上に袖状に置いたものであった。火床面は検出されなかった。それは、カマドが壊された後にカマドのあった場所に、壊されたカマドの一部を用いてカマド的なものを儀礼的に造ったものではないかと想像した。現在、そのような類例がないか探しているところである。

4棟の住居跡内に土坑が付随していた。そして、それらには、割れた土師器碗や坏、割れていない土師器碗や坏が残されていた。住居を去る時に置いていかれたものと思われる。土師器の形態から、10世紀前半から中頃の遺構であると推測できる。

〈中世末期から近世の可能性ある掘立柱建物〉

4棟以上検出された。台地先端の緩やかな斜面部に、互いに少し離れて2棟分ほどの柱穴の集中部がある。それぞれの柱穴集中区に2棟以上が存在したようである。斜面上部にあたる西側の建物の方が規模も、柱穴も大きい。正確な時期は不明だが、周辺の表土から中世末期や近世に属する陶器片がいくらか出土している。

〈出土遺物〉

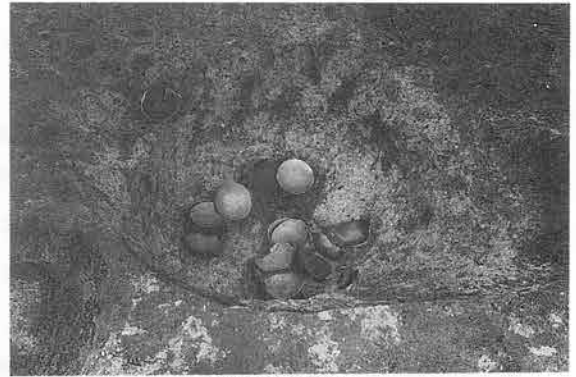
以下の数字には、来年度に残した1,009㎡の調査区出土の遺物も含まれる。旧石器ナイフ1点、エンドスクレイパー1点、フレイク数点、縄文時代中期・平安時代・中世末期・近世の土器類が合わせて大コンテナ112箱、縄文時代中期の石器類が、石鏃1504点（大半は黒曜石製である）、石錐54点、石匙10点、石筥1点、磨製石斧、石棒など、平安時代の住居跡に伴う鉄製品が4点、近世鉄製品が1点出土した。縄文時代の石器には他にも多種類のものが複数出土しているが、整理が進んでいないので現在はこれしか述べられない。平安時代の住居には長胴甕が少ない。住居を去る人々があまりそれらを残していかなかったこと、住居の残りが非常に悪いので床面より上にあった遺物はどこかに移動してしまったことなどが要因と考えられる。住居内の土坑には碗や坏だけが入っていた。また、1棟の平安時代住居跡から灰釉陶器皿片が出土している。

3. まとめ

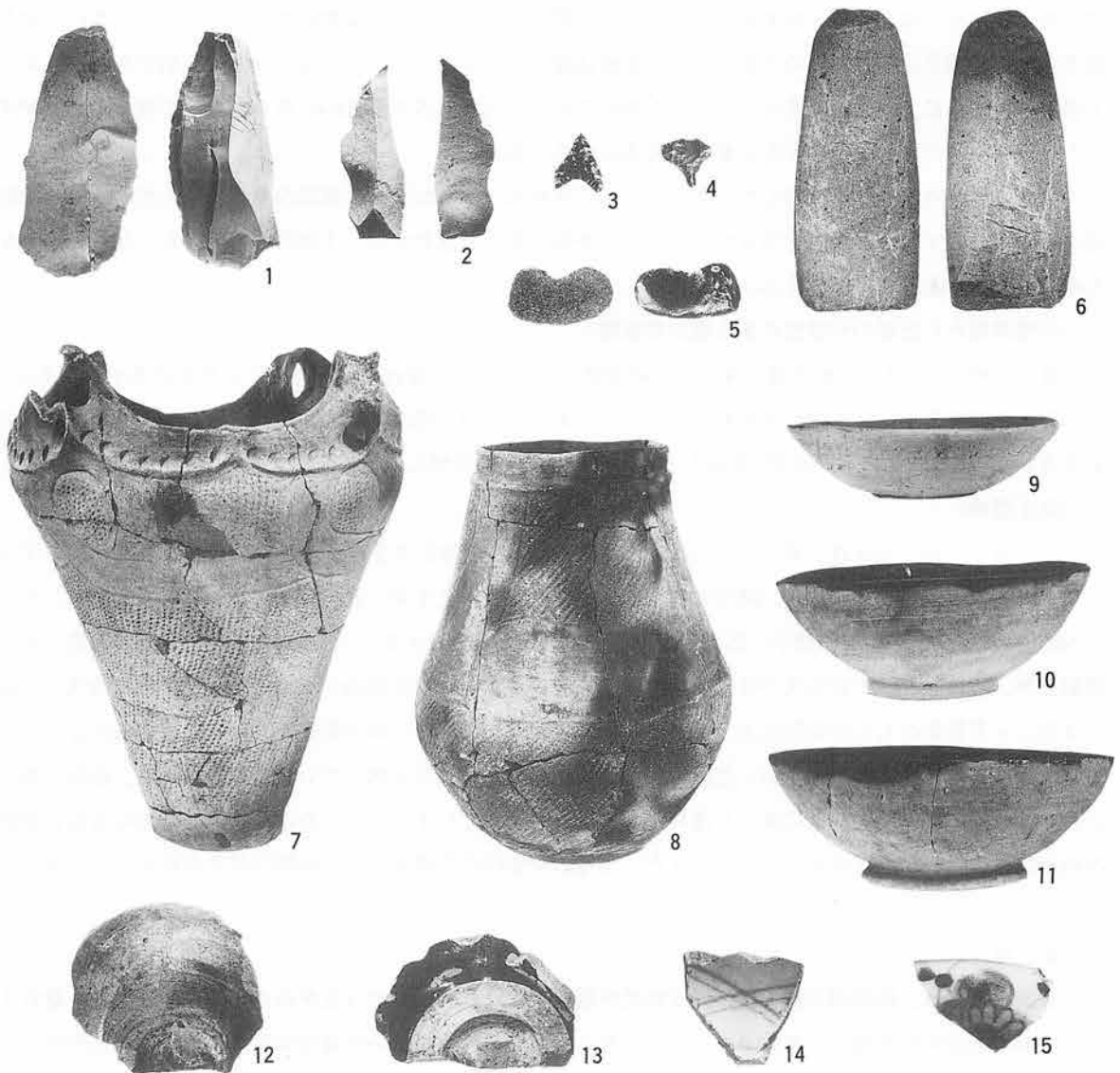
下館銅屋遺跡は、後期旧石器時代・縄文時代中期・平安時代・中世から近世のある時期、そして、最近までの人々の生活の跡を残した遺跡であった。ただし、旧石器時代については今年度は遺物を採集しただけである。花泉遺跡との関係については不明である。また、縄文時代の石鏃のような小さな剝片石器の多くが黒曜石製なのは、黒曜石産地が遺跡付近にあること（佐々木繁喜氏のご教示を得た）と関連しそうであり、黒曜石産地同定の結果が楽しみである。黒曜石を通じて他の遺跡との関連が読み取れる可能性がある。平安時代の遺物、遺構については、当地域の歴史的背景を考えると宮城県北部との関連を調べる必要がある。



縄文土器検出状況

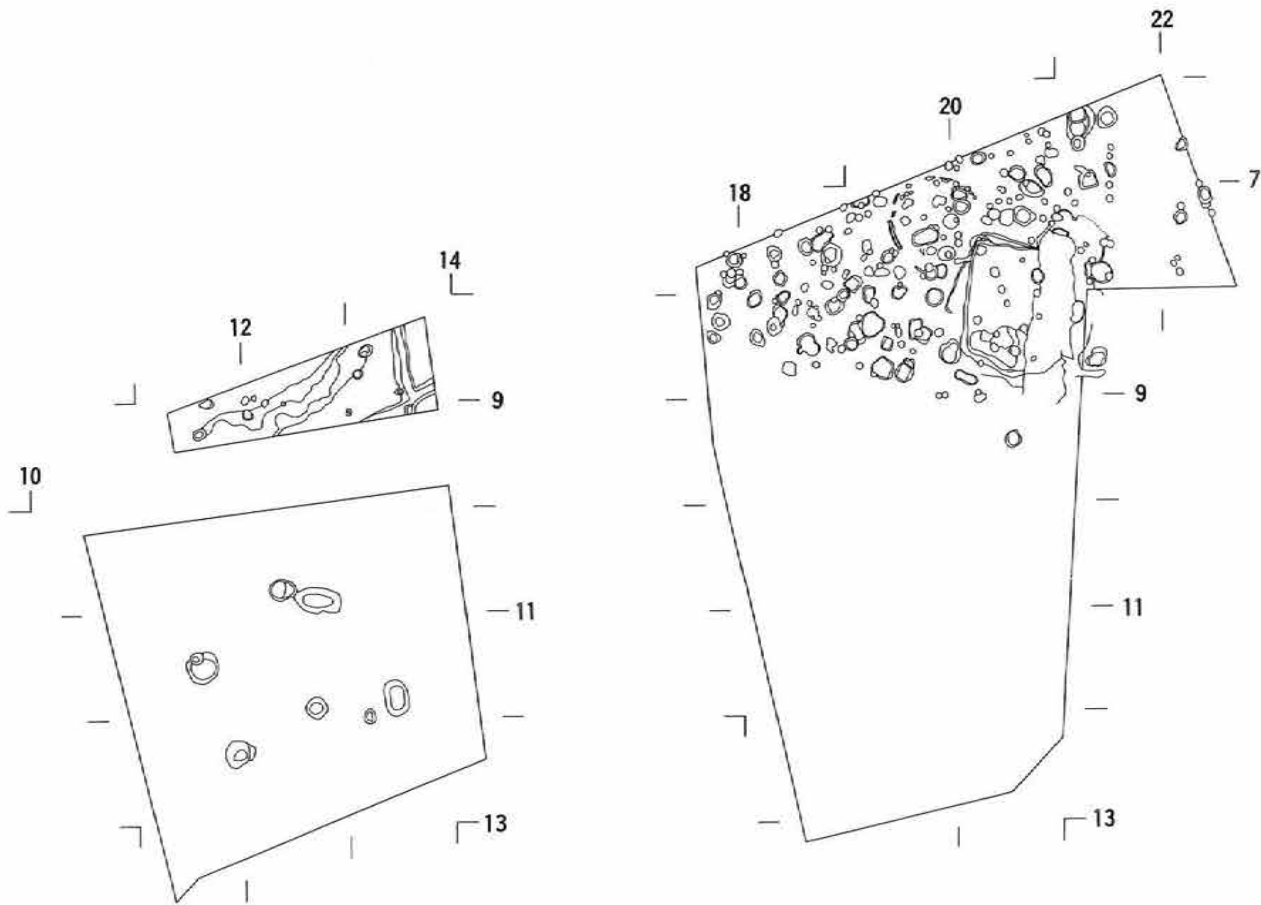
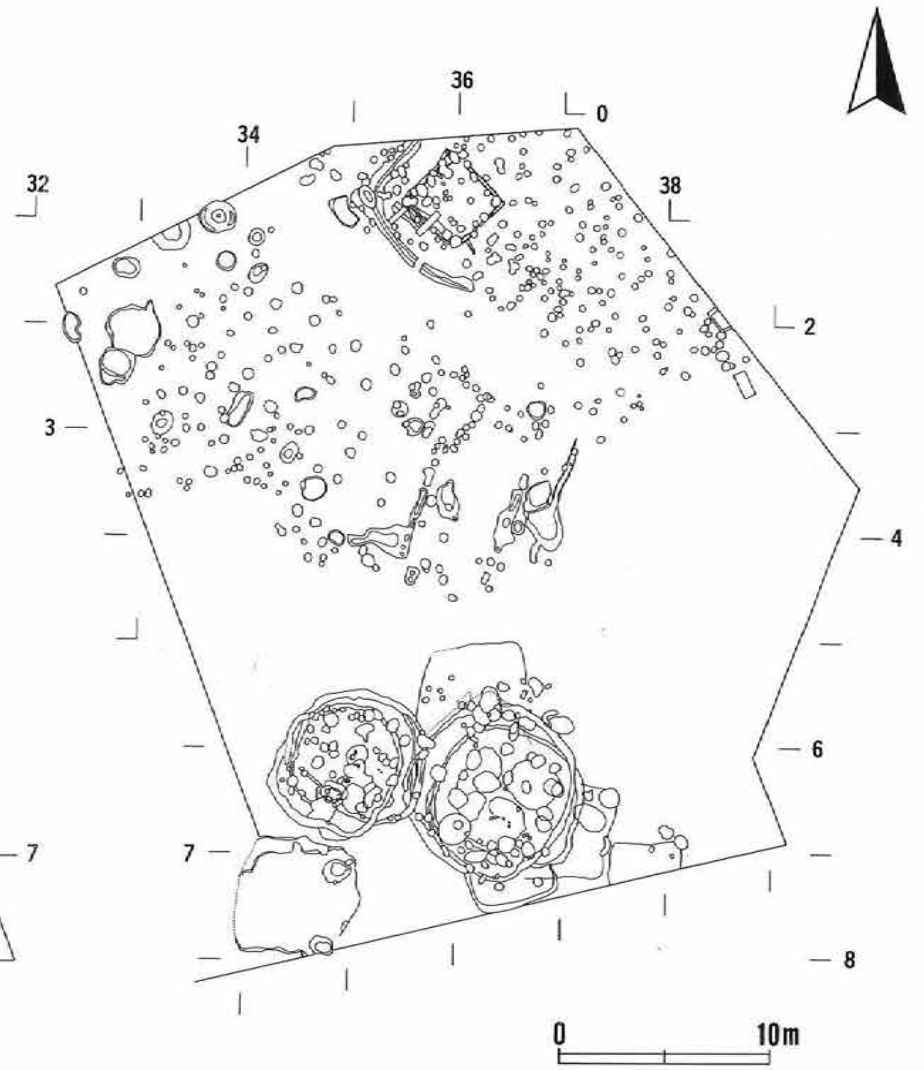
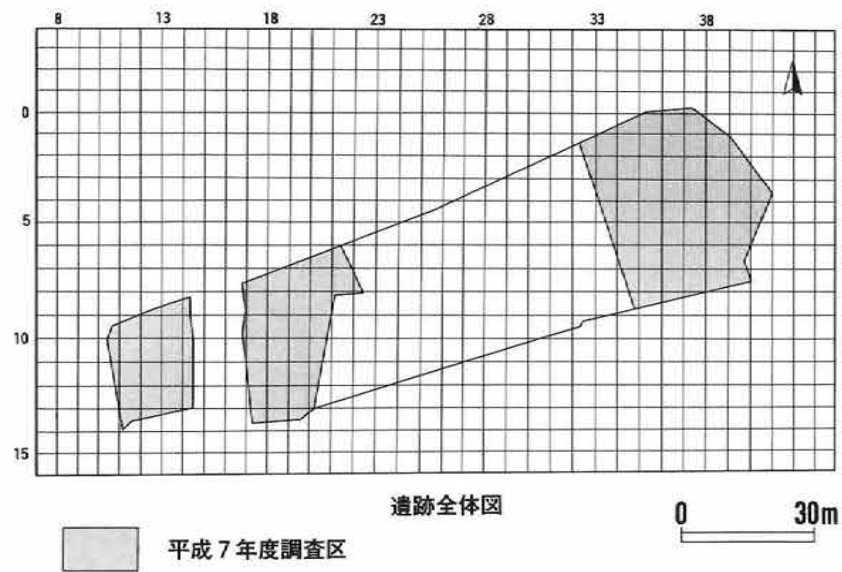


土師器検出状況



- | | | |
|-------------|---------|-------------|
| 1 エンドスクレイパー | 4 石錐 | 7・8 縄文土器 |
| 2 ナイフ | 5 黒曜石石核 | 9・10・11 土師器 |
| 3 石鏃 | 6 磨製石斧 | 12 唐津碗 |
| | | 13 中国産天目茶碗 |
| | | 14・15 肥前磁器皿 |

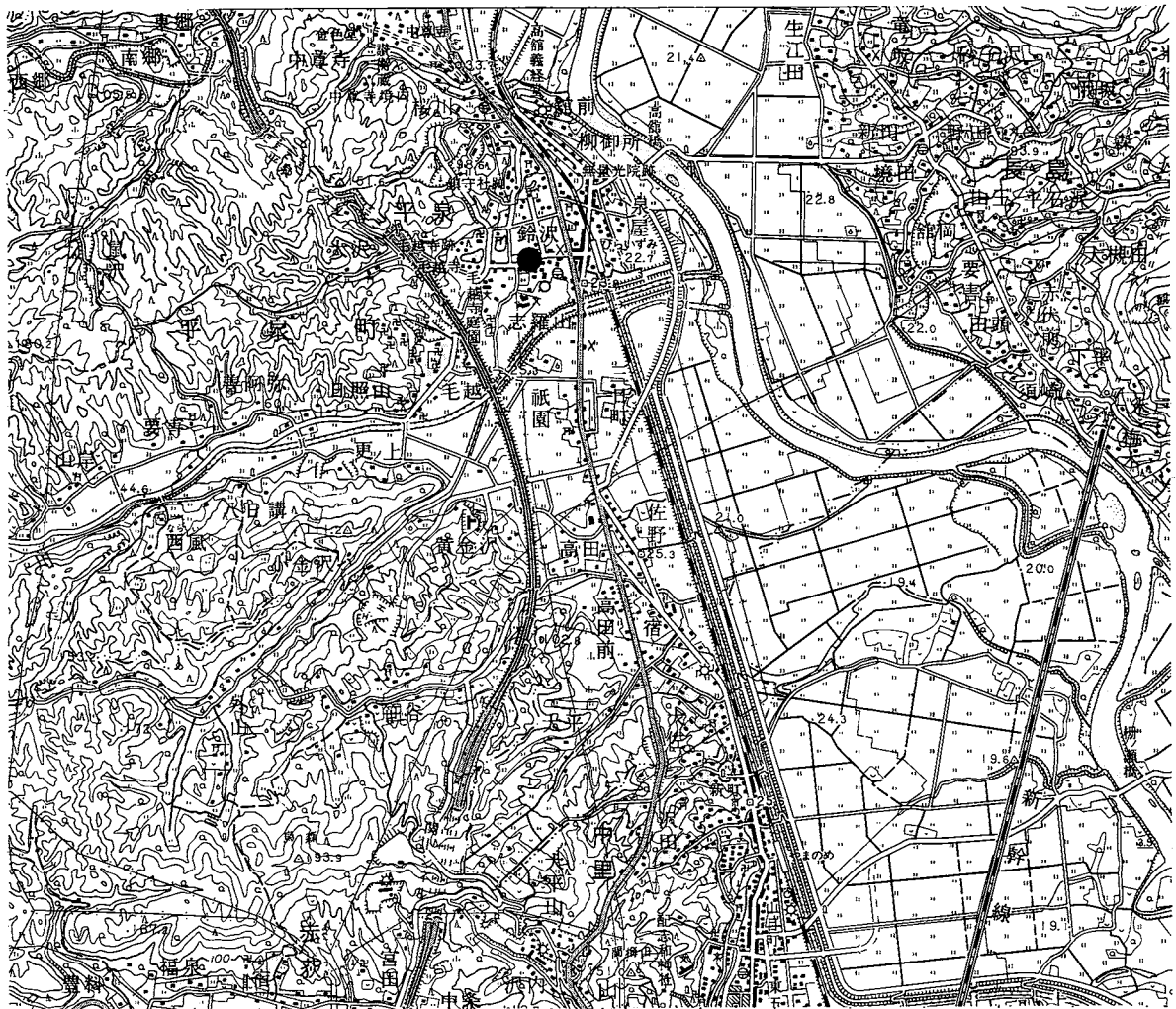
下館銅屋遺跡検出遺構・出土遺物



下館銅屋遺跡遺構配置図

しらやま
(7) 志羅山遺跡47次調査

所在地	西磐井郡平泉町平泉字志羅山78-1ほか
委託者	岩手県土木部一関土木事務所
発掘調査期間	平成7年8月1日～11月30日
調査対象面積	1,697㎡
発掘調査面積	981㎡
遺跡番号・略号	NE76-1088・SY47
調査担当者	高橋佐知子・高橋英樹・大場慎也
協力機関	平泉町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 一関

1. 遺跡の立地

志羅山遺跡は、平泉町平泉字志羅山に位置し、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅の西側に広がっている。遺跡は平泉駅東側から観自在王院に至る河岸段丘上に立地している。この段丘は、標高24～32mで、北西から南東方向に緩やかに傾斜している。

調査区域は遺跡を東西に貫く主要地方道平泉巖美線の両側で、幅約3m長さ約258mの区域である。調査開始前の現況は宅地、水田である。

2. 調査の概要

調査区が東西に長く、1軒の宅地の間口ごとに調査を進める必要があったことから、1軒ごとに用地番号をつけた。今回調査したのは、道路の南側が10区から27区、北側が46区である。

検出された遺構は、掘立柱建物跡9棟、井戸跡1基、便所跡2基、溝状遺構47状、塀跡3条、柱穴列1条、土坑15基、整地跡2か所、柱穴約200基、性格不明の遺構が2基である。このうち、12世紀に属すると考えられる遺構は、掘立柱建物跡4棟、便所跡2基、溝状遺構43条、塀跡3条、柱穴列1条、土坑12基、整地跡2か所である。

〈掘立柱建物跡〉

13区と14区にまたがって検出された1号建物跡は、四面に庇を持つ東西棟である。母屋の部分が2間×5間の建物である。南側に隣接する区域を平成4年に平泉町教育委員会が調査しており、その成果と照合した結果、今回の調査で建物規模が明らかになった。柱間寸法は、母屋の部分が2.2～2.3m、庇部分が1.8～1.9m、桁行き14.8m、梁行き8.4mである。梁行きの軸方向はN-4°30'-Eである。規模等から、この付近のごく主要な建物であったことが推測される。この建物のある13区からは、遺構外であるが中国産の白磁が数点出土している。

14区では2棟の建物跡の一部が検出された。1号建物跡は東西棟で、南北1間、東西2間分が検出されている。梁行きの柱間寸法は2.0m、桁行きが2.8～4.2mである。梁行きの軸方向はN-5°-Wである。2号建物跡は15区にまたがる東西棟で南北2間、攪乱のため明らかではないが、東西はおそらく3間分検出されている。この建物はさらに西方向の調査区外に伸びる可能性もある。柱間寸法は2.6×2.5m、検出部分の梁行き7.8m、桁行き5.2mである。梁行きの軸方向は、N-3°-Wである。

15区の建物跡は、東西棟か南北棟か明らかでない。検出されたのは、南北2間、東西1間分で、柱間寸法が2.1mである。検出部分の軸方向は、N-12°-Eである。この方向は、切り合い関係にある15区2号溝と一致しており、時間的な前後関係はあるものの、共通の方向性をもって建てられたものである。

以上の建物跡が、12世紀に属すると考えられる。そのほかに東よりの10区、11区、46区からは、前述の建物跡とは明らかに異なる埋土の柱穴が多数検出され、掘立柱建物跡の一部が、5棟確認された。出土遺物はかわらけの細片のみなので、時期は確定できないが、これらの建物跡は、12世紀より新しい可能性が高い。

〈井戸跡〉

11区の北東隅で、遺構の約4分の1程度が検出された。平面形は楕円で、直径は2m以上あるものと思われる。深さは、1.65mであるが、調査区外に伸びる部分では、さらに深くなることが予想される。井戸枠などの施設は見られない。埋土から、かわらけの細片が出土している。

〈便所跡〉

19区で2基検出された。1号便所跡は、楕円形で口径1.06×1.25m、底径0.5×0.5m、深さ約1.1mの楕円形である。他の1基は一部が調査区外にのびているため、規模は明らかでないが、検出部分の口径が0.9

×(0.9)m、底径0.7×(0.7)m、深さ約1.18mの楕円形である。埋土はいずれも有機質分が多く、下層には粘性が強く締まりのない黒褐色土が堆積している。埋土には、瓜科の植物の種子、木の葉、植物の繊維が多く含まれ、特に2号便所跡からはちゅう木が多数出土している。そのほかの遺物は、1号便所跡の開口部付近から、流れ込みと思われる埴が、底部からやや浮いた状態で、てづくねのかわらけが出土した。これらの便所跡は12世紀の遺構と考えられる。

〈溝状遺構〉

12世紀と考えられる溝が多いが、それより新しいと考えられる溝も何条か検出されている。大別すると、ほぼ南北方向の溝、やや東に傾く溝、ほぼ東西方向の溝があり、ランダムな方向性を持つものは少ない。

19区と20区にまたがる東西方向の溝(19区7号溝、20区2号溝)は、幅が約1.8m、検出部分の長さ13m、深さが0.6mで、断面形は逆台形を呈している。埋土は砂と粘土の層が交互に堆積しており、水の流れた形跡がある。方向はほぼ東西である。埋土の下層から、約80個の大小のてづくねのかわらけが、投げ捨てられたような状態でまとまって出土している。この溝の時期は12世紀に属し、この付近の土地を大きく区画していたと考えられる。

この溝と同様の溝と考えられるのが、13区の南北方向の3号溝である。規模はほぼ同様であるが、東壁に段を持っている。遺物は、白磁片のほか、かわらけの細片が多く出土している。

12区西端に検出された1号溝は、幅約3m、深さ1.3mで、南北方向の大溝である。この溝は真北に伸び、46区にも延長が検出されている。東側の壁に段を持つ逆台形の断面を呈している。遺物はかわらけの細片が出土した。

〈塀跡〉

19区と20区にまたがって検出された塀跡(19区3号溝)は、19区7号溝の北壁に沿った東西方向の幅20～30cm、長さ約8m、深さ10～20cmを測る溝状の遺構である。東西共に調査区外に伸びている。幅2.5～10cmの板や丸材を底面に打ち込んでいるが、板の規格や一定の方向性はない。13区で検出された南北方向の塀跡も、ほぼ同様であり、溝と共に付近を区画している。そのほかに19区では、3号溝のさらに北側にも東西方向の塀跡が検出されている(19区1号溝)。4.1mの溝状の遺構の一部に板の打ち込み痕が認められた。

〈出土遺物〉

かわらけ、国産陶器(渥美、常滑)、中国産陶磁器、瓦などがある。かわらけは、19区と20区にまたがる溝から出土したものが半分以上を占める。全般にてづくねが圧倒的に多い。27区からは、攪乱のため性格不明の遺構から、椀型鍛冶滓と鍛造剥片が出土し、鍛冶工房の存在を示している。

3. まとめ

今回は志羅山遺跡を東西に長く調査したため、広い範囲の区画とその軸方向がより明らかになった。遺構が多く検出されたのは、10区から20区の間であるが、12区から20区までは、ほぼ東西方向、南北方向の遺構が多い。ところが15区から16区の東半にかけては、東に10～12°傾いた方向の区画が存在するようである。

また、11区、10区付近では、建物や溝の方向が再び東に傾く傾向が見られ、白山神社参道の傾きと近似する。この付近には12世紀より新しいと考えられる遺構も多いようではあるが、かねてから指摘のあったように、参道を軸とする町割が確かに存在する。

本遺跡は、来年度も継続して調査が予定されており、12世紀の平泉の町の面的な広がり、時代的な変遷がより明らかになることが期待される。



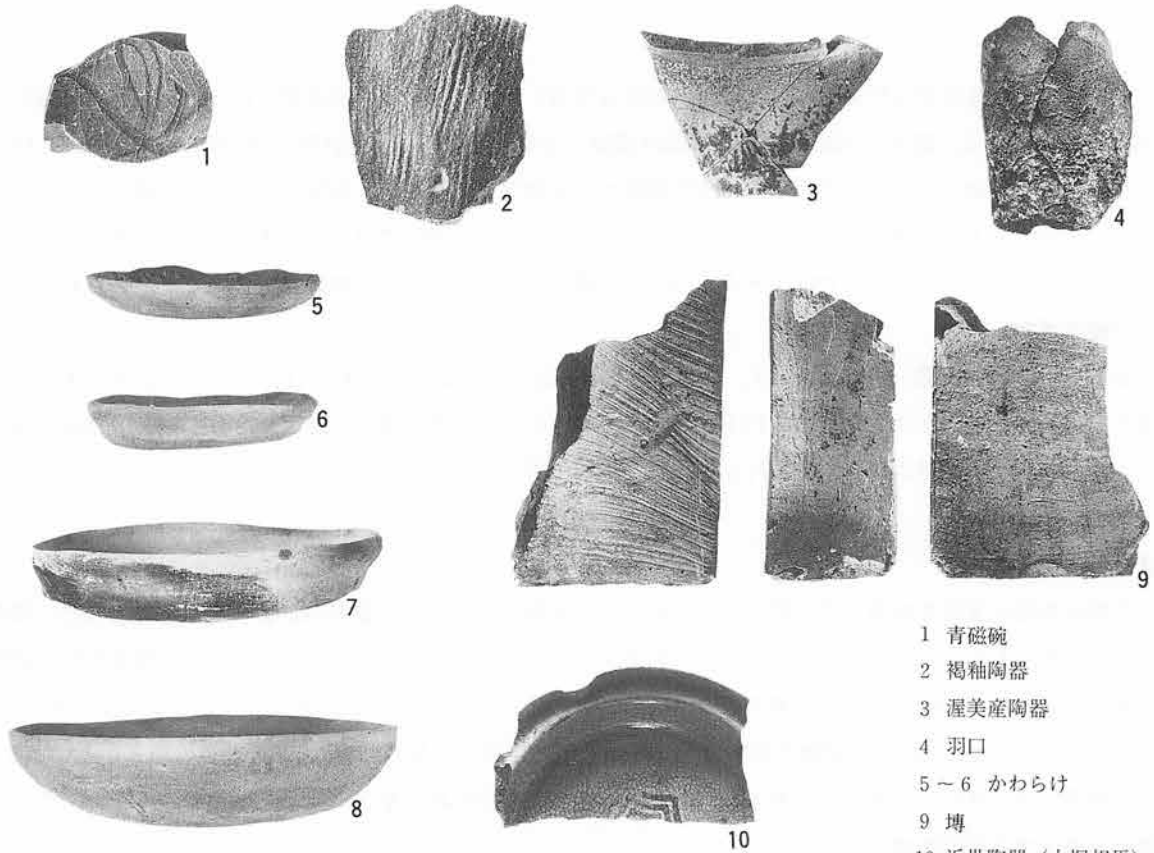
調査区遠景



19区1号便所跡

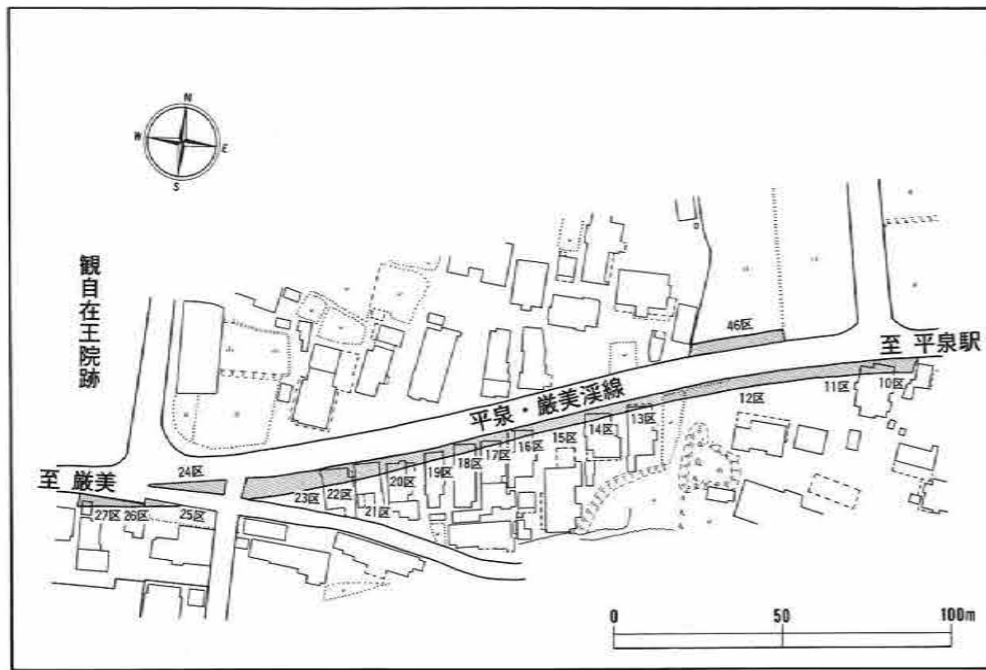


19区7号溝かわらけ出土状況

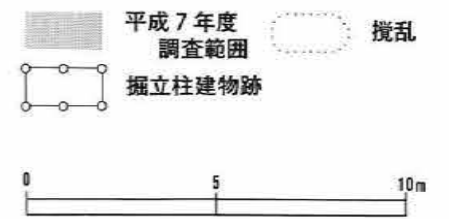
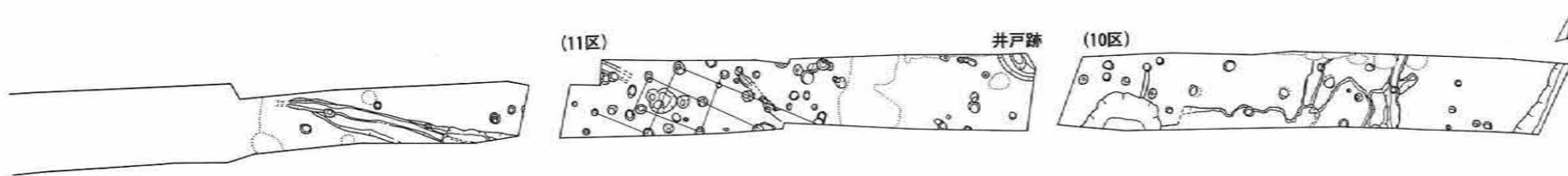
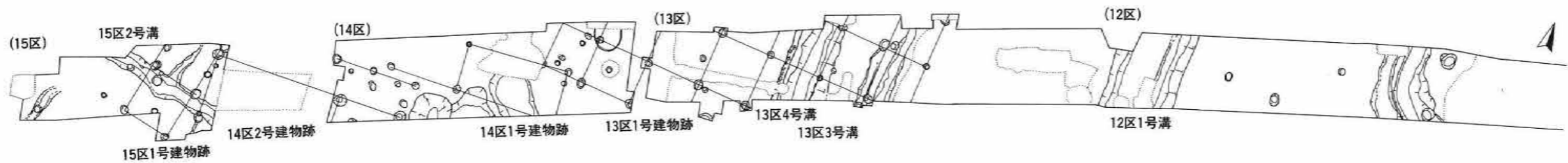
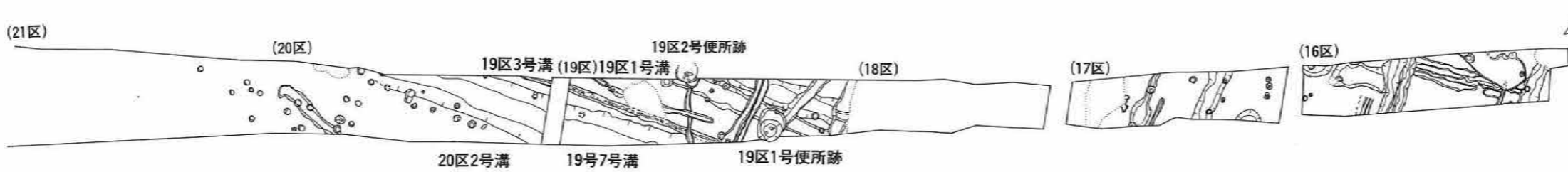
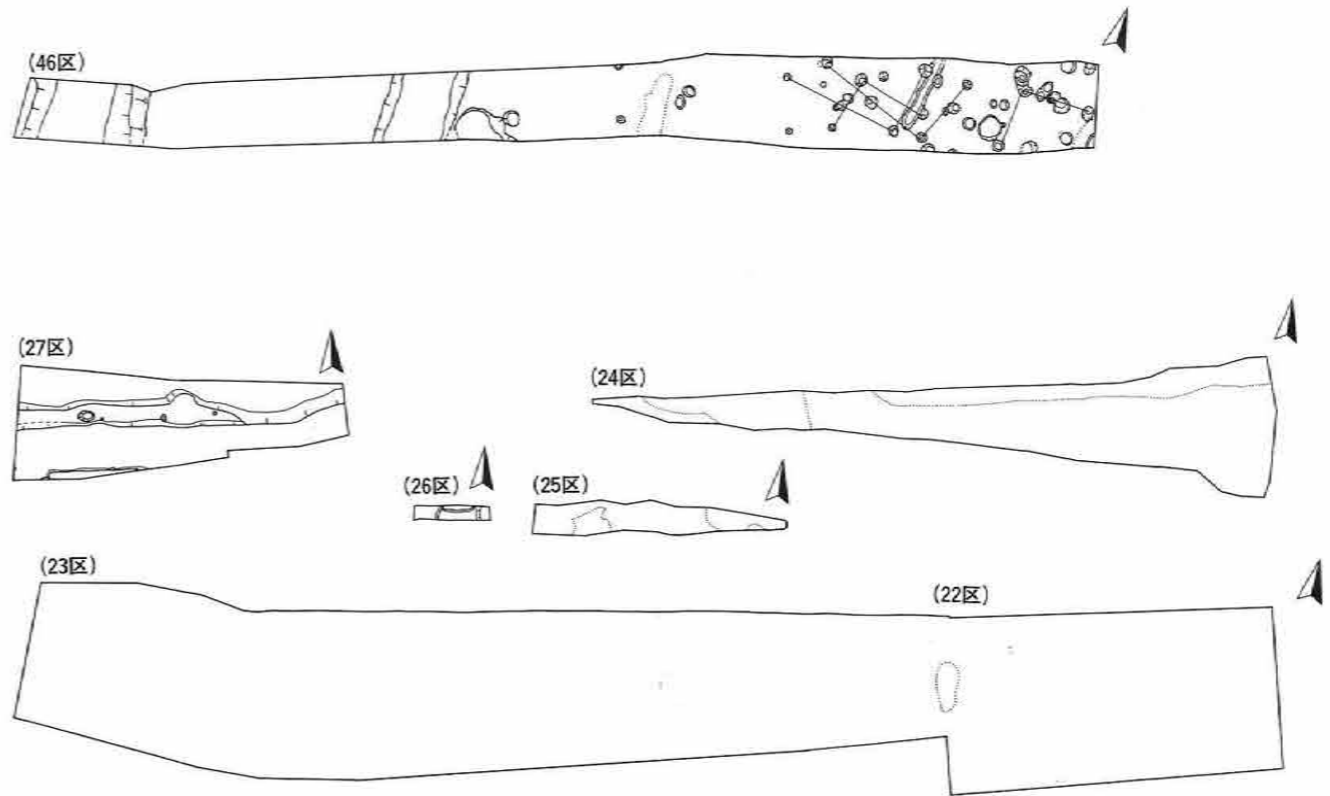


- 1 青磁碗
- 2 褐釉陶器
- 3 渥美産陶器
- 4 羽口
- 5～6 かわらけ
- 9 埴
- 10 近世陶器 (大堀相馬)

志羅山遺跡47次調査・検出遺構・出土遺物



志羅山遺跡47次調査区



志羅山47次遺構配置図

(8) いたくら 遺跡

所在地	東磐井郡大東町猿沢字板倉
委託者	岩手県土木部千厩土木事務所
発掘調査期間	平成7年4月12日～7月21日
調査対象面積	3,875m ²
発掘調査面積	3,875m ²
遺跡番号・略号	N F50-2064・I K-95
調査担当者	吉田 充・阿部 慎
協力機関	大東町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 陸中平原

1. 遺跡の立地

板倉遺跡は、東日本旅客鉄道大船渡線柴宿駅の北方約4.3km付近に位置する。猿沢地区商店街の南端にあり、遺跡の北側には診療所が、南側には江戸時代に築造されたとされる清水川（すずがわ）堰が隣接する。

北上山地の大鉢森山と蓬萊山との谷間に源流を発する猿沢川は、寒沢川との合流点から約3kmの間川幅を広げ、沖積平野が広がる。段丘がよく発達する奥羽山系東側の北上川沿岸に比べ、北上山地は安定していたためか、この間には二面の河岸段丘が発達する。本遺跡は二面にわたって立地する。標高は遺跡中央付近で約124mである。遺跡の現況は、畑地である。

2. 遺跡の概要

本調査区は昭和以前から畑地として利用されていた場所で、部分的に農業機械による削剝痕が地山に残るほど表土層が薄い場所がある。また、堤側は昭和初期以前に墓地として使われたようで、調査区の南縁で現代に埋葬されたと考えられる人骨が出土した。

基本土層は、Ⅰ. 黒褐色土層（耕作土層）、Ⅱ. 暗褐色土層（漸移層）、Ⅲ. 褐色土層（地山）、Ⅳ. レキ層と漸移する。遺構の検出はⅢ層上面で行った。遺物は、縄文時代早期、前期、後期と考えられる時期の土器片や石器などが出土し、調査区の東側では早期の土器片が、中央部分では前期・後期が、西側および低位面では後期の土器片が多く出土し、時期により生活場所が異なっていたとも考えられる。

検出された遺構は、竪穴住居跡が14棟、竪穴状遺構が1基、焼土遺構が5基、土坑が26基、柱穴状土坑が144基である。次に主な遺構および遺物について述べる。

〈竪穴住居跡〉

調査区の位置により、形態が異なっている。①高位面の中央部付近では楕円形～円形状で、中央付近に地床炉をもち、柱穴が不明瞭で壁ははっきり立ち上がらない。住居内には土坑を伴うものがある。4棟検出された。②高位面西端付近では円形状で壁が明瞭に立ち上がり、地床炉で壁柱穴が巡る。床面付近は地山の礫層である。①に比べ規模が大きく、少なくとも7棟が切り合っている。③低位面にあり、炉を伴わず、床には部分的に人為的に敷いたと考えられる礫が置かれ、壁際には偏平な礫が立てられている。わずかであるが、床面付近からは顔料と考えられるものが出土している。1棟のみの検出である。それぞれの規模は長軸が①3.0m～4.5m、②が5.0m～7.0m、③が3.2mである。壁高は①が約10cm、②が最大40cm、③は斜面上側が約30cmである。

遺物は縄文時代後期を中心とした土器片が出土している。

〈竪穴状遺構〉

高位面の前述した①竪穴住居跡分布域に位置する。検出面より約20cm下位に焼土を検出したが、長楕円形状を呈し、周囲の住居跡に比しやや異質に考えられたので、竪穴状遺構とした。縄文時代後期の土器片が埋土から出土し、同時期の遺構と考えられる。

〈土坑〉

土坑は形態により定形的、不定形的に分けられる。定形的土坑には、円形状、楕円形状（小判形）がある。小判形の土坑は低位面で2基検出され、底部は平坦である。円形状の土坑は両面で検出され、低位面の土坑の中には底面で小柱穴状の穴が伴うものがある。また、高位面の住居内で円形状の土坑を伴うものがあり、縄文時代後期中葉に属すると考えられる口縁部大形突起片が出土している。不定形的土坑は不整な楕円形状である。低位面に位置する土坑は長軸が4.8mあり、深さは約1.3mある。完形に近い土器（壺）が2個体出

土している。時期は縄文時代後期と考えられる。

低位面の土坑は、後述する柱穴状土坑も含めて礫を伴うものが多く、約20cmの礫が数十個混入していた土坑がある。

〈柱穴状土坑〉

高・低位面で検出された。高位面では134基検出され、開口部径の頻度分布では4パターンに分かれ、平均①45cm②36cm③29cm④24cmである。規則的な配列が想定され、①・②、③・④はおおの同一の配列に属する。また、低位面では径約60cmの柱穴状土坑が検出され、配列を想定できる。深さは約50cmである。高位面で検出された柱穴状土坑からは遺物が出土せず、時期は不明である。低位面で検出された柱穴状土坑からは、縄文時代に属するとみられる土器片が出土している。

なお、現在検出中の柱穴状土坑があり、今後の整理で増加する予定である。

〈焼土遺構〉

高位面で検出された。規模は24～46cmである。このうち2基は後述するその他遺構の検出時の埋土最上部で検出された。また、土坑の埋土上部で楕円形状に広がる焼土も検出した。これらは異地性の焼土と考えられ、付近から出土している。遺物から、縄文時代後期に属すると考えられる。

〈その他〉

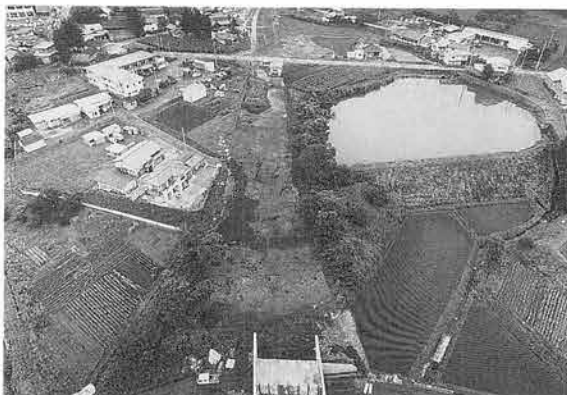
高位面の中央部北側で、およそ14m×6mの範囲で、最深度0.6mの凹地を検出した。埋土最上部では比較的多くの土器片や礫石器が出土したが、下位の埋土からはほとんど遺物が出土しなかった。底面はIV層(礫層)である。

〈出土遺物〉

縄文時代後期を中心とした遺物が出土している。土器片は埋土状態が悪く、脆く、文様がはっきりしないものが多くある。完形品はほとんど出土せず、復元できる土器は少ない。大波形の口縁や、大形の突起をもつ口縁が出土しており、新山権現社遺跡のⅢ群2類や3類に相当し、後期中葉の土器と考えられる。また、前述したように後期の遺物の分布範囲外で、貝殻文・沈線文・刺突文で幾何学的文様が施される土器片が、さらに後期の遺物分布範囲内で植物繊維を含み、器厚の厚い土器片が少量出土する。前者は早期の物見台式に相当し、後者は前期に相当する土器と考えられる。

3. まとめ

大東町内での遺跡の発掘調査は少なく、今回の調査は縄文時代後期の集落を考える上で貴重な資料を得ることができた。とくに低位面で検出された竪穴住居跡は、敷石状の住居跡で県下では珍しい遺構と言える。壁には付近で採取したと考えられる石灰岩の板状の礫を使用していた。炉跡はなく、床面付近に顔料とみられるものが出土したことは、特別な利用をされていたとも考えられる。



遺跡遠景



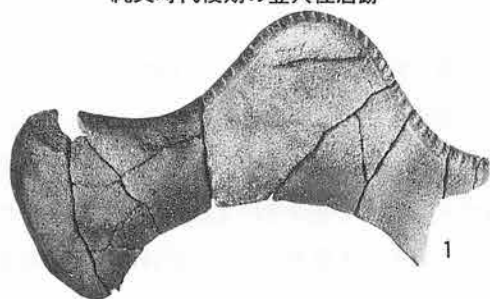
遺跡全景



縄文時代後期の竪穴住居跡



遺物出土状況



1



2



4



5

1～3 縄文土器（後期）

4～5 土製品

6～7 石鏃

8 石匙

9 磨製石斧



6



7

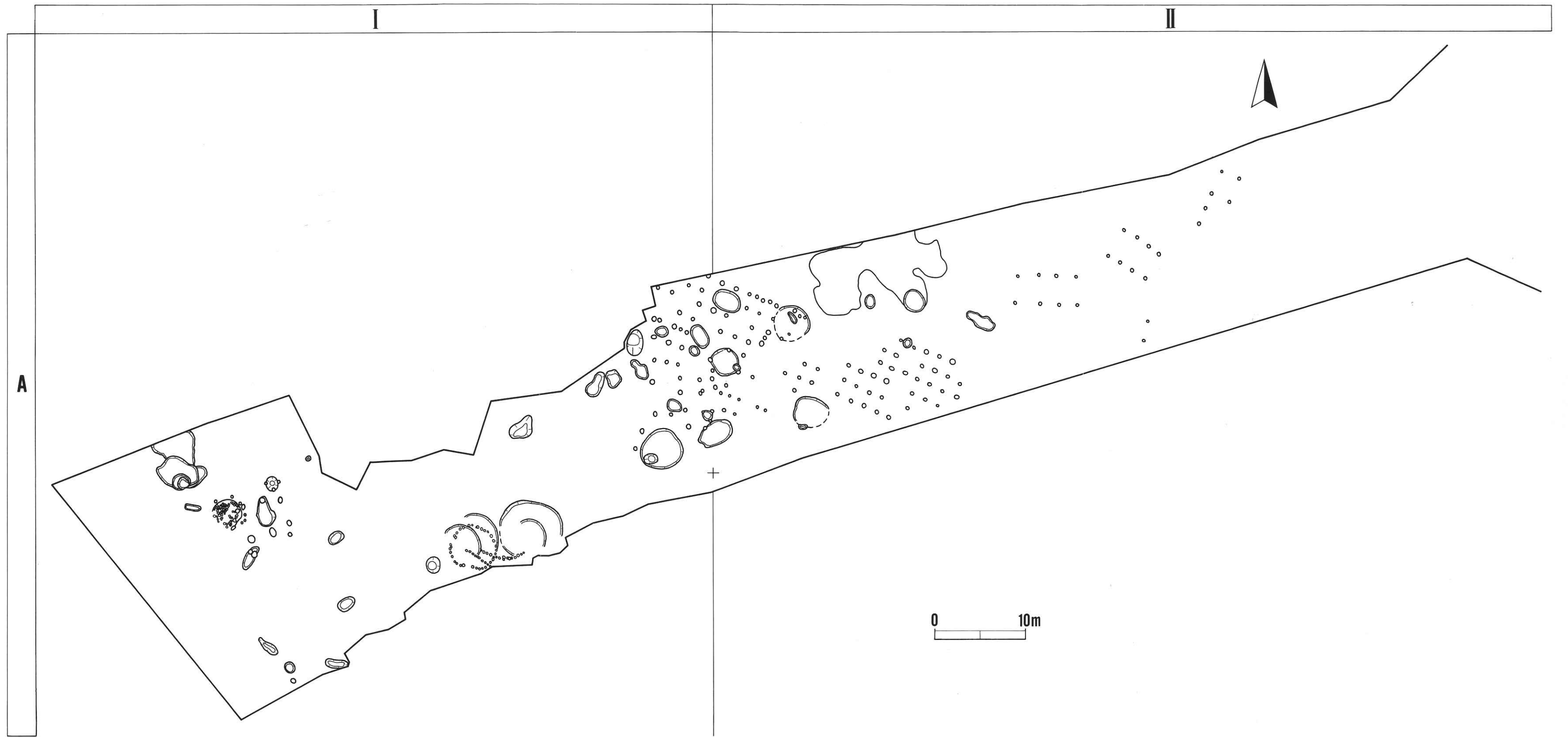


8



9

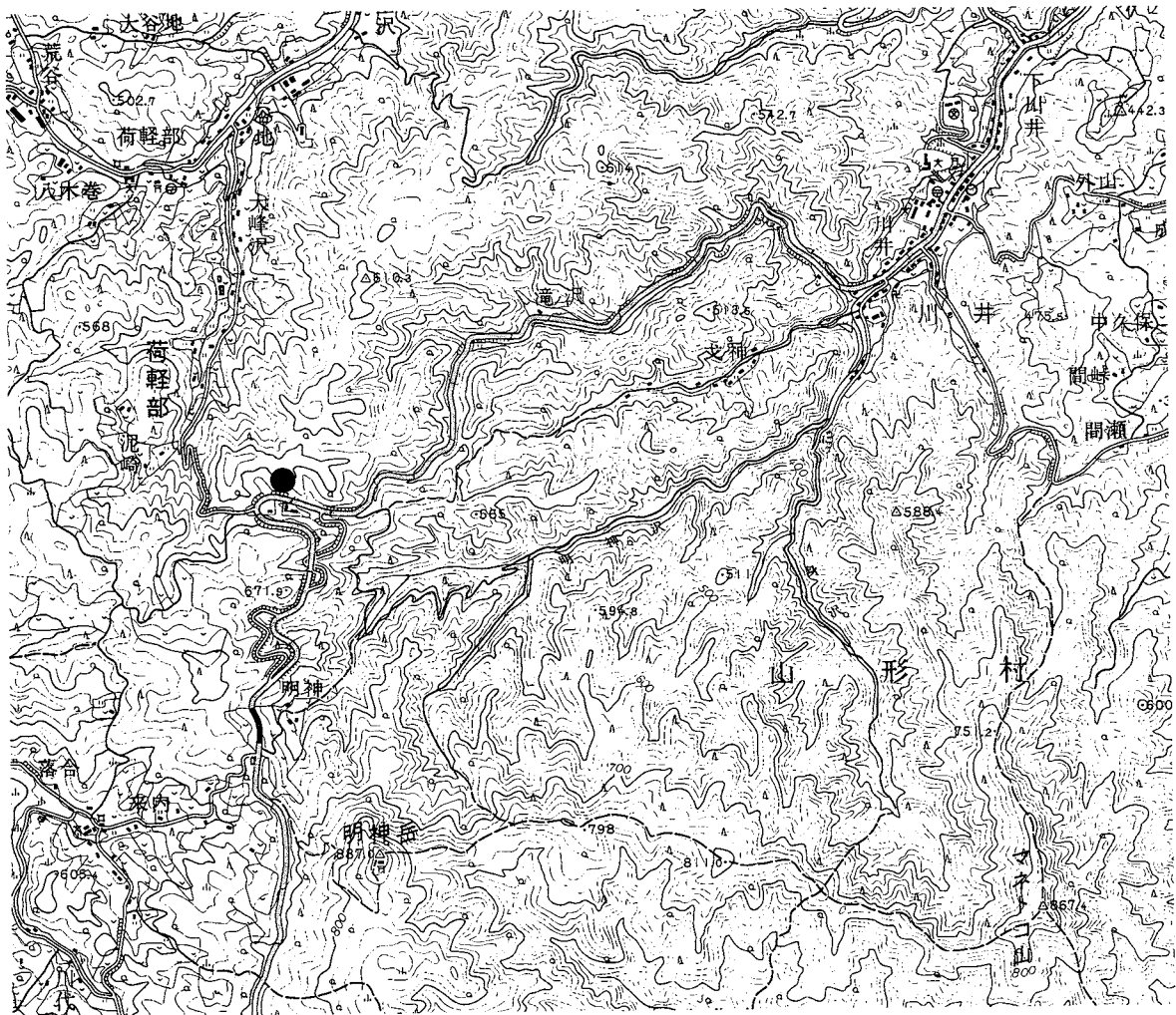
板倉遺跡検出遺構・出土遺物



板倉遺跡遺構配置図

(9) ^{あけ} ^{どおし} 明通Ⅱ遺跡

所在地 九戸郡山形村大字川井17字明神23-62
委託者 岩手県土木部久慈土木事務所
発掘調査期間 平成7年6月16日～7月21日
調査対象面積 1,690㎡
発掘調査面積 1,690㎡
遺跡番号・略号 J F 65-0244・A D Ⅱ 95
調査担当者 大道篤史・菊池人見
協力機関 山形村教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 陸中関

I. 調査に至る経過

明通Ⅱ遺跡は「一般国道281号線滝の沢地区県単道路改良事業」の施工に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

一般国道281号線滝の沢地区県単道路改良事業は、山形村と葛巻町境（平庭峠）より久慈市方面に0.7kmの箇所施工延長L=1,000kmの道路改良工事であり、平成6年度から着工し平成9年度に完成予定の事業である。

これに係る埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、岩手県土木部と岩手県教育委員会との間で協議が重ねられたが、協議の経過は以下のとおりである。

平成6年6月9日付「久土341号」により岩手県土木部久慈土木所長から岩手県教育委員会事務局文化課長あてに遺跡の分布調査について依頼をし、依頼を受けた岩手県教育委員会事務局文化課は平成6年6月23日に分布調査を実施したが、遺物の出土が確認されたことからさらに試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、遺物の出土と遺構の存在を確認した岩手県教育委員会事務局文化課は、平成7年1月22日付「教文第7-120号」により岩手県土木部に対して明通Ⅱ遺跡の発掘調査が必要である旨、回答し、取り扱いについて協議が重ねられた。

協議の結果、本事業に関する調査事業は、平成7年度の財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなり、平成7年6月12日に契約を締結し調査を実施した。

II. 遺跡の立地と環境

1. 地形と地質

明通Ⅱ遺跡は九戸郡山形村役場の南西約4.7kmの県道281号線沿いに位置している。遺跡の所在する山形村は北上山地北部のやや東よりに位置し、北は軽米町・大野村、東は久慈市、西は九戸村、南は葛巻町・岩泉町に接している。地形的には東に寒長根山（720.8m）、南西に平庭岳（1059.8m）・明神岳（887.0m）・遠別岳（1168.8m）、東南に遠島山（1262.7m）、マネドコ山（864.4m）などが連なっている。また西部から北部・東部にかけて北上山地の古い隆起準平原の現地形が残存する起伏量の小さな山地が広がっている。これらの山地の峡谷に源を発する小河川に沿って谷底平野が点在しているが、山間部のため細長く分布し、しかも連続性に乏しい。その中で明神岳山地の東側と西側の縁辺には周囲を小起伏山地に囲まれた谷底平野が比較的広く発達している。

調査区は小規模な谷底平野とそれに接する山地縁辺の緩斜面上にある。標高は560～580mの間に位置する。調査区の西側には沢が通っており、北側から南西側にかけては湿地帯が広がる。調査区の周辺の現況は山林となっており、調査区部分は木が切り倒され、荒れ地の状態であった。また南側は以前谷地であったところを造成した土地であり、上層は削平されその上から盛り土がなされていた。

周辺には平成3年度に埋蔵文化財センターで調査した明通遺跡がある。

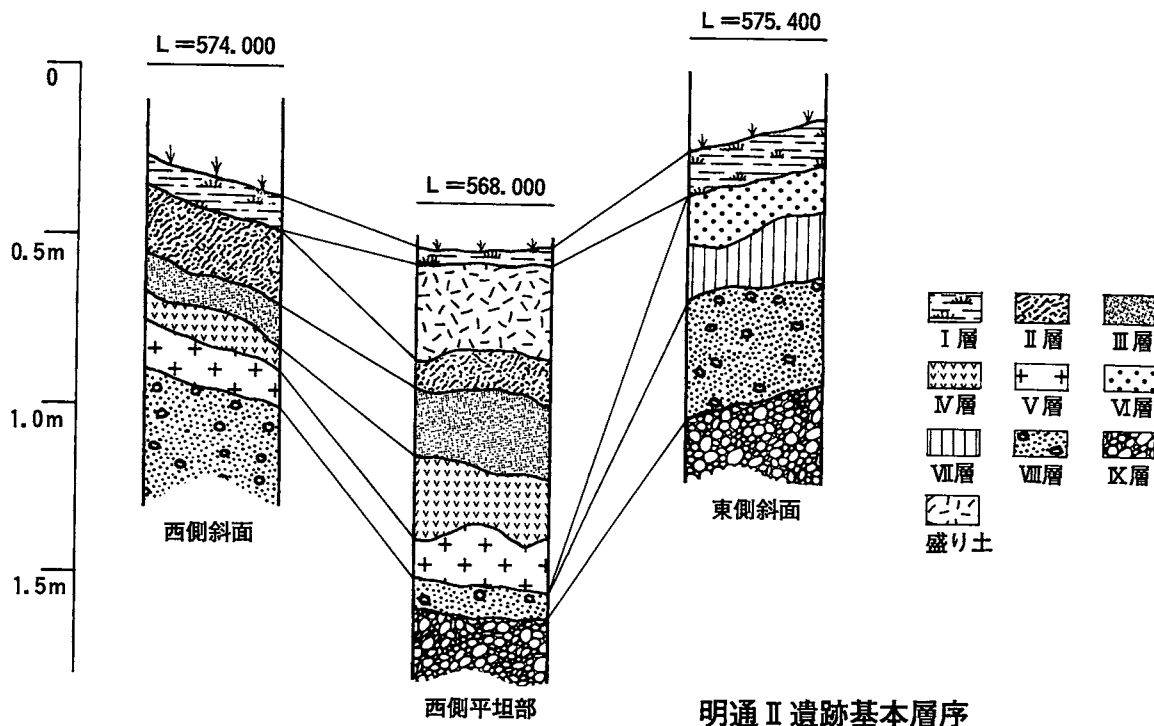
今回の調査は岩手県土木部久慈土木事務所による県道281号線の拡幅工事に伴って遺跡が消滅するため、記録保存を目的に行った緊急発掘調査である。

〈参考・引用文献〉

岩手県文化振興事業団（1992）：「明通遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第190集

岩手県（1972）：「北上山系開発地域土地分類基本調査 陸中関」

2. 基本層序



調査区の南側は大きく攪乱を受け、層序の乱れるところがあるが、概ねは以下のように大別される。

- 第Ⅰ層 黒色シルト (10YR1.7/1) 現表土で調査区全面を覆っている。木根、草根が多い。
- 第Ⅱ層 黒褐色シルト (10YR2/2) しまりはややあるが、粘性に欠ける。草根が入る。
- 第Ⅲ層 黒褐色シルト (10YR3/2) 第Ⅱ層に比べ、粘性に富む。炭化粒が1%程度含まれる。
- 第Ⅳ層 黄橙色パミス (10YR7/8) 堅くしまりがあるが、粘性は全くない。帯状に入り込み、斜面下部ほど堆積が厚くなる。調査区南側で最も厚く、層厚20cmを測る。中掬火山灰と思われる。
- 第Ⅴ層 黒褐色シルト (10YR2/2) しまりがあり、粘性に富む。
- 第Ⅵ層 褐色粘土質シルト (10YR4/4) 堅くしまり、粘性にも富む。
- 第Ⅶ層 黄灰色角レキ層 地山層

Ⅲ. 調査の概要

本年度の調査で検出された遺構は竪穴状遺構1基、土坑7基である。

〈R E01竪穴状遺構〉

ⅡA5jグリッドの南側にかけて検出された。Ⅲ～Ⅴ層を掘り込んで構築されており、暗褐色土の埋土が平面プランとして確認できた。規模は調査の進め方のまずさから全容についてはつかめなかったが、直径約2mのほぼ正円形を呈している。壁の高さは斜面上部側の高いところで50cmを越え、やや斜めに立ち上がる。床面は褐色粘土質でやや堅くしまっており、水平に広がる。床面積は1.7㎡を測る。床面及びその周辺からも柱穴痕は検出されなかった。埋土中に中掬火山灰のブロックが薄く広がるが、斜面上部からの流れ込みによる再堆積であると考えられる。遺構の時期、性格を把握できるような遺物は出土していないが、埋土上部より粗製の甕の底部破片が1片出土している。斜面上部からの流れ込みによるものと考えられ、遺構との

関連は考えにくい。遺構の斜面上部側のⅡA5jグリッドから1個体相当の土器片が集中して出土したが、遺構に伴うものかどうかは分からない。

〈土壙・ピット状遺構〉

7基検出され、RD01がV層上面より検出されたが、他はすべてIV層上面より検出されている。最も深いピットは深さが80cmを越す。しかしその他は総じて浅いもので掘立柱状遺構を示す配列は確認できなかった。遺構に伴う遺物も出土していない。

〈出土土器について〉

出土土器はきわめて少なく、小コンテナで1箱足らずの量である。出土地点も大きく3ヵ所のみに限られ、IA7hグリッドとⅡA5jグリッドからそれぞれ1個体相当の土器が、また調査区南側付近より土器片が少量出土している。石器は全く出土していない。

1の土器は体部にLR縄文を持つ粗製の甕である。IA7hグリッドのIV層上面より一括して出土した。明黄褐色の色調を有する。体部上半に向け膨らみを持ち、頸部に向け、やや内屈する。口縁は短く、ほぼ真つ直ぐに立ち上がる。整形段階においてゆがんだものと思われ、全体的に右に傾いた器形を呈する。施文は口縁直下・体部・底部直上と回転方法を異にしている。縄文はやや摩滅が目立つ。口縁から体部上半にかけ、煤が付着する。周辺からその他の遺物は全く出土していない。

2の深鉢状の土器はRE01竪穴状遺構の斜面上部側(ⅡA5j)のIV層上面より出土した。3の底部片は2と同一個体である。口縁直下よりRL斜縄文(縦回転)を強めに施文している。体部は外側に開くように直線的に立ち上がり、口縁部においてやや反り返る。土器の割れ口は一様に内面から外面にかけて鋭く切り下がる傾向を示す。口縁から体部上半にかけ煤が付着する。また底部には木葉痕が認められる。にぶい橙色の色調を有する。

4は甕状の口縁部の破片と思われる。ⅡA3jグリッドの盛り土下位部分より出土した。口縁直下に「天王山式土器」崩れの刺突文を有し、「赤穴式土器」の口縁部の文様に非常に類似している。刺突文下には6条の沈線が認められ、鋭角的な先端を有する工具によって施文がなされている。口縁部内面にはナデが加えられている。薄手の作りで胎土・焼成はよい。

5～9は撚糸文の文様を持つ破片である。5は撚り糸文の交互施文による羽状を呈する。薄手の作りで色調は赤褐色を呈す。6にも撚糸文系の縄文が施文されている。甕または壺の肩部の破片であると思われる。外面には煤が薄めに付着している。また内外面ともに金雲母が多く付着する。内面にはナデ整形が加えられている。7の底部片には胎土に粗い砂粒が混入する。底面は無文であり、ミガキが加えられている。

10～12は無文の甕の破片である。11は口縁部片であり、外面から口唇部・内面にかけてに炭化物が多く付着する。口縁部は4cm弱と長めで外側に反り返る形状を呈す。胎土には多くの粗い砂粒を混入する。

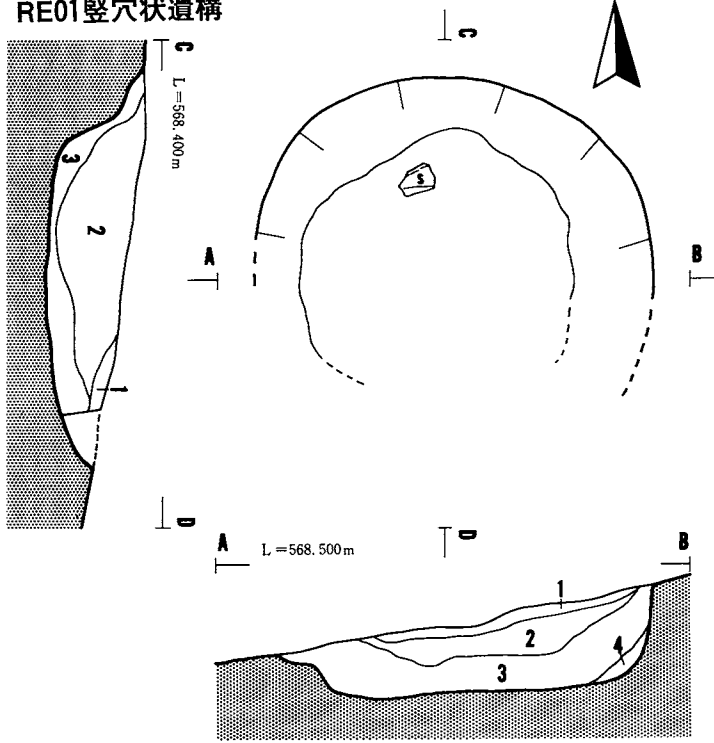
遺物の時期が明らかに特定できるものは4の土器片である、弥生時代末期の遺物と考えられる。他の遺物も同時期であると思われ、他の時代の遺物は含まれない。

IV. まとめ

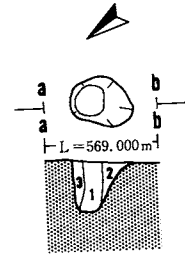
今年度の調査では残念ながら生活のあとを示す遺構はほとんど検出されなかった。また出土遺物も遺構に直接関連すると思われる遺物は皆無であり、遺構の時期、性格を特定することは不可能であった。しかし出土遺物等から弥生時代終末の時期の遺跡が周辺に存在する可能性は高まった。なお明通Ⅱ遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

RE01 竖穴状遺構

1. 10YR2/3 黒褐色シルト しまりあり 粘性なし 炭化粒が1%入る 木の枝・植物の根が入り込む
2. 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまりあり 粘性ややあり 炭化物3%を含む
3. 10YR3/4 暗褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物3%入る

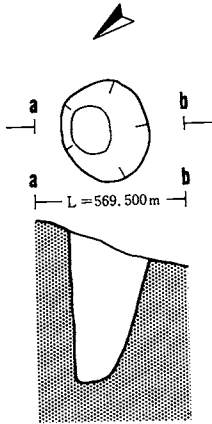


No.	径cm	深さcm
RD01	34×25	27
02	53×46	82
03	38×38	24
04	41×40	41
05	41×34	30
06	37×34	20
07	47×33	44



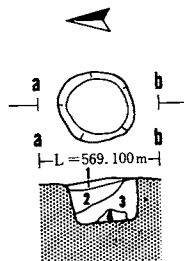
1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり 粘性あり
2. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりややあり 粘性有り
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性あり

RD02

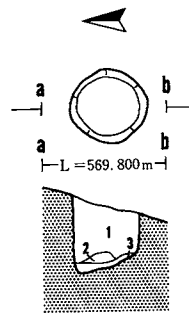


10YR3/3 暗褐色砂質シルト しまり 全くなし 粘性なし ポソポソした手触り

1. 10YR2/3 黒褐色シルト しまりあり 粘性なし 炭化物が1%入る 木の枝・植物の根が入り込む
2. 10YR4/4 褐色シルト粘土質シルト しまりあり 粘性ややあり 炭化物3%を含む
3. 10YR3/4 暗褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物3%入る 中礫火山灰の小ブロックが2%程度散らばる
4. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりあり 粘性ややあり

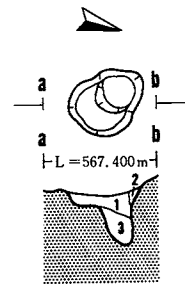


1. 10YR3/2 黒褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 中礫火山灰をブロック状に含む
2. 10YR4/4 褐色質シルト しまりあり 粘性ややあり 根が入り込んでいる
3. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 炭化粒を1%含む
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色ローム質シルト しまりあり 粘性あり



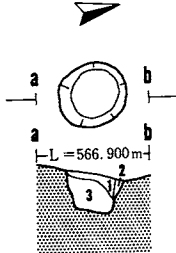
1. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性なし 中礫火山灰のブロック (径5mm前後) が3%入る
2. 10YR7/8 黄橙パミス しまりあり 粘性なし ブロック状小さい粒状に入る
3. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし 褐色砂質シルトが少量混入

RD05



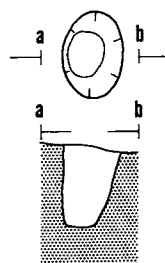
1. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり
2. 10YR2/3 黒褐色シルト しまりあり 粘性ややあり
3. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり 上部に中礫火山灰が帯状にうすく入る

RD06



1. 10YR2/1 黒色シルト しまりなし 粘性ややあり 中礫火山灰をブロック状に含む
2. 10YR4/4 黄褐色ローム質シルト しまりあり 粘性ややあり 根が入り込んでいる
3. 10YR3/3 暗褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化粒が1%程度散らばる

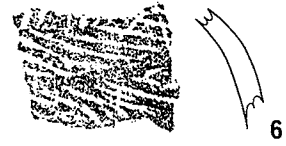
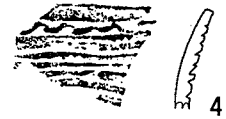
RD07



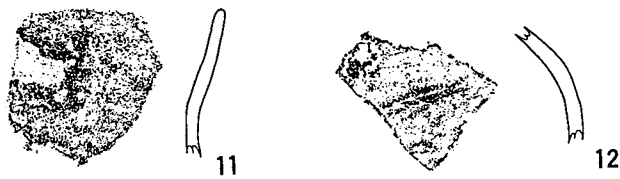
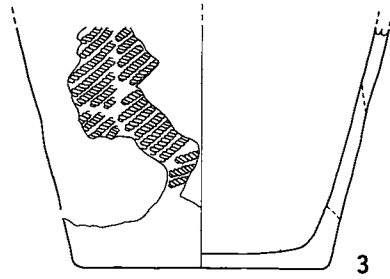
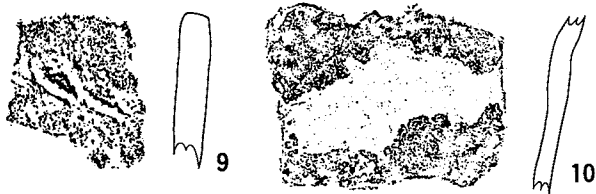
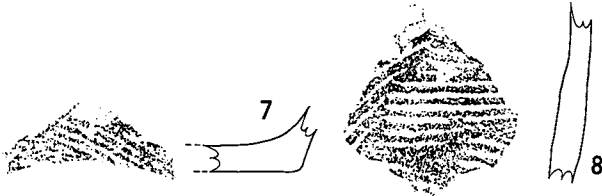
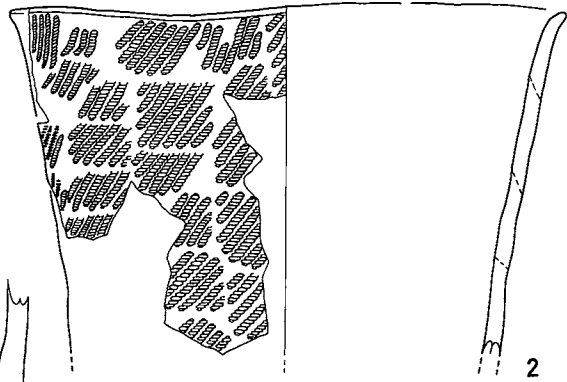
10YR2/3 黒褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 上面に炭化粒が1%程度散らばる

明通 II 遺跡遺構

器高30.3cm、口径27.6cm、底径8.6cm



器高——口径(22.6cm)、底径9.8cm



1~3、10~12はS=1/3、4~9はS=1/2

明通Ⅱ遺跡出土遺物



調査区遠景



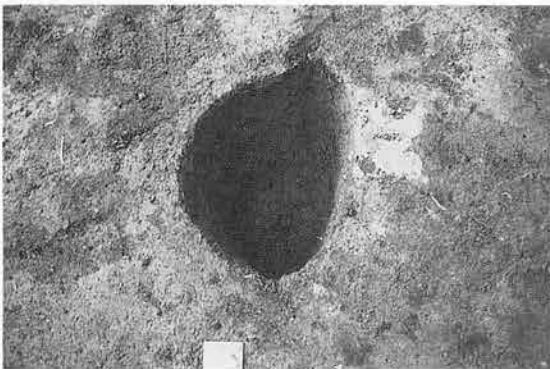
RE01 豎穴状遺構平面



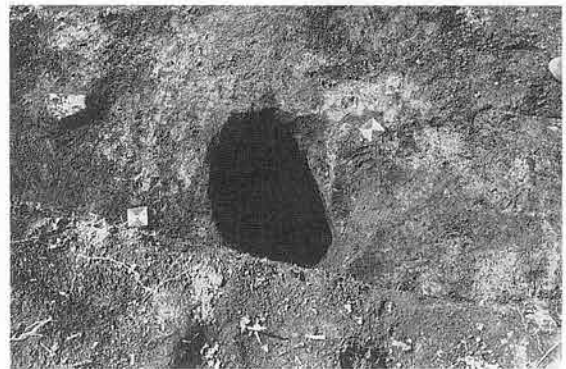
RE01 東西断面



RE01 南北断面



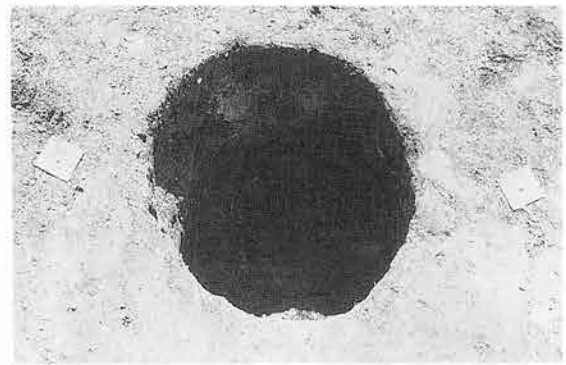
RD01 平面



RD02 平面



RD03 平面



RD04 平面

明通Ⅱ遺跡検出遺構



RD05平面



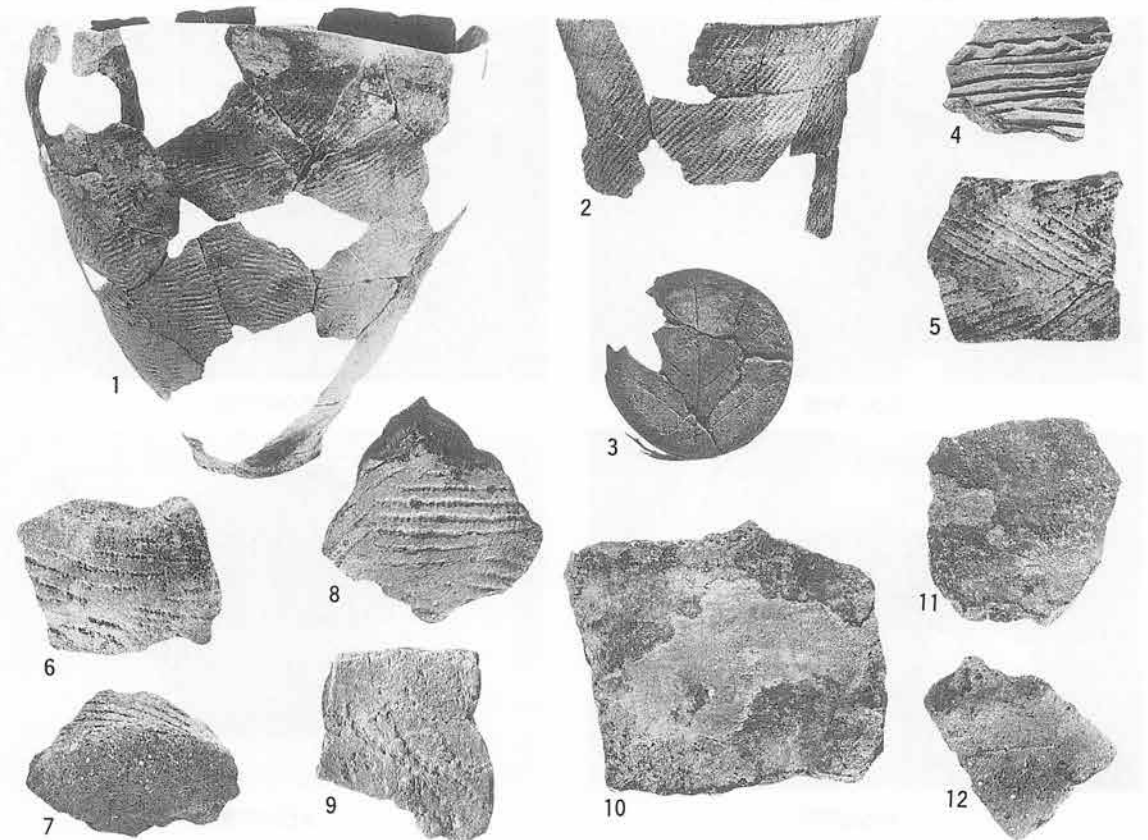
RD06平面



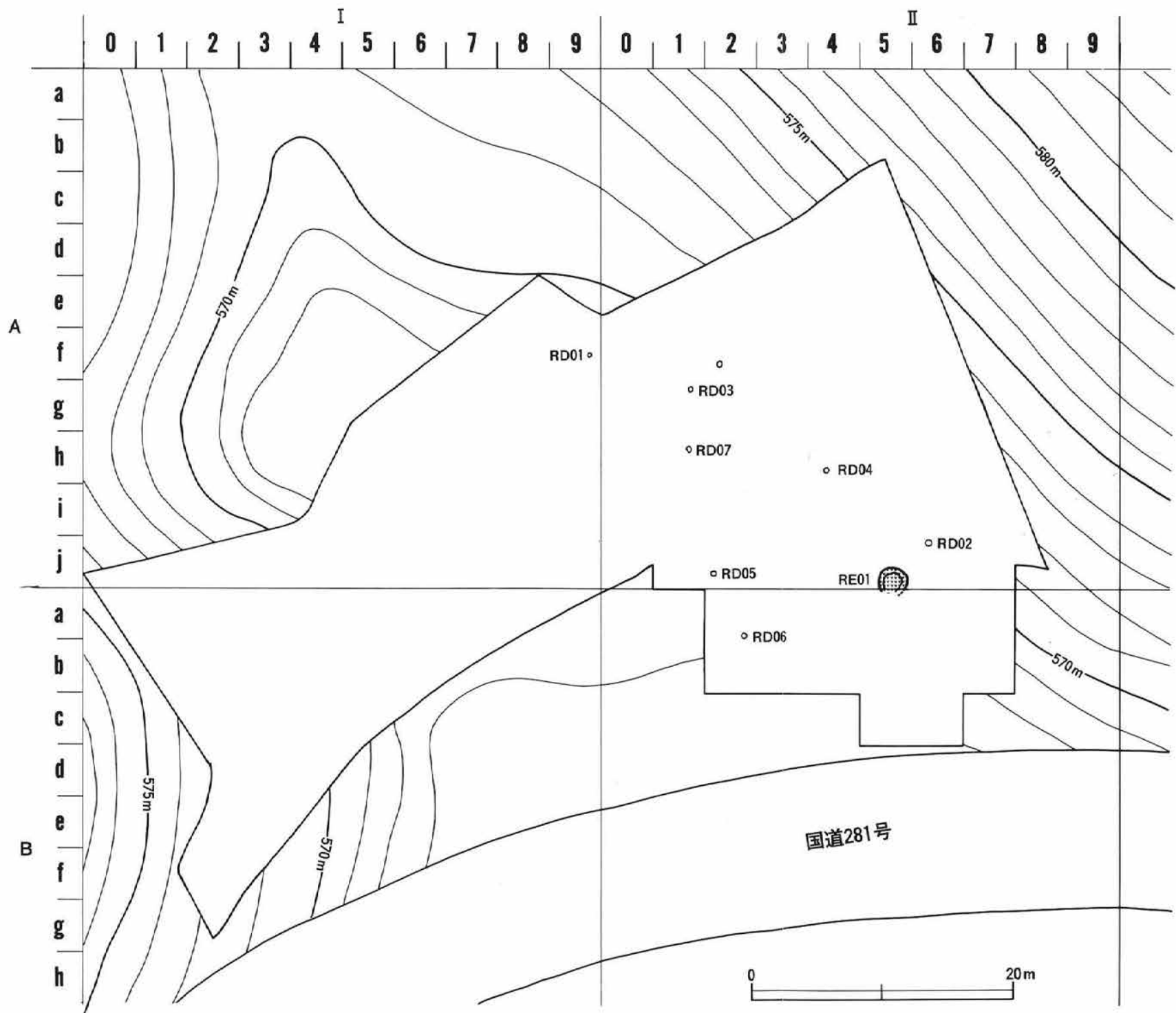
RD07平面



IA 7hグリッド土器出土状況



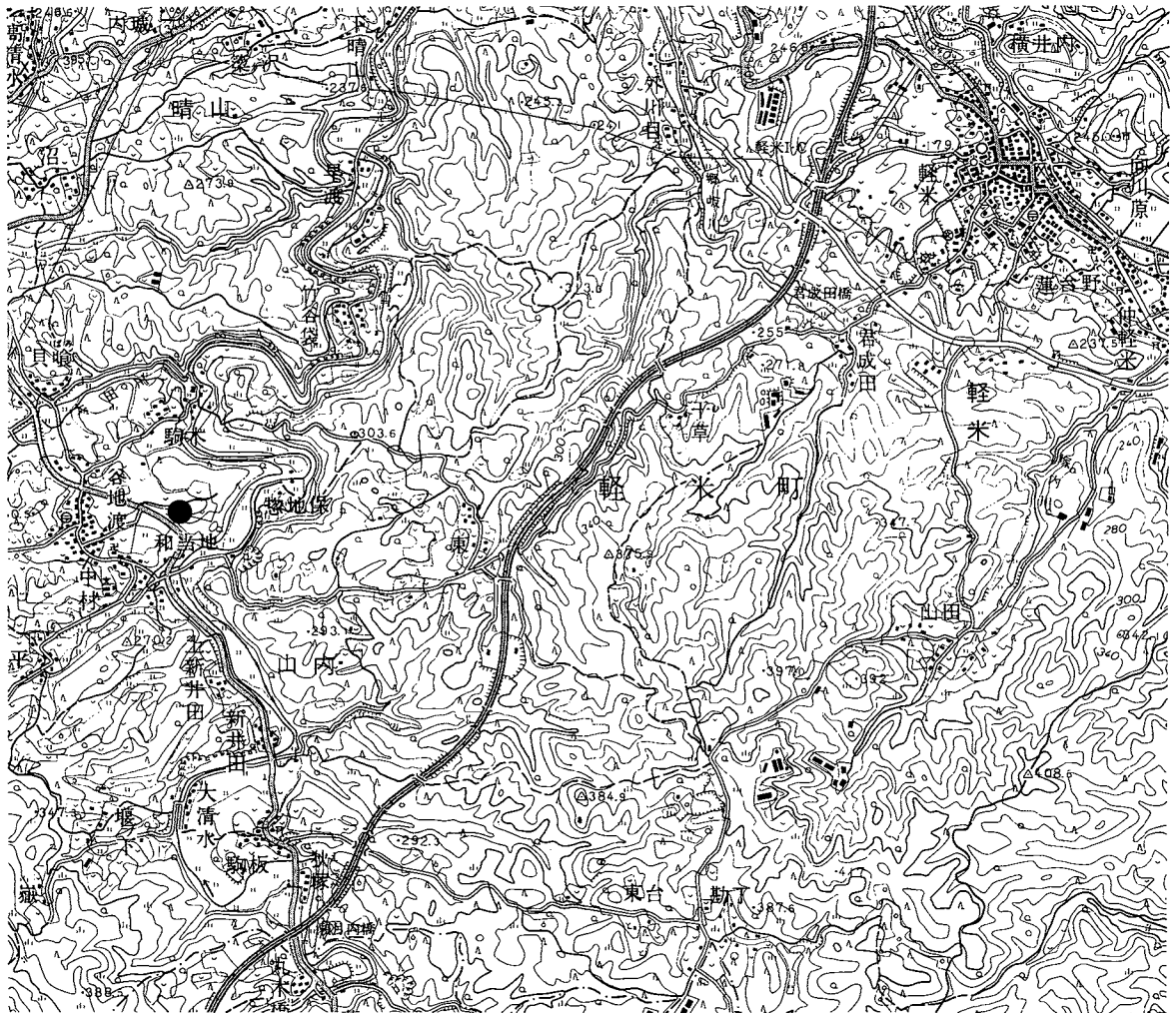
明通Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物



明通 II 遺跡遺構配置図

(10) 和^わ当^{とう}地^ち I 遺跡

所在地	九戸郡軽米町大字山内第23地割字権現林127、128
委託者	岩手県農政部・岩手県二戸地方振興局二戸土地改良事業所
発掘調査期間	平成7年9月5日～11月27日
調査対象面積	1,750m ²
発掘調査面積	1,750m ²
遺跡番号・略号	I F82-2012・WT I-95
調査担当者	中川重紀・千葉貴子
協力機関	軽米町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 一戸

1. 遺跡の立地

和当地 I 遺跡は、軽米町役場の南西約 6 km に位置し、折爪岳の東麓を北流する瀬月内川流域の洪積段丘面上に立地する。遺跡の標高は 222m～215m で、南側に傾斜している尾根部分である。現状は畑地で、遺跡の南側は尾根裾部分を切って国道 340 号線が東西に通っている。

2. 調査の概要

今回調査で検出した遺構は竪穴住居跡（8 棟）や土坑（13 基）、陥し穴状遺構（7 基）、建物跡（1 ヶ所）、柱穴群（2 ヶ所）、鍛冶場跡？（1 ヶ所）などであり、尾根の裾部分や頂部に分布する。

〈竪穴住居跡〉

尾根の裾部分に 7 棟と尾根頂部付近に 1 棟検出した。内訳は縄文時代の住居跡 5 棟、弥生時代の住居跡 2 棟と平安時代以降の住居跡 1 棟である。縄文時代の住居跡は、尾根頂部付近 1 棟と尾根裾部分 4 棟が検出された。時期は出土遺物から、後期～晩期初頭である。また、後期と晩期の住居跡は上下で重なって検出した。平面形は円形ないし楕円形で、炉は地床炉で住居中央部近くにある。規模は楕円形の住居が東西 640cm、南北 415cm、他の住居跡は長径 300cm 前後である。弥生時代の住居跡は十和田 a・b 火山灰を含む埋土で 2 棟近接している。何れも平面形は楕円形で住居中央に石囲炉を設けている。1 棟は焼失住居で、規模は東西 695cm、南北 600cm、深さ 67cm で、炉の東南側の柱穴の脇に壺を正立して埋め、その上に鉢を伏せた合せ口土器が出土した。もう 1 棟は規模は東西 610cm、南北 510cm、深さ 30cm である。平安時代以降の住居跡は大半が壊されている。

〈土 坑〉

尾根の斜面部から裾部分で縄文時代の土坑と弥生時代の土坑を 12 基検出した。縄文時代の土坑は平面形が円形で断面形がフラスコ状とビーカー状で、規模は最大で直径 220cm、深さ 50cm。弥生時代の土坑は平面形が円形で断面形が浅い皿状で、規模は最大で直径 110cm、深さ 35cm である。

〈陥し穴状遺構〉

調査区の尾根斜面上部で 7 基検出した。平面形から細長い溝状 4 基と楕円形状 2 基と円形土坑を 3 個繋いだ 1 基がある。溝状は尾根の西側斜面部に 3 基、東側斜面部に 1 基である。規模は最大で長軸 332cm、短軸 23cm、深さ最大で 77cm。楕円形状は東側斜面部に 2 基である。規模は最大で長軸 161cm、短軸 134cm、深さ 91cm。円形土坑を 3 基繋いだものは斜面中央の 1 基である。規模は長軸 70cm、深さ 80cm、全体の長さが 220cm である。

〈鍛冶場跡？〉

東側斜面部で鉄滓が 150×50cm の範囲に分布するが、鉄滓は鉄分を殆ど帯びていず、黄褐色土層が赤褐色に僅かに変色していた地区である。

〈出土遺物〉

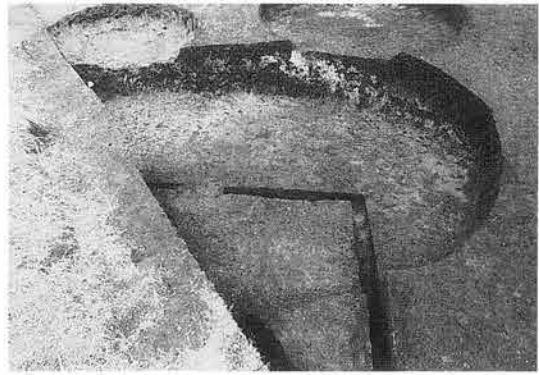
縄文時代と弥生時代の土器・石器と平安時代の須恵器口縁部破片、鉄製品が出土した。土器は縄文時代が晩期初頭の鉢、後期末葉の注口土器、前期の深鉢と、弥生時代が初頭の高坏や壺等である。石器は石鏃、石匙、楔形石器、剥片等で、他には、弥生時代住居跡の埋土中や床面、土坑から炭化種子が出土している。

4. まとめ

今回の調査で、和当地 I 遺跡は縄文時代から弥生時代をへて現代までの間に、集落や狩り場等、様々な使われかたをしてきた場所で、特に住居跡は尾根の高い部分よりも尾根裾に多く検出されていることから、国道 340 号線部分にも遺跡は広がっていたと考えられる。



遺跡全景（上方が北）



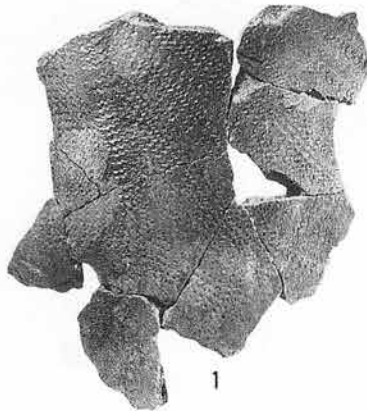
縄文時代住居跡



弥生時代住居跡



合せ口埋設土器出土状況



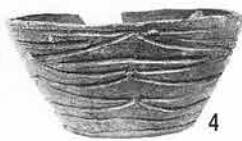
1



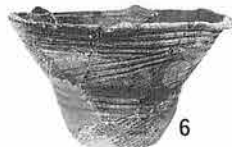
2



3



4



6



7



8



9



10



5



11



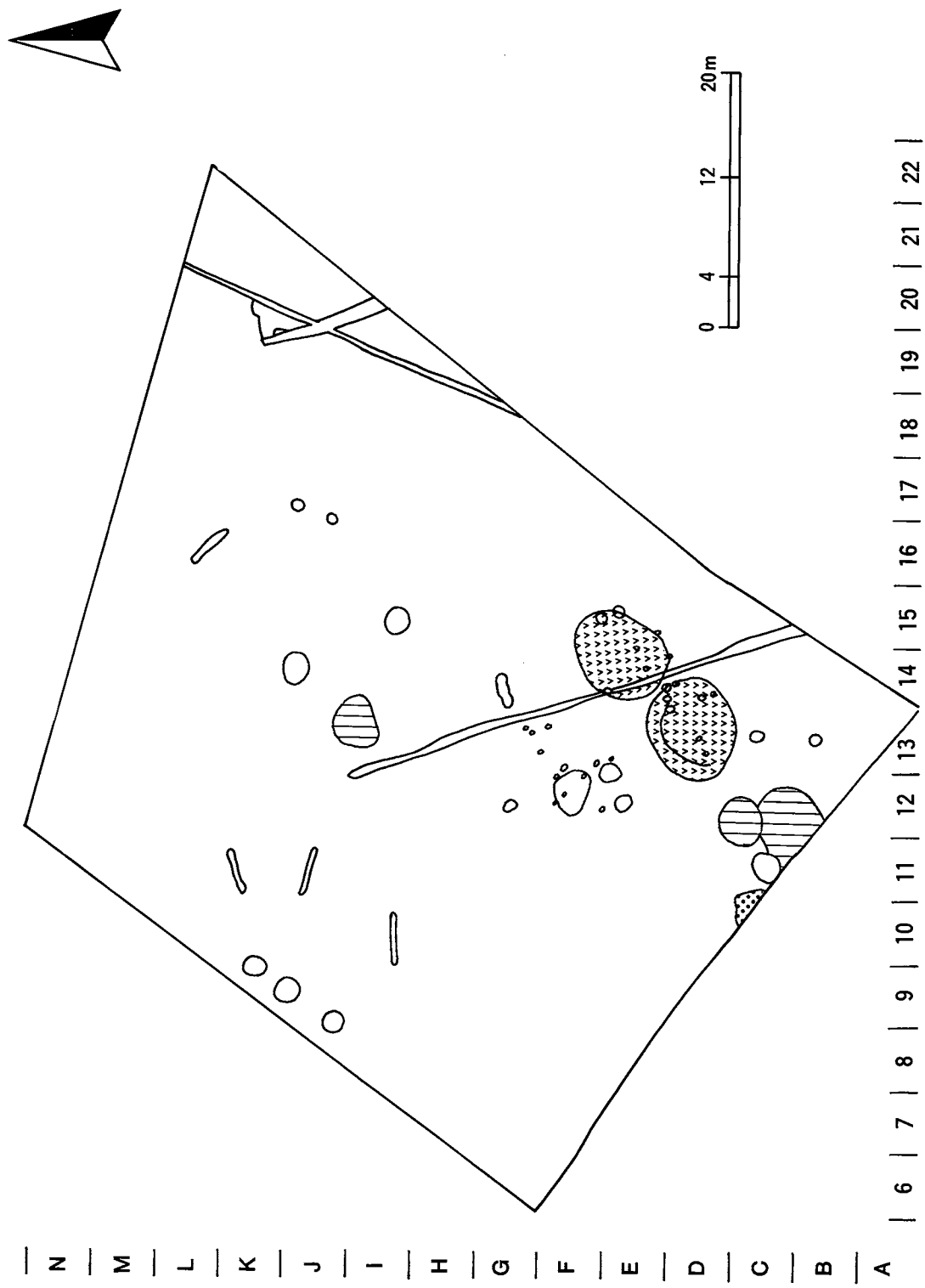
12



13

- 1 縄文時代早期
- 2 縄文時代晚期
- 3 縄文時代後期
- 4～6 弥生時代初頭
- 7～10 石鏃
- 11 石鏃
- 12 石鏃
- 13 大型蛤刃石斧

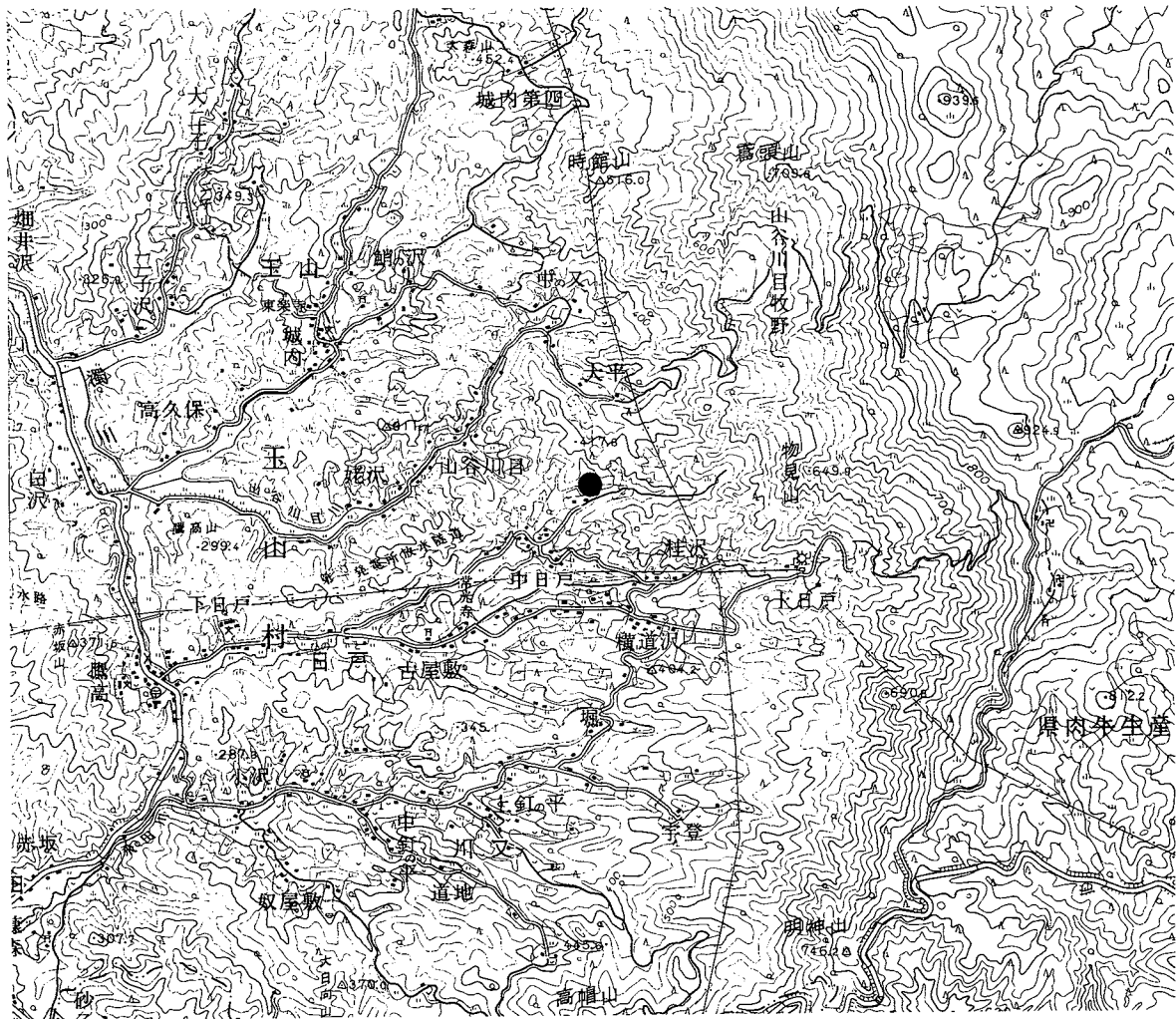
和当地 I 遺跡検出遺構・出土遺物



和当地 I 遺跡遺構配置図

(11) 間洞Ⅱ遺跡

所在地 岩手郡玉山村大字日戸字間洞6番地7ほか
委託者 岩手県盛岡地方振興局岩手北部土地改良事業所
発掘調査期間 平成7年8月16日～10月31日
調査対象面積 2,605㎡
発掘調査面積 2,605㎡
遺跡番号・略号 KE78-0240・MHⅡ-95
調査担当者 木戸口俊子・溜浩二郎
協力機関 玉山村教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡・外山

1. 遺跡の立地

間洞Ⅱ遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線渋民駅から東南東6.8kmに位置し、北側の北上山系の時館山、鳶頭山、東側の物見山などに囲まれた山間部にあり、遺跡の南側には北上側水系である濁川の支流の沢が流れている。遺跡の標高は336～343m前後で南向きに緩傾斜面となっており、現況は原野である。

2. 調査の概要

調査区を南北に縦断する旧沢跡があり、それによって調査区は東西に区画された状態にある。西側部分においては、遺構が全く検出されず、東側部分からのみ土坑43基、焼土遺構7基が検出された。

旧沢跡からは流れ込みと思われる遺物が豊富に出土したが、特に遺構の検出された東側の傾斜部からの出土量が多かった。

〈土坑〉

旧沢跡の東側部分の中央より東寄りにおいて、北-南に走向している小さな沢が流れている。この沢の東部からの土坑の検出が顕著であり、重複した状態で検出された。土坑の平面形はほとんどが円形で、断面形はフラスコ状、円筒状、浅鉢状を呈している。中でもフラスコ状の土坑が43基中27基ともっとも多い。いずれも縄文時代後期の面での検出で、規模は大型では径173cm、小型では径56cmというものもあるが、全体的に100cm前後である。深さは45cm～120cmと様々である。8基より一括土器が出土しており、他の出土遺物と同時期の縄文時代後期前葉のものである。

〈焼土〉

7基とも住居跡など他の遺構に伴っていない。土坑と同様後期の面での検出で、現地性のものと思われるものは5基である。

〈出土遺物〉

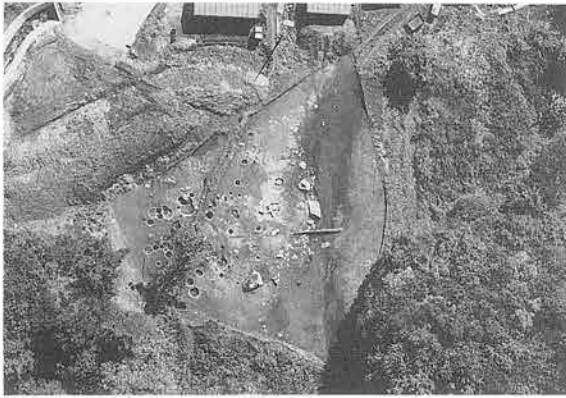
大コンテナで9箱分は縄文時代後期前葉の土器で、中期・晩期の土器も僅少出土している。遺物中5割は旧沢跡からで、3割が土坑内、2割がその他からの出土である。

石器は石鏃8点、打製石斧3点、磨製石斧14点、石匙1点、石筥1点をはじめ50点余り出土している。磨製石斧には、全長4cmの小型のものも含まれている。また、同一の石を打ち割ったと思われる石器製作前の剥片がほぼ同じ所より30点ほど出土している。

土製品としては、調査区西側旧沢跡の東側縁部から土偶が2点出土している。1点は胴体、もう1点は右手のみで沈線、付着物等はない。また、円盤状土製品も旧沢東側より8点出土している。

3. まとめ

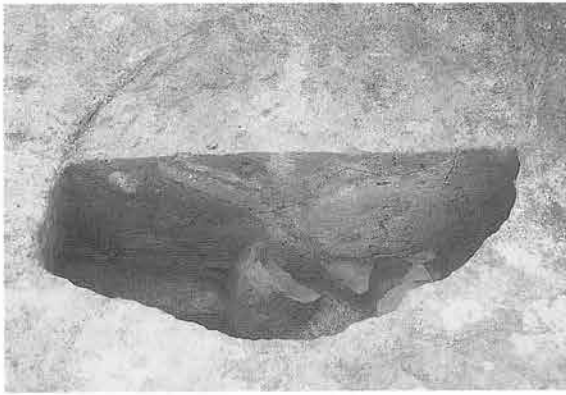
今回の調査では、多くの土坑と焼土遺構のみが検出されたが、旧沢跡から土坑中の出土遺物とほぼ同時期の遺物が多く出土したことで、遺跡周辺にはこの場所を利用していた当時の人々の住居跡が存在する可能性が高いと考えられる。調査区の南側や南東側での県教委の試掘では遺構がほとんど見つかっておらず、北側と北東側の斜面における遺構の存在について期待できる。



調査区遠景



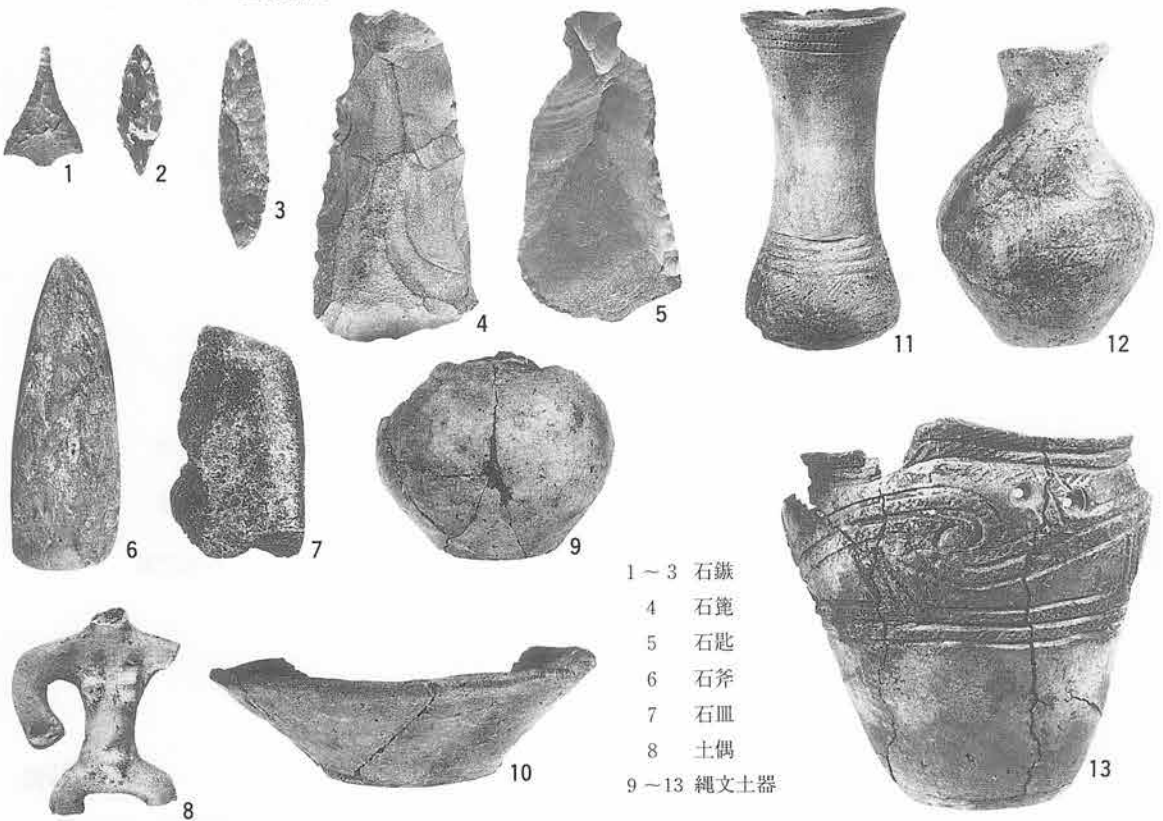
基本層序



土坑断面

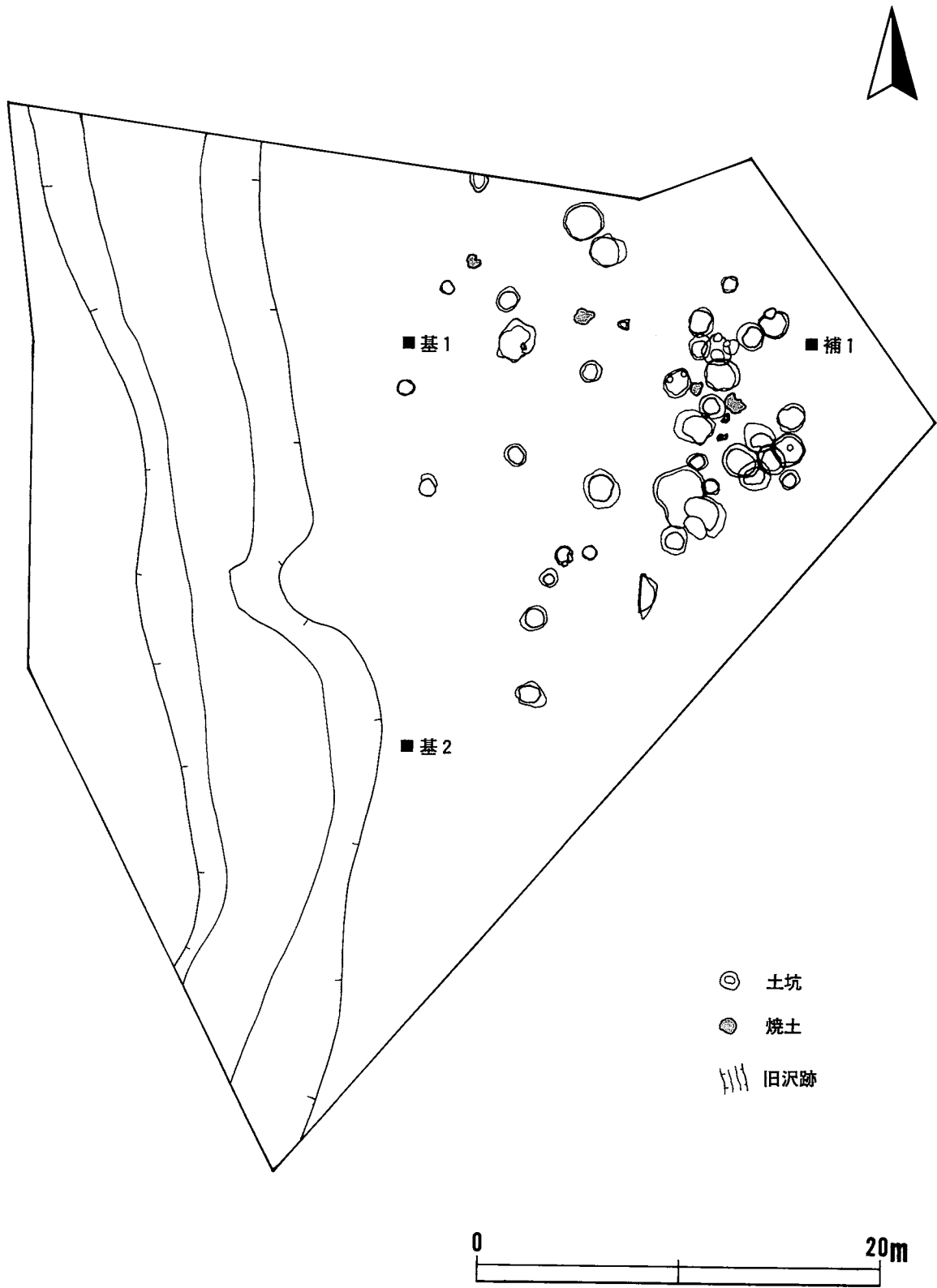


土坑完掘



- 1~3 石鏃
- 4 石鏃
- 5 石匙
- 6 石斧
- 7 石皿
- 8 土偶
- 9~13 縄文土器

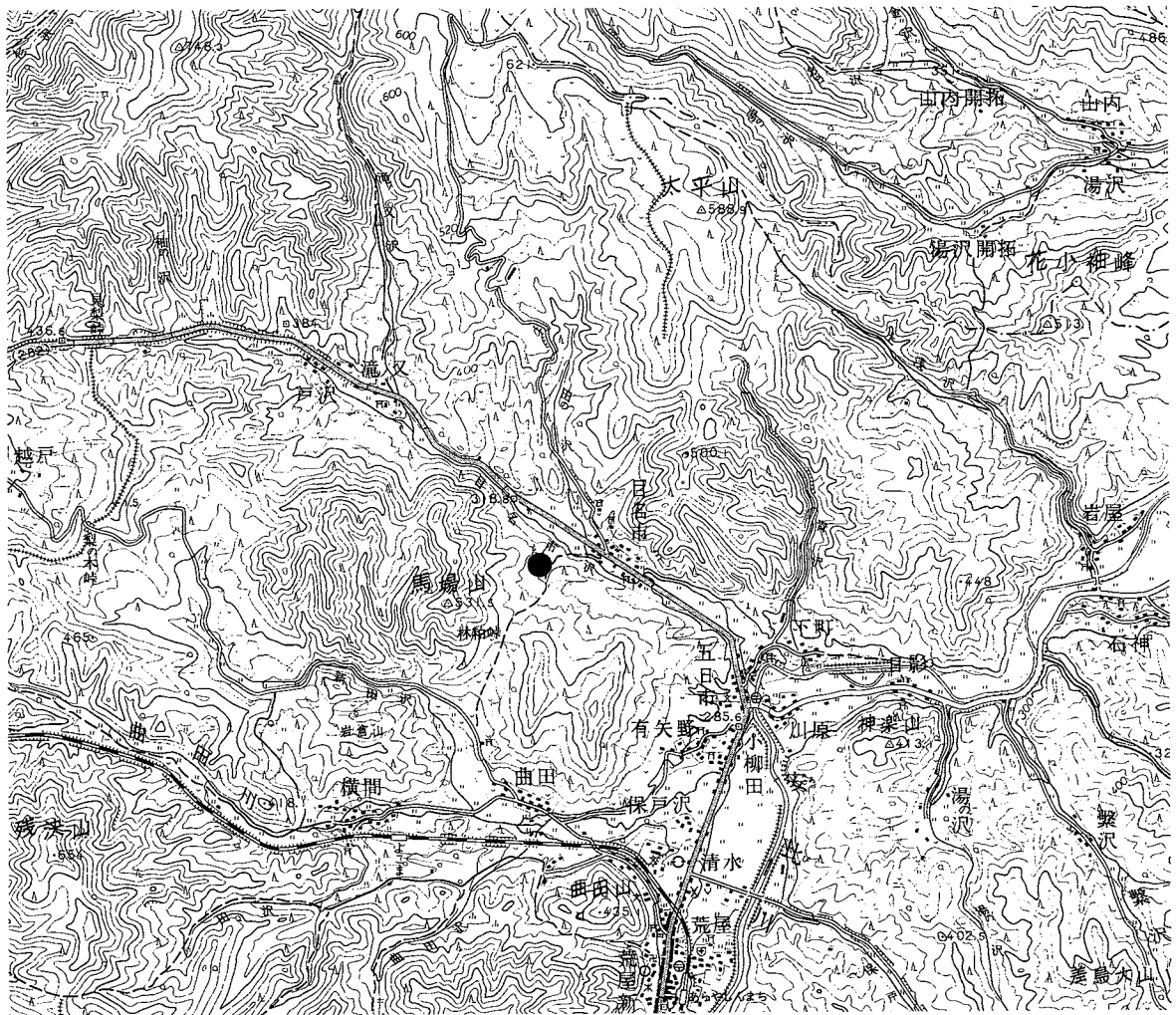
間洞Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物



間洞Ⅱ遺跡遺構配置図

(12) 目名市Ⅱ遺跡

所在地 二戸郡安代町字目名市66-1
委託者 盛岡地方振興局岩手北部土地改良事業所
発掘調査期間 平成7年4月18日～6月15日
調査対象面積 918㎡
発掘調査面積 918㎡
遺跡番号・略号 J E54-1137・MNⅡ-95
調査担当者 阿部勝則・沼田和宏
協力機関 安代町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 荒屋

1. 遺跡の立地

目名市Ⅱ遺跡は、東日本旅客鉄道花輪線の荒屋新町駅の北北西約3km付近に位置し、馬場山(531.5m)などからなる馬場山山地(小起伏山地)の裾部に立地している。遺跡の東側は目名市沢が南流し、南側は目名市沢に注ぐ小規模な沢が東流する。遺跡は、この二つの沢に挟まれた西から東への緩斜面になっている。遺跡の標高は319～325mで、目名市沢との比高は約10mである。遺跡の現況は、山林・畑地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴状遺構2棟、土坑類35基、陥し穴状遺構1基、焼土遺構2ヶ所などである。遺構の分布をみると調査区東側の比較的平坦な面に土坑群が集中している。また、調査区の中央付近と東側では沢跡が検出された。遺跡全体が畑地造成の際、著しく削平と攪乱を受けている。

〈竪穴状遺構〉

竪穴状遺構は調査区西側と中央付近で2棟が検出された。西側で検出された1棟は、南側が調査区域外にかかるため、全体の規模・形状は不明であるが、径4.5m前後で方形基調と思われる。中央付近で検出された1棟は、規模・形状は、径2.5mほどの隅丸方形を呈する。いずれも壁の立ち上がりや床面と思われる硬く締まった平坦面は確認できたものの炉跡・柱穴は不明瞭である。出土遺物は、縄文土器の細片が出土している。

〈土坑〉

土坑類は形状から2種類に分類できる。ひとつは、平面形は円形、断面形はフラスコ形を呈し、規模は径1m～1.5m、深さ1mほどの土坑である。調査区の東側の比較的平坦な面にまとまって検出された。

もうひとつは、平面形が不整形を呈する土坑で、配置にまとまりはなく、単独で数基みつがっている。規模は、径0.5m～1m以上、深さ30cm～70cmとばらつきがある。底部に縄文土器が横転していたものや多量の礫が含まれていたものもある。時期は出土遺物から縄文時代中期に属するものと思われる。

〈陥し穴状遺構〉

調査区の東側の緩斜面で検出された。規模・形状は径3m×0.8m、深さ1.5mで溝状を呈し、両端に膨らみをもっている。長軸はほぼ南北方向で斜面に対して直交している。遺物は縄文土器の細片が出土している。

〈焼土遺構〉

2ヶ所検出された。径30cm前後の広がりをもつが、削平されているため、本来の規模・形状は不明である。炉跡であった可能性もある。

〈出土遺物〉

出土した遺物の総量は、コンテナ(大)で5箱である。時期は縄文時代の前期～晩期まであり、中期中葉から後期初頭に属するものが多い。ほとんどが沢跡の埋土中からの出土である。また、少量の弥生時代の土器や土器器片も出土している。石器は約30点出土しており、器種は、石鏃・石錐・石匙・磨製石斧・凹石・石皿などである。

3. まとめ

今回の調査で、目名市Ⅱ遺跡は、縄文時代の前期以降に生活の場として利用されていたことが明らかになった。フラスコピット群と陥し穴状遺構が調査区東側にまとまって検出されたことや旧地形から考えて、集落の中心は調査区北西側の平坦面にあるものと推定される。また、出土遺物から弥生時代や平安時代の集落が調査区の北西側に存在することが予想される。



遺跡全景



竪穴状遺構



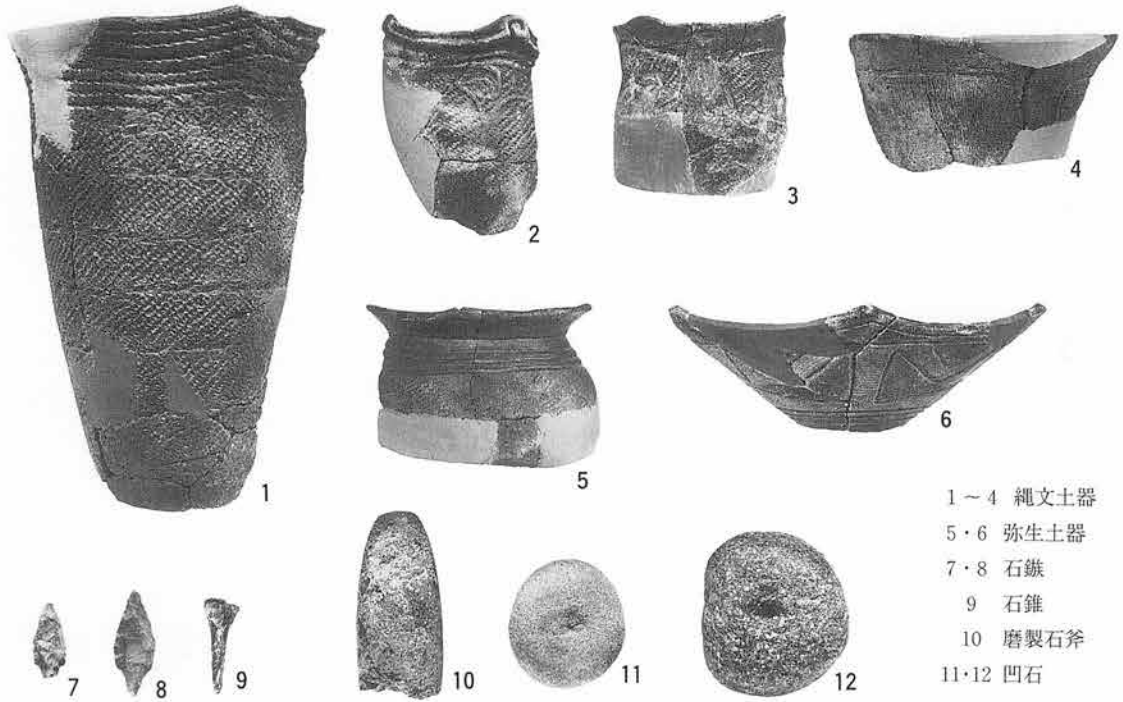
土坑群配列状況



陥し穴状遺構

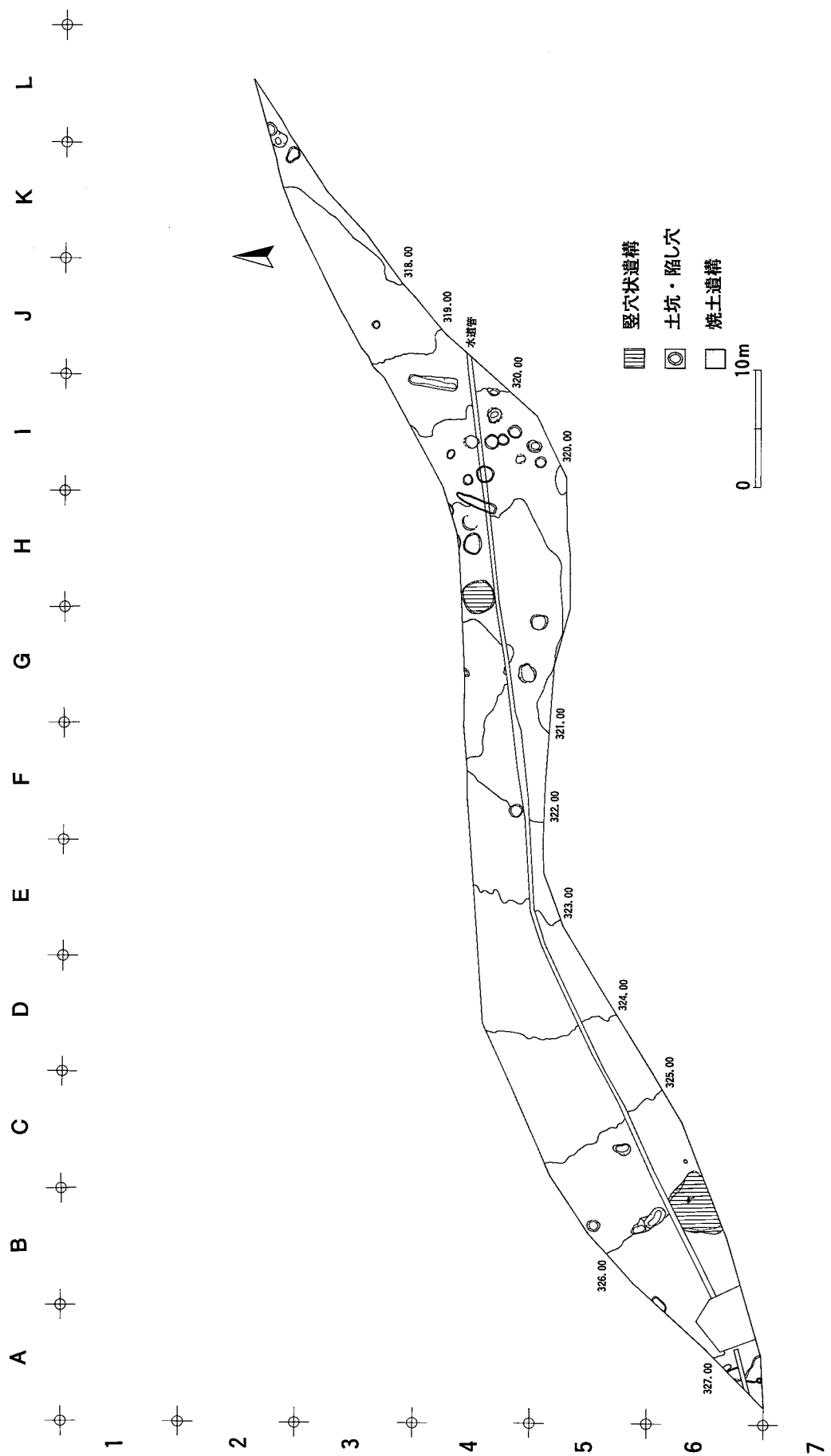


遺物出土状況



- 1～4 縄文土器
- 5・6 弥生土器
- 7・8 石鏃
- 9 石錐
- 10 磨製石斧
- 11・12 凹石

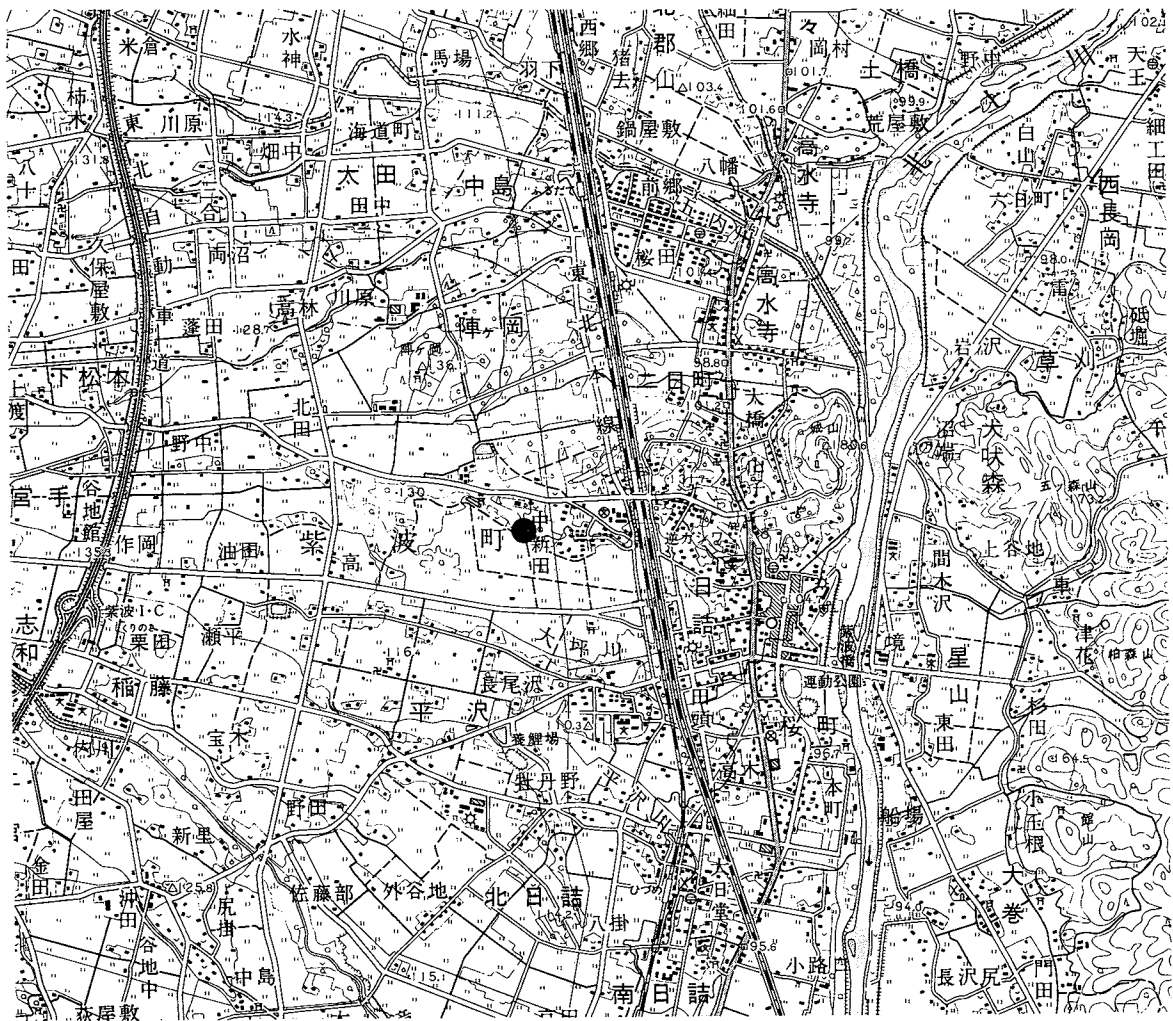
目名市Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物



田名市Ⅱ遺跡遺構配置図

ひづめななくぼ
(13) 日詰七久保遺跡

所在地	紫波町日詰七久保1地割42外
委託者	盛岡地方振興局盛岡南部土地改良事業所
発掘調査期間	平成7年4月7日～6月15日
調査対象面積	1,851m ²
発掘調査面積	1,851m ²
遺跡番号・略号	LE66-0393・HZ-95
調査担当者	菊池人見・伊藤 拓
協力機関	紫波町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 日詰

1. 遺跡の立地

遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線古館駅と日詰駅の間位置し、扇状地上の三紀の残丘の一つに立地しており、この残丘の東部には城山公園（標高180.6m）があり、遺跡はその西端にある。また、遺跡の北には、陣ヶ岡（標高136.1m）がある。遺跡の標高は130m前後で、約10mの標高差がある。

2. 調査の概要

本遺跡は、大きく北側と南側の調査区に分けられる。

北側は、標高125m前後の南西に傾いた縁状の高台で、そのほぼ中央を薬研堀りの用水路が通っており、単層の埋土で一気に埋め戻されている。底部から10世紀頃のものと思われる厚手の須恵器の破片が何点か出土している。

南側は、南南西に下る坂で、斜面上部から土師器や須恵器などの破片が多数出土しており、下部からは縄文時代の竪穴式住居跡が検出されている。

したがって、本遺跡は縄文時代と平安時代の二つ時代の遺跡として位置付けられる。

基盤岩層は鮮やかな赤や黄、青などの層をもった赤色風化殻で、パミスを含む10万年以上も前の火山活動によるものと推測される。

〈竪穴式住居跡〉

調査区の南端に一棟検出された。楕円形状をなし、長軸約2.8m、短軸約2m、壁高約0.3mの竪穴状住居跡である。床面のほぼ中央部に炉跡と思われる焼土がある。埋土中から縄文土器片が出土したことから、縄文時代の住居跡と推定される。

〈土 坑〉

調査区北側の用水路の上部（東寄り）に上部を斜めに削られた形で2基検出された。いずれも直径1m前後の円形のもので、縄文時代のものと推定される。

〈溝 跡〉

北側調査区のほぼ中央に走る薬研堀りの用水路で、幅約12m、底の幅約90cm、深さ約5mで、基盤層である赤色風化殻まで掘り込んでおり、西は現在の山王海ダムの方まで伸びるものと思われ、東は城山公園の西側迄確認された。時代は不明である。なんらかの理由で一気に埋められている。なお、底部には数ミリの厚さの黒く細かな水流による砂状の堆積物が認められた。

〈出土遺物〉

縄文時代の土器片および石鎌やスクレイパーなどの石器と、平安時代の土師器や須恵器が出土した。

3. まとめ

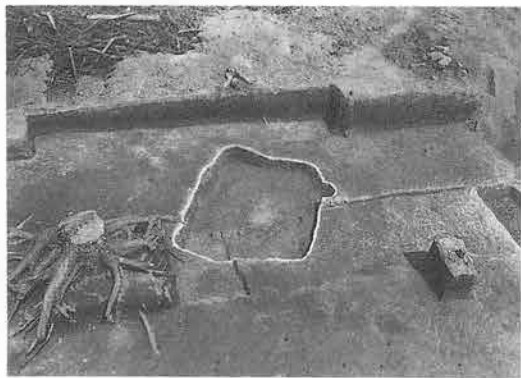
今回の調査では、大きく二つの時代（平安時代と縄文時代）の遺構と遺物が確認された。それらの個々の性格については、今後の分析と調査によって明らかになると思われる。



遺跡遠景



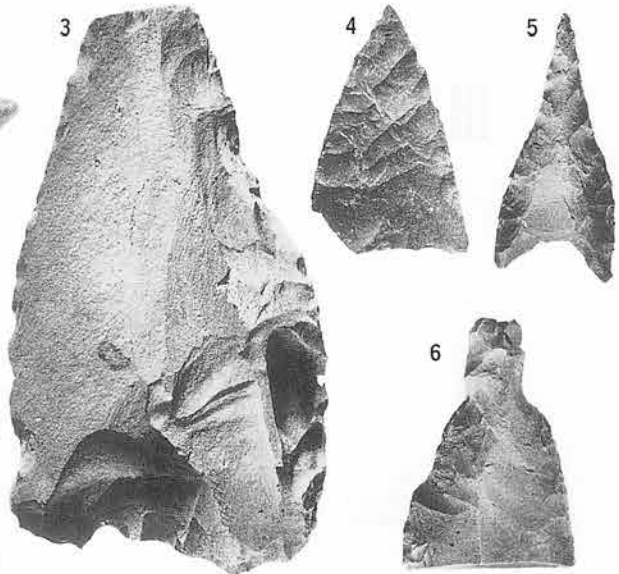
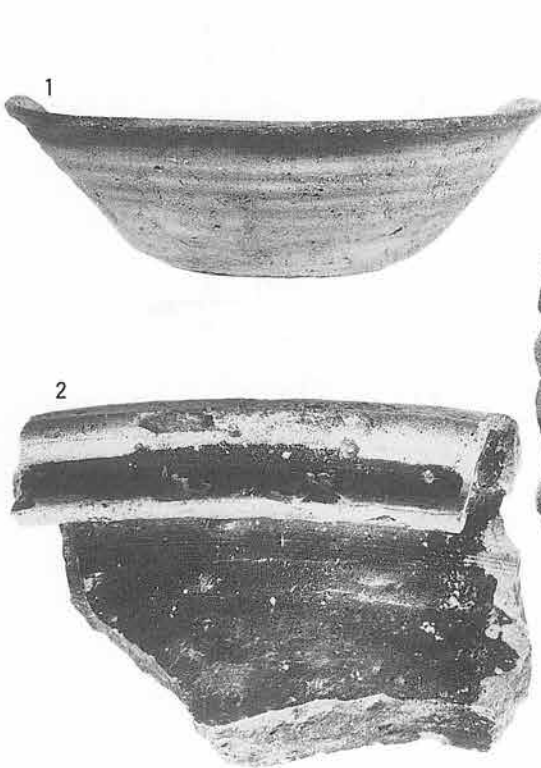
溝状遺構



縄文住居跡

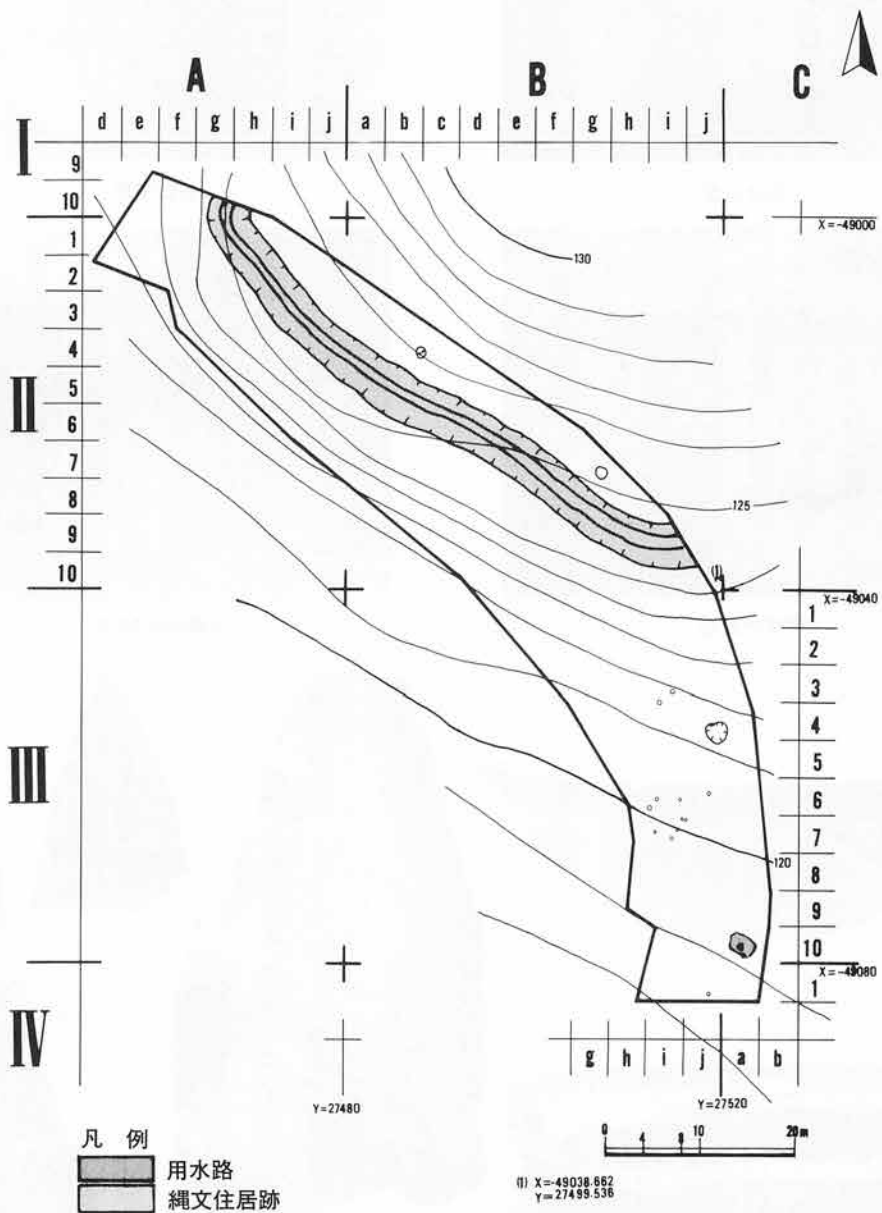


土器出土状況



- | | |
|----------|----------|
| 1 須恵器 | 2 須恵器口縁部 |
| 3 スクレイパー | 4 石鏃 |
| 5 石鏃 | 6 石匙 |

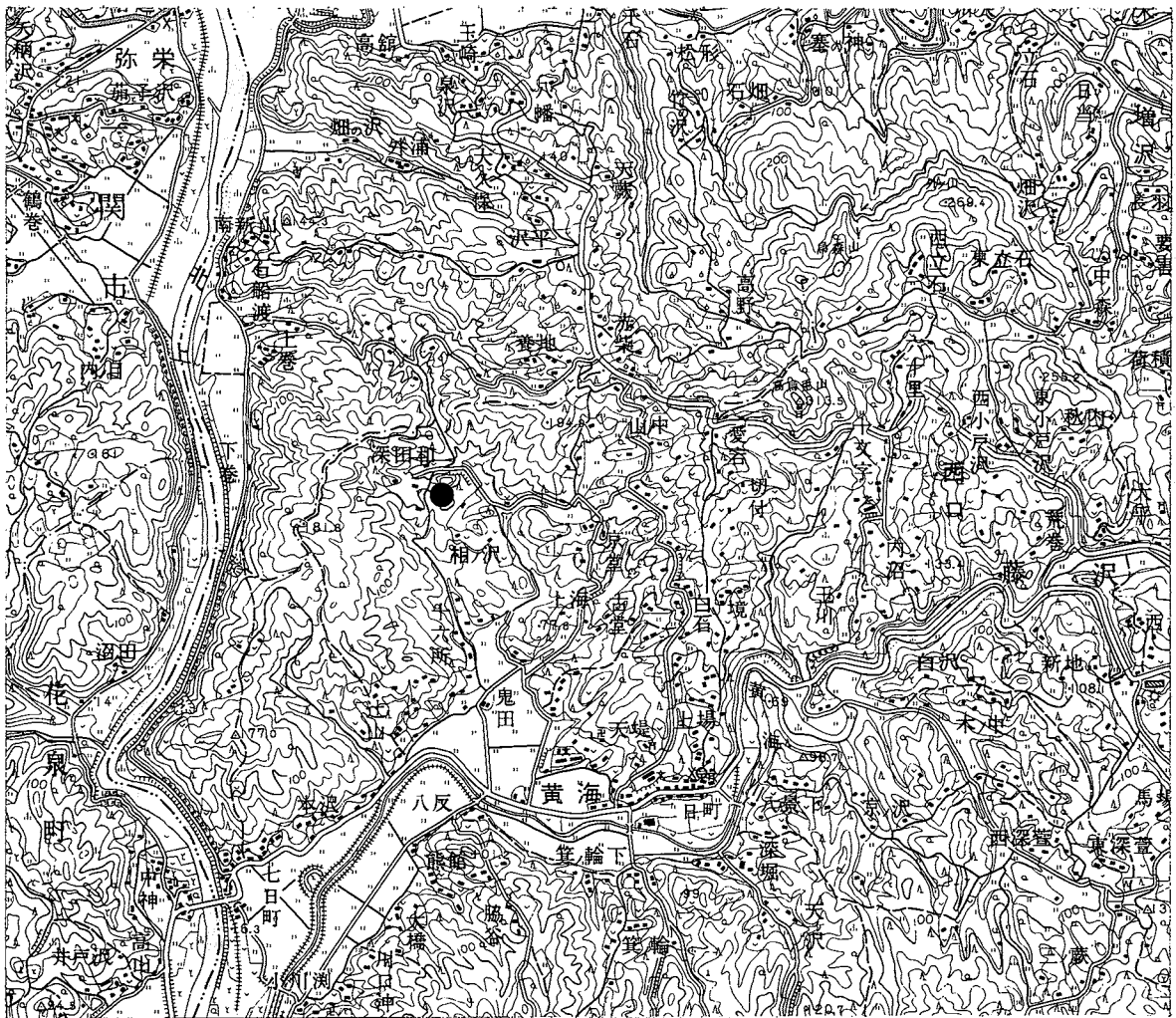
日詰七久保遺跡検出遺構・出土遺物



日詰七久保遺跡遺構配置図

(14) 相ノ沢遺跡

所在地 東磐井郡藤沢町黄海字深田和263番地ほか
委託者 岩手県千厩地方振興局両磐土地改良事務所
発掘調査期間 平成7年4月10日～7月31日
調査対象面積 1,120m²
発掘調査面積 720m²
遺跡番号・略号 OE29-0315・AS-95
調査担当者 宮本節子・松本建速
協力機関 藤沢町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 千厩

1. 遺跡の立地

遺跡は、藤沢町黄海二日町の北西約2.5km、標高100mほどの丘陵の頂上部とその周辺の斜面部に広がる。調査区は、遺跡全体のうちの南西向き斜面部である。調査区の南西側は道路、北西側は水田により削られている。調査開始前、調査区は山林であった。また、調査区南東端の北側には近世から明治時代にかけての墓がある。遺跡の東約200mあたりに川幅2mほどの相ノ沢川が流れている。また、約1.5km西には北上川が南流している。

2. 調査の概要

遺跡は、藤沢町指定の史跡とされており、縄文時代晩期中葉頃の土器や石器が採集されるところとして、周囲の人々にはよく知られている場所であった。今年度の調査予定面積は1,120㎡であったが、遺物包含層が厚く、遺物も多量に出土したため、調査には予定よりも多くの時間を費やした。今年度完全に終了した面積は720㎡であり、残りの400㎡は来年度に残された。

検出された遺構は、縄文時代後期・晩期の「捨て場」、縄文時代後期・晩期の土坑14基、縄文時代後期の柱穴6基、縄文時代後期の配石遺構2基、縄文時代晩期の炉跡1基、縄文時代晩期の埋設土器3基、中世末期と推定される土塁、溝が各々1基ずつ、近代と予想される廃棄された炭窯1基である。

〈縄文時代後・晩期の「捨て場」〉

遺跡を構成する土の大部分は、「捨て場」に廃棄されたものである。それらは最も厚い場所では後期、晩期とも50cmほどで、約1mの厚さに堆積している。「捨て場」は次のように形成されたと考えられる。まず、後期中葉頃の人々が、あまり腐植土の発達していない斜面に、どこかを掘ったときに得られた土、壊された炉を形成していた土、焼土、不要になった土器、石器の製作にかかわるフレイク、チップ、不要になった石器の類、食事に付随して生じたゴミの類などを廃棄し始めた。土や様々なものは場所により様相を変えながらも、廃棄され続け、後期の人々が捨てた土は、厚い所では、約50cmに達した。その後、その上に晩期前葉の人々が土や様々な遺物を捨て始める。いまのところ整理作業がほとんど進んでいないので正確なことは不明だが、後期末頃の遺物はないようなので、後期の後葉のある時期以降、しばらくそこでの生活は途絶え、晩期前葉に再びこの地で生活が始められたと推定できる。そして、縄文晩期大洞A式の古い頃を最後に再び人々はこの地を去ったと推定される。「捨て場」は時期により形成箇所が移動している。後期中葉には調査区中央から北西に中心があり、晩期前葉から中葉にかけてはほぼ調査区中央に中心が移っている。最後の時期には中央より南東側に中心が移っている。

また、大洞A式期の遺物を含む層にだけ、黒色のシルトが多く含まれていた（水成堆積ではない）。それ以前と土が生成される環境が違ったことを反映しているのであろう。大洞A式期の生活状況とそれ以前の生活に違いがあることなどを反映している可能性もあろう。ただし、分析は来年度に持ち越した。

〈縄文時代後・晩期の土坑〉

14基が検出されたが、構築目的が正確に把握されたものはない。

〈縄文時代後期の配石遺構〉

調査区ほぼ中央にあたる部分で検出された。晩期の「捨て場」を形成している斜面のうち、頂上部に近いあたりに偏平な粘板岩などを意図的に配したと思われる礫群があった。ただし、来年度に調査を持ち越した。また、粘板岩は遺跡のある丘陵で自然に得られる。

〈縄文時代後期の柱穴〉

「捨て場」が形成されている斜面の最上部、丘陵の頂上部に近いあたりから検出された。晩期の「捨て場」の下から検出されたものがあるので、後期に属する可能性がある。精査は来年度に持ち越した。

〈縄文時代晩期の炉跡〉

「捨て場」中にも、焼土は数ヵ所形成されており、「捨て場」でも簡単に火を焚いた場合があったと推定されたが、焼土が厚く堆積した炉跡も1基あった。

〈縄文時代晩期の埋設土器〉

調査区ほぼ中央、2-7、2-8グリッドに晩期の埋設土器が3基あった。すべて、地文に縄文を施しただけの粗製深鉢であるので、土器から時期を判断するのは困難であるが、晩期前葉遺物を含む「捨て場」土層を切って埋められているので、晩期中葉頃の可能性を考えている。すべて、口縁を上方に向けて、いくらか傾いて埋められている。掘り方は把握できなかった。

〈出土遺物〉

出土遺物の大部分は縄文時代後・晩期のものである。両方合わせると、土器片が大コンテナで約201箱、石器、石製品が大コンテナで約21箱、焼けた獣骨片が多量に出土している。縄文時代後期、晩期の遺物のうち、これまでに判明しているうちわけは、石鏃3996点（黒曜石製のものが比較的多い。近くに黒曜石の産地があるためであろうか）、石錐249点、石匙60点、磨製石斧125点、打製石斧55点、玉類8点（うち翡翠大珠の可能性のある垂飾品1点）、中空土偶5点（晩期、ほぼ完形品1点）、中実土偶片多数、動物型土偶2点、土面破片1点（縄文時代後期）、アスファルト入り土器椀1点（縄文時代後期）、などである。これらの数字は、調査時に把握していたおおよっぱなものである。今後整理が進めば、更にそれぞれの遺物の出土量は増加するはずである。

紙面が限られているので、ここでは、完形に近い状態で出土した中空土偶の出土状態についてだけ、若干説明することとする。土偶は、大洞C2式土器破片を多く含む「捨て場」土層から出土した。土偶が出土した周囲の「捨て場」には、土以外のものがあまりなかった。土偶は、土器破片などと同じ扱いを受けて、ほかの破損品とともに捨てられたわけではないのである。また、同一層中で数メートル離れたところから完形品の壺が1点出土しており、その周辺は割れていないものが置かれる（捨てられる）場所だったのかもしれない。土偶は、頸と胴体、左腕と胴体、左脚と胴体などが1～2mm離れていたが、それらは埋められた後に、土圧で次第に離れていったものと思われる。検出当初から欠損しており、周囲にもその破片がなかった部分は、右肩上部の一部と右脚付け根の突起だけである。

3. まとめ

相ノ沢遺跡のうち調査された部分は、「捨て場」として利用された場所が大部分であった。「捨て場」からは、遺物が多量に出土した。その中には石器を製作する段階で多量にできる小さなフレイクやチップの類も多くあったこと、焼土粒や植物起源の炭化物片、獣骨片などが多量に出土したことなどから、今回の調査区からは未検出であったが、付近に住居があったことが予想される。地形や「捨て場」からの距離から考えるならば、「捨て場」が形成された斜面のすぐ上にある丘陵頂上の平坦部が予想される。

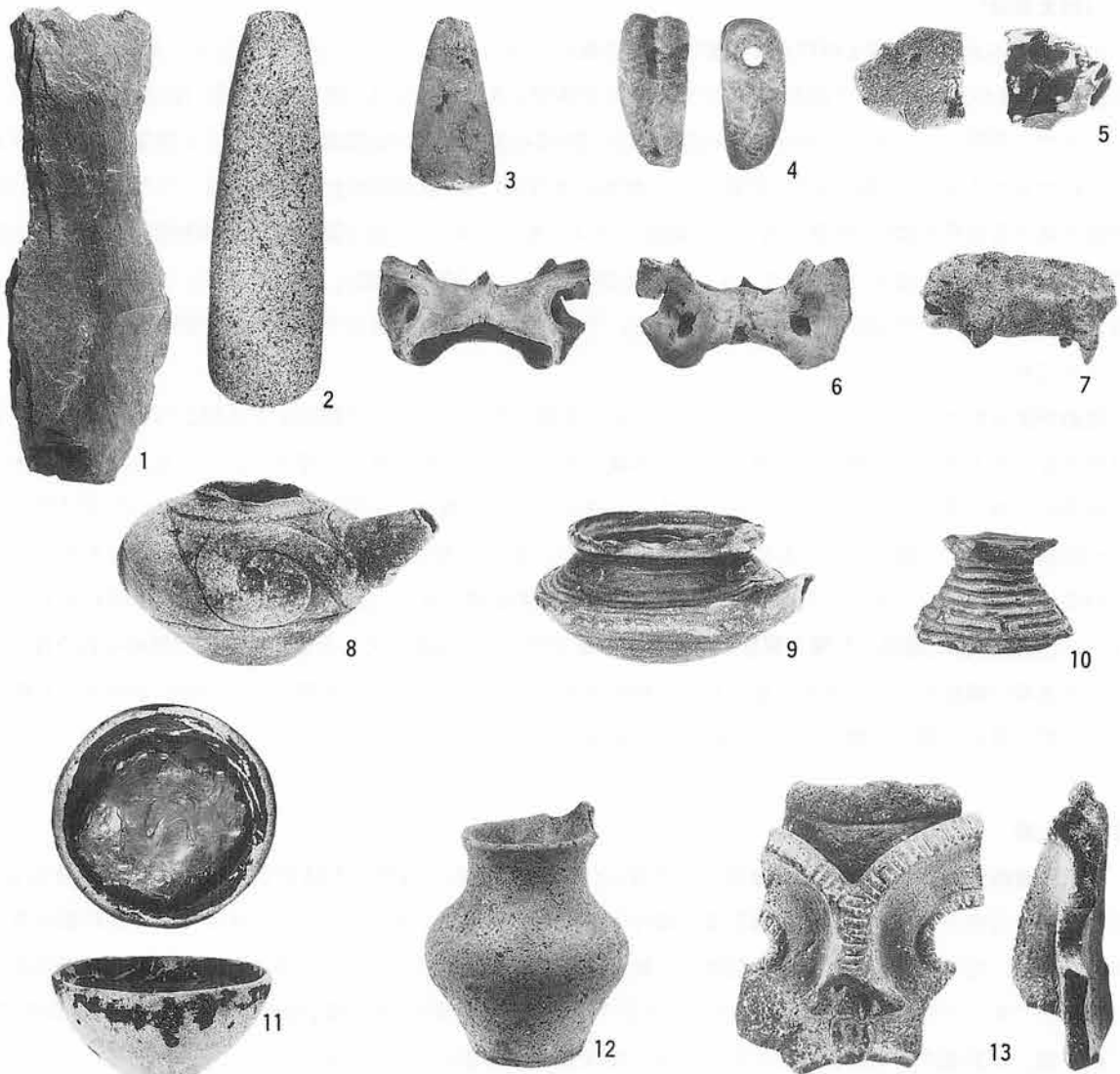
約4000点の石鏃や多量の土器片などの生活用具から、様々な生活があったことがうかがえるが、整理はこれからであるし、一部調査を来年度に残している。来年度以降、さらに相ノ沢遺跡の性質が明らかになると期待される。



捨て場土層断面



中空土偶出土状況



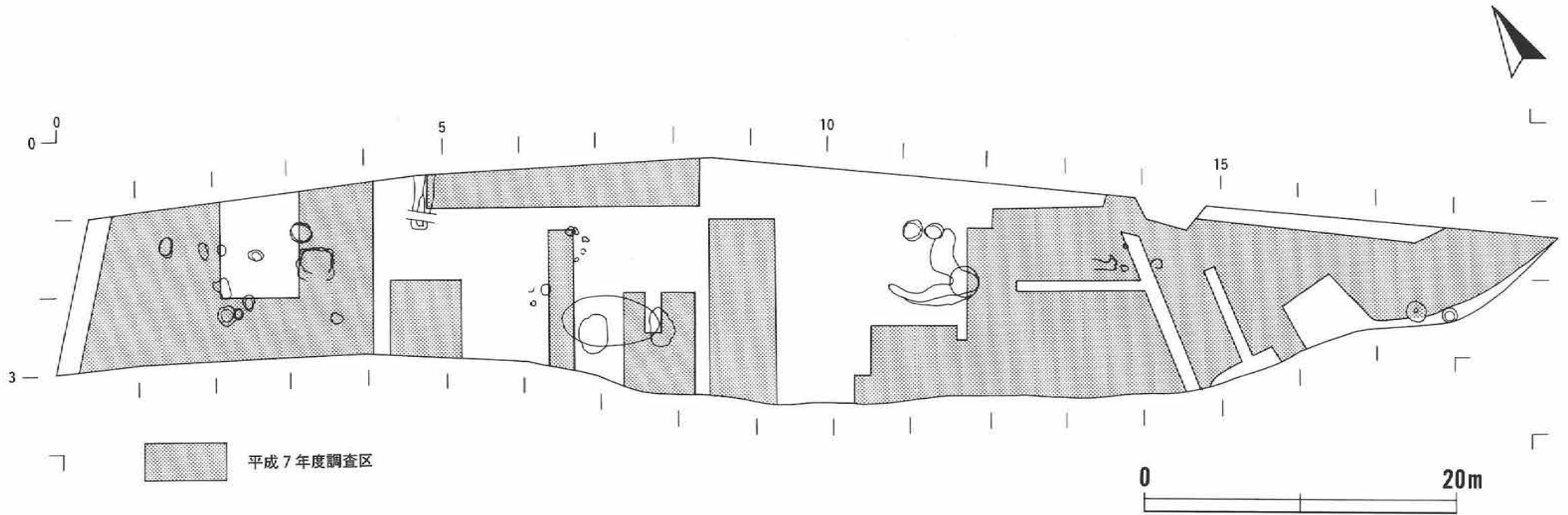
- | | | | |
|----------|---------|-----------------|----------|
| 1 打製石斧 | 5 黒曜石石核 | 8・9 注口土器（後期・晩期） | 12 壺（晩期） |
| 2・3 磨製石斧 | 6 獣骨 | 10 台付浅鉢 | 13 土面破片 |
| 4 石製装飾品 | 7 動物型土偶 | 11 アスファルト入り土器 | |

相ノ沢遺跡検出遺構・出土遺物



遺跡位置図

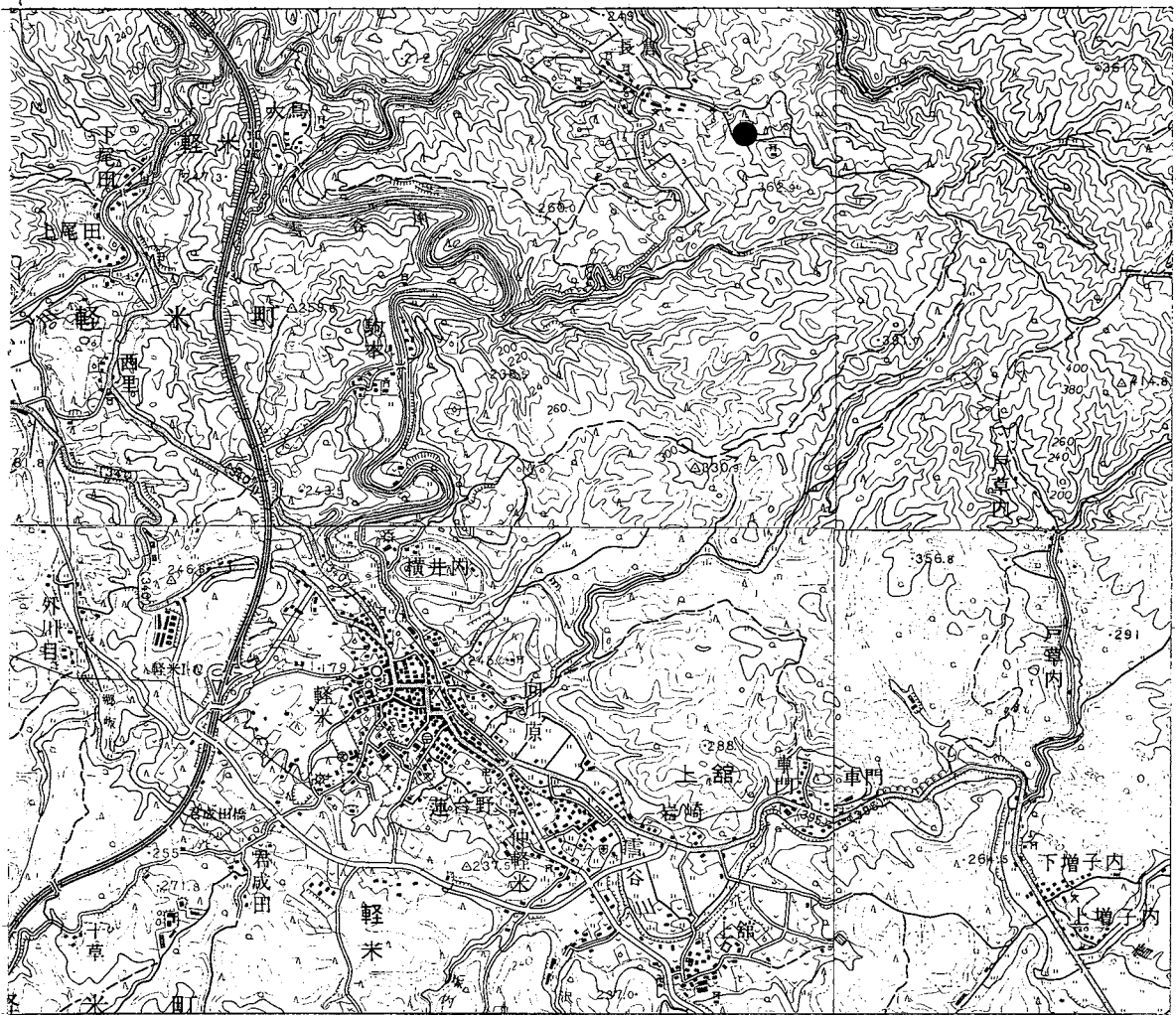
1 : 2,500



相ノ沢遺跡遺構配置図

(15) ^{なが} ^{くら} 長倉 I 遺跡

所在地	九戸郡軽米町大字長倉字一本木
委託者	岩手県二戸地方振興局二戸土地改良事業所
発掘調査期間	平成7年4月11日～9月5日
調査対象面積	2,300㎡
発掘調査面積	1,004㎡
遺跡番号・略号	I F 63-2309・NK I-95
調査担当者	中川重紀・千葉貴子・工藤利幸・高木 晃・星 雅之・村上 拓
協力機関	軽米町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 三戸

1. 遺跡の立地

遺跡は、軽米町役場の北東4.4kmに位置し、北側に舌状に延びている尾根頂部の平坦部から斜面部に立地し、丁度鞍の様になっている地形である。標高は最頂部で296m前後で、遺跡の南東方向には、明神社を祭っている標高340mの明神山がある。遺跡の現状は山林、原野であるが、以前には畑地として利用されている。

2. 調査の概要

調査は平成6年度からの継続で全調査区の中央部と西側斜面部について調査を実施した。検出遺構は、昨年度の列石・配石状遺構が、今回の調査で大型住居跡になった遺構を含め竪穴住居跡6棟、竪穴住居跡状3棟、掘立柱建物跡2棟、柱穴・柱穴状土坑120基、土坑160基、焼土1ヶ所、立石1基、遺物包含層2ヶ所である。

〈竪穴住居跡・竪穴住居跡状〉

主に調査区中央部と南側斜面部で検出し、1棟だけ西側斜面部の遺物包含層下位で検出した。

後期の住居跡は遺物包含層下位で1棟、南側の斜面部で2棟検出した。遺物包含層下位で検出した住居跡は北側が調査区外にあり、検出した部分も西側の大半が削られ、平面形は不明である。炉は地床炉で住居の中央からやや西側に寄った部分に設置したものであろう。規模は西側が削られ、不確かであるが推定で東西3.20mと思われる。南側斜面部で検出した住居跡は中央部の1棟は平面形が東西に長い楕円形状で、規模は東西3.05m、南北2.60mである。炉は住居中央に地床炉を設けている。同じく東側に検出した住居跡は一部が調査区外にあり、全容は不明であるが、円形状を呈すると思われる。規模は東西4.00mである。炉は住居の中央からやや北側に位置する部分に地床炉を設けている。

晩期の住居跡は中央部平場に1棟検出した。西側遺物包含層の上部で検出された大型の住居跡で北側部分は削られているが検出状況から、平面形は円形と推定される。規模は半径8mで壁は山側に40～15cmの石を弧状に12mほど巡らし、他の部分の一部に壁柱穴が巡っている。東側では壁に直行して溝状の土坑を間隔約1mで並列して彫り込んで出入り口を設けている。炉は住居中央部に直径1.70mの石囲い炉を設けている。柱穴は方形状に8本配置されている。また、本住居跡は、柱穴や壁柱穴および出入り口施設などの検出状況から数回の建て替えをしている。

住居跡状は壁の一部と思われる段差を大型住居跡の南側で3ヶ所検出した。縄文時代後期頃の住居跡の一部ではないかと思われる。

他には住居跡の壁際に見られる柱穴が弧状に巡って検出した住居跡や調査途中であり詳細は不明であるが中央部平場に1棟と南側の斜面部に1棟検出している。

〈建物跡〉

大型住居跡南側の斜面部に4本柱の建物跡が2棟検出された。この建物跡は昨年度の柱穴群の中で最大規模の柱穴として報告したものである。柱穴の規模は1棟が開口部で直径1.02m、深さ2.20m柱穴間の距離は4.20mである。他の1棟もほぼ同様な規模である。

〈土坑〉

西側遺物包含層区域から中央部そして南側斜面部で検出された。形状は平面形が円形で断面形がフラスコ状を呈するものが大半で、平面形が長楕円形状を呈するものが平坦部北側に2基検出されている。1基が調査区西側斜面部に検出されたが、多くは調査区中央部南側に検出されている。規模は最大で開口部直径188cm、深さ110cm、最小で開口部直径45cm、深さ21cmである。

〈柱穴・柱穴状土坑〉

調査区中央部の北側から南側そして東側に大小の柱穴や柱穴状の土坑が検出され、建物跡や竪穴住居跡の存在が想定される。柱穴の規模は、開口部径50～30cm、深さ100～20cmと様々である。

〈立石〉

調査区の西側遺物包含層中に検出され、長さ30cm、幅10cmの角柱状の石を立てて埋めている。

〈遺物包含層〉

調査区の東側と西側の斜面部に形成されている。今回調査した西側遺物包含層は昨年度の北側部分で、深さは最大で約2m程である。出土遺物は土器を主体として土製品、石器、石製品、獣骨片が出土している。

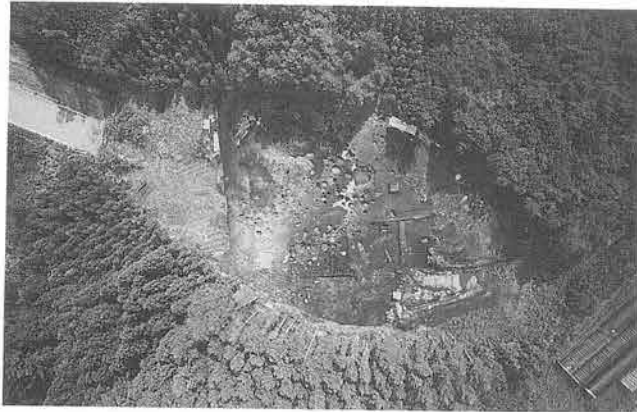
〈出土遺物〉

遺物は大きなコンテナで167箱ほどの土器と約1059点の石器・石製品と土製品320点、骨片？等が主に遺物包含層から出土している。縄文時代後期初頭から晩期初頭が主体で、完形ないし完形品に近い土器が後期中葉を中心として数多く検出された。

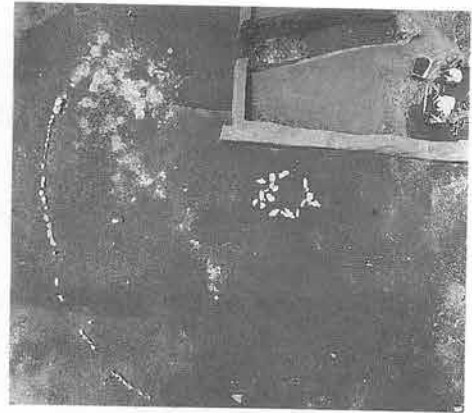
土器は縄文時代後期初頭から末葉と晩期初頭が中心で、後期の土器が多く出土し、完形品や完形品に近い土器が調査区の北側の遺物包含層中より多く出土している。器種としては、深鉢形土器・鉢形土器・注口土器・香炉形土器・壺形土器・ミニチュア土器・片口形土器・浅鉢形土器等がある。なお、極僅かであるが縄文時代早期や前期及び弥生時代の土器破片が出土している。土製品は土偶、スプーン状土製品、スタンプ形土製品、土製円盤等が、石器は石鏃、石匙、石錐、石斧、石錘、磨石、敲石、石皿等が、石製品は有孔石製品、石製円盤、石剣？等が出土している。

3. まとめ

今回は昨年度の調査区の東側と西側遺物包含層を調査しただけであり、全容は不明な部分が多いが、出土遺物から縄文時代早期と前期の一時期と縄文時代後期初頭～晩期初頭の時期と弥生時代の一時期に生活を営んでいた遺跡である。昨年度祭祀に係わる施設と思われた列石や配石状が、今回の調査で半径8mの大型住居跡の壁石や大型の炉であることが判明し、柱穴や柱穴状土坑が密集する部分も住居跡があったと推定される。また、今回の調査結果から北側の調査区外にも遺物包含層が延びている事が明らかであり、大型住居跡が構築された時期には住居の東側は広場として利用していたと推定される。何れ次年度の調査によって明らかになるであろう。



遺跡全景（上方が南）



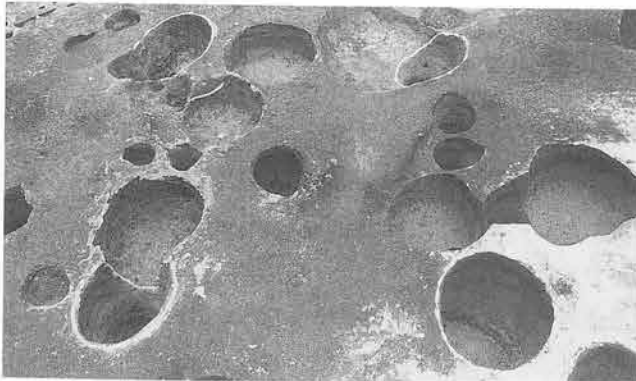
縄文時代大型住居跡（1回目）



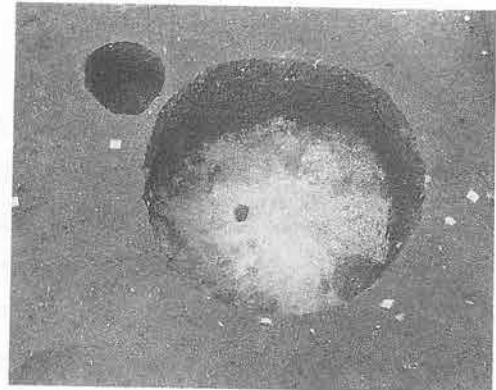
縄文時代住居跡



縄文時代大型住居跡（2回目）



縄文時代建物跡



縄文時代土坑

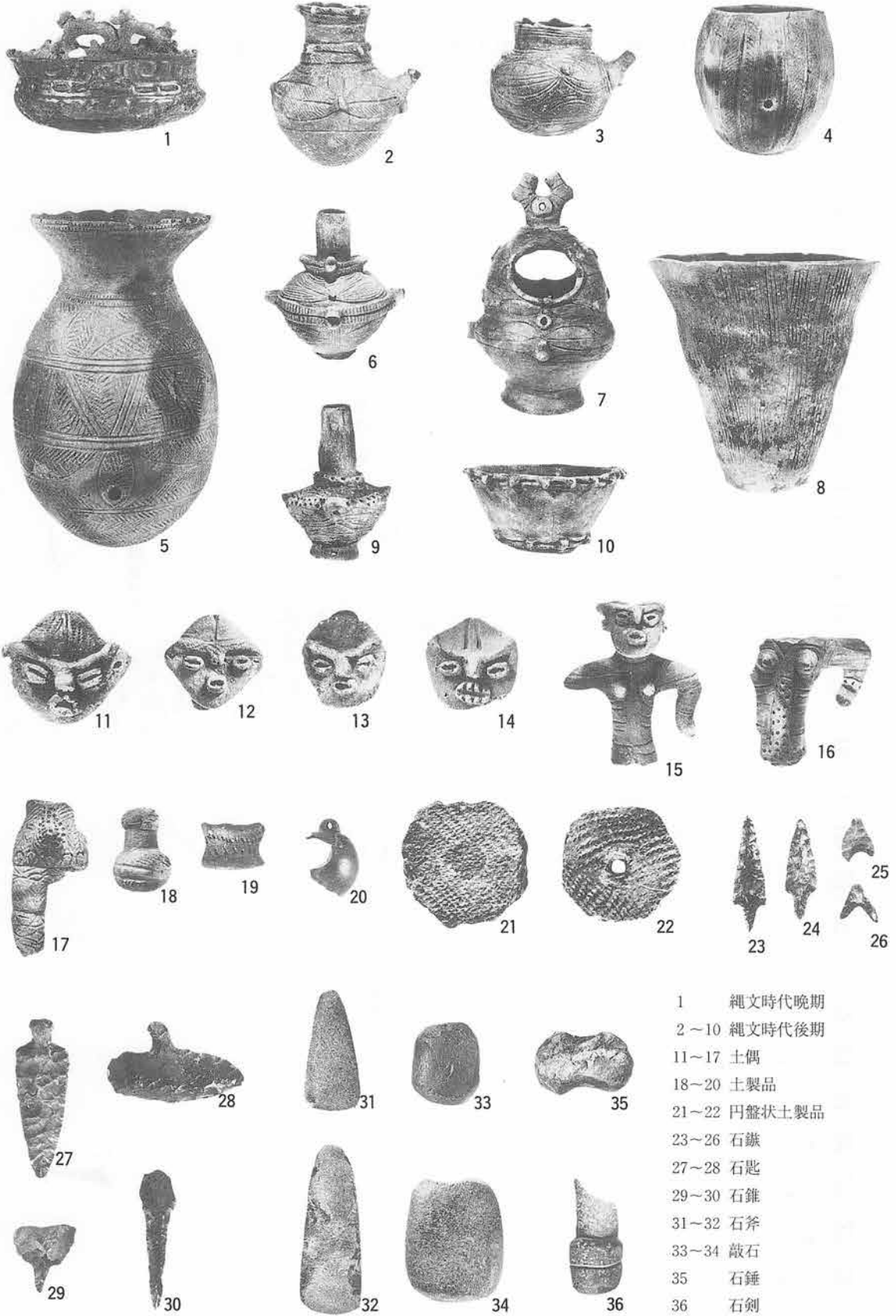


遺物包含層地区土層と骨出土状況



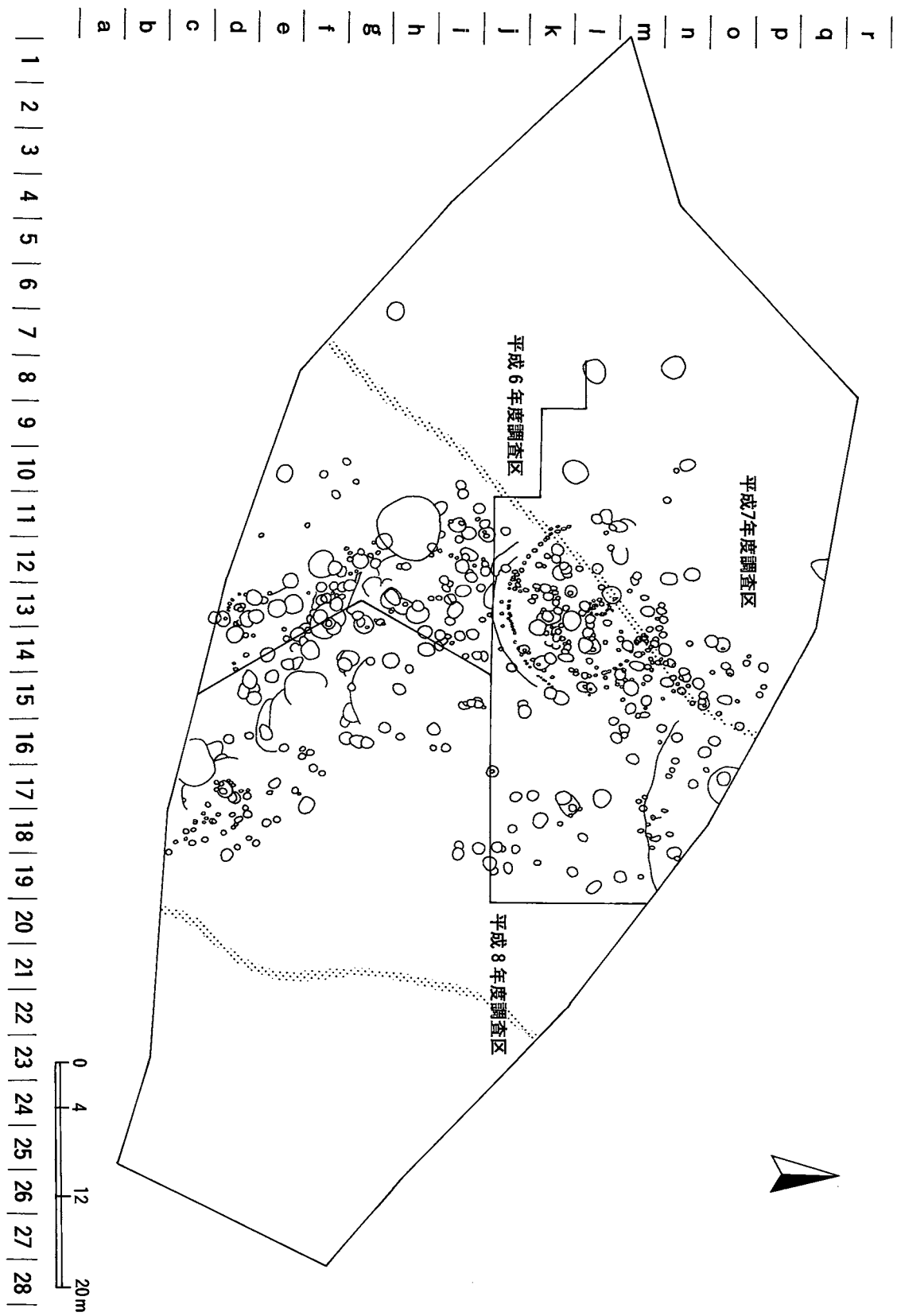
遺物出土状況

長倉 I 遺跡検出遺構



- 1 縄文時代晩期
- 2~10 縄文時代後期
- 11~17 土偶
- 18~20 土製品
- 21~22 円盤状土製品
- 23~26 石鏃
- 27~28 石匙
- 29~30 石錐
- 31~32 石斧
- 33~34 敲石
- 35 石錘
- 36 石劍

長倉 I 遺跡出土遺物



長倉 I 遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

田代遺跡は、九戸インターチェンジの南東約500mに位置し、折爪岳から東方に張り出す尾根の先端部に接続する低位段丘相当面に立地する。遺跡の標高は262～259mで、現況は宅地及び畑地である。周辺部の同様な地形面には、石神田遺跡・滝谷遺跡・柿の木遺跡等多くの遺跡が分布している。

2. 調査の概要

平成5年度からの継続調査で、今年度は国道340号線の東側に沿う部分が対象となった。なお、宅地や道路施設のため、調査は畑地となっていた尾根部分が主体となった。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡17棟、炉跡3基、土坑14基、土器埋設遺構4基、中世の竪穴住居跡1棟、時期不明の土坑1基等である。また、尾根中央部から北側にかけて遺物包含層（捨て場）が形成されており、多量の遺物が出土した。

〈縄文時代の竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡は調査区の全域から17棟が検出された。そのうち前期のものが1棟、中期のものが16棟である。調査区が狭いことや重複が著しいため、全体の規模や形状を把握できるものは少ない。

前期の竪穴住居跡は調査区北側から検出された。埋土中から円筒下層b・c様式の土器を出土していることから、前期前葉～中葉の住居であると考えられる。西側が区域外にかかっているため不明な点が多いが、検出部分から推定すると、平面形は楕円形が基調と考えられる。炉は検出されていない。

中期の竪穴住居跡は調査区全域から検出されたが、特に南半部の緩斜面に集中して分布している。内訳は中期中葉の住居が14棟、後葉の住居が2棟である。なお、詳細な検討は行っていないが、中葉の住居は円筒系土器を伴うものと大木系土器を伴うものがある。平面形は、残存する部分や柱穴の分布から円形・楕円形・不正な楕円形と推定される。規模は最小のもので直径2.8mの円形、最大のもは長軸9.5m、単軸6.3m前後の不正な楕円形を呈する。炉の形態には石囲炉・地床炉・土器片囲炉・土器埋設炉などがある。最大の住居跡は1m×1.22mの石囲炉と、その同軸線上に直径55cmの地床炉を有する。また壁溝が三重に巡ることや、貼り床の下から古期の炉跡が検出されていることから、この住居は少なくとも二回の建て替えが行われたと考えられる。

後葉の住居跡は南側から検出された。いずれも大木9式土器を伴出している。これらの住居の一部は調査区域外にかかっており、規模の詳細は不明である。住居の平面形はいずれも楕円形を基調としている。炉は石囲炉と複式炉で、複式炉は東壁に接するように設置されている。なお、石囲炉をもつ住居跡は焼失住居で、埋土下部から床面にかけて多量の炭化物が検出された。

〈中世の竪穴住居跡〉

調査区北側から中世のものと考えられる住居が1棟検出された。平面形は方形と推定され、南西部に出入り口と考えられるスロープ状の張り出しを有している。この住居跡も東半部は区域外にかかり、全体の規模は不明であるが、検出された部分の幅は南北方向に約3mで、出入り口部分の大きさは長さ0.6m・幅1.4mである。柱穴は18個確認されたが、配置は明確でない。この遺構の床面から環状の鉄製品2点、管状の銅製品1点が出土しているが、他に出土遺物がほとんどなく、詳細な時期は不明である。

〈土坑〉

縄文時代の土坑は調査区南端部と中央部を中心に14基が検出されている。平面形は円形・楕円形・隅丸長方形などがあり、断面形はフラスコ状・ピーカー状・浅鉢状等を呈する。フラスコ状の土坑のうち1基は、底径が2.4mと大型で、縄文時代中期の住居跡を切り込む形で検出された。また、中期の住居跡の床に切ら

れる形で2基が検出されている。土坑の規模は径が1 m前後のものが多く、深さは0.2m～0.7mで、0.5m以下のものが多い。時期は出土遺物などから、主に前期・中期に属すると考えられる。

時期不明の土坑は中世の竪穴住居脇から1基が検出されている。この土坑については出土遺物もなく、明確な時期を確定し得ないが、埋土の状況等から中世の住居に伴う可能性が考えられる。

〈炉 跡〉

調査区中央部から3基が検出された。いずれも石囲炉である。本来は住居跡に伴う炉と考えられるが、住居跡上部が削平され、炉のみが残ったものと考えられる。炉内の焼土の厚さは約1 cm～8 cmである。

〈土器埋設遺構〉

調査区北側から3基、南側から1基が検出された。うち2基は縄文時代前期後葉、のこる2基は中期に所属する。4基のうち前期の1基は倒立の状態で見出され、他の3基は正立の状態で見出されていた。倒立した土器内からは粉状の骨片が見出された。

〈遺物包含層〉

遺物包含層（捨て場）を構成する土層には、廃棄の単位が確認できる部分も多く、縄文時代前期末葉と中期中葉期に、中央部から北に向かって形成されたものと考えられる。層中には、土器や石器等の遺物のほかに炭化材・焼土・炭化した堅果類（クリ・クルミ・トチ）や焼けた獣骨片などが含まれていた。

〈出土遺物〉

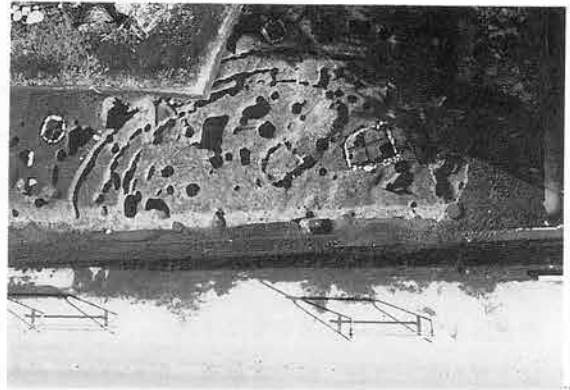
コンテナ102箱分の遺物が出土した。内訳は、土器・石器・土製品・石製品等があるが、大半は縄文土器である。土器はほとんどが縄文時代前期後葉～中期にかけてのものであるが、早期のものが僅かに出土している。石器は石鏃・石匙・磨石・磨製石斧などが出土した。また土偶・土玉・垂飾などの土製品、石冠・軽石製の浮子などの石製品が出土している。この他に、アスファルト塊が柱穴状土坑から出土しているほか、加工痕はみられないがコハクが出土している。

3. まとめ

今回の調査区は、縄文時代前期中葉から末葉、中期後葉の居住域と捨て場の一部であった。南半部は中期後葉に住居が頻りに建てられていた居住域として、北半部はおもに捨て場として利用されていた集落跡と考えられる。今回の調査区は遺跡のごく一部であったが、遺跡全体としては大規模な集落跡を構成しうると考えられよう。また、中世の竪穴住居が見つかったことで、該期の好資料も追加することができた。



縄文時代の竪穴住居跡



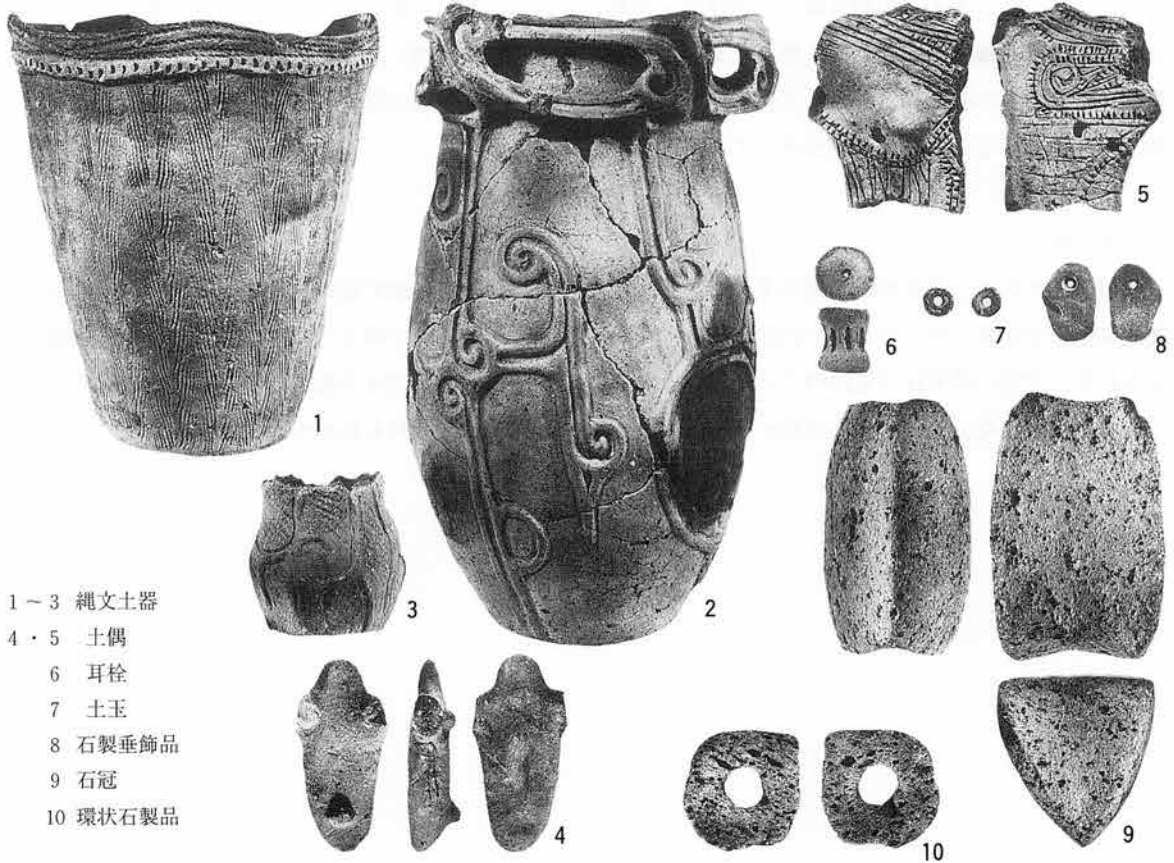
縄文時代の竪穴住居跡



土器埋設遺構

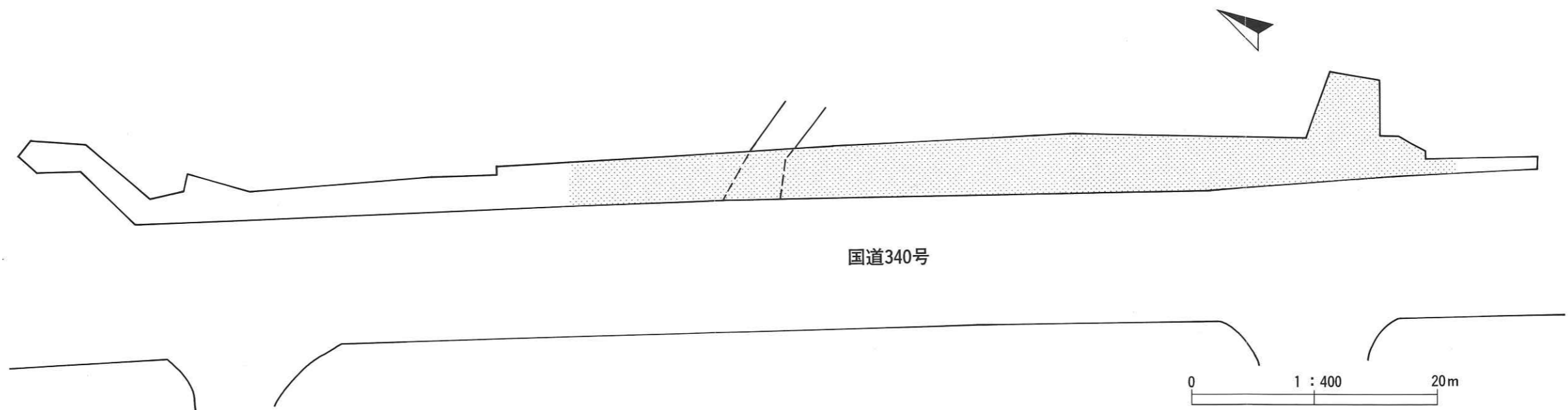
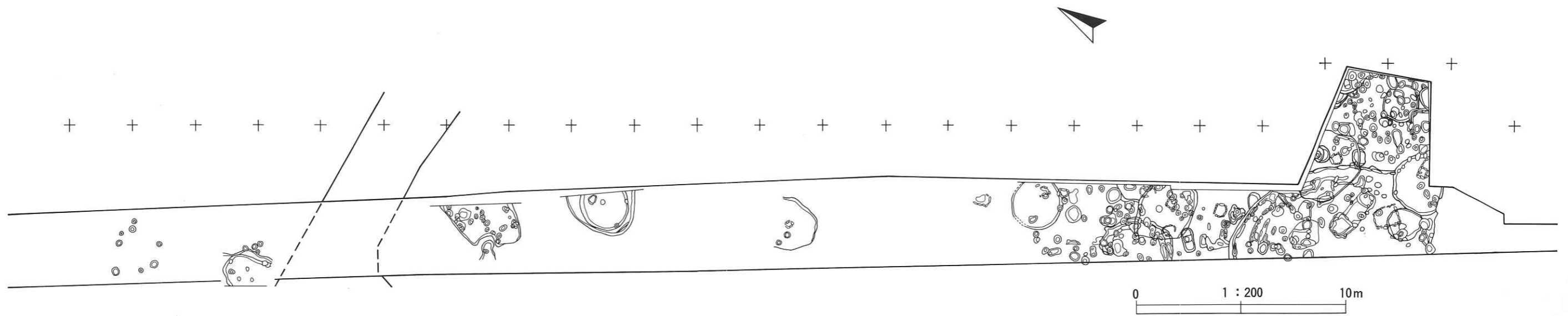


中世の竪穴住居跡



- 1 ~ 3 縄文土器
- 4・5 土偶
- 6 耳栓
- 7 土玉
- 8 石製垂飾品
- 9 石冠
- 10 環状石製品

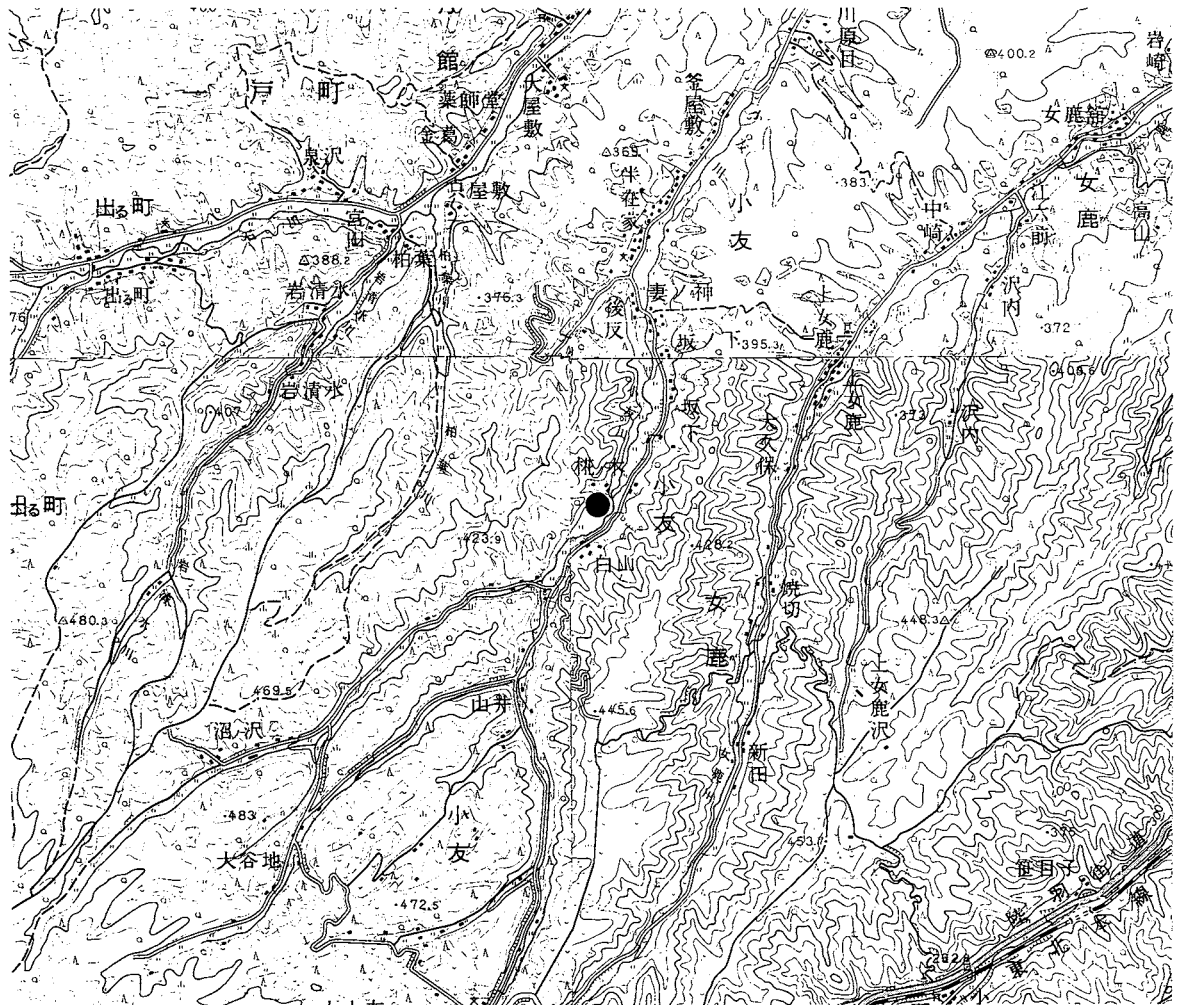
田代遺跡検出遺構・出土遺物



田代遺跡遺構配置図

(17) ^{かば} ^き 椴の木Ⅱ遺跡

所在地 二戸郡一戸町小友字椴の木76-1
 委託者 二戸土地改良事業所
 発掘調査期間 平成7年7月17日～11月24日
 調査対象面積 4,290㎡
 発掘調査面積 4,290㎡
 遺跡番号・略号 JE39-2070・KBⅡ-95
 調査担当者 吉田 充・稲垣雅宏・阿部 慎
 協力機関 一戸町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 葛巻・荒屋他

1. 遺跡の立地

柵の木Ⅱ遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線一戸駅の南西方約6.5km付近に位置し、小友川沿いに発達する段丘上にある。標高は約300mである。遺跡の現況は、畑地である。

2. 遺跡の概要

本調査区は民家を挟んで、下流側（AⅡ区、約800m²）、上流側（BⅠ区、約3,500m²）に分かれる。BⅠ区の地形は後背に丘陵をひかえ、南半分は前方の現河床側に向かって舌状に段丘が広がり、北半分は逆に現河床側から丘陵に向けて湿地帯が広がる（B3線）。後背の丘陵は新第三系の凝灰質な岩石で構成され、遺跡内の土層には、地滑りで供給された大小の岩石が混入する。基本土層では、少なくとも3枚の崩落土が識別でき、さらに他層にも少量混入している。遺跡内は、この地滑りに伴う崩落により短時間で埋められたと推測された。崩落土の直下から完形の土器が出土していること、遺構がその崩落土から再度掘りこまれていることなどからである。

基本土層はBⅠ区南半分を模式とし、Ⅰ層黒褐色土（耕作土）、Ⅱ層暗褐色土（崩落土1）、Ⅲ層黒色土（縄文時代後期包含層）、Ⅳ層褐灰色土（崩落土2）、Ⅴ層黒褐色土、Ⅵ層暗褐色土（崩落土3）、Ⅶ層黒褐色土、Ⅷ層褐色土、Ⅸ層段丘礫に区分した。崩落土は、崩落土3の分布が狭く、崩落土2が比較的広範囲（B2線）で、それに続いて崩落土1（B1線）が広く分布する。Ⅴ層・Ⅶ層の分布範囲は狭く、丘陵側だけに限られる。崩落土の基盤はⅧ層と考えられ、崩落土分布外では地山となる。なお、BⅠ区北半分は前述したように湿地帯で泥質土が堆積しているが（凡例9）、Ⅳ層以下にオーバーラップし、Ⅰ層に覆われている。この泥質土の上部付近には十和田aとみられる火山灰が介在し、その下位の泥質土からはⅢ層出土土器と同時期とみられる土器やより新しい土器が出土する（凡例10）。この泥質土の遺物出土状況は、住居跡に近接した場所および舌状に広がった段丘の先端付近に特に多い。したがって、この湿地帯の土層は基本土層のⅠ層より下位でⅢ層以上にあたる同時異相である。

検出された遺構は、竪穴住居跡が11棟、竪穴状遺構が1基、炉跡・焼土遺構が10基、土坑が17基、柱穴状土坑が122基である。次に主な遺構および遺物について述べる。

〈竪穴住居跡〉

掘込み層位と住居形態で列挙する。BⅠ区で①Ⅱ層（崩落土1）の分布範囲外で、Ⅳ層（崩落土2）で検出し、床面がⅣ層の住居跡。壁柱穴が巡り、地床炉である。地床炉には焼け焦げてない土器片で覆われているものがある。2棟。規模は長軸が（以下同じ）4.4mと5.2mである。②Ⅱ層で検出し、Ⅳ層が床面の住居跡。壁柱穴が巡るものがある。地床炉である。出入口状施設が伴うものがある。2棟。規模は6.6mと8.8mである。③Ⅳ層で検出し、床面がⅥ層の住居跡。4棟。地床炉である。柱穴の不明瞭なものは2棟。壁柱穴の巡るもの2棟、出入口状施設が伴うもの1棟。規模は4.4m～5.0mである。④Ⅱ層・Ⅳ層分布外で検出した住居跡で、壁柱穴が巡り、地床炉である。2棟。⑤AⅡ区でⅣ層相当層で検出し、Ⅳ層を床面とする住居跡。石囲炉。柱穴が検出され、壁は耕作によりほとんど破壊されている。1棟である。これらの住居跡にはさらに特徴的なことがあげられる。タイプ②・③では、ア) 検出時の埋土上部で焼土遺構が検出された住居跡が2棟、炭化材が混入しているのが2棟、イ) 床面付近と埋土上部で断続して土器が出土した住居跡が3棟。これらは遺跡内で二時期に分けて生活した痕跡とも考えることができる。遺物は、床面付近から縄文時代後期中葉に相当する土器が、埋土上部からは瘤付きの土器など後葉付近に相当する土器が出土している。

〈竪穴状遺構〉

一見竪穴住居跡に囲まれるような位置にある。Ⅱ層で検出し、Ⅳ層が床面である。規模は2.5m×2.4mである。床面では柱穴状の土坑が5基検出された。規模は平均25×22cmである。縄文時代後期に属すると考えられる土器が出土している。

〈炉跡・焼土遺構〉

BⅠ区で9基検出された。①前述のように住居跡埋土上部で検出されたもの2基、②Ⅱ層（崩落土1）で検出されたもの1基、③Ⅲ層で検出されたもの5基、④Ⅷ層で検出されたもの1基である。規模はそれぞれ長軸が20cmと80cm、25cm、25cm～75cmである。AⅡ区で石囲炉1基を検出した。長軸が10cm～20cmの垂円レキを11個用い、C字状に並べている。中心には底部付近の粗製土器が埋められていた。規模は70cm×70cmである。縄文時代後期と考えられる。

〈土坑〉

BⅠ区では8基検出された。円形状のものが多く、Ⅱ層（崩落土1）で検出した土坑は浅い（2基）。Ⅳ層（崩落土2）で検出された土坑はやや深く、Ⅵ層が床面となる（2基）。その中には埋土に十数個の礫が混入し、焦げているレキや凹石が含まれていた。南端に位置する土坑は楕円形状で2基切り合っている。埋土は他の土坑と異なり粗砂～豆粒大の礫が上流側から流れたように互層をなしていた。規模は長軸が1.6と1.9mである。前者は縄文時代後期と考えられる。

AⅡ区では9基検出された。本区の表土層は約20cmと薄く、農業機械などによる耕作痕が地山に残っている部分がある。現河床側には規模の大きい土坑があり、長軸が3と4mの円形～楕円形状である。これらの埋土は、下部に黒色土、上部に褐色土（地山）と逆転した堆積状態をしめす。中には完形の土器を含む比較的多量の土器片を含むものもある。縄文時代後期頃と考えられる。

〈柱穴状土坑〉

AⅡ区での検出が110基と多い。規模は開口部径で10～30cmである。深さは30cm前後が多い。竪穴住居の柱穴、近世民家の柱穴、農業用の柱穴などが考えられる。

〈溝状遺構〉

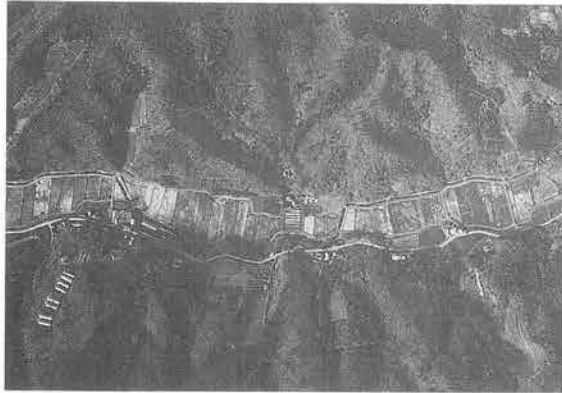
BⅠ区で検出された。丘陵の裾野に沿い、旧湿地帯につながっている。縄文時代後期と考えられる竪穴住居を掘りこみ、Ⅰ層下部で検出しているため、比較的新しい遺構と考えられる。調査区外の上流側では、山裾に沿って露出する溝状の凹地が続き、本遺構はこの溝状の凹地につながる可能性がある。遺構内にはレキ、粗砂、時に縄文土器片が入り込む。土器片は二次的なものと考えられる。長さは36cm、幅約1mである。

〈出土遺物〉

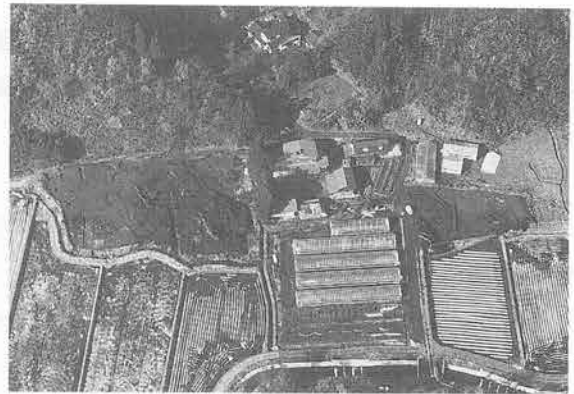
縄文時代後期を中心とした遺物が出土している。出土場所・層位は①BⅠ区の竪穴住居跡周辺のⅢ層黒色土、②AⅡ区の石囲炉周辺のⅢ層黒色土、③A区、B区ともに旧河川および湿地帯のⅡ～Ⅲ層相当層である。①ではⅡ層直下から完形土器（壺）や潰れた土器が出土している。③では、完形に近い土器や大形の土偶片が出土し、出土状況から捨て場の要素が考えられる。①では縄文時代後期中葉～後葉にかけての土器が出土している。

3. まとめ

本遺跡は縄文時代後期を中心に営まれた集落跡であることが判明した。町で実施した分布調査では鳥海地区に同時期の遺構が比較的多く分布していることが確認されているが、発掘調査は少ないため今後の調査に貴重な情報を提供できると考える。



遺跡遠景



遺跡全景



縄文時代後期の竪穴住居跡



遺物出土状況



1



2



3

1～3 縄文土器（後期）

4 土製品

5 石鏃

6 石匙

7 磨製石斧

8 凹石



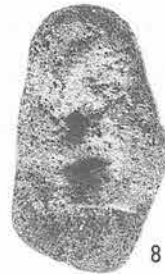
5



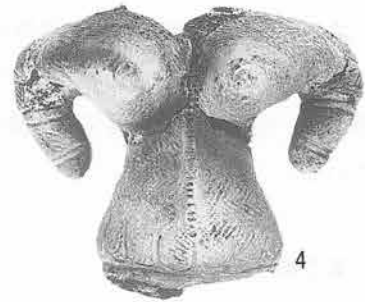
6



7

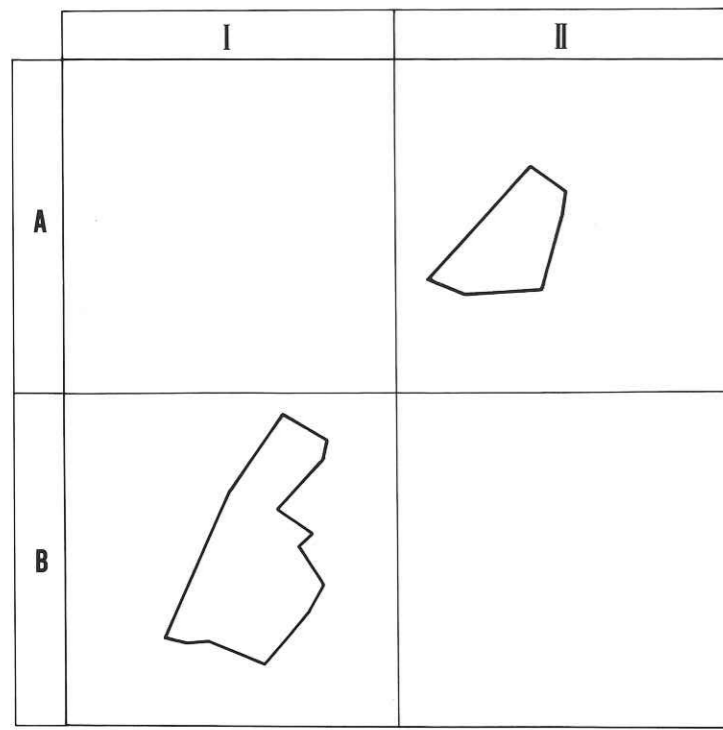


8



4

柁の木遺跡検出遺構・出土遺物

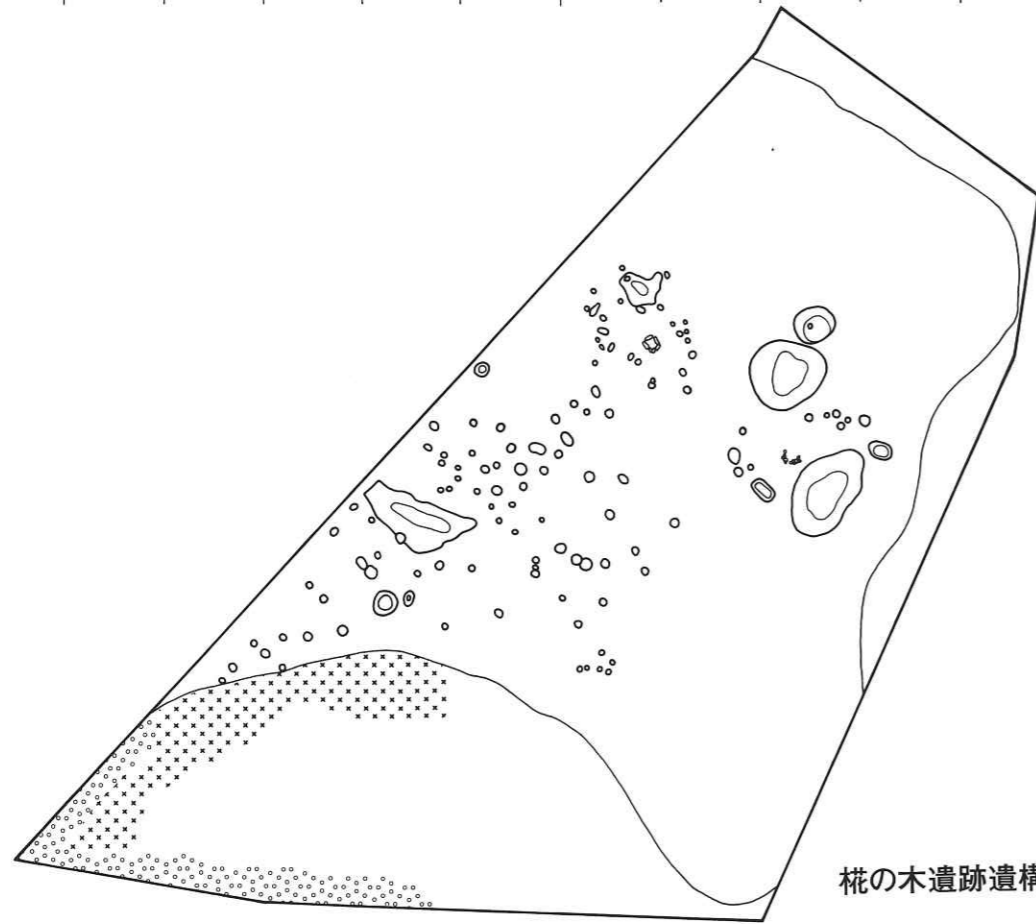


凡例

- 1 竪穴住居跡
- 2 竪穴状遺構
- 3 焼土遺構
- 4 炉跡
- 5 土坑
- 6 溝状遺構
- 7 農業用水埋設パイプ
- 8 旧河床
- 9 旧湿地帯～現湿地帯
- 10 遺物集中区
- B1 崩落土 1
- B2 崩落土 2
- B3 Ⅷ層

3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13

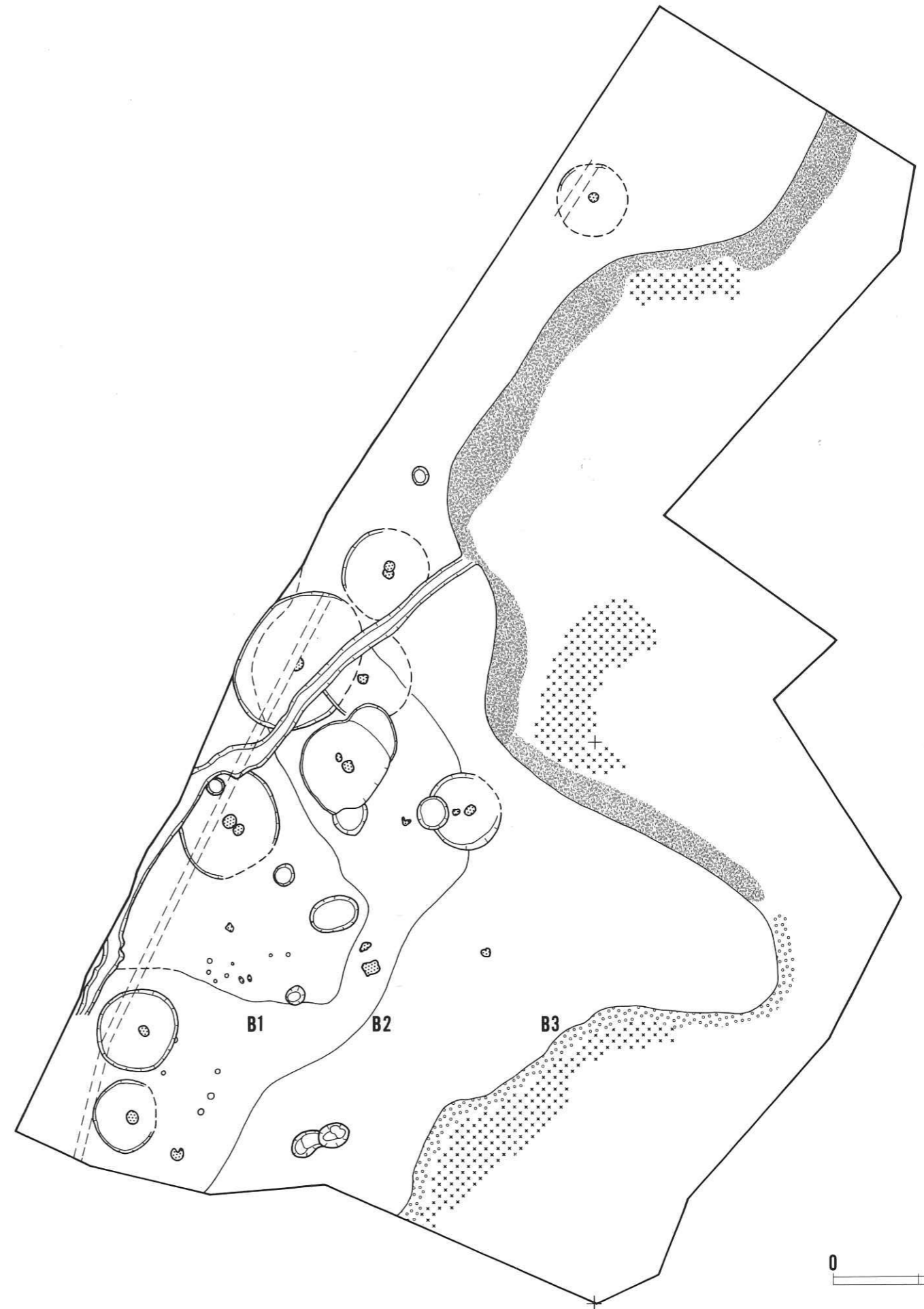
i
j
k
l
m
n
o
p
q
r



柵の木遺跡遺構配置図

6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21

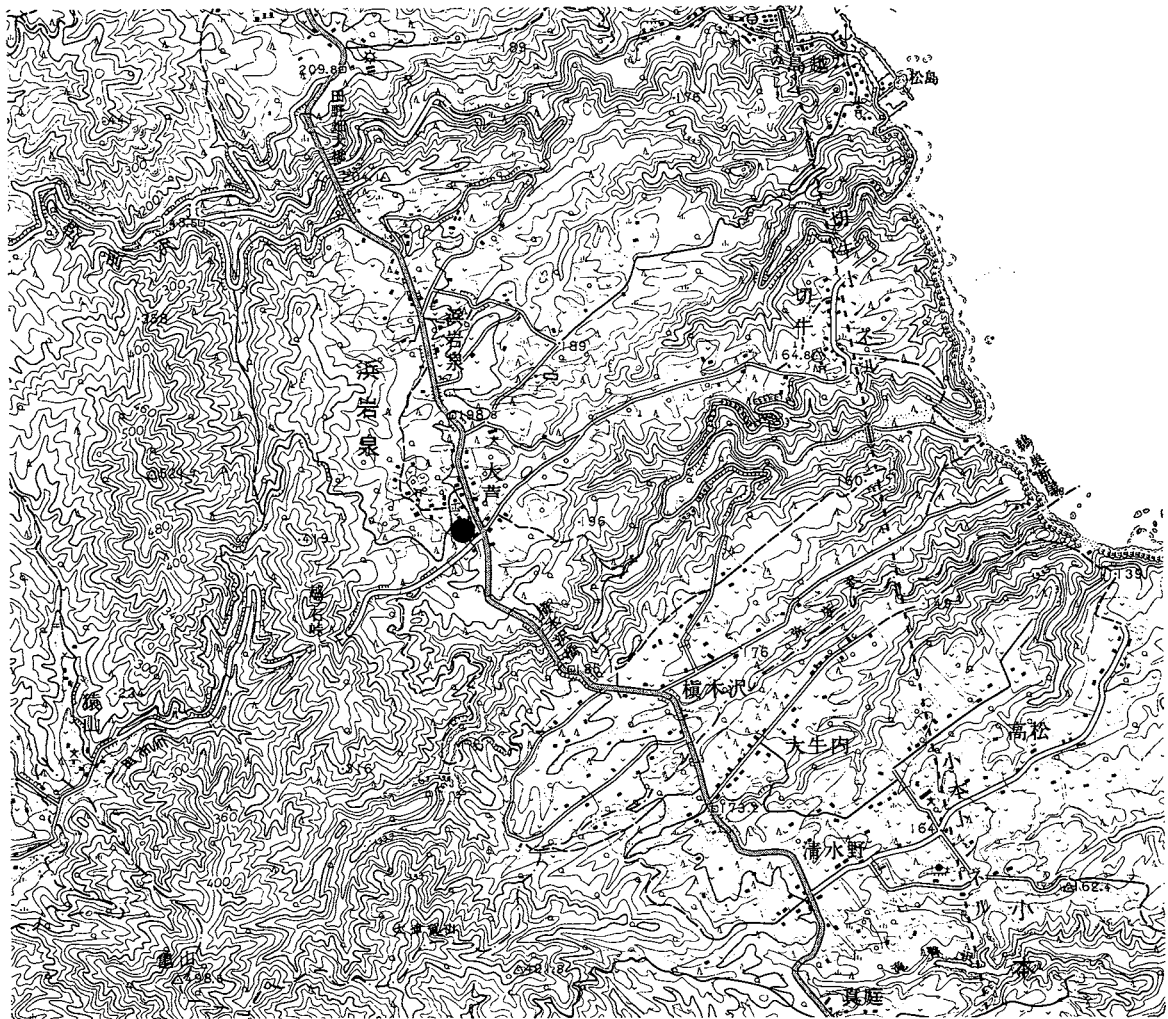
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
p
q
r
s
t
u



0 10m

はまいわいずみ
(18) 浜岩泉 I 遺跡

所在地	下関伊郡田野畑村浜岩泉39-2ほか
委託者	宮古地方振興局農政部
発掘調査期間	平成7年4月11日～8月11日
調査対象面積	2,011m ²
発掘調査面積	1,157m ²
遺跡番号・路号	KG43-0036・HI-95
調査担当者	金子昭彦・田村 聡
協力機関	田野畑村教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 岩泉

1. 遺跡の立地

浜岩泉Ⅰ遺跡は、三陸鉄道北リアス線島越駅の南西約3.7km、県道岩泉・平井賀・普代線に近い国道45号線沿いにあり、すぐ北側には、大型の遮光器土偶が出土した浜岩泉Ⅱ遺跡がある。

浜岩泉Ⅰ遺跡は、東西約400m、南北約200mの、国道の東側にも広がる大きな遺跡で、今回の調査は、ちょうど遺跡の中央に南北に伸びるトレンチを約10mの幅で入れた格好になる。遺跡は、大きく見れば標高120～200m前後の海岸段丘の上であり、今回の調査区は太平洋（北東）に向かって下がる緩やかな斜面にあり、標高は223～230mである。

遺跡の現況は林や畑、宅地であり、今回の調査区のほとんど全ては林で、木根が深く入りこんでいる割に表土が浅かったため、検出・精査は困難を極めた。

2. 調査の概要

今回の調査では、北部の一部を除き、おびただしい数（50棟以上）の竪穴住居跡が発見され、調査は来年も行われることになった。今年は調査範囲の北部と南部の、住居が比較的少ない部分を調査し、中央部は来年に残すことになった（北部約650㎡、南部約500㎡）。

今年調査した遺構は、竪穴住居跡17棟、竪穴住居状遺構2基、土坑2基、土器埋設遺構1基である。これらは全て縄文時代中期後葉～末（大木8b～10式）のものと思われる。また、北部では、江戸時代末～明治時代の掘立柱建物跡と思われる柱穴群や墓壇も検出されているが、掘立柱建物跡（柱穴群）は中心から外れていて不明な点が多いので詳述しない。墓壇は、埋土から人頭大の礫が多く出土し、出土した人骨は無縁仏として調査区域外に再埋葬したが、キセルなどの副葬品の出土は無かった。

〈竪穴住居跡〉

17棟のうち15棟が南側の調査区から、2棟が北側の調査区から検出された。出土遺物が非常に少ないので時期を特定するのは難しいが、いずれも縄文時代中期後葉～末（大木8b～9式）になる可能性が高い。

平面形は、一部楕円形に近いものもあるが、ほとんど全て円形である。規模は直径3.5mが平均で、4mを越えるものが3棟、3m以下のものが5棟ある。

炉は、調査できたものは全て石囲炉である。形は丸みを帯びた方形がほとんどで、大きさは一辺の長さが30～40cm程度のものが多いが、大きな住居には大きな炉があり、長さが1m近いものもある。炉の位置は、住居の真中にあるものと中央から外れていずれかの壁に寄っている（北壁が多い）ものがある。炉が北東の壁に寄っている住居の中には、複式炉の前庭部のような土坑状の浅い落ち込みを持つものもある。住居の床はほとんど硬くないが、炉の周りの一部に非常に硬く踏みしめられている部分を持つ住居が幾つかある。この場合、踏みしめられている部分は炉の中にある火烧面（焼土）とちょうど反対側になっている。

柱穴が見つかった住居は、ほとんどない。これは、木根などで壊されているせいとも考えられるが、大きな住居3棟からは見つかったことから、元々なかったのかも知れない。

その他、1棟からは埋甕が検出された。口径は20cmで、どういうわけか胴の途中で欠損していた。また、石器の材料となる剥片類が、埋納されていたかのように1棟の住居の炉端の小穴からまとめて出土したが、この小穴は根穴と区別がつかないような貧弱な穴で、埋納施設と言えるかどうかかわからない。

4棟の住居の埋土から炭化材や焼土が検出された。しかし、これは、発見された場所が床のすぐ上でなく、また炭化材も小さく焼土も少しであることから、家に住んでいる最中に火事にあっただけではなく、人が住まなくなって壊れかけている時に火がついたものと思われる。

〈竪穴住居状遺構〉

形も大きさも竪穴住居跡とほとんど同じだが、炉を持たないものである。北部から2基検出された。ほぼ円形で直径2.5m～3m、隣り合う住居と非常によく似ているが、これらの住居と違って、埋土に炭化物がなく、床面に凹凸がなく、人が住んだ感じがしない。時期を特定する材料がないが、縄文時代中期後葉～末の可能性はある。

〈土坑〉

今年調査した所では非常に少ない。竪穴住居跡が検出されていない最も北の部分に2基存在する。最も北の急斜面の下に見つかったのは、直径90cmの円形で深さが70cmある。もう一つは、この急斜面のすぐ上にあり、開口部は直径1mの円形で底面の直径2mのフラスコ形土坑で、深さは2mある。注目すべき点は、この土坑の底面近くの壁際から、おそらく堅果類と思われる炭化物片がわずかに出土していることであり、この土坑の用途を考える上で重要な材料となろう。両方の土坑とも、出土遺物は非常に少ないので時期の特定は難しいが、縄文時代中期後葉～末の可能性はある。

〈土器埋設遺構〉

調査区南部から1基検出された。口径が30cm、高さ40cmの深鉢形土器（縄文時代中期後葉、大木9式）が直立した形（正位）で見つかり、底は打ち欠いてあった。中からは琥珀（製品？）が出土したが、これは副葬品の可能性があろう。今回の調査では住居内の埋甕も検出されているが、この埋甕は、埋設土器のすぐ側に検出されたことと住居が検出しにくかったことから考えると、住居に属するものではなく土器埋設遺構であった可能性もある。

〈出土遺物〉

コンテナ7箱分の土器・土製品、石器・石製品が出土している。遺構の数の割に遺物が非常に少ない。

土器は、コンテナ約4箱ほどの縄文土器で、大部分は中期後葉～末の土器だが、晩期後半らしいものもわずかにある。

土製品は、円盤状土製品が数十点あるだけで、土偶などは出土していない。

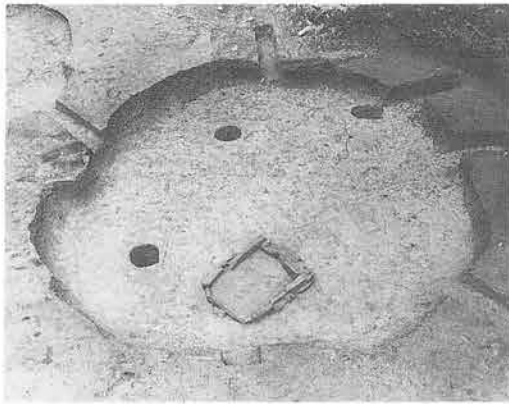
石器は約300点出土しているが、このうち200点は磨石で、遺構の内外を問わず出土し、その他、磨製石斧が約10点、石鏃約20点、剥片石器数十点と、剥片石器が非常に少ない。また、石製品には大型の石棒がある。

その他、琥珀、直径5cmほどのアスファルトの塊なども出土している。

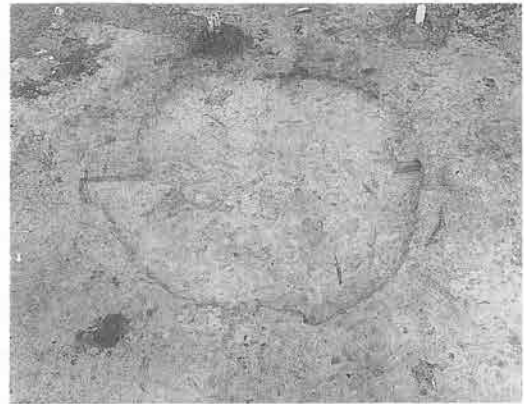
3. まとめ

今回の調査で、浜岩泉I遺跡は縄文時代中期後葉～末の大集落跡であることがわかった。また、わずかだが縄文時代晩期後半の土器も見られることから、今後の調査でこの時期の遺構が検出される可能性もある。

ところで、集落の規模の割に遺物が非常に少ないのが気になる。調査範囲外に大規模な捨て場が存在することも考えられるが、この時期は、廃絶された竪穴住居を捨て場として利用するのが一般的で、住居から遺物が多量に出土するのが通常である。今回の調査でまとまった出土を見た磨石は、遺構の内外から無造作に放置されたような状態で出土し、出土の少ない剥片石器の材料となる剥片類は、埋納されていたような状態でまとまって出土した。磨石は、いわゆる浜石を利用したもので、海岸にいけば容易に手に入るものである。これらの事実から推測すると、本遺跡の遺物の出土状況は素材の入手し易さ、にくさを表しており、手に入りにくいものは大事に使い、次の集落に引越す時大切に持っていったのではないかとすることも考えられよう。



竪穴住居跡



竪穴住居状遺構



フラスコ形土坑



埋設土器



石棒の出土状況



1



2



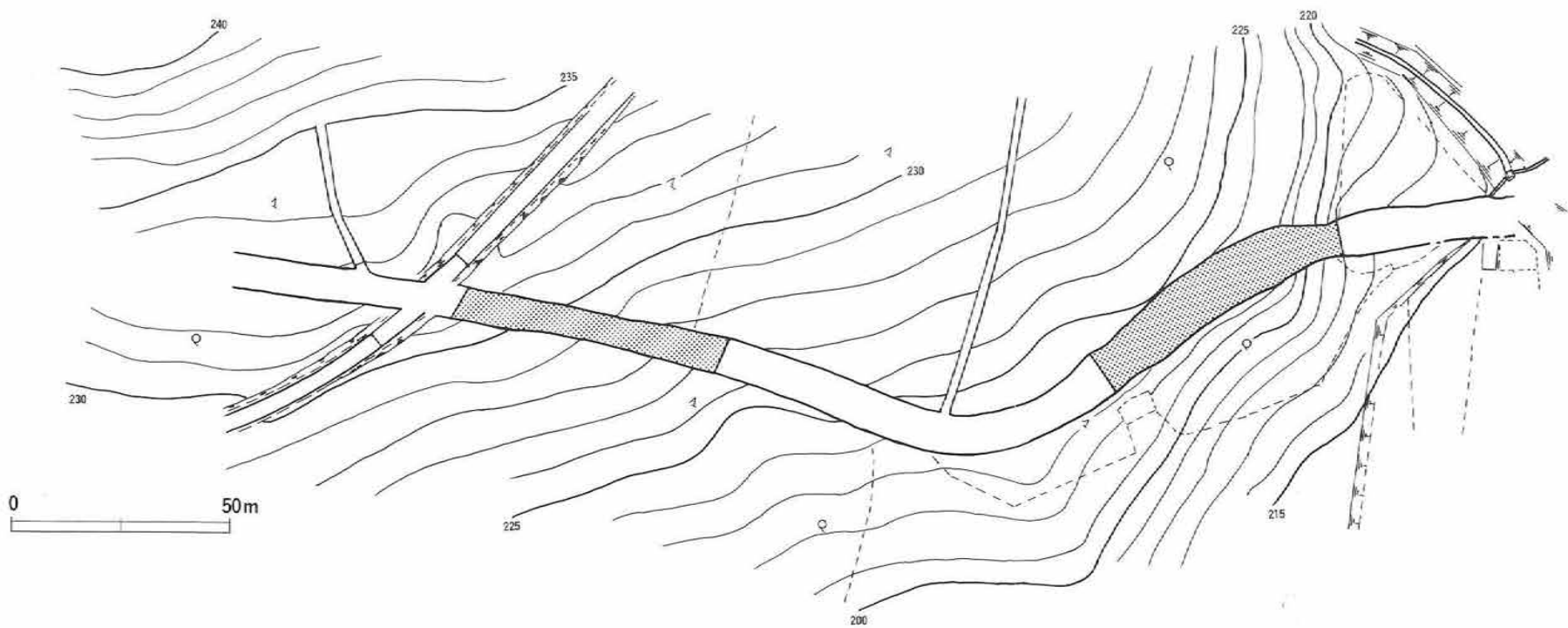
3



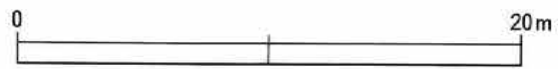
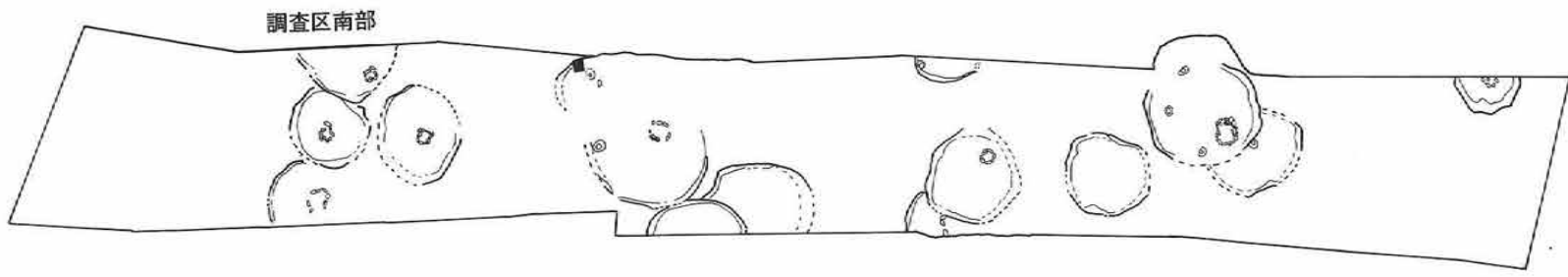
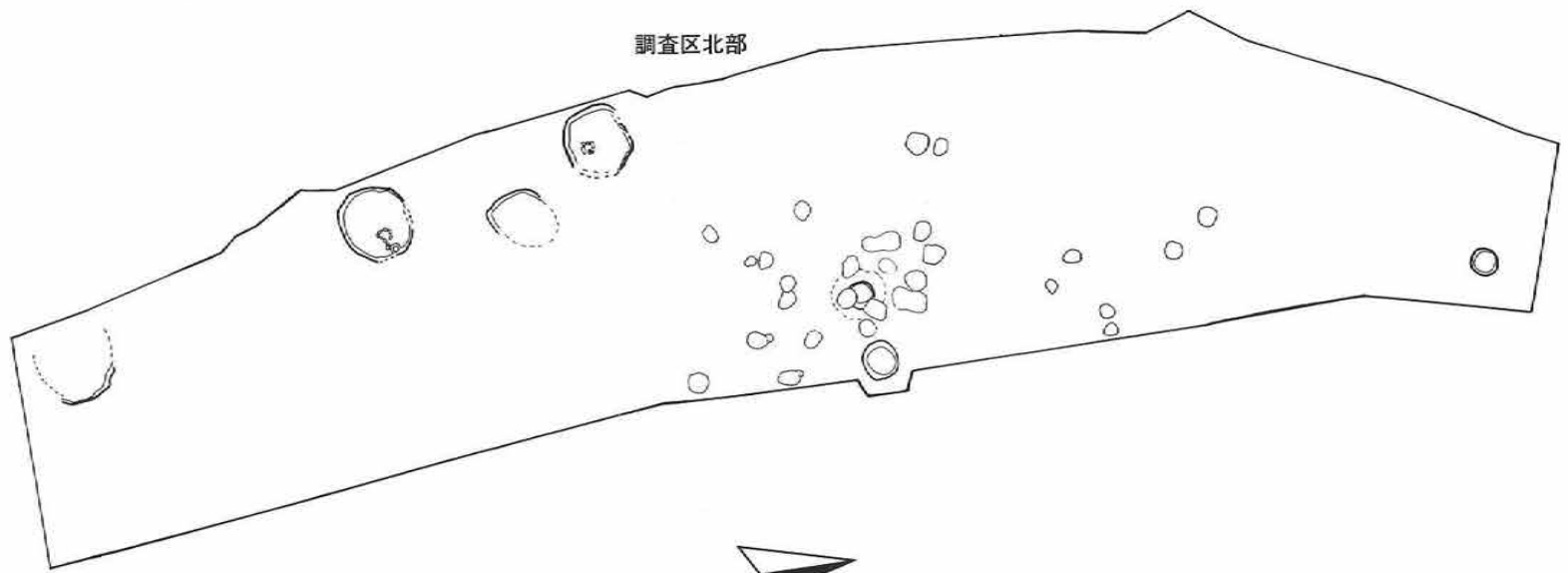
4

1～3 縄文土器 (中期後葉)
4 異形石器

浜岩泉 I 遺跡検出遺構・出土遺物



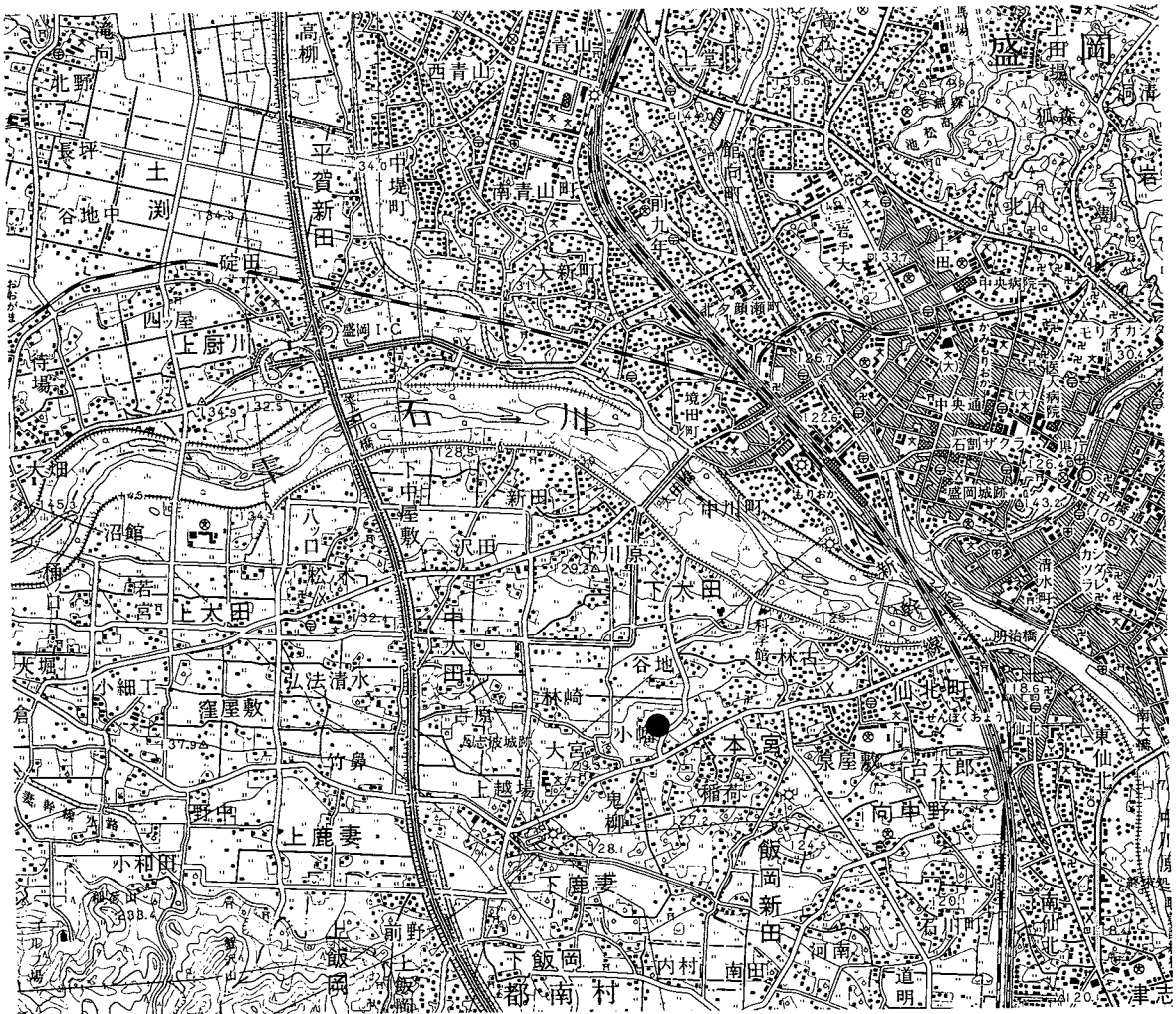
- 今年度調査範囲
- 埋設土器



浜岩泉 I 遺跡遺構配置図

こはば
(19) 小幅遺跡第4次

所在地 盛岡市本宮字小幅49ほか
委託者 盛岡市盛南開発課
発掘調査期間 平成7年4月7日～9月6日
調査対象面積 15,000m²
発掘調査面積 14,143m²
遺跡番号・略号 LE16-2009・OKH04
調査担当者 酒井宗孝・中村直美
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡

1. 遺跡の立地

小幅遺跡は、東日本旅客鉄道盛岡駅の南西約2.3kmに位置し、雫石川によって形成された、標高126m前後の沖積段丘上に立地する。現河床面からの比高は6～6.5mで、現状は水田である。

本遺跡の西方約500mには、延暦22年(803)坂上田村麻呂によって造営された志波城があり、周辺には志波城との関連が考えられる林崎遺跡・熊堂B遺跡・矢盛遺跡などが分布する。

2. 調査の概要

前年度からの継続調査で、今年度は第4次調査として前年度調査区の東側の地区が対象となった。検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡8棟、竪穴状遺構1棟、掘立柱建物跡4棟、土坑1基、溝跡1条、円形周溝1基、時期不明の竪穴状遺構2棟、井戸跡2基、近世～近代の民家跡3ヵ所、カマド状遺構3基、竪穴状遺構16棟、井戸跡2基、土坑54基、溝跡20状等である。

〈竪穴住居跡・竪穴状遺構〉

平安時代の竪穴住居跡及び竪穴状遺構は、いずれも地山がシルト質の地区から検出された。なお、埋土中に灰白色の火山灰が堆積するものはない。平面形はほぼ正方形を基調としており、規模は最大のもので5.5m×5.3m(床面積約24㎡)、最小のものは2.2m×2m(約3.4㎡)である。

カマドの位置は、西側に設置されるものが7棟(南西2・西1・北西4)、北壁に設置されるものが1棟で、いずれも壁の中央部に設けられている。残存状態の悪いものもあるが、多くは楕円形の礫を心材としてこれを粘土質シルトで覆った構築方法がとられている。煙道部の構造は、1棟を除いて刳り貫き式である。柱穴が検出された住居跡はない。床は、粘性を持つシルトによって貼床が施され、平坦で堅くしまる。

最大規模の住居跡は、床面の東北部に鍛冶炉を有している。炉は70cm×30cm、深さ約10cmの不整形な浅いくぼみで、南側には炉に接する位置に、金床石と考えられる扁平な巨礫が置かれている。周辺部からは量は少ないものの、フイゴの羽口片や粒状滓・鍛造剥片が出土している。また、カマドの反対側の壁に、不整な半月状の段を有する住居跡が1例見られた。

平安時代の竪穴状遺構は、住居跡に隣接して検出した。2.3m×3.2mの長方形でカマドはない。南西隅からは、大小の須恵器の坏形土器が28枚伏位に重なった状態で出土している。

時期が特定できなかった竪穴状遺構のうち、調査区の中央部から検出されたものは、一辺3.5mの正方形を呈し壁に沿った柱穴をもつ。出土遺物がなく詳細は不明であるが、形態は平安時代末期から中世にかけての住居跡に類似する。

調査区北東部から検出されたものは、4.7m×3.8mの隅丸長方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、カマド・柱穴とも検出されていない。この遺構の埋土下部からは、和鏡が出土している。和鏡は約半分を欠損しているほか、全体に錆化が進んでおり文様の判読はできない。銅製で直径は9.5cm、厚さ2～4mmの、縁の高さは8mmである。縁の内側には、直径2mmの小孔が穿たれている。埋土からは、北宋銭の皇宋通寶が出土しているほか、須恵器と土師器の小破片が出土している。また、床面からは、工具として使用されたと考えられる石皿や凹石・たたき石等が出土しており、なんらかの作業場的な性格を持った遺構と推定される。

〈掘立柱建物跡〉

形態から平安時代の遺構と考えられる建物跡は4棟検出された。いずれも竪穴住居跡と同様の分布を示すが、住居跡からはいくぶん離れて占地している。1棟は3間×2間(6.5m×5m)、他の3棟は2間×2間(4.3m×4.3m・3.3m×3.3m・5.3m×5.3m)でこの内2棟は中央に東柱を有する総柱の建物である。

軸方向は各々異なるが、近接する住居跡には同方向のものもあり、これらとの関連が考えられる。

〈円形周溝〉

住居跡が分布する地区から検出された。時期を決定できる遺物はないが、埋土の状態が周辺の住居跡と類似することから、平安時代の遺構と考えられる。上幅60～65cm、下幅25～30cm、深さ30～40cmの溝が直径3.7mの円形に巡る。底面からは、工具（鋤？）痕と考えられる小穴が2列に並んで検出された。なお、埋土中から須恵器坏の小破片が1片出土している。

〈土坑〉

平安時代の土坑は1基だけである。1.5m×1.3m、深さ15cmの長方形を呈する。底面には、住居跡と同様に貼床が施され、下部には不整形な掘り方をもつ。

時期は不明であるが、調査区の北側から、馬の顎骨及び歯を伴う土坑が検出された。90cm×80cm、深さ23cmの規模をもつ不整形楕円形の土坑で、規模から推定して頭部のみを納めたものと考えられる。

この他の土坑の多くは、出土した陶磁器片等から近世・近代の遺構と考えられる。

〈溝跡〉

検出された21条のうち、平安時代の溝跡は1条である。幅20～60cm、深さ5～40cmで、一部途切れる部分もあるが、調査区の南西部から北東部にかけて約165mにわたってほぼ直線的に延びている。底面には、円形周溝に見られたものと同様の工具痕が観察された。埋土から須恵器・土師器・赤焼き土器が出土しているほか、中部には十和田a降下火山灰の堆積が見られた。

この他の溝跡は、時期を特定できないものもあるが、重複関係等から近世・近代に属するものが多い。

〈井戸跡〉

4基検出されたが湧水が激しく、完掘できたものは1基だけである。出土遺物から時期が特定できたものは2基で、近世に属し、隣接する民家跡に付随する井戸と考えられる。時期の詳細は不明であるが、南東部から検出されたものは、上部が3.5m×2.7mの隅丸長方形、下部は直径1.6mの円形を呈し、最深部で90cmの深さを持つ。腐食のため詳細な大きさは不明であるが、底面直上には井戸枠として曲物が埋め込まれていた。また、埋土の下部からは漆器の椀が出土している。

〈民家跡〉

調査区中央部と西側及び北側の3ヵ所から検出された。いずれも掘立柱式の建物である。個々の建物については検討していないが、中央部と西側のものは母屋とこれに付随する小規模な建物で構成されており、西側と北側のものからは、カマド状遺構が検出されている。また、中央部の民家跡には、底面に寛永通寶を伴う柱穴が2基あった。なお、柱穴の分布状況から2～3回の建て替えが行なわれているものと考えられる。

〈出土遺物〉

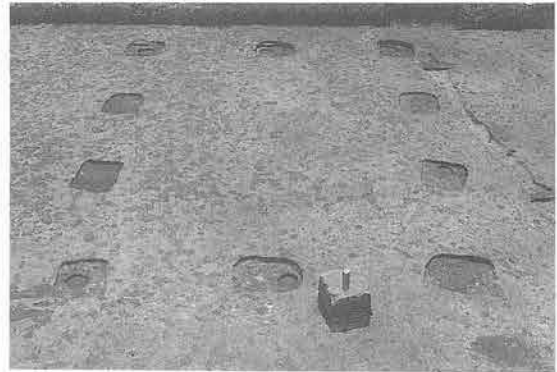
遺物の大半は平安時代の土器である。須恵器・土師器・赤焼き土器があるが、須恵器がやや多い。また、量は少ないが、鉄鏃、刀子等の鉄製品が住居内から出土している。近世民家跡の周辺からは、肥前産・相馬産・瀬戸産の陶磁器等が出土している。

3. まとめ

昨年度からの調査で、小幅遺跡は平安時代の集落を主体とする遺跡であることが確認された。しかし、今回の調査で得られた資料には、住居跡の構造や出土した土器の特徴等で、昨年度とはいくぶん異なる要素も多くみられ、今後の検討課題となった。



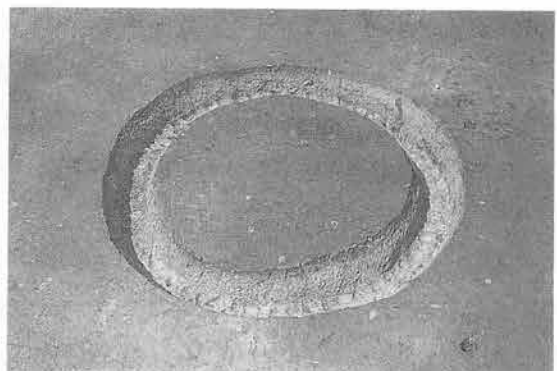
平安時代の竪穴住居



平安時代の掘立柱建物跡



土器出土状況



円形周溝



7



1



2



3



4



5



6



8



9



10



11



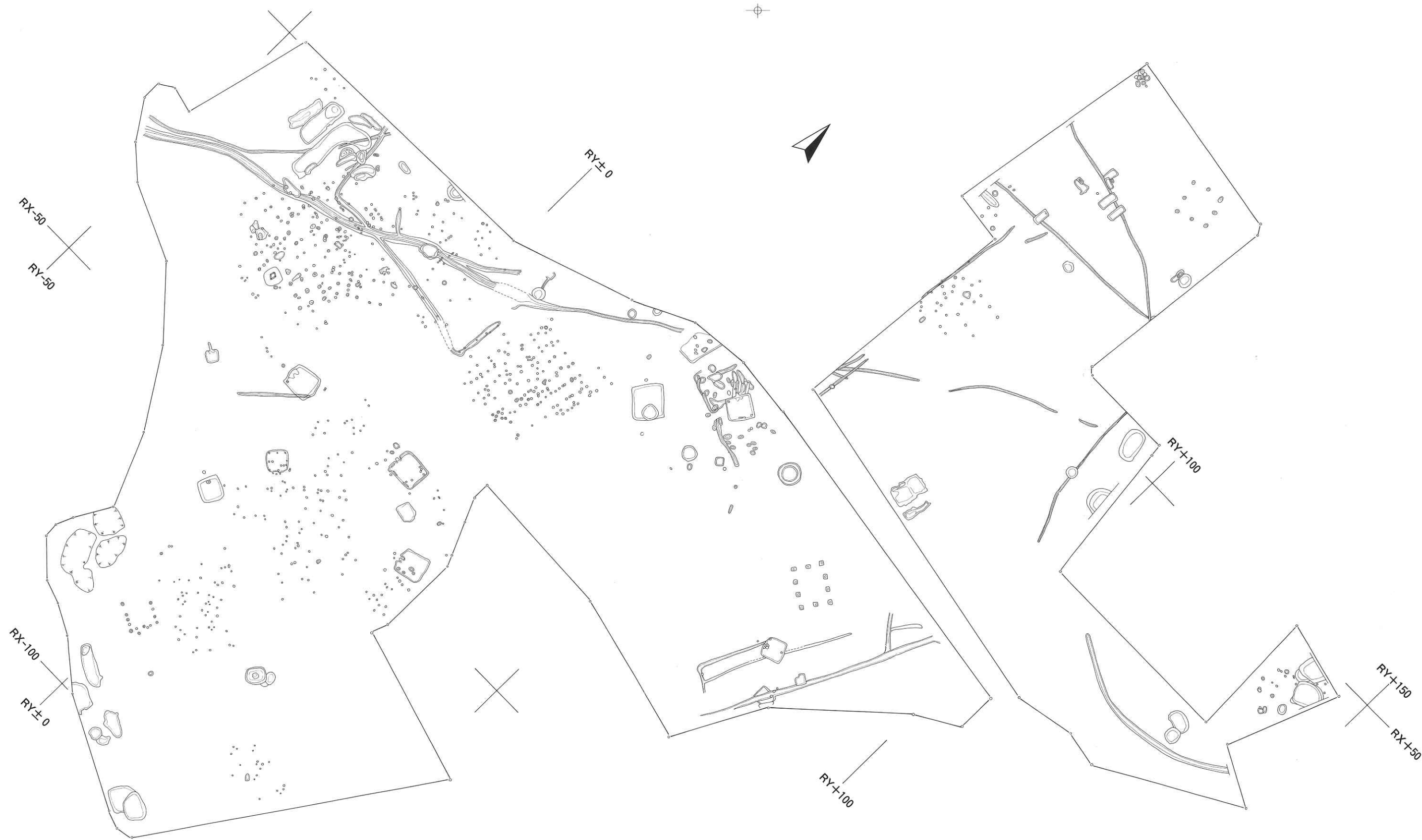
12



13

- 1～6 須恵器坏
- 7 土師器甕
- 8～10 土師器坏
- 11 和鏡
- 12 皇宋通宝
- 13 漆器

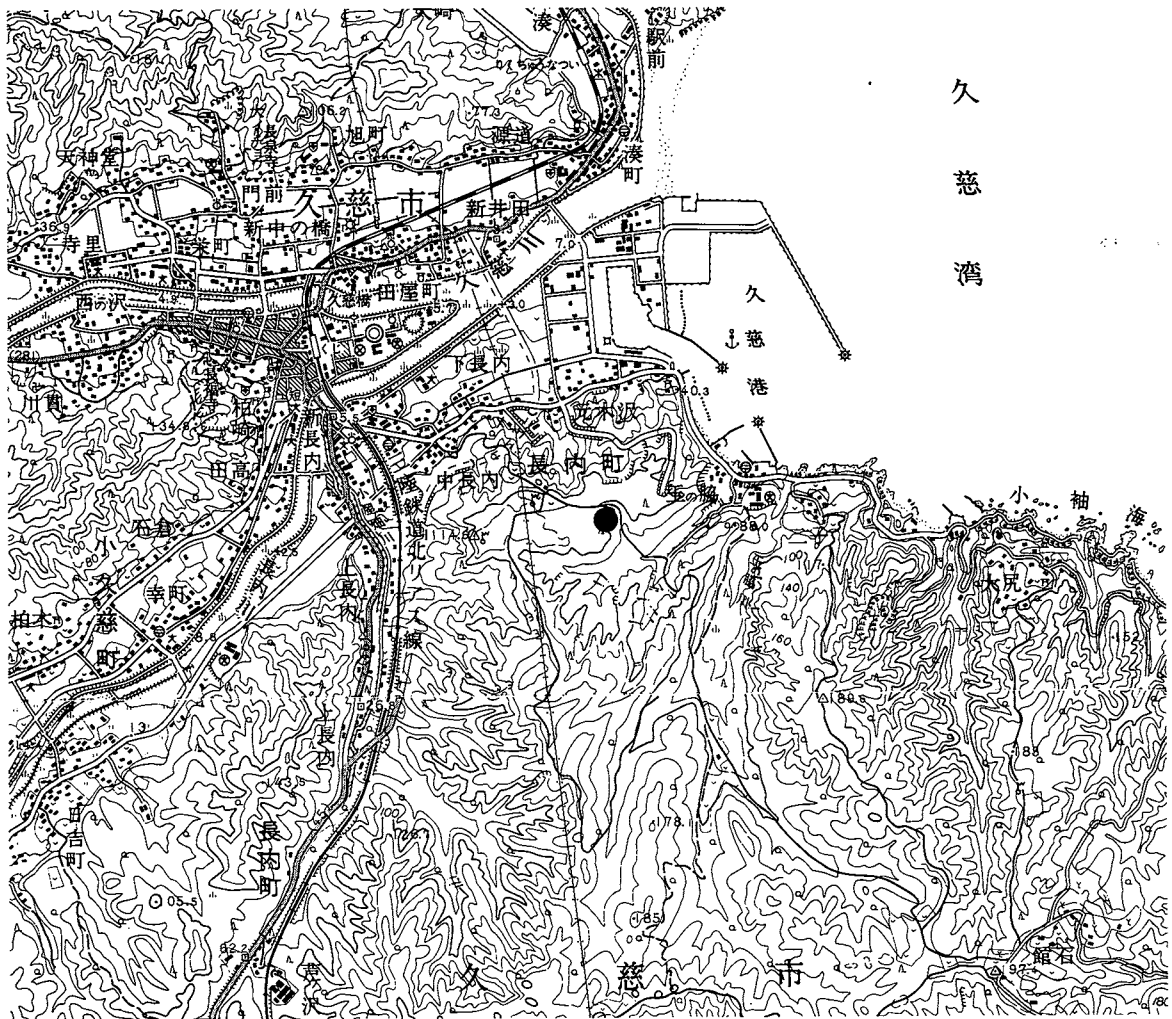
小幅遺跡第4次調査検出遺構・出土遺物



小幅遺跡第4次調査遺構配置図

(20) 平沢 I 遺跡

所在地	久慈市長内町28
委託者	久慈市企画部
発掘調査期間	平成7年8月17日～11月17日
調査対象面積	3,500m ²
発掘調査面積	1,760m ²
遺跡番号・略号	JG30-0199・HSI-95
調査担当者	金子昭彦・田村 聡
協力機関	久慈市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 久慈・陸中野田

1. 遺跡の立地

平沢Ⅰ遺跡は、東日本旅客鉄道八戸線久慈駅の南東約2 kmにある。海岸段丘上に立地しており、調査区の大部分は標高106 m前後のほぼ平らな部分にあるが、東（海）に向かって緩やかに傾斜している。遺跡の現況は原野である。

2. 調査の概要

今回の調査は昨年度に引き続いて行なわれ、縄文時代の竪穴住居跡7棟、古代の竪穴住居跡11棟、竪穴住居状遺構1基、陥し穴状遺構8基、土坑7基、土器埋設遺構1基、焼土6基の遺構を調査した。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡は、平面形・規模とも全て似通っており、一部楕円形に近いものもあるが、ほとんど全て直径3～4 mの円形である。炉は、4棟が石囲炉、2棟が地床炉、1棟が不明で、全て住居の中心より東壁に近い場所にある。柱穴を検出できた住居は、ほとんどなく、これは、木根などで壊されているせいと考えられる。時期は、出土遺物が少ないのではっきりしない部分もあるが、いずれも後期初頭～前葉（蛭沢式）と思われる。

古代の竪穴住居跡は、古墳時代末～平安時代初頭にわたり、古墳時代2棟、奈良時代後半～平安時代初頭9棟と考えているが、出土遺物が少ないため時期が特定しにくい。ちなみに、時期のおおよその目安になる十和田a火山灰を含む住居は5棟、白頭山火山灰を含む住居は3棟、両方含む住居は1棟あり、いずれも埋土中位～下位（第1次埋没土には含まれない）に見られる（火山灰の同定は肉眼観察による）。

平面形は全て隅丸方形で、規模から三つにわかれ、一辺の長さが7 m近いものが1棟、約4～5 mのものが7棟、3 m以下のものが3棟ある。カマドは、1棟のみ北東の壁に作られ、その他は全て北西の壁に作られている（1棟は調査範囲外にあって不明）。最も大きな住居には北西の壁の他に南東の壁にもカマドがあり、一軒で二つのカマドを持っている。北西のカマドの炊口の焼土の上にロームブロックが載っている部分があるので、この方が古いと時期差を推定できるが、決め手に欠く。また、1棟の古墳時代の住居のカマドは、袖部を地山から削り出して作ったもの（袖部の作り出し）である。なお、1棟のカマドの煙道は関東地方のように非常に短く（約50 cm）、別の1棟の住居は縄文土器を煙道に使っているようである。さらに、どういふわけか規模の小さい住居の方がカマドの残りが良く、大きいものは袖石も残っていなかった。

柱穴は、検出しづらく、はっきりしないものがほとんどであるが、古墳時代の1棟は4本柱、また平安時代の1棟は外に柱穴を持つようで、さらに最も大きい住居からは、5本の柱穴と南西壁に沿って周溝が検出されている。

前述のように、ほとんどの住居の埋土からは、広域火山灰が検出されているが、そのうち1棟からは、十和田a火山灰の上から白頭山火山灰が検出されている。また、住居跡によってその量に差はあるが、炭化材が必ずと言ってよいほど出土する。焼土を伴って多くの炭化材が出土し、いわゆる焼失住居といえるのは古墳時代の1棟だけで、その他は焼土を伴わずブロック状に出土する。これは住居に人が住まなくなり廃屋になってから火が着けられたためと思われる。さらに、1棟の住居跡には、アワビなどの貝殻やウニの刺などが廃棄されていた。

〈竪穴住居状遺構〉

古代の竪穴住居に似ているが、カマドでなく炉を持つもので、1基検出した。大きさは1辺の長さが約3 mで、北東～南東壁に沿って住居外に周溝が巡り、地床炉様のものを中央に持つ。時期ははっきりしないが、

埋土の様子から奈良時代後半～平安時代初頭と思われる。フイゴの羽口、鉄滓などは出土しておらず土器片ばかりだが、周溝から一抱えもある石皿が出土している。

〈陥し穴状遺構〉

溝のように細長く、深さが1mを越す楕円形の土坑である。未調査遺構も含めれば、北部の大形住居の南に、並んで列をなすような状況も推定されるが、基本的には調査区内に散在的に見られる。縄文土器破片が出土した遺構が幾つかあり、何よりもこれまでの調査例から縄文時代に属すると思われる。

〈土坑〉

7基調査し、埋土と検出状況から、4基が縄文時代、3基が古代と思われる。いずれも出土遺物はほとんどなく時期の特定は難しい。

縄文時代の土坑の平面形は、円形と隅丸方形があり、円形の一つはフラスコ形土坑である。開口部の大きさは、円形が直径1mと2.2m、隅丸方形が1.2×1mと2×1.8mであり、深さは、フラスコ形土坑が1.5m、それ以外は0.5～0.7mである。特筆すべきことはフラスコ形土坑の底面からの高さ30cm位のところに焼土？と粘土のブロックが出土したことである。これは、土坑の全面でなく東側1/4に集中して出土したものであるが、用途を推定する上で重要な資料となろう。

古代の土坑は、楕円形が1基、円形が2基である。楕円形土坑の規模は2.1×0.6mで、埋土から墓壙と推定されるが、出土遺物はほとんどない。円形の2基は規模が全く同じで（直径0.5m）、並んでいるように思われ、当初掘立柱建物跡と推定していたものであるが、建物を構成する他の土坑が見つからなかったので土坑とした。深さは0.3～0.6mで、片方の土坑の埋土下部から一握り分の貝が出土している。

〈土器埋設遺構〉

1基のみ検出された。口径30cm、高さ40cm程度の深鉢形土器（地文縄文のみ。縄文時代後期？）が直立した形（正位）で出土した。掘り方ははっきりしない。

〈焼土〉

全て直径50cm弱の円形～楕円形の規模の小さなもので、調査区内に散在する形で検出された。時期は不明だが、縄文時代の炉跡の可能性もある。

〈出土遺物〉

コンテナ11箱分の土器・土製品、石器・石製品、鉄製品などの人工遺物、コンテナ1箱分の貝類などの自然遺物が出土している。昨年も同様であったが、遺構の数の割に遺物が非常に少ない。

土器は、縄文土器が6箱と大半を占め、古代の土器（土師器のみ）は2箱程度である。縄文土器のほとんど全ては後期初頭のもので（蛸沢式）、わずかに前期初頭の土器がある。

土製品は、円盤状土製品が数十点あるだけで、土偶などは出土していない。

石器・石製品は、400点程出土しているが、大半は、磨製石斧、磨石などの礫石器で、石鏃などの剥片石器は少ない。この他、調査区の各所から琥珀が出土しているが、ほとんど全て原石である。

3. まとめ

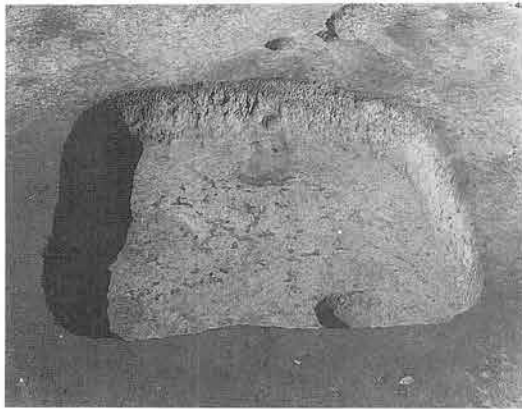
今回調査した所は、昨年と同様、縄文時代の狩猟の場、縄文時代後期初頭と古代の集落跡であることがわかった。昨年の調査成果と合わせると、陥し穴状遺構は調査区全面に散在的に広がるようであり、縄文時代後期初頭の住居は、北東の平坦部の端に集中するようだが、それ以外の南西の部分にも存在することがわかった。また、古代の住居は南西部分に集中するようで、来年の調査区がその中心になりそうである。



縄文時代の竪穴住居跡



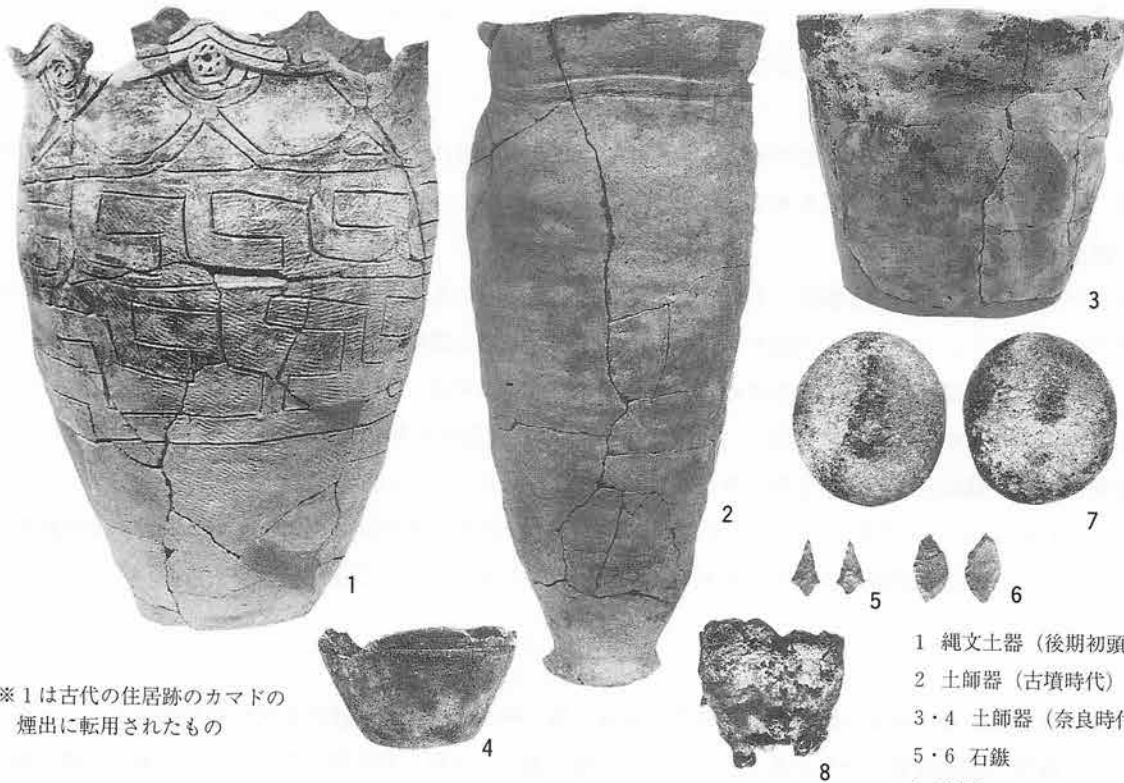
フラスコ形土坑の焼土？粘土出土状況



平安時代の竪穴住居跡



竪穴住居状遺構

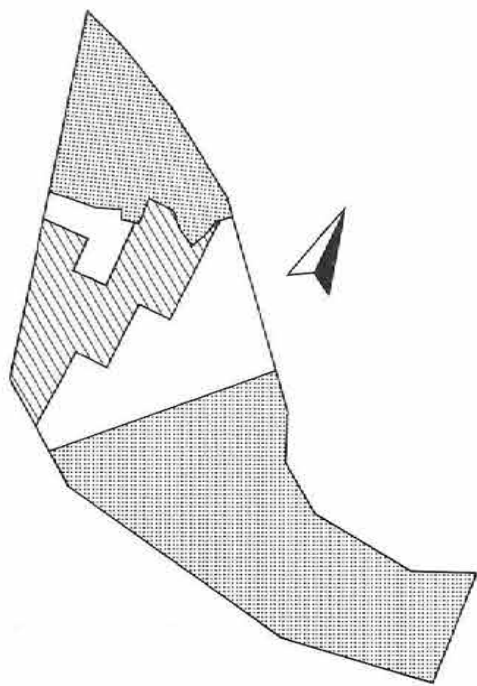


※ 1は古代の住居跡のカマドの
煙出に転用されたもの

- 1 縄文土器（後期初頭）
- 2 土師器（古墳時代）
- 3・4 土師器（奈良時代）
- 5・6 石鏃
- 7 凹石
- 8 羽口

平沢 I 遺跡検出遺構・出土遺物

調査範囲



未調査部分

平成6年調査区



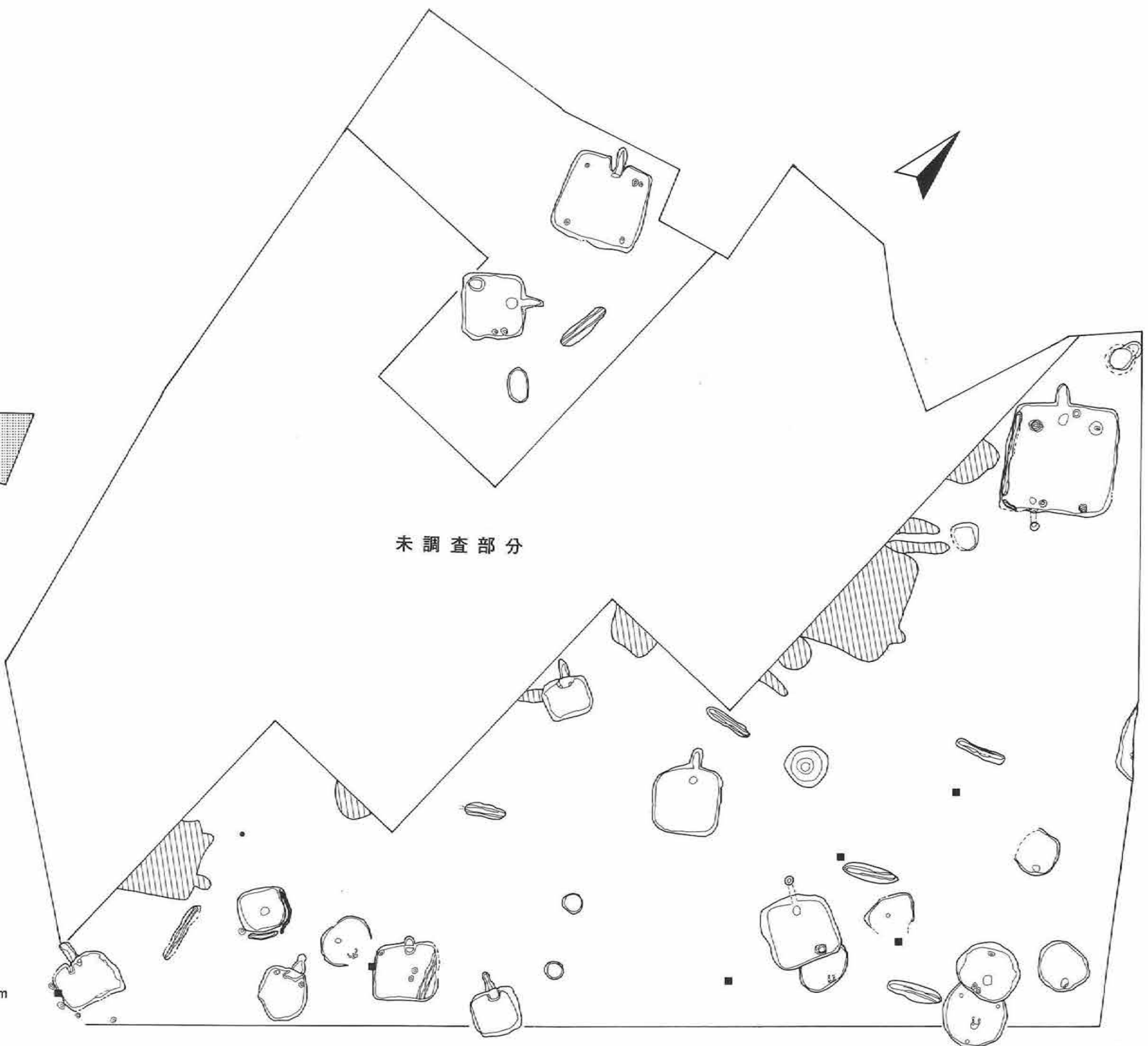
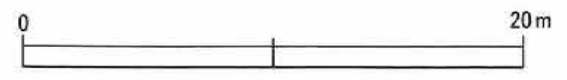
未調査部分・未調査遺構



埋設土器



焼土

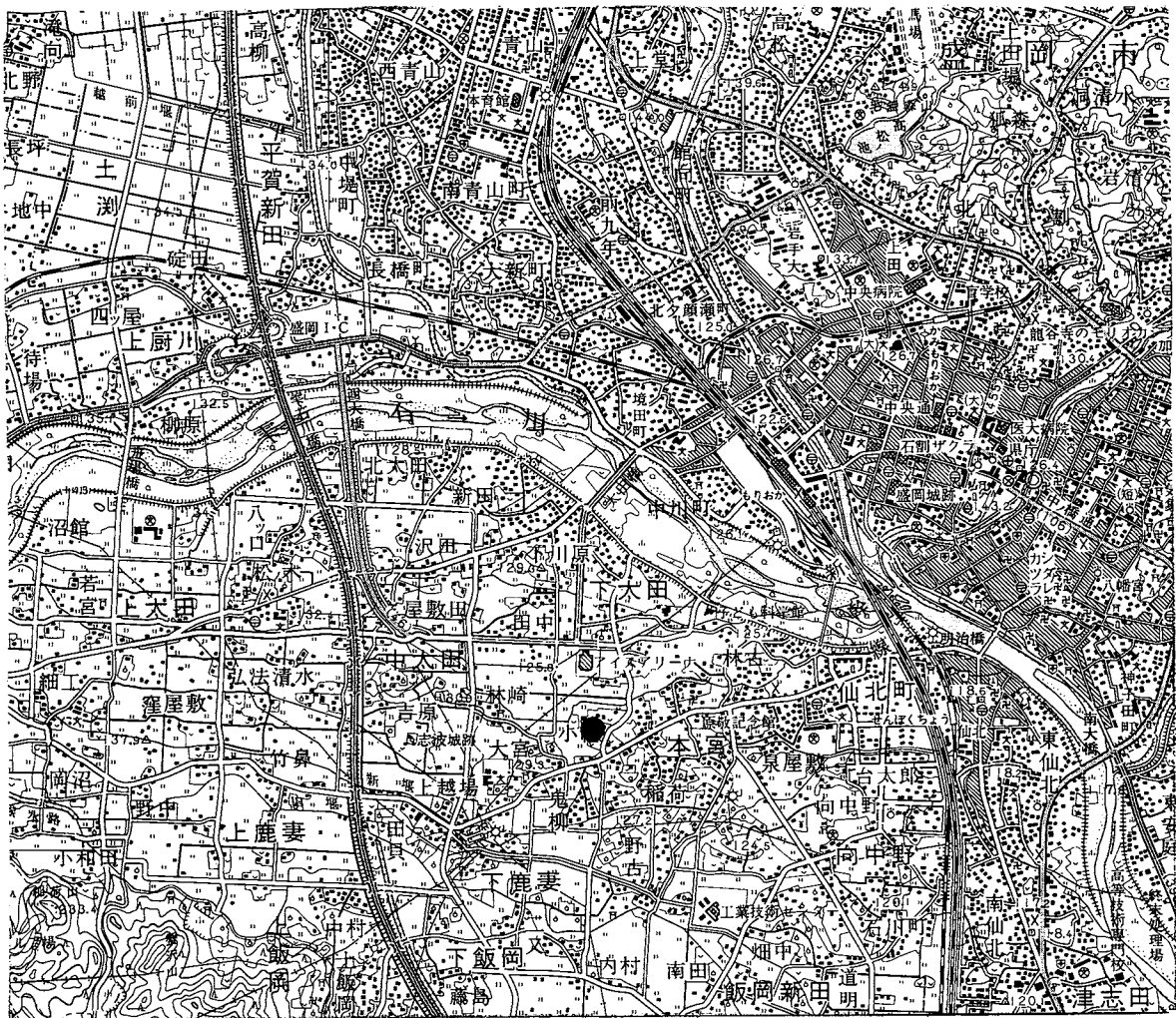


平沢 I 遺跡遺構配置図

Ⅲ. 公 团 関 係

(1) 小幅遺跡第6次

所在地	盛岡市本宮字小幅53ほか
委託者	地域振興整備公団
発掘調査期間	平成7年9月11日～11月16日
調査対象面積	900m ²
発掘調査面積	900m ²
遺跡番号・略号	LE16-2009・OKH06
調査担当者	伊藤 拓・鎌田 勉
協力機関	盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡

1. 調査に至る経過

小幅遺跡は第6次調査は平成7年2月28日付「教文第1053号」で通知された平成7年度埋蔵文化財発掘調査事業には含まれなかった。しかし、盛岡西バイパス建設事業関連の第5次調査区に隣接する箇所であることと小面積であることから、県教育委員会と地域振興整備公団が協議を行った結果、平成7年度事業として追加され、平成7年度9月6日付「教文第594号」で通知された。それにより、(財)岩手県文化振興事業団と地域振興整備公団との間で、同年9月8日付委託契約を取り結び、同年9月11日に発掘調査を開始した。なお、工事の事業名は盛岡南新都市土地区画整理事業である。

2. 遺跡の立地

小幅遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線仙北町駅よりほぼ西約2.5kmに位置し、雫石川によって形成された標高127m前後の河岸段丘縁辺部の微高地に立地し、現在の雫石川との高低差は約10mある。周辺地域は雫石川の氾濫源に当たり、旧河道の跡も残っている。調査区の現況は水田で、周辺地域も水田・畑地など農村的土地利用が中心だが、一部に宅地、公共施設などの都市的土地利用も見られる、都市郊外に典型的な両者の漸移帯となっている。本遺跡の周辺遺跡としては、西側約1,000mの所にある志波城跡をはじめ、本遺跡と時代的に近いと考えられる林崎遺跡・本宮熊堂遺跡・矢盛遺跡などがある。

3. 調査の概要

第6次調査区は南側に隣接する第5次調査区の調査と平行して行ったが、掘立柱建物跡や溝跡など第5次調査区にまたがる遺構も見られる。検出された遺構は掘立柱建物跡2棟・土坑1基・溝跡3条であり、遺構は調査区の西側に集中し、中央部や東側からは検出されていない。また遺物も西側を中心に遺構内とその周辺から出土している。

〈掘立柱建物跡〉

昨年の第2次調査で6基の柱穴が検出された平安時代と考えられる掘立柱建物跡(RB03)の、残りの5基の柱穴が検出されている。第2次調査では『南北梁行2間、東西桁行2+αの南北に長い掘立柱建物跡』と報告されているが、今回の調査で検出された部分を含めると、南北梁行2間、東西桁行3間(4.0×6.0m)の規模であることが分かった。各柱穴の直径は0.7~1.0mでほぼ円形、深さはそれぞれ約0.6m、柱間は約1.8mある。柱穴の埋土内からはTo-a火山灰及び平安時代の土器が出土している。

一方、調査区の南西部で一部の柱穴が第5次調査区にまたがって検出された掘立柱建物跡(RB10)は、西庇の東西梁行2間、南北桁行3間(6.5m×7.0m)、各柱穴の直径は約0.4m、深さは0.3m程度、柱間は約2.0mあるが、西側の庇の一部となる柱穴2基は検出されていない。一部の柱穴の埋土内にTo-a火山灰を含むことから平安時代のものと思われる。

〈土坑〉

溝跡(RG61)の東側に隣接して土坑(RD176)が検出されている。直径は約2.0mと比較的大きいが、深さは約0.1mと浅く、形はほぼ円形である。火山灰は検出されなかったが、遺物から平安時代の遺構と思われる。

〈溝跡〉

調査区の西端から3条検出されたが、どの溝跡も深さは0.3m以内と浅い。最も規模の大きな溝跡(RG61)は調査区を南北にほぼ直線に延びている。開口部幅0.7~1.0m、底部幅約0.5m、深さ約0.3mの規模で長さ

約15mが調査区内で検出されている。溝跡の南北端は調査区外に延び、北端は未調査区のため不明だが、南端は第5次調査区内に約12m延びている。

この溝跡の東側にあり、途中でR G61に合流する溝跡（R G62）は、開口部幅約1.3m、底部幅約1.0m、深さ0.2mの規模で長さが約9.0mある。この溝跡もR G61と同様、北端は調査区外へ延びている。

調査区西端部の溝跡（R G64）は開口部幅約0.8m、底部幅約0.5m、深さ約0.2m、長さ約6.0mあり、東端は途中で消失し、西端は調査区外に延びている。

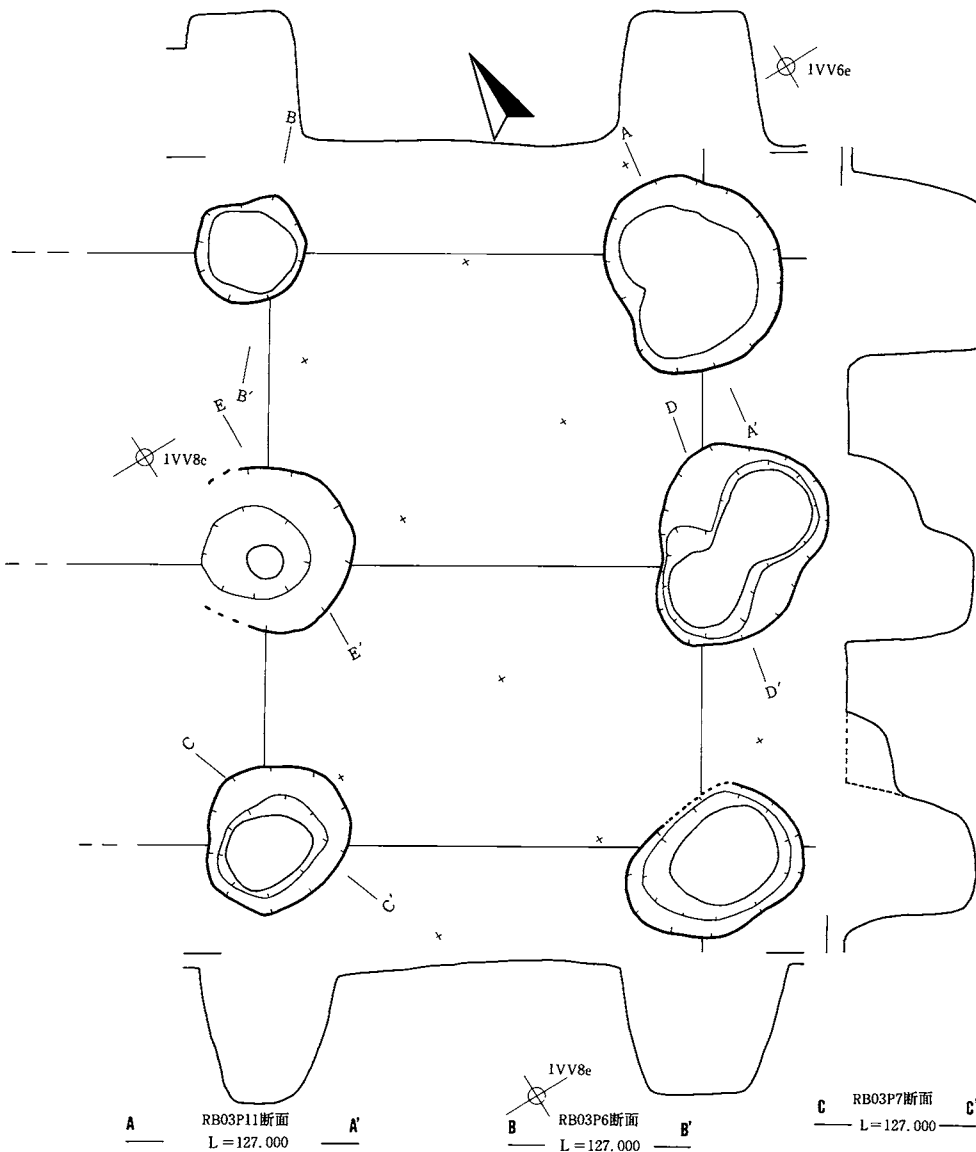
〈出土遺物〉

出土遺物は全体で大コンテナ1箱程度であり、調査区西側の掘立柱建物跡、溝跡の埋土内とその周辺に集中している。平安時代前期（9C後半～10C後半）の遺物が中心で、主体は土師器、あかやき土器であり、出土土器全体の7割程度を占める。器種は坏が中心でロクロ成形され、底部切り離しはすべて回転糸切りである。須恵器は数は少ないが器種は甕が中心である。また表土からは近世陶磁器が出土している。

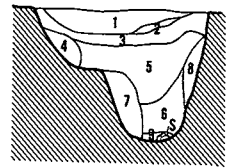
3. まとめ

今回の調査では第2次調査で一部の柱穴が検出された平安時代の掘立柱建物跡の残り部分が検出された。また新たに平安時代のものと思われる両庇付きの掘立柱建物跡も検出された。遺物は北西端の掘立柱建物跡（R B03）の柱穴や遺跡の埋土とその周辺から出土したが、土師器、あかやき土器の坏が中心であり、須恵器はほとんど見られなかった。

なお、小幅第6次遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

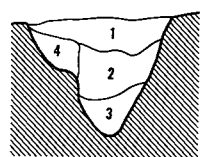


RB03P10断面
L=127.000



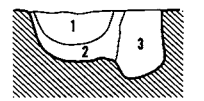
- 1 10YR2/3黒褐色シルト。暗褐色砂質シルト(少量)。炭化物(微量)。
- 2 10YR2/3黒褐色シルト。火山灰(少量)。
- 3 10YR2/3黒褐色シルト。砂質シルト(少量)。
- 4 10YR2/3黒褐色シルト。褐色粘土質シルト(微量)。
- 5 10YR2/2黒褐色シルト。炭化物(微量)、褐色粘土質シルト(微量)。
- 6 10YR2/2黒褐色シルト。にぶい黄褐色粘土質シルト(少量)。炭化物(微量)。
- 7 10YR2/2黒褐色シルト。
- 8 10YR1/3黒褐色シルト。丸レキ(少量)。
- 9 10YR2/2黒褐色粘土質シルト。

RB03P8断面
L=127.000



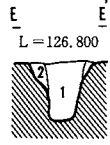
- 1 10YR黒褐色シルト。土器片、炭化物(多量)。褐色ローム質土(混入)。火山灰(少量)。
- 2 10YR黒褐色シルト。褐色~赤褐色ローム質土砂質シルト(多量)、黒色ローム質シルト(少量)。土器片、炭化物、火山灰(多量)。
- 3 10YR2/2黒褐色シルト。丸レキ(少量)。暗褐色~褐色ローム、炭化物(少量)。
- 4 10YR2/2黒褐色ローム質シルト。赤褐色~褐色ローム質土、砂質シルト(多量)。

RB10P4断面
L=126.800



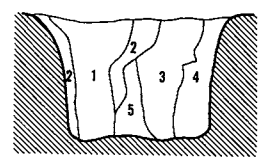
- 1 10YR2/2黒褐色シルト。火山灰、炭化物(少量)。
- 2 10YR2/1黒色ローム質シルト。黒色シルト、火山灰(少量)。
- 3 10YR2/3黒褐色シルト。黒色ローム質シルト(少量)、火山灰(微量)。

RB10P5断面
L=126.800



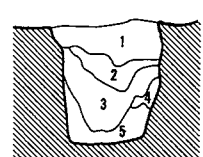
- 1 10YR3/2黒褐色シルト。黒色ローム質シルト(少量)。
- 2 10YR1.7/1黒色ローム質シルト。黒褐色シルト。

RB03P11断面
L=127.000



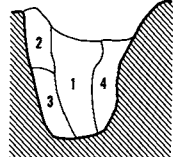
- 1 10YR2/3黒褐色シルト。火山灰(少量)。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト。砂、炭化物(少量)。
- 3 10YR2/3黒褐色シルト。炭化物(微量)。
- 4 10YR2/2黒褐色砂質シルト。ローム(少量)。
- 5 10YR3/2黒褐色ローム質シルト。火山灰(微量)。

RB03P6断面
L=127.000



- 1 10YR2/3黒褐色シルト。丸レキ、粘土質シルト(少量)。
- 2 10YR2/3黒褐色シルト。粘土質シルト(微量)。
- 3 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物(微量)。
- 4 10YR1.7/1黒色シルト。
- 5 10YR2/3黒褐色シルト。粘土質シルト(多量)。

RB03P7断面
L=127.000



- 1 10YR3/3暗褐色シルト。黒褐色粘土質シルト(微量)。
- 2 10YR3/2黒褐色シルト。
- 3 10YR3/2黒褐色シルト。黒褐色粘土質シルト(少量)。
- 4 10YR3/2黒褐色シルト。黒褐色粘土質シルト(微量)。

RG64断面
L=127.000



- 1 10YR2/3黒褐色ローム質シルト。暗褐色シルト(少量)。
- 2 10YR2/3黒褐色ローム質シルト。暗褐色ローム質シルト(多量)。炭化物(微量)。
- 3 10YR5/6明褐色砂質シルト。黒褐色ローム質シルト(少量)。

RG61断面
L=127.000

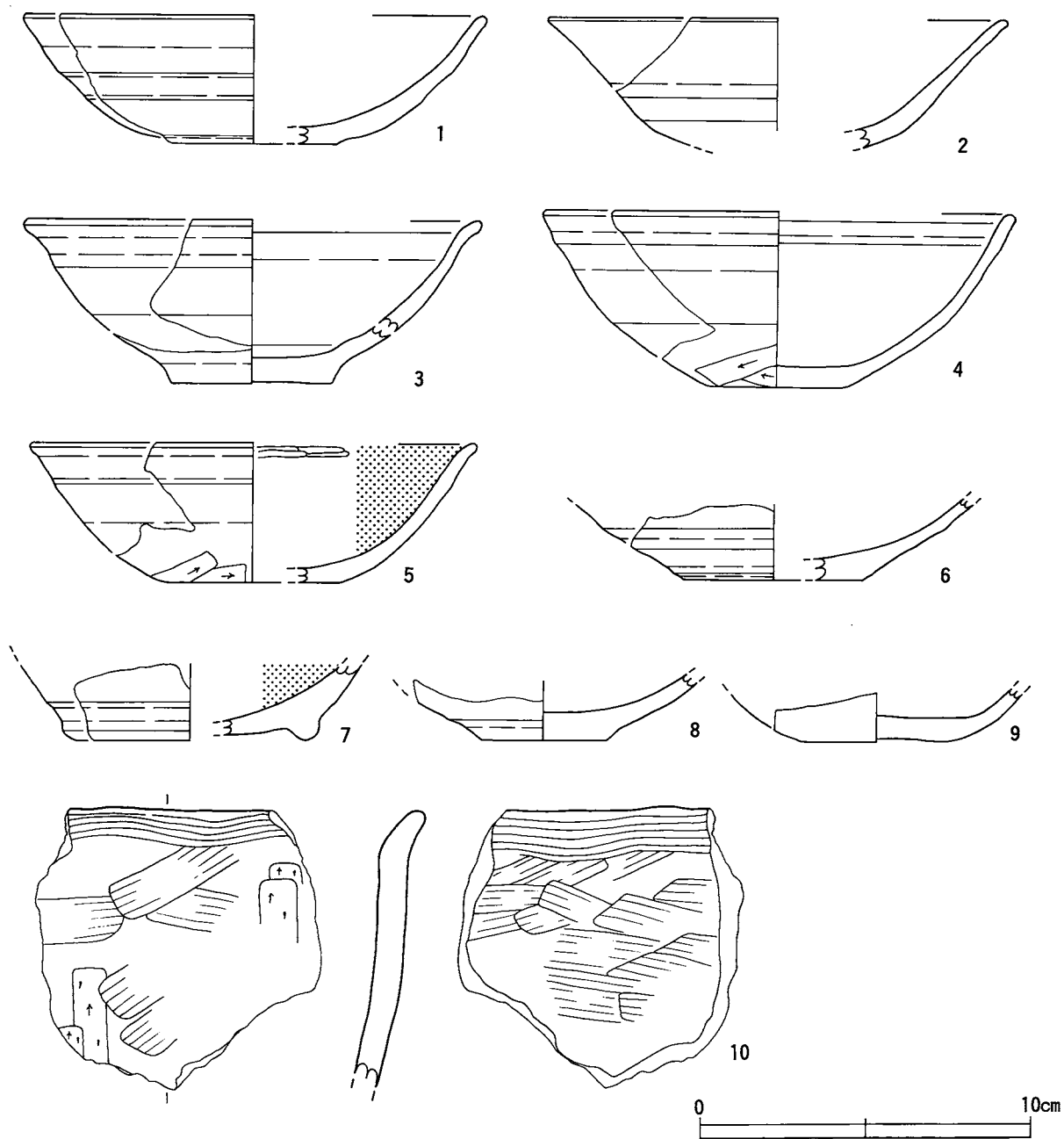


- 1 10YR2/3黒褐色ローム質シルト。暗褐色砂質シルト(少量)。
- 2 10YR3/3暗褐色砂質シルト。砂、黒褐色シルト(少量)。
- 3 10YR2/3黒褐色ローム質シルト。暗褐色ローム、炭化物(少量)。

RG62断面
L=127.000



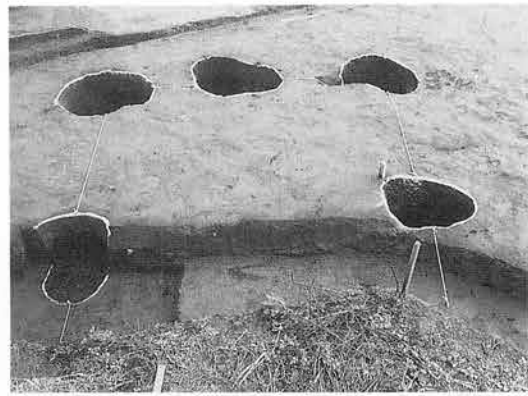
- 4 10YR3/3暗褐色ローム質シルト。黄褐色砂質土(少量)。
- 5 10YR1.7/1黒色砂質シルト。砂(多量)。褐色~10YR5/6黄褐色ローム(少量)。



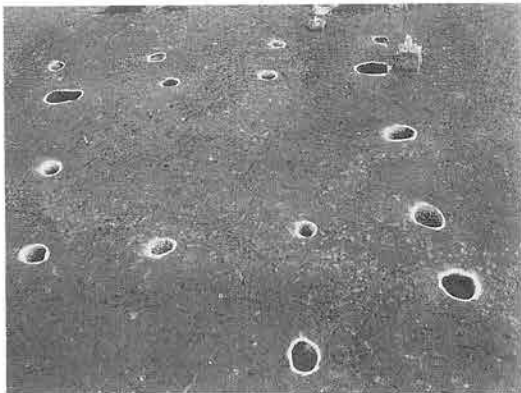
No.	出土地点・層位	種類	成形	調整		底部	計測値：cm		
				外面	内面		口径	器高	底径
1	調査区西側Ⅱ層上面	土師器 坏	ロクロ			回転糸切り	13.8	3.9	5.0
2	RD181 埋土	土師器 坏	ロクロ			—————	(7.9)	(3.5)	—
3	RB03P8 埋土	土師器 坏	ロクロ			回転糸切り	(7.0)	4.9	5.0
4	RB03P8 埋土	土師器 坏	ロクロ	ヘラケズリ		回転糸切り	14.0	5.3	4.0
5	RB03P8 埋土	土師器 坏	ロクロ	ヘラケズリ	黒色処理、ヘラミガキ	回転糸切り	(6.8)	4.2	(2.8)
6	RB03P8 埋土	土師器 坏	ロクロ			回転糸切り	—	(2.3)	5.4
7	IVV3e 表土	土師器 坏	ロクロ		黒色処理	回転糸切り、高台貼り付け	—	(2.3)	7.0
8	IVV7c Ⅱ層上面	土師器 坏	ロクロ			回転糸切り	—	(1.8)	3.8
9	RB03P8 埋土	土師器 坏	ロクロ			回転糸切り	—	(1.45)	4.6
10	IVV10k Ⅱ層上面	土師器 甕	非ロクロ	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	—————	—	(8.5)	—



遺跡全景



掘立柱建物跡 (RB03)



掘立柱建物跡 (RB10)



溝跡 (RG61・62)



1



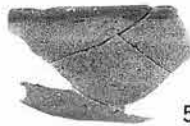
2



3



4



5



6



7



8



9

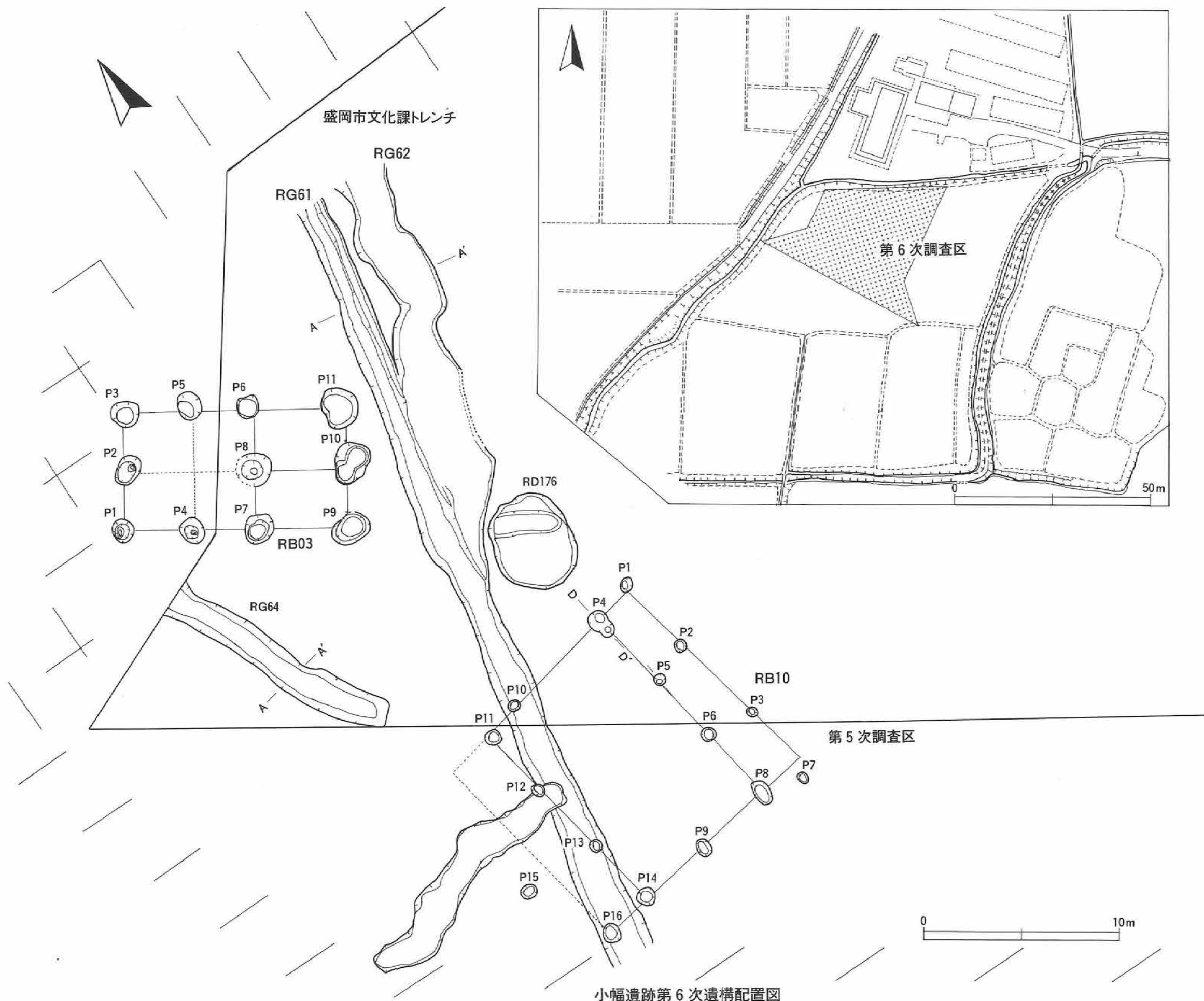


10

1～9 土師器坏

10 土師器甕

小幅遺跡第6次検出遺構・出土遺物



小幅遺跡第6次遺構配置図

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 山 影 源 吉
副 所 長 千 葉 政 男

[管理課]

管 理 課 長 澤 田 寛
主 事 千 葉 勝 彦
〃 久 保 田 幸 恵

[調査課]

調 査 課 長 鈴 木 恵 治
課 長 補 佐 三 浦 謙 一
〃 高 橋 與 右 衛 門
主 任 文 化 財 工 藤 利 幸
專 門 調 査 財 中 川 重 紀
〃 佐々木 清 文
〃 高 橋 義 介
〃 酒 井 宗 孝
文 化 財 菊 池 人 見
專 門 調 査 財 吉 田 充
〃 鎌 田 勉
〃 小 山 内 透
〃 高 橋 佐 知 子
〃 松 本 建 速
〃 宮 本 節 子
〃 金 子 昭 彦
〃 木 戸 口 俊 子
〃 杉 沢 昭 太 郎

文 化 財
專 門 調 査 財

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

期 限 付
專 門 職 員

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

阿 部 勝 則
星 雅 之
羽 柴 直 人
高 木 晃
伊 藤 拓
村 上 拓
大 道 篤 史
溜 浩 二 郎
中 村 直 美
稻 垣 雅 宏
高 橋 英 樹
元 吉 弘 明
佐々木 裕 司
千 葉 貴 子
沼 田 和 宏
大 場 慎 也
吉 田 理

[資料課]

資 料 課 長 菊 池 強 一
主 任 文 化 財 中 村 英 俊
專 門 調 査 財

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第246集
岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
(平成7年度分)

平成8年3月25日 印刷

平成8年3月29日 発行

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (0196)38-9001

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23-27

電話 (0196)25-2323